

岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集

嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道八戸線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター

日 本 道 路 公 団

岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集

嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道八戸線建設関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など、交通網整備事業は県政の重点施策でもあります。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活をより豊かにするという開発との均衡を保つことも大きな課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北自動車道八戸線建設に伴う関連遺跡の発掘調査として、昭和56・57年度に行った九戸村楸Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査範囲は、遺跡の中央部を横断する形で行われましたが、なお遺跡の一部であります。しかし、その結果、縄文時代・平安時代の遺構が重複して存在し、かつ、縄文時代の住居址と夥しい土坑群の間には占地に関するある種の示唆を与える配置をしているなど、県北地方における縄文時代から平安時代の歴史を解明していく手掛りとなる資料を得られたといえるであります。

本報告書が研究者のみならず、一般の方々にも活用され埋蔵文化財保護思想普及の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局、九戸村教育委員会をはじめとする関係機関、直接発掘業務に携っていただきました地元の多くの方々から感謝申し上げますとともに、今後とも関係各位の御指導、御協力をお願いいたします。

昭和59年8月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役 員

理事長	金	子	彰	吉	(県教育長)	
副理事長	尾	沢	重	遠	(県教育次長)	
常務理事	熊	谷	正	男	(県立埋蔵文化財センター所長)	
理 事	吉	田	良	和	(県農政部次長)	
〃	高	橋	健	之	(県林業水産部次長)	
〃	穂	積	昭	慈	(県土木部次長)	
〃	板	橋	源		(県立博物館長)	
〃	草	間	俊	一	(県立盛岡短期大学長)	
〃	小	形	信	夫	(元常務理事)	
監 事	佐	藤	公	志	(県教委総務課長)	
〃	小	野	寺	英	二	(県教委財務課長)

職 員

所 長	熊	谷	正	男	専 門 調 査 員	柄	沢	満	郎
副 所 長	宮	英	一		〃	平	井	進	一
所 付	吉	田	務		〃	中	村	良	一
[総務課]					〃	田	村	壯	一
総 務 課 長	菊	池	勉		〃	岩	河	久	行
庶 務 係 長	阿	部	詔	夫	〃	光	井	文	喜
主 事	戸	草	内	幸	〃	玉	川	英	喜
〃	立	花	多	加	〃	石	川	長	喜
技 能 員	佐	藤	春	男	〃	三	浦	謙	一
[調査課]					〃	高	橋	与	右
調 査 課 長	近	藤	宗	光	〃	高	橋	義	介
主任専門調査員	昆	野	靖		〃	佐	々	木	清
〃	国	生	尚		[資料課]				
専 門 調 査 員	片	方	宗	明	資 料 課 長	名	須	川	滋
〃	長	沼	彬		専 門 調 査 員	菊	池	利	和
〃	大	原	一	則	〃	工	藤	利	幸
〃	渡	辺	洋	一	〃	中	川	重	紀
〃	田	鎖	寿	夫	〃	酒	井	宗	孝
〃	佐	々	木	直					

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡九戸村大字江刺家字鍋倉地内に所在する縄Ⅱ遺跡を発掘調査した成果をまとめたものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴い、日本道路公団の委託を受け、(財)岩手県埋蔵文化財センターが記録保存を目的として行った緊急発掘調査である。
3. 調査面積は約5,000㎡であり、野外調査は、1981年7月23日から同年11月10日までと、1982年4月12日から9月4日までの2年間にわたって実施された。
4. 発掘調査において、縄文時代の住居址23棟、古代の住居址4棟、土壇201基、集石遺構1基、焼土遺構15ヵ所等が検出された。
5. 人工遺物としては土器・土製品・石器・石製品・鉄製品・木製品・及び縄状の編物が、天然遺物としては堅果類と炭化材及び自然礫が出土した。
6. 出土した遺物は、実測図又は拓影図及び写真図版に掲載することを原則としたが、同一個体や極小破片及び無文の土器片等は大幅に割愛した。また、天然遺物は堅果類を写真図版に掲載したのみで、他はすべて割愛した。
7. 遺構内出土遺物は遺構ごとに、遺構外出土遺物は種別ごとにまとめ、連番を付した。また、遺物番号は図版の種別には関係なく同一の番号である。
8. 図版は下記の縮尺を原則とし、そのつど縮尺率を示した。
 - 遺構……………1/50
 - 土器拓影図・拓本実測図・土製品・剥片石器・石製品・木製品・鉄製品……………1/5
 - 土器実測図・礫石器……………1/5
9. 遺物実測図は下記の要領で作成されたものである。
 - ①各種縄文・貝殻文・刺突文等の文様の表現は、簡略化したところもある。
 - ②完形土器及び復元想定断面形が1/5以上の土器は側面実測、1/5以下1/10以上は反転実測、1/10以下は拓影又は拓本実測とし、すべてに断面図を加え、必要に応じて底部の拓影も加えた。また、反転実測したものは〔反転〕、図上で復元実測したものは〔復元〕と注記した。
 - ③石器は製作過程の復元と使用痕の復元に着目し、点と線で表現した。石質・重さ等は一覧表にして、巻末に一括掲載した。
10. 本報告書で使用した土色は、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版、標準土色帖」によった。
11. 調査及び本報告書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1の地

形図、日本道路公団仙台建設局八戸工事事務所作成の千分の1の平面図及び岩手県北上奥羽山系開発室作成の5千分の1の地形図を使用した。また、標高は同公団作成の成果表を使用した。

12. 石質鑑定は佐藤二郎氏（岩手県立大般渡農業高校教諭）による。
13. 炭化材の材質鑑定は早坂松次郎氏（岩手県木炭協会）による。
14. 放射性炭素の年代測定は木越邦彦氏（学習院大学年代測定研究室）による。
15. 火山灰産地同定は町田洋氏（東京都立大学教授）による。
16. 本報告書で使用した方位は、磁北を示し、原点における基準線は磁北より西へ $9^{\circ}30'40''$ ずれる。また、東京天文台編纂「理科年表」によると、八戸（北緯 $40^{\circ}23'7''$ 、東経 $141^{\circ}37'6''$ ）における偏角は $7^{\circ}10'1''$ （W）、（1970、0年値）となっている。
17. 本遺跡の調査区原点は、東北自動車道八戸線の中心杭、STA 126+80であり、同点は平面直角座標の第11系、X—+28656.163、Y—+48627.982である。
18. 野外調査及び室内整理は下記の職員が中心となって行った。

野外調査

室内整理

1981年度	鈴木隆英 調査員	種市 進 調査員	平井 進 調査員
	平井 進 調査員	岩淵 久 調査員	菅原典夫 臨時職員
	菅原典夫 臨時職員	（種市・岩淵10月5日～11月10日）	

1982年度	平井 進 調査員	平井 進 調査員
	石川長喜 調査員	石川長喜 調査員

1983年度	平井 進 調査員
--------	----------

19. 本報告書の執筆分は、「Ⅰ．調査に至る経過」は嶋千秋前調査課長が「Ⅴ．検出された遺構と遺物」は石川・平井が担当した。その外はすべて平井が担当した。
20. 野外調査に当たっては、九戸村教育委員会の御協力を得た。また上柿政吉氏、道地善之助氏をはじめ地元作業員の協力を得た。室内整理には当センターの吉田津子をはじめ臨時職員がこれに当たった。記して謝意を表するものである。

目 次

序	1
センター組織図	2
例言	3
目次	5

本 文 目 次

I 調査に至る経過	19
II 調査方法と整理方法	20
〔1〕 調査方法	20
〔2〕 整理方法	21
III 遺跡の環境	24
〔1〕 地 形	24
〔2〕 遺跡の立地	24
〔3〕 周辺の遺跡	25
IV 基本層序	31
V 検出された遺構と遺物	34
〔1〕 縄文時代の竪穴住居址と出土遺物	34
〔2〕 平安時代の竪穴住居址と出土遺物	130
〔3〕 土坑と出土遺物	150
〔4〕 焼土遺構	267
〔5〕 墓石遺構	270
〔6〕 埋設土器	273
〔7〕 遺物包含層	274
〔8〕 遺構外の出土遺物	280
VI まとめと考察	340
〔1〕 複合状況について	340
〔2〕 土坑群について	348
〔3〕 出土遺物について	350
資料：放射性炭素年代測定結果	353
火山灰産地同定に関する鑑定結果	354

図 版 目 次

第1図……………18	第15図……………48
岩手県全図	第2号住居址内出土遺物(No.2)
第2図……………23	第16図……………49
地形及びグリッド配置図	第3号住居址
第3図……………27	第17図……………51
九戸村内遺跡分布図	第3号住居址内出土遺物(No.1)
第4図……………29	第18図……………53
遺跡周辺の地形	第4号住居址
第5図……………33	第19図……………54
基本層序模式図と	第4号住居址内出土遺物(No.1)
土層観察用トレンチの位置	第20図……………55
第6図……………36	第4号住居址内出土遺物(No.2)
第1号住居址	第21図……………57
第7図……………38	第5号住居址及び出土遺物(No.1)
第1号住居址内出土遺物(No.1)	第22図……………58
第8図……………39	第5号住居址内出土遺物(No.2)
第1号住居址内出土遺物(No.2)	第23図……………60
第9図……………40	第6号住居址
第1号住居址内出土遺物(No.3)	第24図……………62
第10図……………41	第6号住居址内出土遺物(No.1)
第1号住居址内出土遺物(No.4)	第25図……………63
第11図……………42	第6号住居址内出土遺物(No.2)
第1号住居址内出土遺物(No.5)	第26図……………64
第12図……………43	第6号住居址内出土遺物(No.3)
第1号住居址内出土遺物(No.6)	第27図……………65
第13図……………46	第6号住居址内出土遺物(No.4)
第2号住居址	第28図……………67
第14図……………47	第7号住居址
第2号住居址内出土遺物(No.1)	第29図……………68
	第7号住居址内出土遺物(No.1)

第30回	69	第46回	92
第8号住居址		第13号住居址内出土遺物(No.1)	
第31回	71	第47回	93
第9号住居址		第13号住居址内出土遺物(No.2)	
第32回	73	第48回	94
第9号住居址内出土遺物(No.1)		第13号住居址内出土遺物(No.3)	
第33回	74	第49回	97
第9号住居址内出土遺物(No.2)		第14号住居址	
第34回	75	第50回	98
第9号住居址内出土遺物(No.3)		第14号住居址内出土遺物(No.1)	
第35回	77	第51回	99
第10号住居址及び出土遺物(No.1)		第14号住居址内出土遺物(No.2)	
第36回	78	第52回	100
第10号住居址内出土遺物(No.2)		第14号住居址内出土遺物(No.3)	
第37回	79	第53回	101
第10号住居址内出土遺物(No.3)		第14号住居址内出土遺物(No.4)	
第38回	81	第54回	103
第11号住居址		第15号住居址及び出土遺物(No.1)	
第39回	83	第55回	104
第11号住居址内出土遺物(No.1)		第15号住居址内出土遺物(No.2)	
第40回	84	第56回	106
第11号住居址内出土遺物(No.2)		第16号住居址及び出土遺物(No.1)	
第41回	85	第57回	108
第11号住居址内出土遺物(No.3)		第17号住居址	
第42回	86	第58回	109
第11号住居址内出土遺物(No.4)		第17号住居址内出土遺物(No.1)	
第43回	87	第59回	111
第11号住居址内出土遺物(No.5)		第18号住居址及び出土遺物(No.1)	
第44回	89	第60回	112
第12号住居址及び出土遺物(No.1)		第18号住居址内出土遺物(No.2)	
第45回	91	第61回	114
第13号住居址		第19号住居址	

第62図	116	第78図	138
第20号住居址		第24号住居址内出土遺物(No.4)	
第63図	117	第79図	141
第20号住居址内出土遺物(No.1)		第25号住居址	
第64図	118	第80図	142
第20号住居址内出土遺物(No.2)		第25号住居址内出土遺物(No.1)	
第65図	120	第81図	143
第21号住居址		第25号住居址内出土遺物(No.2)	
第66図	122	第82図	145
第21号住居址内出土遺物(No.1)		第26号住居址	
第67図	123	第83図	146
第21号住居址内出土遺物(No.2)		第26号住居址内出土遺物(No.1)	
第68図	124	第84図	147
第21号住居址内出土遺物(No.3)		第26号住居址内出土遺物(No.2)	
第69図	125	第85図	149
第21号住居址内出土遺物(No.4)		第27号住居址及び出土遺物(No.1)	
第70図	126	第86図	151
第21号住居址内出土遺物(No.5)		土坑の配置と位置区分図	
第71図	127	第87図	153
第21号住居址内出土遺物(No.6)		第1～4号土坑	
第72図	128	第88図	155
第22号住居址		第5～8号土坑	
第73図	129	第89図	157
第23号住居址		第9～12号土坑	
第74図	133	第90図	159
第24号住居址		第13～16号土坑	
第75図	135	第91図	161
第24号住居址内出土遺物(No.1)		第17～21号土坑	
第76図	136	第92図	163
第24号住居址内出土遺物(No.2)		第22～24号土坑	
第77図	137	第93図	165
第24号住居址内出土遺物(No.3)		第25～28号土坑	

第94图.....	167	第110图.....	203
第29~32号土坑		第114~118号土坑	
第95图.....	169	第111图.....	205
第33~37号土坑		第119~121号土坑	
第96图.....	171	第112图.....	207
第38~43号土坑		第122~125号土坑	
第97图.....	173	第113图.....	209
第44~47号土坑		第126~129号土坑	
第98图.....	175	第114图.....	211
第48~51号土坑		第130~133号土坑	
第99图.....	177	第115图.....	213
第52~57号土坑		第134~138号土坑	
第100图.....	179	第116图.....	215
第58~61号土坑		第139~143号土坑	
第101图.....	181	第117图.....	217
第62~66号土坑		第144~148号土坑	
第102图.....	183	第118图.....	219
第67~71号土坑		第149~152号土坑	
第103图.....	185	第119图.....	223
第72~77号土坑		第153~156号土坑	
第104图.....	187	第120图.....	225
第78~83号土坑		第157~160号土坑	
第105图.....	189	第121图.....	227
第84~89号土坑		第161图~163号土坑	
第106图.....	192	第122图.....	229
第90~94号土坑		第164~168号土坑	
第107图.....	195	第123图.....	231
第95~100号土坑		第169~173号土坑	
第108图.....	197	第124图.....	233
第101~106号土坑		第174~177号土坑	
第109图.....	199	第125图.....	235
第107~113号土坑		第178~181号土坑	

第 126 图	237	第 142 图	257
第 182 ~ 185 号土坑		土坑内出土遗物(No.12)	
第 127 图	239	第 143 图	258
第 186 ~ 189 号土坑		土坑内出土遗物(No.13)	
第 128 图	241	第 144 图	259
第 190 ~ 193 号土坑		土坑内出土遗物(No.14)	
第 129 图	243	第 145 图	260
第 194 ~ 197 号土坑		土坑内出土遗物(No.15)	
第 130 图	245	第 146 图	261
第 198 ~ 201 号土坑		土坑内出土遗物(No.16)	
第 131 图	246	第 147 图	262
土坑内出土遗物(No.1)		土坑内出土遗物(No.17)	
第 132 图	247	第 148 图	263
土坑内出土遗物(No.2)		土坑内出土遗物(No.18)	
第 133 图	248	第 149 图	264
土坑内出土遗物(No.3)		土坑内出土遗物(No.19)	
第 134 图	249	第 150 图	265
土坑内出土遗物(No.4)		土坑内出土遗物(No.20)	
第 135 图	250	第 151 图	266
土坑内出土遗物(No.5)		土坑内出土遗物(No.21)	
第 136 图	251	第 152 图	268
土坑内出土遗物(No.6)		烧土遗物配置图	
第 137 图	252	第 153 图	271
土坑内出土遗物(No.7)		烧土遗物断面图(No.1)	
第 138 图	253	第 154 图	272
土坑内出土遗物(No.8)		烧土遗物断面图(No.2)	
第 139 图	254	第 155 图	273
土坑内出土遗物(No.9)		集石遗物(平面图)	
第 140 图	255	第 156 图	273
土坑内出土遗物(No.10)		埋设土器(平面、断面图)	
第 141 图	256	第 157 图	274
土坑内出土遗物(No.11)		遗物包含层土层断面图	

第 158 图	275	第 174 图	307
遺物分布图		遺構外出土遺物(No.14)繩文	
第 159 图	277	第 175 图	308
包含層遺物分布图(同一個体)No.1		遺構外出土遺物(No.15)繩文	
第 160 图	279	第 176 图	309
包含層遺物分布图(同一個体)No.2		遺構外出土遺物(No.16)繩文	
第 161 图	283	第 177 图	310
遺構外出土遺物(No.1)石器		遺構外出土遺物(No.17)繩文	
第 162 图	284	第 178 图	311
遺構外出土遺物(No.2)石器		遺構外出土遺物(No.18)繩文	
地 163 图	285	第 179 图	312
遺構外出土遺物(No.3)石器		遺構外出土遺物(No.19)繩文	
第 164 图	286	第 180 图	313
遺構外出土遺物(No.4)石器		遺構外出土遺物(No.20)繩文	
第 165 图	287	第 181 图	314
遺構外出土遺物(No.5)石器		遺構外出土遺物(No.21)繩文	
第 166 图	288	第 182 图	315
遺構外出土遺物(No.6)石器		遺構外出土遺物(No.22)繩文	
第 167 图	289	第 183 图	316
遺構外出土遺物(No.7)石器		遺構外出土遺物(No.23)繩文	
第 168 图	290	第 184 图	317
遺構外出土遺物(No.8)石器		遺構外出土遺物(No.24)繩文	
第 169 图	291	第 185 图	318
遺構外出土遺物(No.9)石器		遺構外出土遺物(No.25)繩文	
第 170 图	292	第 186 图	319
遺構外出土遺物(No.10)石器		遺構外出土遺物(No.26)繩文	
第 171 图	293	第 187 图	320
遺構外出土遺物(No.11)石器		遺構外出土遺物(No.27)繩文	
第 172 图	305	第 188 图	321
遺構外出土遺物(No.12)繩文		遺構外出土遺物(No.28)繩文	
第 173 图	306	第 189 图	322
遺構外出土遺物(No.13)繩文		遺構外出土遺物(No.29)繩文	

第 190 図	323	第 201 図	334
遺構外出土遺物(No.30)縄文		遺構外出土遺物(No.41)縄文	
第 191 図	324	第 202 図	335
遺構外出土遺物(No.31)縄文		遺構外出土遺物(No.42)縄文	
第 192 図	325	第 203 図	336
遺構外出土遺物(No.32)縄文		遺構外出土遺物(No.43)縄文	
第 193 図	326	第 204 図	337
遺構外出土遺物(No.33)縄文		遺構外出土遺物(No.44)縄文	
第 194 図	327	第 205 図	338
遺構外出土遺物(No.34)縄文		遺構外出土遺物(No.45)縄文・弥生	
第 195 図	328	第 206 図	339
遺構外出土遺物(No.35)縄文		遺構外出土遺物(No.46)土師	
第 196 図	329	第 207 図	345
遺構外出土遺物(No.36)縄文		第 I ~ II 期住居址群	
第 197 図	330	第 208 図	346
遺構外出土遺物(No.37)縄文		第 III ~ IV 期住居址群	
第 198 図	331	第 209 図	347
遺構外出土遺物(No.38)縄文		第 V・VI 期住居址群	
第 199 図	332	第 210 図	349
遺構外出土遺物(No.39)縄文		土坑埋土堆積状況模式図	
第 200 図	333		
遺構外出土遺物(No.40)縄文			

写真図版目次

写真図版1.....361	写真図版16.....376
嶽Ⅱ遺跡周辺のようす(空中写真)	第13号住居址
写真図版2.....362	写真図版17.....377
嶽Ⅱ遺跡全景(空中写真)	第14号住居址
写真図版3.....363	写真図版18.....378
層序	第15号住居址
写真図版4.....364	写真図版19.....379
検出された土坑群	第16号住居址
写真図版5.....365	写真図版20.....380
第1号住居址	第19号住居址
写真図版6.....366	写真図版21.....381
第2号住居址	第21・22号住居址
写真図版7.....367	写真図版22.....382
第4号住居址	第24号住居址
写真図版8.....368	写真図版23.....383
第5号住居址	第25号住居址
写真図版9.....369	写真図版24.....384
第6号住居址・第3号住居址	第26号住居址
写真図版10.....370	写真図版25.....385
第7号住居址	第27号住居址
写真図版11.....371	写真図版26.....386
第8号住居址	第1～3号土坑
写真図版12.....372	写真図版27.....387
第9号住居址	第4～6号土坑
写真図版13.....373	写真図版28.....388
第10号住居址	第7～9号土坑
写真図版14.....374	写真図版29.....389
第11号住居址	第10～12号土坑
写真図版15.....375	写真図版30.....390
第12・18・20号住居址	第13～15号土坑

写真图版31.....	391	写真图版47.....	407
第16~18号土坑		第70~72号土坑	
写真图版32.....	392	写真图版48.....	408
第19~21号土坑		第75~79号土坑	
写真图版33.....	393	写真图版49.....	409
第22~24号土坑		第81~83号土坑	
写真图版34.....	394	写真图版50.....	410
第25~27号土坑		第84~87号土坑	
写真图版35.....	395	写真图版51.....	411
第28~30号土坑		第88~90号土坑	
写真图版36.....	396	写真图版52.....	412
第31~33号土坑		第91~94号土坑	
写真图版37.....	397	写真图版53.....	413
第34~36号土坑		第95~98号土坑	
写真图版38.....	398	写真图版54.....	414
第37~39号土坑		第99~101号土坑	
写真图版39.....	399	写真图版55.....	415
第40~42号土坑		第102~104号土坑	
写真图版40.....	400	写真图版56.....	416
第43~45号土坑		第105~107号土坑	
写真图版41.....	401	写真图版57.....	417
第46~48号土坑		第108~110号土坑	
写真图版42.....	402	写真图版58.....	418
第49~51号土坑		第111~113号土坑	
写真图版43.....	403	写真图版59.....	419
第52~56号土坑		第114~116号土坑	
写真图版44.....	404	写真图版60.....	420
第58~61号土坑		第117~119号土坑	
写真图版45.....	405	写真图版61.....	421
第62~65号土坑		第120~122号土坑	
写真图版46.....	406	写真图版62.....	422
第66~69号土坑		第123~126号土坑	

写真图版63	423	写真图版79	439
第 127 ~ 129 号土坑		第 184 ~ 186 号土坑	
写真图版64	424	写真图版80	440
第 130 ~ 133 号土坑		第 187 ~ 190 号土坑	
写真图版65	425	写真图版81	441
第 134 ~ 137 号土坑		第 191 ~ 193 号土坑	
写真图版66	426	写真图版82	442
第 138 ~ 142 号土坑		第 194 ~ 196 号土坑	
写真图版67	427	写真图版83	443
第 144 ~ 146 号土坑		第 197 ~ 199 号土坑	
写真图版68	428	写真图版84	444
第 147 ~ 149 号土坑		第 200 ~ 201 号土坑·他	
写真图版69	429	写真图版85	445
第 150 ~ 152 号土坑		遗物出土状况	
写真图版70	430	写真图版86	446
第 153 ~ 156 号土坑		第 1 号住居址内出土遗物	
写真图版71	431	写真图版87	447
第 157 ~ 159 号土坑		第 1 号住居址内出土遗物	
写真图版72	432	写真图版88	448
第 160 ~ 162 号土坑		第 1 号住居址内出土遗物	
写真图版73	433	写真图版89	449
第 163 ~ 167 号土坑		第 1·2 号住居址内出土遗物	
写真图版74	434	写真图版90	450
第 168 ~ 171 号土坑		第 2·3 号住居址内出土遗物	
写真图版75	435	写真图版91	451
第 172 ~ 174 号土坑		第 4 号住居址内出土遗物	
写真图版76	436	写真图版92	452
第 175 ~ 177 号土坑		第 5·6 号住居址内出土遗物	
写真图版77	437	写真图版93	453
第 178 ~ 180 号土坑		第 6 号住居址内出土遗物	
写真图版78	438	写真图版94	454
第 181 ~ 183 号土坑		第 6 号住居址内出土遗物	

写真図版95	455	写真図版 111	471
第7・9号住居址内出土遺物		第26・27号住居址内及び土坑内出土遺物	
写真図版96	456	写真図版 112	472
第9・10号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版97	457	写真図版 113	478
第10・11号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版98	458	写真図版 114	474
第11号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版99	459	写真図版 115	475
第11・12・13号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 100	460	写真図版 116	476
第13・14号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 101	461	写真図版 117	477
第14号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 102	462	写真図版 118	478
第15号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 103	463	写真図版 119	479
第16・17・18号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 104	464	写真図版 120	480
第20・21号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 105	465	写真図版 121	481
第21号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 106	466	写真図版 122	482
第21号住居址内出土遺物		土坑内出土遺物	
写真図版 107	467	写真図版 123	483
第24号住居址内出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 108	468	写真図版 124	484
第24号住居址内出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 109	469	写真図版 125	485
第24・25号住居址内出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 110	470	写真図版 126	486
第25・26号住居址内出土遺物		遺構外出土遺物	

写真図版 127	487	写真図版 138	498
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 128	488	写真図版 139	499
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 129	489	写真図版 140	500
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 130	490	写真図版 141	501
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 131	491	写真図版 142	502
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 132	492	写真図版 143	503
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 133	493	写真図版 144	504
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 134	494	写真図版 145	505
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 135	495	写真図版 146	506
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 136	496	写真図版 147	507
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物	
写真図版 137	497	写真図版 148	508
遺構外出土遺物		遺構外出土遺物及び堅果類	

表 目 次

第1表 九戸村遺跡一覧表	26
第2表 縄文時代堅穴住居址時期別一覧表	35
第3表 石器計測表	355

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を経由し青森県八戸市に至る約68kmの高速度道路である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は延長距離27.6kmであり、二戸郡一戸町で国道4号線と接続する一戸インターチェンジを起点とし折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村・軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和48年10月に第7次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育委員会事務局文化課と日本道路公団仙台建設局との協議が重ねられた。

文化課においては、昭和50年から51年度にわたり道路公団の協力を得て実施計画路線沿い400m巾を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。その結果にもとづき遺跡保存とルート設定についても協議が行われた。

昭和52年9月に路線発表となり、中心杭、巾杭設置作業が開始され、昭和54年9月から用地買収へと進展していった。その間、発表された路線巾内における遺跡確認調査も併行して文化課により実施された。しかし、山林地帯における分布調査や確認調査は思うにまかせず、改めて山林伐採後に行うことにした。この時点における全計画路線内における遺跡数は14遺跡約81,700㎡となっている。

昭和55年度から当理文センターが第7次施行命令区間の発掘調査を文化課の調整と指導のもとに九戸村田代遺跡、軽米町吠屋敷Ⅰa遺跡、君成田遺跡の3遺跡について実施した。

同年9月には、工事用道路予定地の分布調査も行われ、一戸町沼山遺跡・滝野来田遺跡が追加となったが、滝野来田遺跡は文化課により立会調査とした。

昭和56年度は、軽米町土弓Ⅰ遺跡、吠屋敷Ⅱ遺跡、吠屋敷Ⅲ・Ⅳ遺跡、馬場野Ⅰ・Ⅱ遺跡、九戸村道地Ⅱ・Ⅲ遺跡、楸Ⅰ・Ⅱ遺跡、江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡、滝谷Ⅲ遺跡、江刺家遺跡、一戸町沼山遺跡、小井田Ⅳ遺跡の調査となった。この中で吠屋敷Ⅲ遺跡、馬場野Ⅱ遺跡、江刺家Ⅴ遺跡は当初計画がなく、山林伐採後に遺跡確認されたものである。

II 調査方法と整理方法

(1) 調査方法

(1) 調査区の設定 (第2図)

日本道路公団が測量した中心枕STA126+80を基準点とし、他の任意の1点STA125+80とを結ぶ直線を基準線と定めた。基準線及び基準線に直交する直線を、基準点より30mごとに区切り大グリッドを設定した。なお、遺跡の広がりを想定し、座標原点は基準線上北北西60mにとり、更に同点から西南西へ150mの位置に設定した。以上の操作により得られた大グリッドに対して、西から東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……のローマ数字を付し、北から南へA・B・C……のアルファベットを付し、両方の組み合わせによって大グリッド名CV区、CM区……のごとく表わした。また、大グリッドを座表軸にそって10等分し、西から東へ0～9のアラビア数字を付し、北から南へa～jの小文字のアルファベットを付し、大グリッドと同様の方法で小グリッドを命名した。なお、調査区を南北に分断する形で沢が東流しているため、沢を境に北区、南区と呼んだ。

(2) 粗掘り

北区は耕作地として利用されていたため、一部は土盛(厚さ、最大150cm)、一部は削平を受けていた。南区は試掘の結果、植林されていた部分に遺構が確認された。当初の調査期間が3ヶ月余であったこと、表土が厚いこと等を勘案して、重機(バックホー)による表土剥ぎを行った。土捨て場には調査区外、谷部および遺構が検出されなかった区域をあてた。

(3) 遺構検出と遺構の命名

遺構検出は北から南へ向かって手掘りにより順次進めた。遺構が検出された場合、住居址には01、土塼には02、その他の遺構には00を付したのち、大グリッドごと検出順に連番を付し遺構名とした。精査の過程で下位に遺構を確認した場合は、新しい遺構をa、古い遺構をbとした。また、精査の段階で遺構と確認されなかったものについては欠番とした。なお、1982年度の調査にあたっては前年度と無関係に遺構名を付したため、一部に遺構名が重複するなどの混乱が予想されたため、遺跡略号と調査年度を併記して区別した。

(4) 精査

住居址は4分法、土塼は2分法を原則とした。遺構内出土遺物の取り上げは、必要に応じて写真撮影をし、実測図を作成のうえ取り上げた。出土遺物の洗浄・注記は現場のプレハブで野外調査と併行して行った。

(5) 実測

遺構の分布が一定地区内に集中しかつ多数にのぼるため、調査区全域で簡易造り方実測を行った。基準測量、造り方設置は調査員が行った。遺構の実測図は $\frac{1}{60}$ の縮尺を原則とし、炉址や、カマド跡など必要に応じて $\frac{1}{30}$ の縮尺とした。遺構のレベル計測は住居址床面や遺構の周囲等は50cm間隔、稜線部等は必要に応じて細かく計測した。81年度の調査では水系を使用し、82年度はレベル計測機を使用した。遺構の実測・埋土の註記等は現場の女子作業員の中から養成した実測班が行った。実測班は計測者、作図者の2人組を原則として構成した。実測の指示、図面の点検はそのつど調査員が行った。

(6) 写真撮影

アサヒペンタックス6×7cm判のカメラ1台とニコン35mm判カメラ2台を使用した。35mm判は50mmの標準レンズと35mmの広角レンズを必要に応じて使用した。フィルムはモノクローム(6×7判・35mm判)とカラーリバーサル(35mm判)を使用した。撮影は調査員が担当したが、一部は作業員が行った。撮影にあたっては当センター作成の「撮影カード」を使用した。

[2] 整理方法

(1) 作業内容と分担

室内整理作業は次の三段階にわたって行われた。

- 1981年11月11日～1982年3月31日
 - ・遺構図面の点検・合成・第2原因の作成
 - ・写真、スライドの整理および写真台帳の作成
 - ・遺物の仕分けおよび遺物台帳作成
- 1982年11月8日～1983年3月31日
 - ・遺構図面の点検・合成・第2原因の作成
 - ・遺物の仕分け・復元および遺物台帳の作成
 - ・遺物の実測
- 1983年4月1日～1984年3月31日
 - ・写真・スライドの整理と台帳の作成
 - ・遺構図面の点検・合成・トレース・図版の作成
 - ・遺物の実測・拓本・トレース・図版の作成
 - ・原稿執筆

(2) 遺構図版

遺構配置図は野外調査時に作成した平面図を合成し $\frac{1}{60}$ に縮小したものである。各遺構は $\frac{1}{60}$ の縮尺を基本とし、遺構の規模や性質により適宜縮尺を変えた。また、各遺構図またはそのページにスケールを表示した。各遺構の平面図はセクションが水平になるようにし、方位は遺構内

かまたは原則として左肩に表示した。遺構図版の中で使用したスクリーン・トーンは凡例に示したとおりである。また、調査時の遺構命名は前述したとおりであり煩雑なため、本報告書では住居址は時期別に、土坑等は原則として北側から連番を付した。

(3) 遺物図版

遺物の実測図はすべて実物大で作成したが、本報告書には縮少して掲載した。その際の縮尺は例言に示したとおりである。

(4) 写真図版

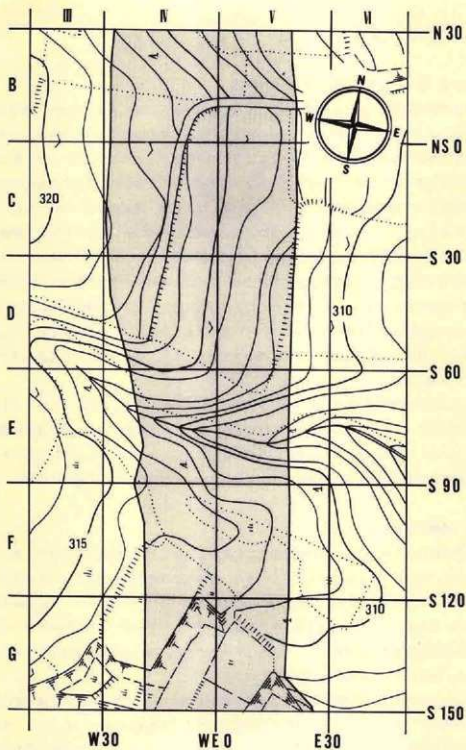
遺構の写真や遺物出土状況の写真は野外調査中に撮影したものの中から選択して掲載した。遺物写真は当センターの写真技師が撮影した。遺物写真は図版として掲載されたものから、更に選択して掲載するとともに、図版に掲載されなかった堅果類等を掲載した。

(5) 遺物番号

実測図や拓影図と写真の番号は統一をした。石器及び石製品等は1番から、土器及び土製品は201番から、その他の遺物は1501番からとして連番を付した。

〔凡例〕

石		当該遺構より新しい遺構	
土器		木根	
柱穴	P ₁ P ₂ P ₃		
調査区外		土器の剥落部分	
地山		南部浮石粒	Nbp
焼土		十和田 a 降下火山灰	To-a
掘り過ぎ・攪乱		十和田 b 降下火山灰	To-b
当該遺構より古い遺構		炭化物	C



第2図 地形及びグリッド配置図

III 遺跡の環境

(1) 地形 (第1図・第3～4図・写真図版1)

遺跡Ⅱは岩手県九戸郡九戸村大字江刺家第13地割字鍋倉にあり、折爪岳山頂から南東2.5kmに位置する。当遺跡の西は標高852.2mの折爪岳を中心とする山地でありほぼ南北にのびる。東は多少曲折しながらも同山地と平行するように瀬月内川が北流する。同河川の更に東は北上山地の隆起準平原を起源とする起伏量の小さな山地が広がる。岩手県農地林務部発行の「北上山系開発地域土地分類基本調査、一戸」(1972年)によれば、同遺跡周辺の地形・地質は次のような構造となっている。折爪岳の東麓は折爪岳山脚部が直線に近い形でより低い丘陵部に接する。この丘陵部は崖錐性堆積物を基盤とした複合扇状地であり、瀬月内川の開析による平地(瀬月内川地溝帯)とは明瞭に段丘化されており中位段丘に相当する。この崖錐性堆積物は古生層の粘板岩とチャートによって作られている。粘板岩は黒色～暗灰色で板状にはかれやすい。これらの基盤盤の上に赤褐色の火山灰土が厚く堆積する。その上に南部浮石や中巔り浮石、十和田b・a降下火山灰等がのり、表土は黒ボクとなる。この土壤は雪谷統・盆花統と呼ばれる黒ボク土壌である。

この扇状地は緩斜面を形成し、斜面上をほぼ平行して東流する多くの沢がはしっている。これらの沢によって扇状地付近から扇端にかけて開析が進み、沢と尾根が南北に繰り返す丘陵状となっている。この沢や湧水沿いに多くの遺跡が分布する。このうち、これまでに当センターが東北縦貫自動車道建設に係って発掘調査した遺跡は、九戸村内だけでも8遺跡にのぼる。

(2) 遺跡の立地 (第4図)

遺跡Ⅱは上記の複合扇状地のほぼ中央に位置する。標高325～310mの緩斜面で、北にはナニマが沢、南にはアイクボ沢が東流する。また、遺跡内には湧水が2ヶ所あり、北の湧水は縦貫道路の中心杭S T A126+20から約40m、南の湧水は中心杭S T A125+80から約20mそれぞれ西側に位置する。北側の湧水は調査区を南北に二分する形で東流する沢を形成する。水量は少ないが開析が進み、基準線上で谷の深さは7m余である。南の沢は湧水口付近まで開田されており、湧水は水田に利用されている。

この付近は黒ボク土壌で礫を含まない良質の耕作土ではあるが、「北上山系の北部末端に位置し、内陸性の気候であり、一般に県内でも冷涼な地域で、降水量も少ない」ことから、水田としての土地利用は少なく、^(注1)細作もデントコーンやジャガイモ・レタス等寒冷地帯の野菜やリンゴ等の果樹園として利用されている。また、天然林は「コナラ・クリ林を主体とした広葉樹林

が大部分で、部分的にアカマツ天然林が点在する。折爪岳・傾城時周縁部には一部ミズナラ林が見られる。アカマツ・カラマツの大面积造林も若干見られるがスギの造林地は小面積で点するにすぎない。^(注2)

遺物の分布状況や遺構の検出状況等の観察から、一部には耕作地の造成に伴う削平や擾乱が見られるものの、巨視的にはかなり良好な状態で遺跡が保存されていたと考えられる。

(3) 周辺の遺跡 (第3図・第1表)

第3図に示めたとおり、九戸村内だけでもこれまでに確認された遺跡は51遺跡を数える。^(注3) そのうち調査された遺跡は僅か9遺跡だけである。この遺跡の分布状況を見るに、北から順に折爪岳東麓周辺、伊保内地区(現在、村の中心地)、山根地区の3ヶ所に集中しており、いずれも瀬月内川地溝帯沿いに属する。このように明瞭な片寄りをみせることは、一つには開発等に伴う分布調査がこれらの地区に集中していることによるものと考えられる。

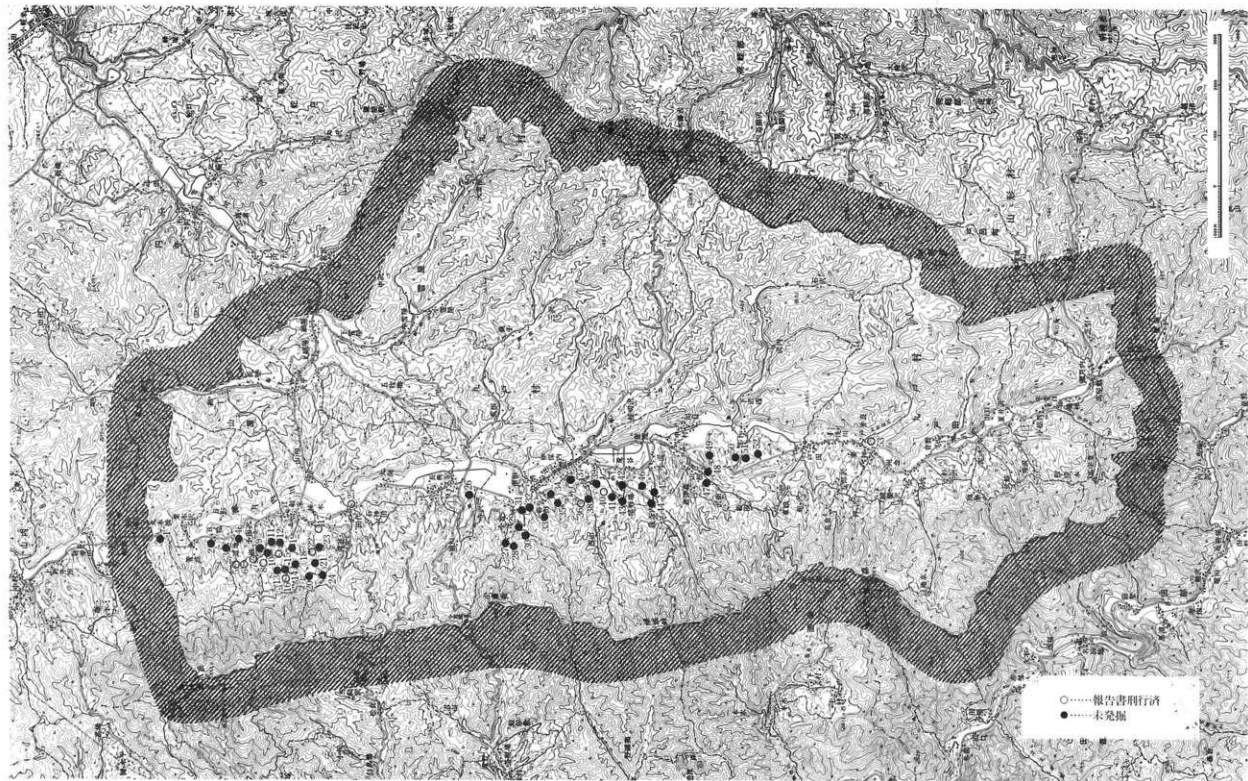
折爪岳東麓の遺跡群は第3図および第1表に示したとおりである。このことから、縄文時代中期から後期かけてと平安時代が圧倒的に多いといえる。しかし、これらの発掘も東北縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘が大部分であるため、発掘は路線中に限ぎられ遺跡全体からすれば一部を発掘したに過ぎない。また、遺構としての確認のないものもあるが、出土土器は縄文時代早期から平安時代まで各期にわたって出土していることから、種市進が当センター発行の「紀要Ⅱ」および「道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書」で指摘しているとおり、折爪岳に源を発する沢や湧水を生活水として連綿として生活が営まれていたことを推測させる。

〔Ⅲ章注記〕

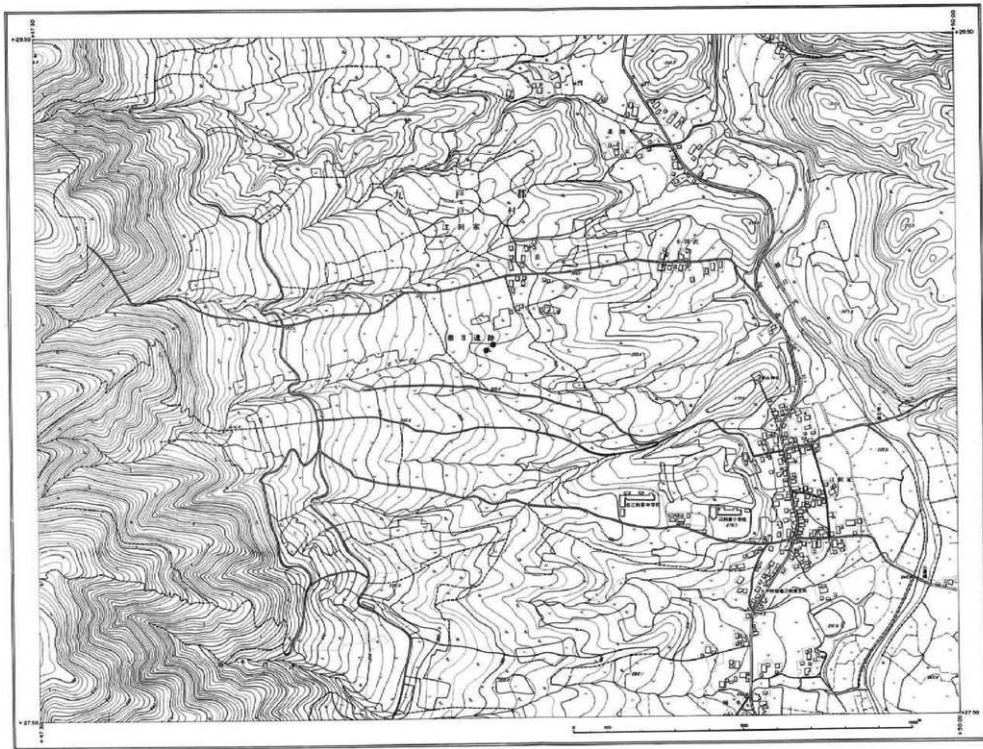
1. 岩手県農林務部「北上山系開発地域土地分類基本調査 一戸」 1972年 P 24
2. 前掲書 P 25
3. 岩手県教育委員会文化課「岩手県遺跡基本図」昭和57年による。

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	2121	丸木橋	大字江刺家第17地科字丸木橋	縄文	
2	0029	菅波(I)	〃 第16地割	縄文晩期～平安	
3	0048	〃(II)	〃 〃	〃 土師(平安)	
4	0170	道地	〃 第14地割字道地		
5	0066	〃(III)	〃 〃	縄文晩期	沼手県埋文センター報告書第64巻 昭和58年
6	0087	〃(IV)	〃 〃	〃	〃 第64巻 昭和58年
7	1005	塚(I)	〃 第9地割	〃	〃 第50巻 昭和58年
8	1025	〃(II)	〃 第13地割		
9	1018	〃(III)	〃 第12地割	縄文晩期	
10	1038	〃(IV)	〃 第13地割	〃	
11	1049	〃(V)	〃 第12地割	縄文後期～晩期	
12	1059	江刺家(I)	〃 第12地割	晩文晩期	
13	1044	〃(II)	〃 第13地割	縄文後期～晩期	
14	1054	〃(III)	〃 〃	縄文中期～晩期	
15	1067	〃(IV)	〃 〃	縄文中期～後期～晩期	沼手県埋文センター報告書第59巻 昭和58年
16	1063	〃(V)	〃 〃	縄文晩期	〃 第59巻 昭和58年
17		江刺家	〃 〃	〃	〃 第70巻 昭和59年
18	1095	若宮(I)	〃 第8地割	縄文晩期	
19	1089	〃(II)	〃 〃	〃	
20	2012	滝谷(I)	〃 〃	〃	
21	2025	〃(II)	〃 〃	〃	
22	2025	滝谷(III)	大字江刺家	縄文晩期	沼手県埋文センター報告書第49巻 昭和58年
23	2027	〃(IV)	〃 〃	〃 ～土師(平安)	
24	2053	〃(V)	〃 〃	縄文中期～晩期～土師(平安)	
25	2197	田代	〃 第2地割字田代	縄文前期～中期	沼手大学芸術部研究年報第13巻198: 草園 沼手県埋文センター報告書第41巻 昭和57年
26	2129	長興寺	大字長興寺第3地割	縄文中期	
27	0111	小倉(I)	大字小倉	〃 ～後期	
28	0120	〃(II)	〃 〃	〃 ～土師	
29	0123	〃(III)	大字伊保内	土師	
30	0150	〃(IV)	〃 〃	縄文中期	
31	0136	南田(I)	〃 〃	縄文晩期	
32	0147	〃(II)	〃 〃	晩文中期～晩期	
33	0185	轟田(I)	〃 〃	縄文晩期	
34	0199	〃(II)	〃 〃	縄文中期	
35	1118	〃(III)	〃 〃	土師	
36	1158	伊保内(I)	〃 〃	縄文中期～土師	田遺跡名 昭和56年度改訂 伊保内篇 I 沼手県埋文センター報告書第53巻 昭和58年
37	1231	伊保内館	〃 〃	縄文中期～晩期～土師	伊保内館 II
38	1187	川向(I)	〃 〃	〃 ～土師	〃 III
39	1281	〃(II)	〃 〃	〃 ～土師	〃 IV
40	2109	〃(III)	〃 〃	縄文晩期	〃 V 沼手県埋文センター 報告書第25巻 昭和57年
41	2118	〃(IV)	〃 〃	土師	〃 IV
42	2240	尾形場(I)	〃 〃	縄文中期?～土師	
43	2157	〃(II)	大字伊保内	縄文中期?～土師	
44	2197	滝谷内(I)	大字滝谷	縄文後期	
45	2199	〃(II)	〃 〃	縄文中期(?)	
46	2261	〃(III)	〃 〃	〃	
47	0292	山根(I)	大字山根	縄文晩期	
48	1204	〃(II)	〃 〃	〃	
49	1217	〃(III)	〃 〃	縄文晩期	
50	1267	牛の馬場(I)	大字戸田	縄文中期	
51	1297	〃(II)	〃 〃	土師	
52	2208	〃(III)	〃 〃	縄文後期～土師	
53	1320	妻ノ神	大字戸田字妻ノ神	縄文晩期	日本考古学年報13 昭和35年

第1表 九戸村遺跡一覧



第3圖 九戸村内遺跡分布圖



第4図 遺跡周辺の地形

IV 基本層序 (第5図)

調査区内の地形は僅かに波状を描くような起伏をもった緩斜面であり、必ずしも層序や層厚が一定しているわけではない。そこで調査区内外の3ヶ所(第5図①～③)に土層観察用のトレンチをいれ、相互に比較検討した。その結果、第2地点が基本的な層序を示していると考えられた。ただし、同地点は畑地として利用されていたため、植林されていた南区に見られた腐葉土はない。したがってこの土層を加え、モデルとしての基本層序とした。また、調査の進展に伴い更に4ヶ所に同様のトレンチ(同図④～⑦)をいれ観察した結果、この基本層序は妥当なものであった。なお、土層名は上位からローマ数字でI層・II層・III層……とし、算用数字で表わした遺構内の埋土とは区別した。

- I層——10YR 5/2 黒褐色土 腐葉土であり、大部分は南区の荒地で観察される。層厚15cm。
- II層——10YR 5/2 黒色土 黒ボクであり、下部はIV層又はV層に漸移する。調査区のはほぼ全域を覆う表土層で、耕作土として利用されている。主として縄文土器片が混入している。層厚20cm。
- III層——10YR 5/2 灰黄褐色土 十和田a降下火山灰。黒色土層中に見られるため、灰白色に見える。縄文晩期の遺構の埋土上位や土師期の遺構の埋土下位にはまとまった層として堆積をするが、遺構外では南区の東側に若干見られる程度で面的な広がりはない。層厚不定。
- IV層——7.5YR 5/2 極暗褐色土 III層とV層の間層である。下部はV層に漸移する。常にIII層に伴って表われることから、フラクションを起こした層と考えられる。層厚不定。
- V層——7.5YR 5/2 黒褐色土 シルト、1～2mmのガラス質の浮石や上部に十和田b降下火山灰を含む。調査区全域を覆い、層厚は15cmでほぼ一定である。この層が遺物を包含している層であるが、更に細分することはできなかった。下部はVI又はVII層に漸移する。
- VI層——10YR 5/2 褐色土 いわゆる中燥浮石層に相当するが、斜面の下部又は凹地に散見する程度で面的な広がりはない。大部分は黒色土との混土である。粘性に乏しい。
- VII層——10YR 5/2 暗褐色土 乾燥すると白っぽい砂質状となるシルトである。調査区全域を覆い層厚15～20cmでほぼ一定である。この層の上位面が遺構検出面である。遺構の埋土最上位はほぼ同じ土色であるが、南部浮

石粒が混入しているため、比較的容易に平面プランを確認することができる。またこの層の上部面に縄文土器片等が含まれる。

Ⅶ層——7.5 YR 5/6 明褐色土 南部浮石層。地元では「ゴロタ」と呼ぶ。調査区のほぼ全域を覆う。層厚は20cmで一定である。この層以下にはまったく遺物はない。

Ⅵ層——7.5 YR 5/6 暗褐色土 シルト。調査区全域を覆う。層厚3cmで下部はⅤ層に漸移する。

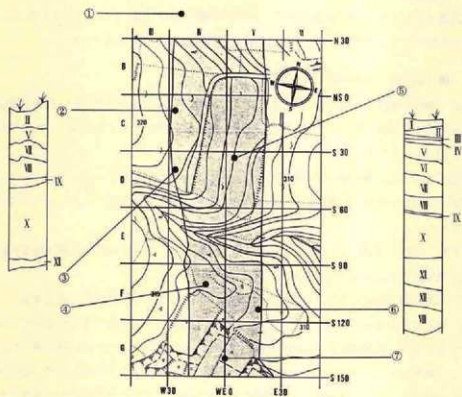
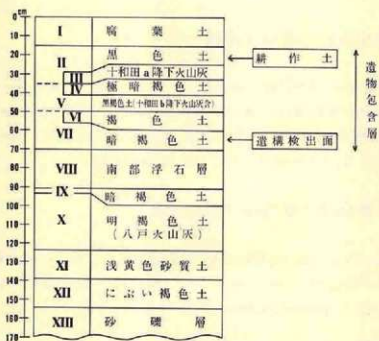
Ⅴ層——7.5 YR 5/6 明褐色土 八戸火山灰に同定される。硬くしまり粘性も強い。厚く堆積しており、薄い所でも30cm以上である。下部ほど明るい褐色となり、細分が可能である。大部分の竪穴住居址と大きい土坑はこの層まで掘り込んで作っている。

Ⅳ層——2.5 YR 5/6 浅黄色砂質土 粒径1mm程度のガラス質粒子を多く含む。最も深く掘り込んだ土坑の底部はこの層の上部まで達する。Ⅲ層と逆転する所や切れる所もある。層厚不定。

Ⅲ層——7.5 YR 5/6 にぶい褐色土 粘土。層厚不明。

Ⅱ層——2.5 YR 5/6 砂礫層 いわゆる崖錐性堆積物で基盤礫である。層厚不明。

以上のように層序区分を試みたのであるが、出土した遺物を層位的に把握するまでには至らなかった。



第5図 基本層序模式図と土層観察用トレンチの位置

V 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居址23棟、平安時代の竪穴住居址3棟、時代不詳の竪穴住居址1棟の計27棟、土坑201、焼土遺構13、集石遺構1等である。また、出土した遺物は縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、鉄製品、炭化材、木製品、炭化した堅果類等である。以下、順に詳述する。

〔1〕縄文時代の竪穴住居址と出土遺物

縄文時代に属する住居址を時期別に分類すると第2表のようになる。明瞭に時期を決定できない住居址を考慮しても、中期から後期にかけてが最も多い。また、これは後述する土器の出土量とも合致する。住居址名は時期別に分類し、連番を付して表わした。

第1号住居址

本遺構は、検出された全住居址の中で、最も深く掘り込んで構築された住居址である。また、隅丸長方形のプランを明瞭に残し、遺構の保存状態が最もよい住居址である。

遺 構 (第6図、写真図版5)

(位置) 南区の尾根状台地の頂上部に位置する。南北両側には沢が東流する。北側の沢は比高約7mである。南側の沢は埋没谷となっており、現在は谷頭から若干の湧水が流れ出ており、水田に利用されている。

(重複) 本住居址の中央部付近の埋土中位に、厚い焼土が形成されている。

(埋土) 埋土は上位から、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。レンズ状の自然堆積である。

(平面形、規模) 北側に張り出しをもつ隅丸長方形である。長軸方向は南北線(磁北)に一致する。規模は3.4m×4.7mである。

(壁) 壁高は65~75cmである。北の張り出し部はやや外反するが、他はほぼ直立する。

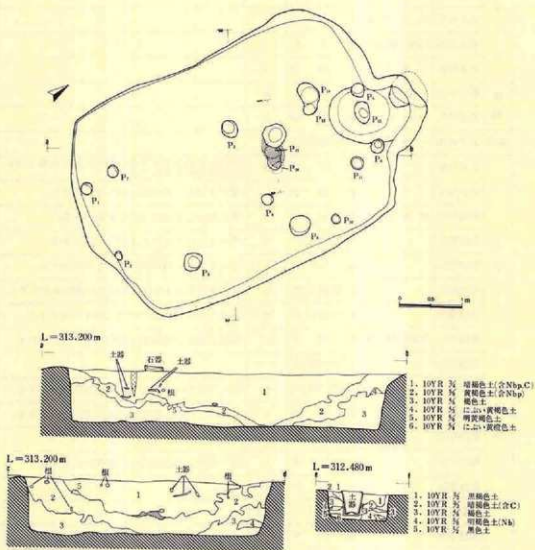
(床) 第Ⅰ層で水平かつ平坦である。とくに硬い部分はないが、一様によくしまっている。張り出し部の床は、径80cm厚さ10cmの円形状の段が作られている。中央に浅い柱穴状土坑があるため、一見ドーナツ状に見える。土性は粘土に砂質シルトをまぜたようなもので、粘性は少なくきわめて硬い。この段の両端に一对の柱穴状土坑がある。ともに開口部径20cm程度である。

(柱穴) 主柱穴はP₁~P₄の6本である。他に10本の柱穴又は柱穴状土坑がある。

時期	住居址	床面出土土器	炉の形態	主柱穴	備	考
中 期	第1号住	円筒上層C式	土器埋設炉	6		
	第2号住	円筒深鉢	石囲炉	4		
	第3号住	円筒上層D式	地床炉	(1)		
	第4号住	大木9式	石囲炉	4		
後 期	第5号住	十腰内I式	地床炉	4		
	第6号住	十腰内I式	石囲炉	4		
晩期	第7号住	円筒深鉢	土器埋設炉	4		
不 明	第8号住		地床炉	10	周辺から出土する土器は繊維土器と中期と思われる粗製の土器片である。	
	第9号住		石囲炉	(1)	埋土下位から椀林式土器片が出土する。	
	第10号住	粗製深鉢	石囲炉	4	埋土内から椀林式土器片が出土する。	
	第11号住		石囲複式炉	4	埋土下位から椀林式土器片が出土する。	
	第12号住		地床炉	(1)	埋土下位から椀林式の土器片が出土する。	
	第13号住		石囲複式炉	4	埋土下位から大木9～10式の土器片が出土する。	
	第14号住		石囲複式炉	6	埋土下位から大木10式の土器片が出土する。	
	第15号住	粗製深鉢・壺	石囲炉	3?	粗製土器は中期末葉～後期初頭と考えられる。	
	第16号住		小型石囲複式炉			
	第17号住		石囲炉(?)		埋土下位から十腰内I式の土器片が出土する。	
	第18号住		地床炉	4	埋土下位から十腰内I式の土器片が出土する。	
	第19号住		石囲炉(?)	4?	晩期(?)	
	第20号住		地床炉	2	埋土上位から椀林式の土器片が出土する。	
第21号住		地床炉	4			
第22号住			(1)			
第23号住		地床炉	4?			

表2 縄文時代壱穴住居址時期別一覧表

(炉) 土器埋設炉である。土器の東側に柱穴状土坑があり、その埋土は粉炭を多量に混入した黒褐色土である。焼土は同土坑を覆うように薄く形成され、同土坑と接する土器には煤が付着し二次焼成が見られる。土器は2～3cm床面に出る程度で深く丁寧に埋められている。底には大小2個の石が敷いてある。土器内の埋土は黒褐色土であり、粘性はなくしまりもない。焼土は上位に焼土粒として僅かに混在するだけであるが、粉炭は埋土全体に一緒に混在する。土器の下半部は破壊され欠損している。



第6図 第1号住居址

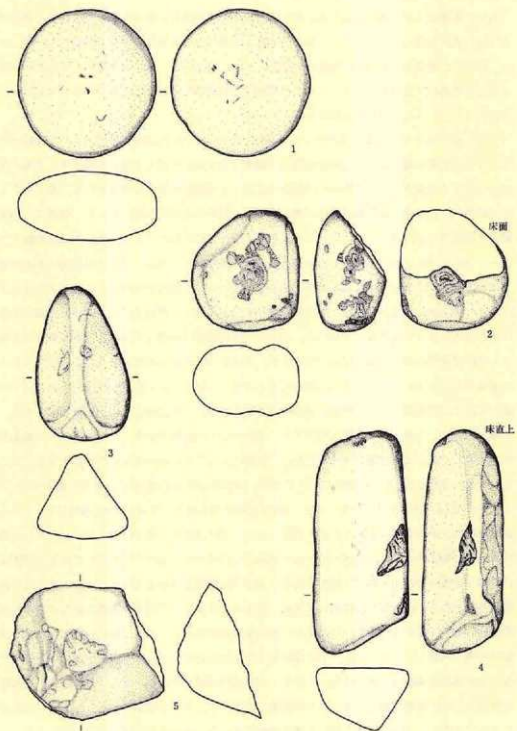
(その他) ○付属土坑について

北側の張り出し部の壁を挟んで土坑が作られている。内部は球形状にふくらむ。奥行き50cm、高さ40cmである。内部床面から炭化したクルミ2個が出土した。

出土遺物（第7図～第12図、写真図版86～89）

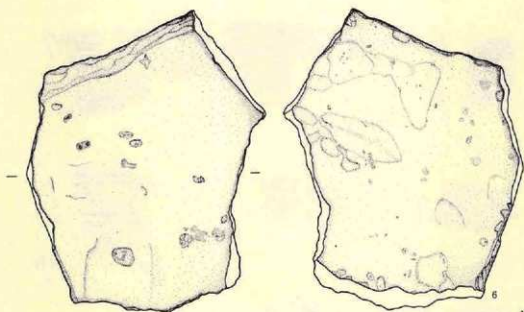
（石器）床面から2の凹石と張り出し部の床直上から4の磨石が出土する。2は表裏と側面の4ヶ所に凹みを持っている。4は三角柱状で最も鋭角をなす稜線部が著しく磨滅している。また、図示した側面と上部の面に磨滅痕が認められる。埋土中から1と3の磨石と5・6の石皿又は台石と思われる石器が出土した。1は側縁部と表裏の中央部付近にわずかながらも打痕がみられる。3・5・6は焼成を受け赤化している。

（土器）床面出土の土器は、埋設炉として使用されていた201の深鉢1点である。口縁部はゆるい4つの山形口縁である。口縁部文様体は横走する9本の隆帯と頂部から垂下する2本の隆帯によって4区画される。隆帯間には割箸状工具による連続刺突文が充填される。垂下する2本の隆帯間には3本1組の縄文原体が押圧される。隆帯には縄文が施文される。体部には羽状縄文が施文される。202～246はすべて埋土中から出土した土器片である。202は貝殻条痕文である。203～208は胎土に横維を含む鉢形土器の口縁部破片である。207は口縁部に2本の縄文原体圧痕文が、203～205は縄文原体圧痕による幅のせまい幾何学文様体を施す。206は上下に3本の縄文原体圧痕が施され、間に綾格文がまわる。208は摺糸文である。209は縄文原体圧痕と隆帯によって文様体が作られる。210～213は隆帯と割箸状工具による連続刺突文である。210は隆帯に沿って縄文原体が圧痕され、211と212は縄文が施される。213はコイル状に縄文原体を押圧している。210は突起部であるが、口唇部には上から指頭圧痕が施されている。214は山形突起であり口唇部に棒状刺突が施される。215は幅の広い山形突起部である。斜縄文を施文した後、細い隆帯を貼布する。216～217は隆帯を貼布した後、隆帯上に縄文を施文する。218～230は縄文を施文した上に沈線によって文様体を構成した沈線土器である。218、221、222はゆるやかな波状口縁をえがき、口唇部は僅かに肥厚し一本の沈線が入る。222と223は同一個体と思われる。219、220は沈線の間を磨滅しており、隆沈線状になっている。229は頂部に棒状刺突が加えられる。222、223、229は器表に煤が付着している。224～228は埋土中に形成された焼土遺構の中から一括出土した破片の一部であり赤化している。231は口唇部まで無節の縄文が横位に施文される。233は口唇部直下が磨滅されている。234は口唇部に隆帯が貼布され折返し口縁状に見える。231～234は胎土に若干の横維の混入が見られる。235は折返し口縁で0段多条の斜縄文が口唇部まで施文される。236は網目状摺糸文、237は器厚が薄く内溝して立ち上がる。238はゆるやかな波状口縁をえがく、器表全面に煤が付着する。239は単節斜縄文が横位に施文される。240は無節縄文である。焼成は良い。241は木目状摺糸文、242は羽状縄文と共に胎土に横維が含まれる。243は綾格文である。244～246は底部片であるが、245は体部下端に2本の沈線がまわる。246は無節縄文が深く斜行する。

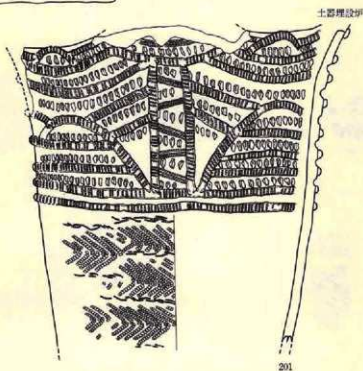
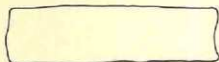


第7图 第1号住居址内出土遗物(No.1)

S=1/3

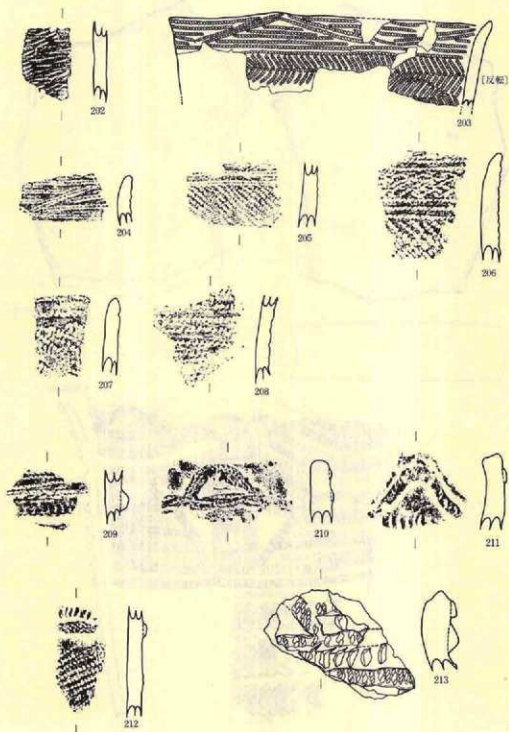


S- $\frac{1}{3}$



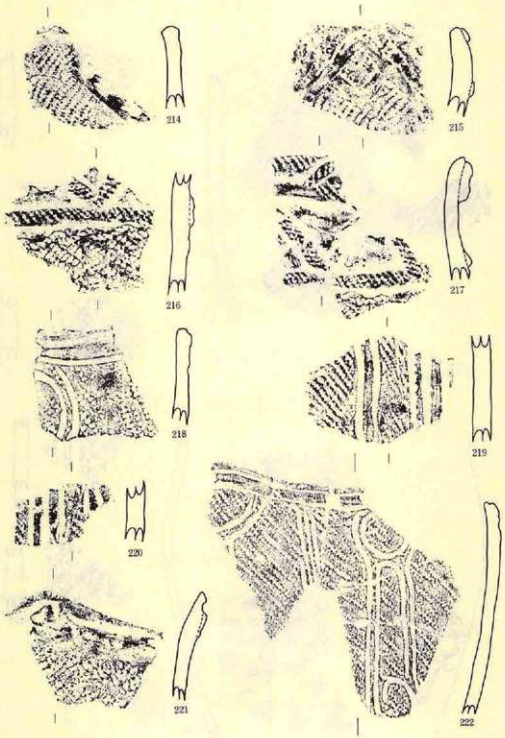
第8圖 第1号住居址内出土遺物 (No. 2)

S- $\frac{1}{4}$



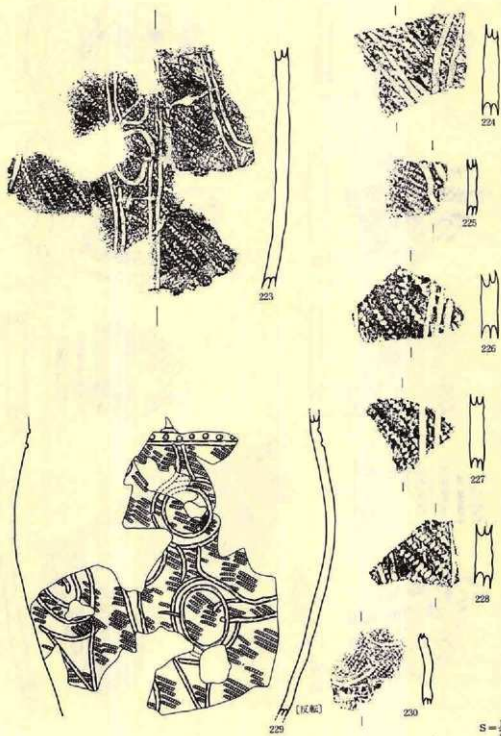
第9图 第1号住居址内出土遗物(No. 3)

S- $\frac{1}{2}$
(203-S- $\frac{1}{3}$)



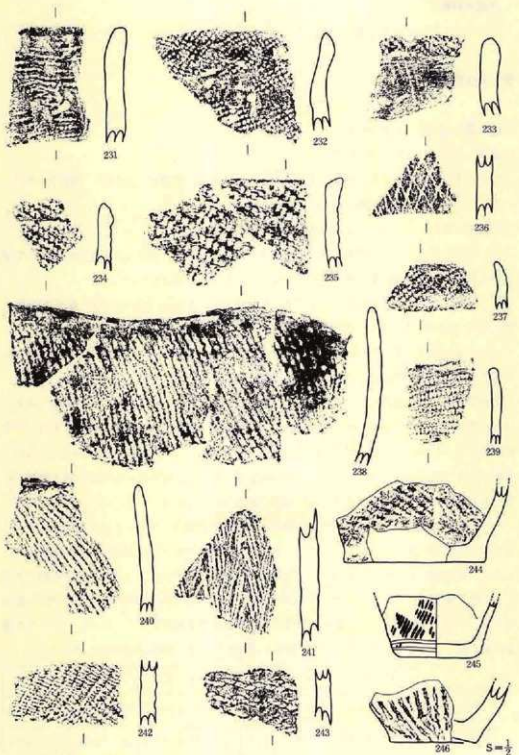
第10图 第1号住居址内出土遗物 (No. 4)

$S = \frac{1}{2}$
 (222-S = $\frac{1}{2}$)



第11圖 第1号住居址内出土遺物 (No.5)

(223, 229 - S = 1/3)



第12图 第1号住居址内出土遗物 (No. 6)

$S = \frac{1}{2}$
 $(245 - S = \frac{1}{4})$

遺構の時期

201の土器により中期中葉である。

第2号住居址

遺 構 (第13図、写真図版6)

(位置) 北区のはほぼ中央部に位置する。

(埋土) 上位から黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。斜面の下位側で一部削平を受けているが、レンズ状の自然地積である。

(平面形・規模) 正円で、径4.3mである。

(壁) 壁高は斜面上位側で最大値70cm、下位側では20cmを測る。壁の上部はⅣ層で若干の崩壊が見られるが、下部はⅩ層を掘り込んでいるためほとんど崩壊はない。

(床) Ⅹ層で全面に南部浮石粒が混入する。水平かつ平坦である。壁際より中央部がやや硬く、炉と東壁の間は非常に硬くしまっている。

(柱穴) 主柱穴は4本(P₁~P₄)で、ややいびつではあるが方形の配置をとる。柱間2m。床面からの深さは平均60cmである。他に8柱穴が検出されたが、いずれも北壁側沿いであり、土留め等の何らかの施設を作ったものと思われる。これらはいずれも10cm程度の深さである。

(炉) 中心より東側に寄り、P₂~P₃の中間に位置する。一辺が57cmの方形石囲炉である。炉縁石は長さ30~40cmのものが2個、他は20cm程度のものである。石の厚さの $\frac{1}{2}$ を埋め込んでおり、炉の作りは丁寧である。石質はチャート質粘板岩である。上位は厚さ10cm程度の焼土で覆われる。なお、この石囲炉はこれよりも古い時期の炉を埋めて作られている。この先行炉も石囲炉であった可能性もあるが、石の抜き取り跡などは確認できない。しかし、先行炉の底面がこの石囲炉の底面より更に6cm深くなること、先行炉も不完全ではあるが方形に掘り込まれていること、東壁際に火熱を受け赤褐色化した石が6個もあること等から、その可能性を指摘できる。

(その他) 東壁の近くに大小6個、南東壁の近くに2個、南西隅の柱穴P₁上に1個の計9個の石が出土した。東壁の近くの6個の石はすべて火熱を受け赤褐色化しているが、そのうち2個は石皿の破片である。この2個をのぞく他の7個の石には加工痕等は認められない。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
床面の径	13.0	23.0	15.0	10.0	4.0	3.0	9.0	6.0	7.0	4.0	5.0	9.0
深 さ	65.5	57.5	59.5	63.0	14.0	4.0	11.0	20.0	18.0	10.0	36.0	14.0

付表：柱穴の規模 (単位・cm)

遺物 (第14～15図、写真図版89～90)

(石器) 床面から8・9の石皿の破片が出土している。8の表は磨滅しているが裏は破損しており使用、未使用は不明である。9は両面が磨滅している。石質はどちらも硬砂岩である。埋土中からは7の半円状扁平打製石器と10の磨石が出土する。7は研磨したかどうかは判然としないが、両側面は磨滅しており、その面に両面から打撃を加え、剥離している。弧状の刃部には明瞭な使用痕は認められないが、直線の刃部はほぼ水平に磨滅している。一部欠損している。10は磨石及び敲石として使用されている。全面が磨滅し、縁辺部には敲打痕がみえる。一部欠損している。

(土器) 床面から247の円筒土器深鉢が復元できる状態で出土する。伎節斜縄文を地文とする粗製土器である。器形は、体部の中頃がややふくらみ口縁部付近が僅かに外反する。褐色の色調で焼きが硬く胎土は密である。248～253は埋土中から出土した鉢形土器の口縁部破片である。248は隆帯の間に縄文原体を折り曲げた爪形圧痕文を充填する。隆帯には隆帯に沿って縄文原体が押圧される。249は口唇部が肥厚し隆帯が口唇部と平行に貼布される。口唇部と隆帯にはコイル状に縄文原体圧痕が施文される。また隆帯間には波状に縄文原体圧痕が施される。250～252は口唇部の形状の違いはあるが、すべて地文のみの口縁部破片である。253は口唇部に向かって直立する部分は無文で研磨されている。体部に向かって膨らむ部分から単節斜縄文が施文され、その上に浅い2本の沈線が平行にまわる。平行沈線の下に「∩」状に細い沈線が垂下し、平行沈線との間には竹管刺突文が加えられる。254は皿又は浅鉢の体部最下部の破片で一本の沈線がまわる。縄文は細粒の単節斜縄文である。

遺構の時期

石器では7・10・土器では247が出土していることから、本遺構は中期中葉から中期後葉に位置付けられる。

第3号住居址

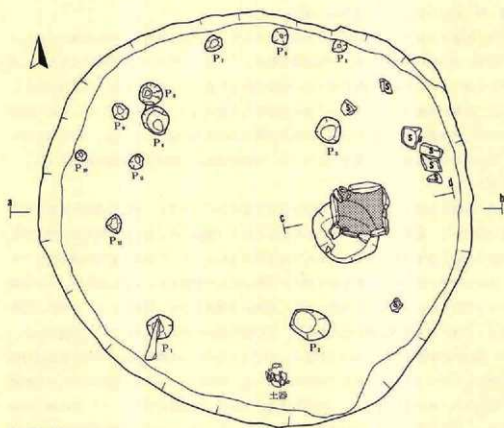
本遺構は南半の流失、西半が調査区外に続いていることもあって一部分の調査である。

遺構 (第16図、写真図版9)

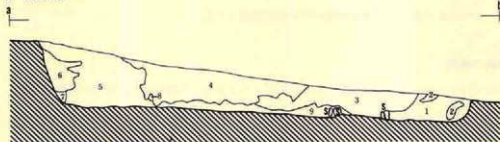
(位置) 北区南側上位で、沢に面した南斜面の肩部にあたる。

(重複) 風倒木痕以外は認められない。住居址床面は風倒木痕を埋め戻している。

(埋土) 上位から黒色土・暗褐色土・灰褐色混土・黒褐色混土・褐色混土の5層に大別される。



L = 315.000m



1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/ 黑土(含Nbp)
3. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/ 黑土(含Nbp)
5. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp)
7. 10YR 5/ 褐色土
8. 10YR 5/ 黄褐色土
9. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)

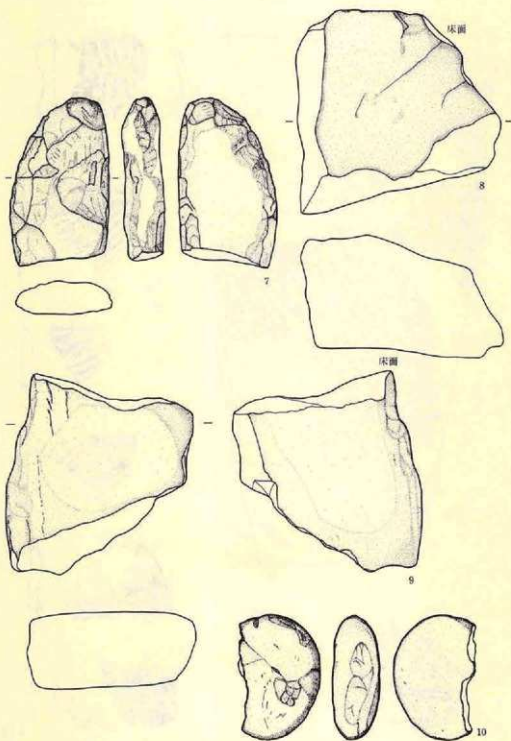
L = 314.970m 伊神断面图



1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 5YR 5/ 赤褐色壤土
3. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
5. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/ 黄褐色土

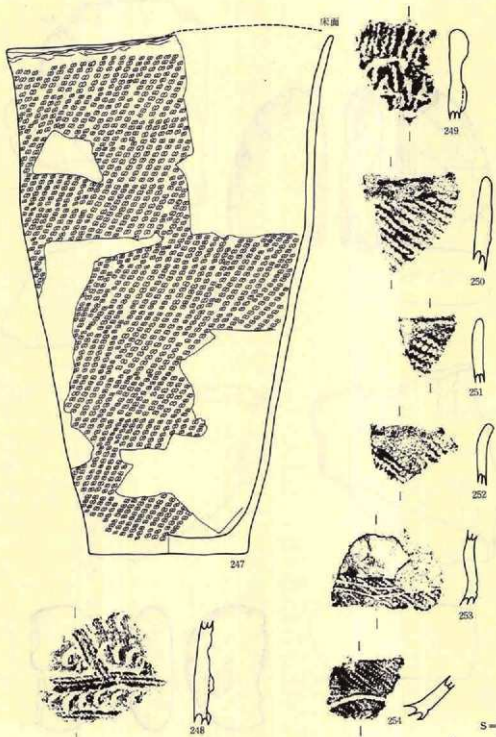
0 0.5 1m

第13图 第2号住居址



第14图 第2号住居址内出土遗物 (No. 1)

S=1/3



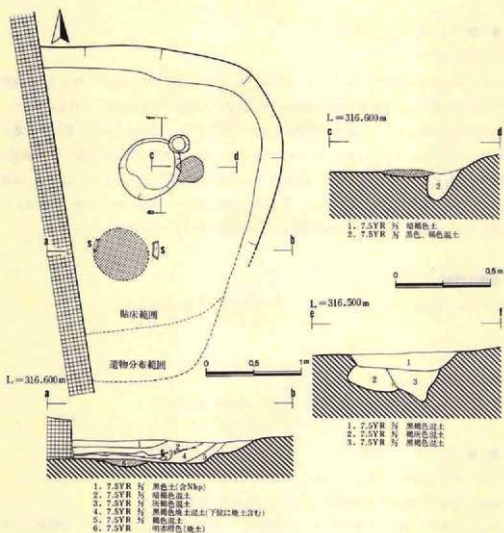
第15图 第2号住居址内出土遗物 (No. 2)

レンズ状の自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) かなりじて残すのみである。貼床の範囲及び遺物の分布等によると3.5m前後の方形に近い形をなすと思われる。

(壁) 崩落が顕著であり必ずしも明確ではない。壁高は東壁で20cmほどである。

(床) 南半においては風倒木炭を埋め戻して貼床とし、北半では覆層を床面としている。ほぼ水平に近く平坦である。



第16図 第3号住居址

(柱穴) 北東部にP₁を検出したのみである。

(炉) 直径55cmほどの円形の地床炉である。焼土の厚さは6cmほどである。住居址のほぼ中央部に位置していると思われる。

(その他) 焼土：P₁の南に隣接する形に焼土がある。直径30cmほどの不整形をなし、厚さ2cmほどの地山が赤色変化したものである。

土坑：P₁と炉の間に直径60cm、深さ20cmほどの土坑がある。P₁より先行するもので、性格は不明である。埋土は黒褐色泥土と褐灰色泥土からなりたっている。

遺物 (第17図、写真図版90)

(石器) 出土していない。

(土器) 255が柱穴内部から出土する。深鉢の口縁部破片である。太い隆帯が貼布され、隆帯間には半截竹管による連続刺突文が充増される。隆帯には縄文が施文される。口唇部は肥厚し、波状に隆帯が貼布される。文線体の下部には3本1組の原体圧痕が押し込まれる。器表面に煤が付着している。256～259は埋土中から出土したものである。256は隆帯を貼布し、区画内に摺糸圧痕文を施文している。257は平行沈線の区画内に磨消縄文を配している。口唇部には刻目が入れられ、所謂、B型突起がある。258は口唇部は折返し口縁状になっており、摺糸文が縦位に施文される。259はよく研磨された無文の土器片である。煤が付着している。

遺構の時期

255の土器が柱穴内から出土していることから中期中葉と考えられる。

第4号住居址

遺構の西半は調査区外にあたるため、東半のみ調査したものである。

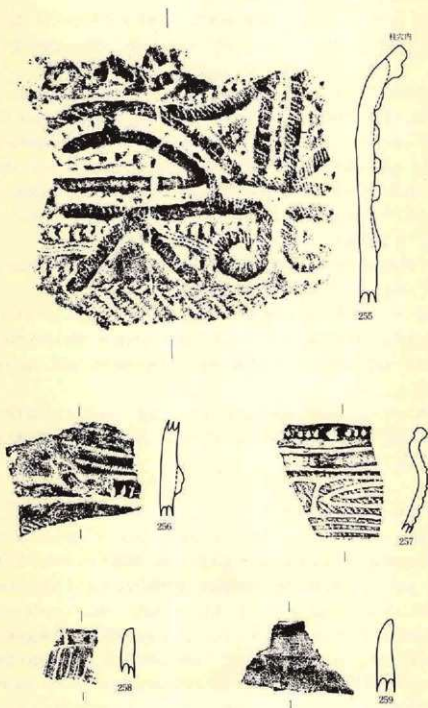
遺構 (第18図、写真図版7)

(位置) 北区の西端に位置し、本調査区の最高位に位置する。

(重複) 北東部に第65号土坑が接しており、当住居址が切っている。

(埋土) 上位から十和田a降下火山灰土・暗褐色土・褐色土・褐色泥土・褐色～暗褐色泥土の5層に大別される。褐色泥土はブロック状に混在しており、人為堆積に起因するものかもしれない。他はレンズ状堆積を示し、自然堆積と思われる。

(平面形・規模) 全体形は西半が調査区域外に続いていて判然としなが、検出部から長径4.2



第17图 第3号住居址内出土遗物 (No. 1)

S=1/2

m、短径2.5 m以上の楕円形をなすと推測される。

(壁) 直立に近い立ち上がりを示し、壁高は40~50cmで、東半がやや低くなっている。

(床) X層を床面とし、ほぼ平坦である。ただし、石囲炉から続く東部では約10cmほど下がっている。

(柱穴) 調査範囲内ではP₁~P₄の4柱穴が確認されている。石囲炉を囲む配置である。

(炉) 住居址を完掘していないのではっきりしないが、幾分東に寄った位置にあたると思われる。石囲炉とそれに続く前庭部からなる。炉は52×40cmの方形で、1辺2個の礎で構成されている。但し、北辺の1個が抜き取られており、西辺が二重となっている。炉縁石は一部赤変しているが、焼土の厚さは2~6cmとそれほど厚くはない。前庭部は2.1×1.6 mほどの不整な楕円形をなし、床面から10cmほど下がっている。全体的に堅く踏みしめられている。

(その他) その他の焼土：炉の北面1 mに焼土が散在している。

貯蔵穴：炉の前庭部の北東端で、壁に接する位置に、45×35cm、深さが21cmの土坑があり貯蔵穴と考えられる。埋土は暗褐色混土で非常に軟らかくしまりが無い。

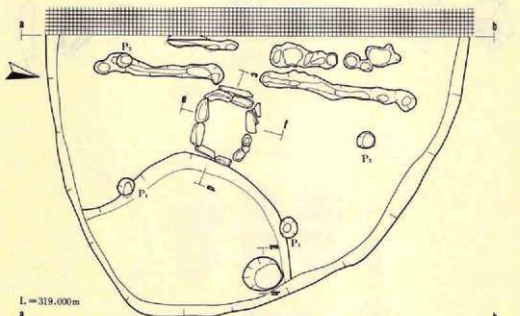
間仕切溝(?)：石囲炉の西に2条の溝が平走している。規模は東側のものが3.5 m、西側のものが2.5 mを計測する。幅は20cm内外で、深さは前者が12~20cm、後者が6~25cmである。両者とも柱穴の連続として扱えられる。両端は壁との間が30~40cmあいており、間仕切的な存在が想定される。

埋没期間：埋土上位に十和田a降下火山灰が層をなして堆積しており、火山灰降下時点においても僅かではあるが凹地となっていたことを示している。埋没には相当の期間を要したことを示唆している。

遺物 (第19~20図、写真図版91)

(石器) 埋土中から削器11・12が出土する。ともに両面加工によって刃部が作られている。

(土器) 床面から260が、床直上から261が出土する。260は体部下半が欠損し、径の弱弱が残存する。器種は鉢で、器形は緩やかな液状口縁で、口唇部にかけて外反し頸部はすばまる。体部上位でふくらみ、下半部にかけてすばむ。文様体は口縁部に沈線によって区画された楕円形の内部にRL単節斜縄文を施文する。その下には同様な縦位の長楕円形の区画文が施文される。261は粗製深鉢土器の口縁部破片であるが、口径の弱程度残存する。出土状況や器形等から、これらは同時使用の土器と考えられる。262~273は埋土中から出土した。262は突起部であるが、隆帯の貼付によって区画された内側に割箸状工具による刺突が加えられる。中央部にはやや扁平な瘤が貼付される。263は口唇部が肥厚しコイル状に縄文が施文される。隆帯が貼付される。264は磨滑縄文、265は沈線文である。266は口唇部に指頭圧痕が加えられる。

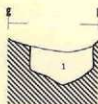


L = 319.000m



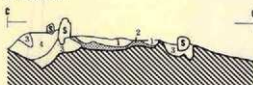
1. 7.5YR 弱 黑褐色土(弱中土)
1. 7.5YR 弱 に赤褐色土(T=α)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 黑褐色土(含C)
4. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 弱 暗褐色土
6. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
7. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
8. 7.5YR 弱 暗褐色土
9. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nk)
10. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nk)
11. 7.5YR 弱 暗褐色土

0 0.5 1m



1. 7.5YR 弱 暗褐色土

L = 318.100m



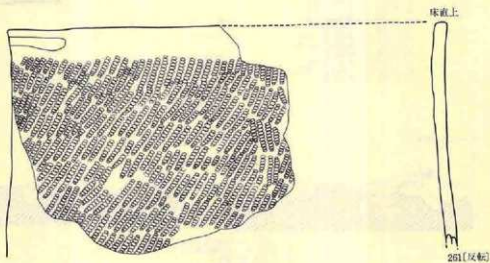
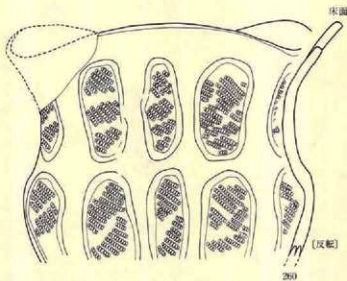
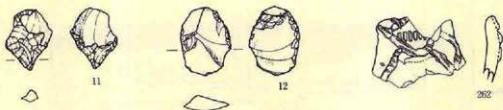
L = 318.100m



1. 7.5YR 弱 暗褐色土(弱中土)
2. 5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土

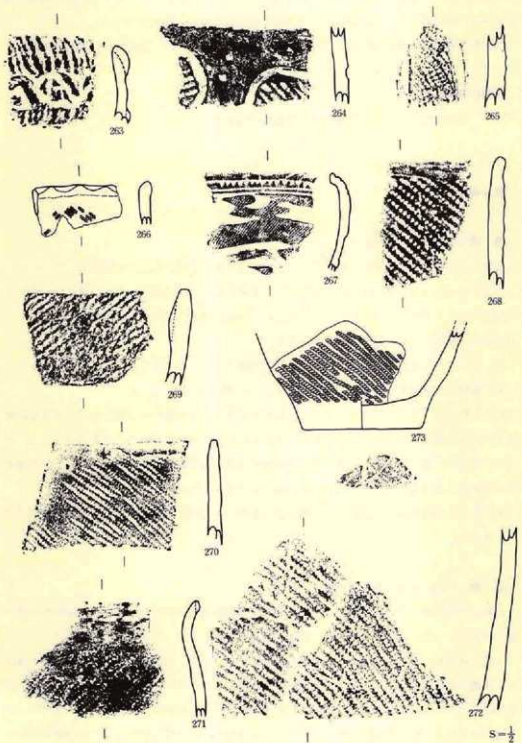
0 0.5 1m

第18图 第4号住居址



第19图 第4号住居址内出土遗物 (No. 1)

(260, 261, 262—S— $\frac{1}{3}$)



第20图 第4号住居址内出土遗物 (No. 2)

(265, 273 - S = 1/3)

267は半肉彫り的な雲形の磨消縄文と口唇部にキザミが加えられたものである。268～271は縄文のみの口縁部破片、272は同体部片である。273は底部に木葉痕を有する。

(炭化材) 床面から炭化材が出土したが、材質は不明である。C¹⁴により3450±110B.Pを得る。

遺構の時期

260・261の土器により、中期末葉に位置づけられる。

第5号住居址

遺 構 (第21図、写真図版8)

(位置) 北区南圃上位にあり、沢に面した南緩斜面の傾斜変換点付近に位置する。

(重複) 第112土坑と第113土坑と重複する。前者を切り、後者に切られている。

(埋土) はほとんど褐色～暗褐色混土でしめられ、下位に僅かに黒褐色土が堆積している。

(平面形・規模) 3.0×2.7mの円形をなす。

(壁) 最大壁高は北壁で、僅か20cmである。南東部については削平されていて不明である。

(床) Ⅴ層及びⅥ層を床面とし、後者については一部貼床となっている。

(柱穴) P₁～P₄であるが、支柱穴かどうかは不明である。それ以外では壁に沿って小さな柱穴状土坑が9個確認されている。いずれも直径10cm内外で、深さが15cmほどである。

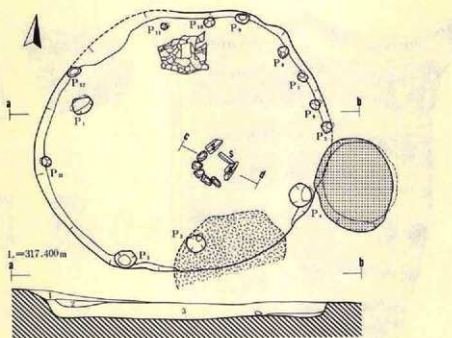
(炉) 石囲炉で若干南東部に寄る。西半の炉縁石は既に抜き取られており、僅かに3個を残すのみである。抜き取り穴等によって1辺40cmほどの方形を呈していたと推測される。

(その他) 当住居址からは、炉の北、壁の近い部分からはほぼ完形に近い深鉢形土器が横位で出土している。

遺 物 (第21～22図、写真図版92)

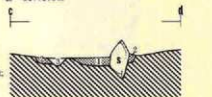
(石器) 埋土中から13の磨石1点が出土する。全面が磨滅しているが、とくに側縁部の一部が強く磨耗している。両面とも縦方向に擦痕が認められる。また、敲打痕もみられる。

(土器) 床面から押しつぶされた形で274の深鉢が出土する。器形は口唇部にかけて緩く外反し、体部中頃から底部に向かってすぼまる。口縁部は5つの波頂部をもつ波状口縁である。3本1組を単位とした沈線文が体部中頃まで広く施文される。波頂部の下に月見草の蕾状にキザミが付けられる。胎土は緻密で焼成は良好である。275～284は埋土中から出土した縄文土器片である。275は隆帯と縄文原体圧痕が施文される。276は磨消の帯縄文である。277は口唇部



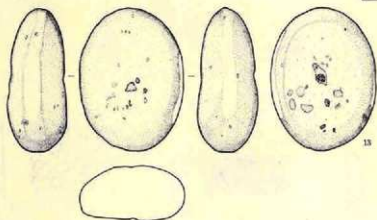
1. 10VR ㄉ 黑色土
2. 10VR ㄉ 褐色土(含Nkp)
3. 10VR ㄉ 黑褐色土(含Nkp)
4. 10VR ㄉ 暗褐色土

L=317.100m

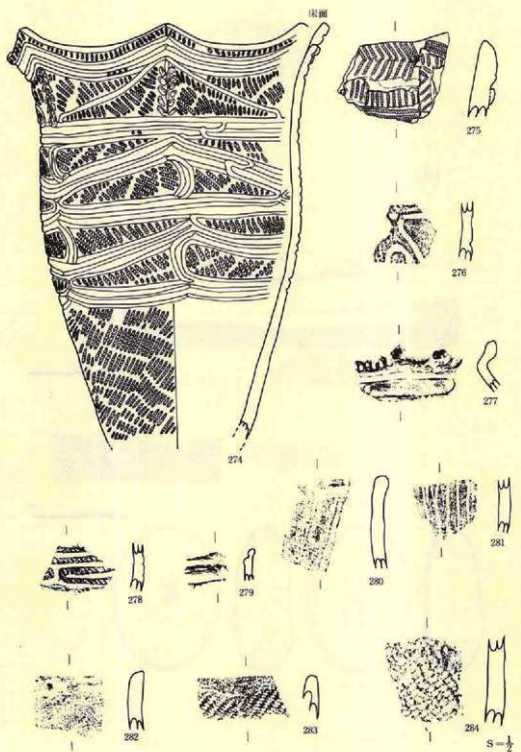


1. 10VR ㄉ 褐色土、粘土混土
2. 10VR ㄉ 暗褐色土、粘土混土
3. 10VR ㄉ 褐色土

0 0.5m



第21图 第5号住居址及び出土遺物(No.1)



第22图 第5号住居址内出土遗物 (No. 2)

(274-S=1/4)

に1対の突起をもちキザミ目が施文される口縁部破片である。278は沈線で工字文をえがく。279は口唇部内側に沈線がまわる。280は網目状捺糸文、281は捺糸文が縦位に施文される。282は無文、283と284は単筋斜縄文である。

遺構の時期

274の土器から、後期初頭に位置付けられる。

第6号住居址

本住居址は炉址と北西隅に大きな木根痕があり、床面が破壊されている。

遺 構（第23図、写真図版9）

（位置）北区南端にあり、沢に面した南斜面上位にある。

（重複）第119号土坑と重複する。同土坑が廃棄された後、本住居址が造られている。

（埋土）上位から十和田a降下火山灰土・黒色土・十和田b降下火山灰を含む黒褐色土・褐色土の4層に大別される。中央部の大きな木根によって影響を受けてはいるが、レンズ状の自然堆積状況を示す。北側の埋土中に焼土が形成されている。

（平面形・規模）直径4mほどの円形である。

（壁）北西壁で最大壁高63cmを測る。南東壁では最小壁高20cmである。北西壁は崩壊が進み相反するが、他の壁はほぼ直立する。

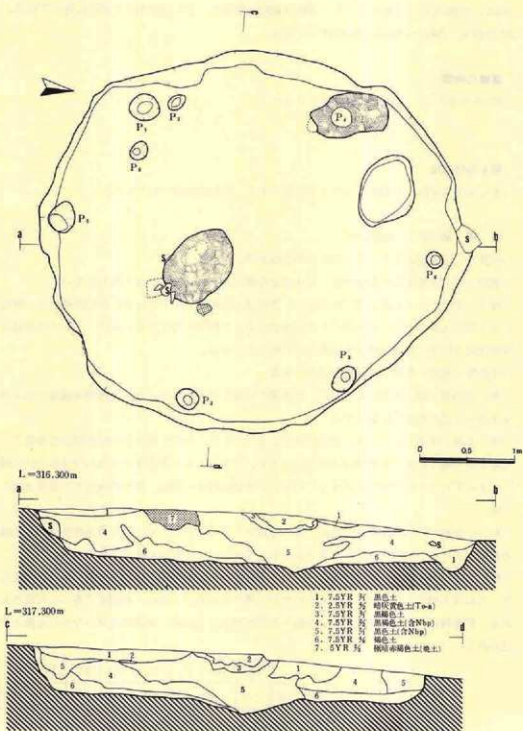
（床）X層を床面としている。全体によくしまっている。平坦ではあるが中央部がやや低く、壁際がやや高くなる。北西側はほぼ水平である。中央部にある第119号土坑の埋土最上位は硬くしまっているが貼床とはなっていない。北側に径40～50cm、深さ10cmほどの皿状土坑がある。

（柱穴）主柱穴P₁～P₄は検出したが、その配置からみて4ないし6になる可能性が強い。P₄は木根痕によって上位は攪乱され不明であるが、下位において柱芯も確認された。

（炉）南側に偏在する。炉の南端部分に長さ20～30cmの扁平な石3個が上を向くように出土した。これは木根によって持ち上げられたためと考えられることから、石囲炉であった可能性もある。炉址付近の床および埋土には多量の粉炭が混入している。床面には薄いながらも焼土が見られる。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
底面の径	15	10	10	20	20	10	10	8
深 さ	29.5	18.3	40.5	40.2	12.4	16.7	12	26.5

付表：柱穴の規模（単位：cm）



第23图 第6号住址

遺物 (第24~27図、写真図版92~94)

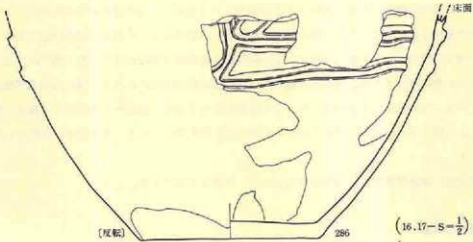
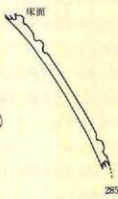
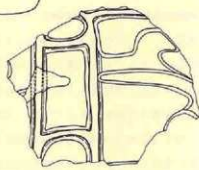
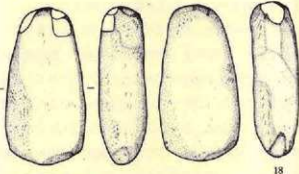
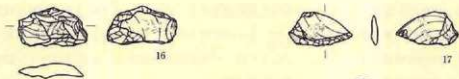
(石器・石製品) 床面から14・15の玉石2点が出土する。直径4~4.5cm、重さ100g程度である。14は特に丁寧に研磨されているが、1ヶ所に傷がついている。埋土中からは16・17の削器2点、18の磨製石斧1点およびフレック・チップ等が若干出土する。16は両面加工が顕著であるが、17は大部分が片面加工である。18は刃部はきわめて鈍い。

(土器) 床面から285・286の甕形土器の破片が出土する。破片数は多いが大きく接合できたのは図示した2点のみである。無文のよく研磨された器表に、隆沈線文が体部の下方まで広く施文される。体部上半には区画内に曲線の沈線文が充填されている。文様体が構成されている部分には赤く彩色が施されている。287~320は埋土中から出土した土器である。287は板目状燃糸文、288は羽状縄文であるが、ともに胎土に繊維が混入している。289は口唇部に指頭圧痕が施され、隆帯が貼付される。290~299は磨消縄文であるが、磨消は誰である。300は磨耗しており磨消部があるかどうかは不明である。301は口唇部に2段の棒状刺突がまわり、磨消縄文が楕円又は長楕円に施される。器面はよく研磨され、色調は明褐色である。302は外反して立ち上がる鉢形土器の口縁部破片である。磨消縄文で、沈線で方形に区画された中に沈線が流れるように入る。303は細くシャープな沈線が1本横走する。304は5~6本の沈線が横走する。305~6は網目状燃糸文である。ともに煤が若干付着している。307は口縁部に2本の沈線が入り、口唇部は短かいが大きく外反する。残滓が付着している。308~9は口縁部に1本の沈線がまわり、その上は研磨され無文となっている。310は口縁部に沈線がまわり、その下にキザミがつけられる。311は皿又は浅鉢状の口縁部破片である。口唇部に内外1対の瘤が付く。312は口縁部が直立し体部上位が膨らむ鉢形土器の口縁部破片である。口縁部はヘラナデの調整をしている。色調は暗灰白色で、器表面に煤が付着している。313は無節、314~5は単節の斜縄文である。316~319は体部下半であるが、317は底部に調代痕が、319は縄文が施文されている。320は埋土最上位から破片状態で出土した弥生式土器の壺である。細粒の縄文が頭部より下に施文されている。頭部から体部の中頃にかけて、長方形に二段に区画された磨消部がまわる。磨消部の縁辺には細い棒状刺突が加えられる。頭部は無文で研磨されている。口縁部はひとまわり大きくなり沈線が1本まわる。沈線~口唇部間には縄文が施文され、2個1対の瘤が貼付されている。全面が赤く彩色されている。体部下半には煤が付着している。

(炭化材) 伊勢付近から、粉炭が出土したが、材質は不明である。

遺構の時期

285~6の土器により、本住居址は後期初頭に属するものである。

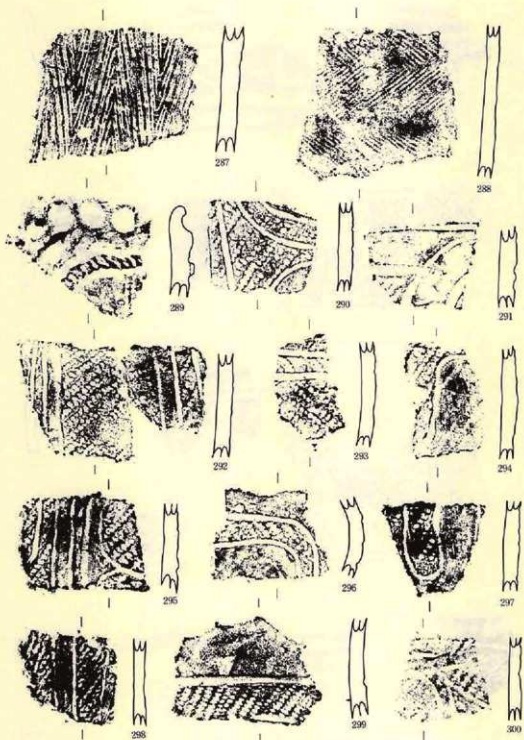


[尾板]

第24图 第6号住居址内出土遗物 (No. 1)

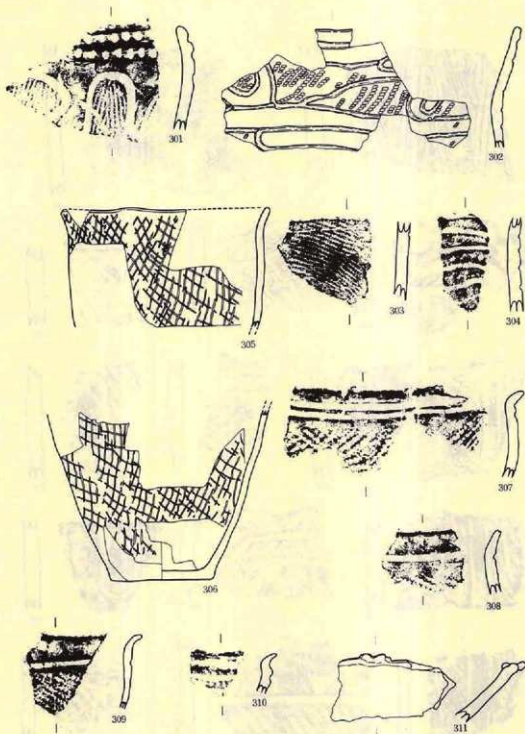
(16. 17-S- $\frac{1}{2}$)

(18. 285. 286-S- $\frac{1}{3}$)



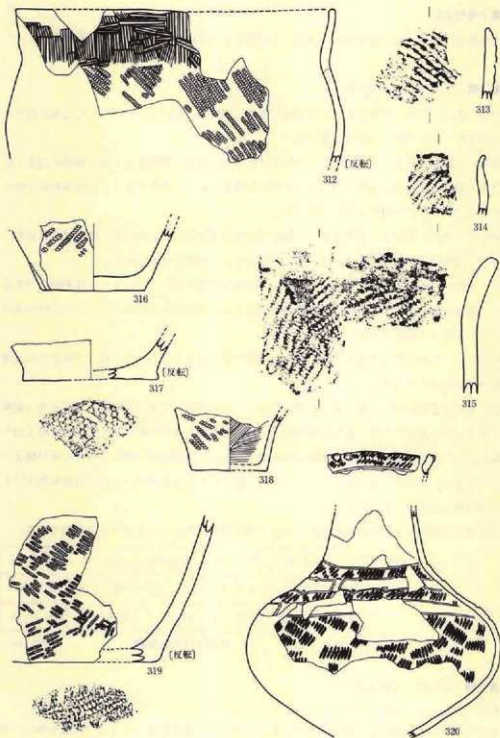
第25图 第6号住居址内出土遗物 (No. 2)

S- $\frac{1}{2}$



第26图 第6号住居址内出土遗物 (No. 3)

$S = \frac{1}{2}$
 $(305, 306 - S = \frac{1}{4})$



第27图 第6号住居址内出土遗物 (No. 4)

$S = \frac{1}{2}$
 (312, 320 - $S = \frac{1}{3}$)

第7号住居址

本住居址は東側一部が耕作地等の造成により削平を受けており、東壁はない。

遺 構 (第28図、写真図版10)

(位置) 北区の北端に位置する。本住居址の北約10mに埋没谷があり、緩やかな北傾斜面となっているが、その斜面の上位に位置する。

(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・十和田a降下火山灰土・黒褐色土・黒～褐色の混土・暗褐色土・黒褐色土と南部浮石粒の混土の7層に大別される。7層の下部ほど南部浮石粒が多く混入する。レンズ状の自然堆積状況を示す。

(平面形・規模) 東側は一部削平され、南北方向は崩壊が進んでいるため、楕円状に見える。しかし、残存する壁及び柱穴の配置等から直径約5mの円形と推測される。

(壁) 西壁で最大壁高60cmを測る。しかし、大部分は崩壊が進み、立ち上がりは不明瞭である。

(床) 畳層の直上で、炉の周囲は一部畳層が露出する。水平かつ平坦である。とくに硬い所はないが、床直下の畳層はしまっている。

(柱穴) P₁～P₆が支柱穴である。他のP₇～P₈は建て替えによるものか、支柱穴であるのかは埋土状況等からは不明である。

(炉) 土器埋設石囲炉である。柱穴配置からみて、やや南に偏する。炉縁石はレンガ大の直角礎である。石の配置は円形で造りはやや雑である。炉の中央に直径45cm深さ30cmの鉢形土器が埋設されている。口縁部と底部は欠損している。炉縁石と埋設土器の間の土は厚く硬い焼土となっているが、土器内の土は下半にブロック状に焼土粒があるものの、大部分は黒褐色土であり、厚い焼土は形成されていない。

(その他) 北壁際に2個の自然石があったが、本住居址に伴うものかどうかは不明である。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
底面の径	15	18	16	16	15	12	18	16	20
深 さ	70	91.5	78	88	73	58.5	63	66	39

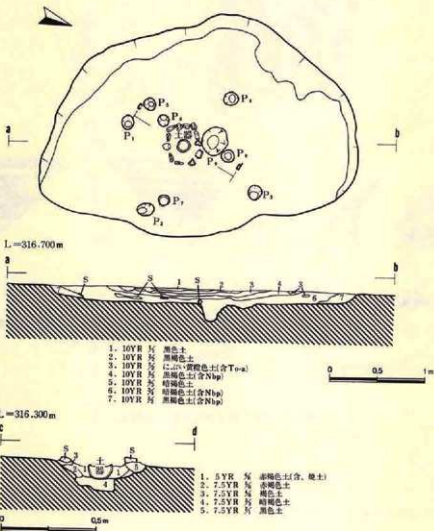
付表：柱穴の規模

(単位：cm)

遺 物 (第29図、写真図版95)

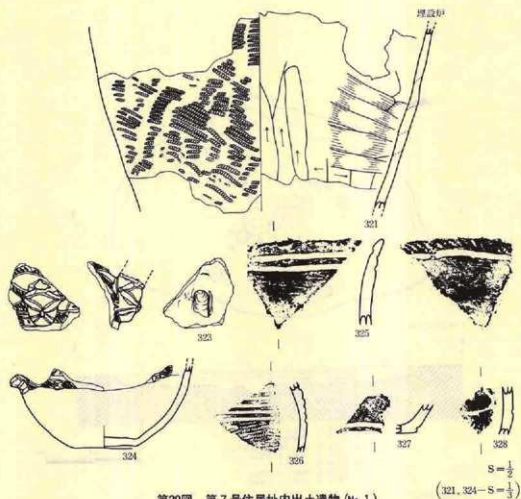
(石器) 出土していない。

(土器) 321が埋設炉として使用されていたものである。器厚0.5～0.8cmで焼成が良い。色調は浅黄橙色である。地文は単節斜縄文である。器形は上下部とも欠損しており詳細は不明であるが、下すばまりの深鉢と思われる。323～328は埋土中から出土した縄文土器片である。



第28図 第7号住居址

323～4は同一個体と思われる。体下半は研磨され無文である。体部中央に貼付の瘤がまわる。注口部は帯縄文がめぐり、隆帯の交差点には小さな瘤が貼付される。灰白色できわめて硬い。325は口縁部の外側に2本、内側に1本の沈線がまわり、内側は沈線と口唇部の間に縄文が地文される。内外とも入念なミガキが施される。色調は明赤褐色で焼成もよい。326は数本の平行沈線が、227は体部最下端に一本の沈線がまわる。ともに細粒の縄文をもち器厚は薄く焼き



第29図 第7号住居址内出土遺物 (No.1)

は硬い。色調は黒褐色である。328は磨消縄文で色調は橙色で焼成は不良である。

遺構の時期

本住居址は炬の形態や 321、325～7等の遺物から晩期中葉に属すると思われる。

第8号住居址

検出された住居址の中で、唯一の大型住居址である。しかし、大部分の壁は耕作地造成等にかかわって削平されており、ほとんどの壁は失われている。僅かに残存する壁と柱穴によって

その概要を知るのみである。

遺 構 (第30図、写真図版11)

(位置) 北区南東部に位置する。本住居址の西側から斜面の傾斜が強くなり、東側は緩やかになるが、これは耕作地造成に伴う地形の変化が影響していると思われる。

(重複) 第155号土坑と第157号土坑と重複する。本住居址がともに切っている。

(埋土) 黒褐色土の単層である。

(平面形・規模) 柱穴配置と残存する壁から、長軸方向が南北となる隅丸長方形と考えられる。規模は約10.5×3 mと推測される。

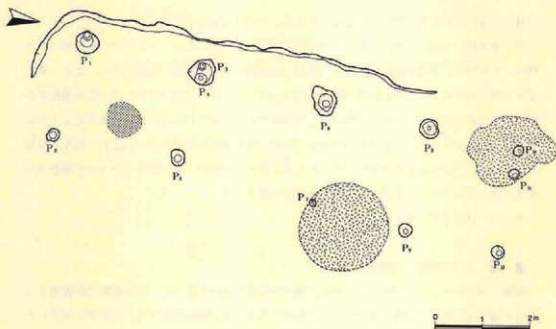
(壁) 南西隅で最大壁高32cmを測る。北及び東に行くにつれて低くなり消滅する。

(床) Ⅳ層の下位が床面である。平坦ではあるが北に僅かに傾斜している。特に硬い所はない。

(柱穴) 主柱穴は5対10本である。P₂とP₄は差し替えによるかどうかは不明である。P₆、P₈は重複する土坑の埋土を切って作られている。柱間は長軸方向で平均2.5m、短軸方向では2.1 mである。

(炉) 地床が1基が南側に偏在する。焼土は直径70cmの円形であるが、厚さは最大でも1 cm未満である。炭化物も少ない。

(その他) 遺物は出土していない。



第30図 第8号住居址

遺構の時期

遺構の時期を決定できる資料が乏しく不明である。ただし、周辺から出土した遺物は繊維を含む土器片と厚手の縄文土器片であった。

第9号住居址

本住居址の東半が調査区外へのびているため、遺構の写弱は未調査である。尾根の下位にあたり、沢に面しているためか埋土に多様な土器片を包含している。

遺物 (第31図、写真図版12)

(位置) 南区南斜面、尾根沿いの最も低い所に位置する。埋没谷からは4mほどの位置であるが、その比高は約2.5mと大きい。

(埋土) 上位から暗褐色土・黒褐色土と褐色土との混土・褐色土の3層に大別される。ほぼレンス状の自然堆積状況を示す。

(平面形・規模) 東半が未調査のため詳細は不明であるが、直径4.3mほどの円形と推測される。

(壁) 北壁で最大壁高65cmを測る。西壁は崩壊がやや進む。

(床) X層を床面とし平坦である。北側がやや高く、炉の周辺はしだいに低くなる。炉と柱穴の間はきわめて硬い。

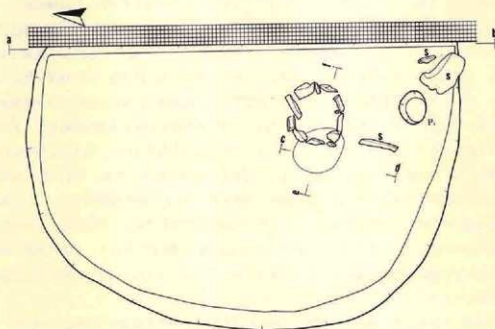
(柱穴) 検出されたPは開口部径30cm、床面からの深さ52cmほどである。

(炉) 中央部より南に寄る。円形の石囲炉でその作りは堅牢である。炉と壁の間に40cmほどの棒状の石が横位に埋設されている。炉内の埋土は黒褐色土で下位ほど粉炭が多い。また、細かな焼土粒も見られる。この炉は造り替えられたもので、この炉に先行する炉は一部が重複する形で西側にある。先行炉は1辺が50cmほどの隅丸方形状で深さ12～3cmほどに掘り込んでいる。埋土は黒褐色土であるが、炉床の一部は焼土と化し残存する。明瞭な石の抜き取り痕などは見られないが、この先行炉も石囲炉であったと思われる。先行炉と壁の間に台形状に暗褐色土の埋土が見られるが厚さは1～2cm程度の不定な凹地である。

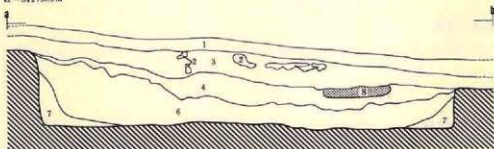
(その他) 埋土上位に焼土遺構がある。

遺物 (第32～34図、写真図版95～96)

(石器) 埋土中から3点出土する。19の石鏃は先端部が破損している。20は削器で片面加工により刃部を作り出している。21は砥石状の石器である。形状は半円状扁平打製石器に似ているが敲打痕はまったくみられない。直線部の刃部のみ磨耗している。磨耗痕は中央部がやや低くなり皿状となっている。

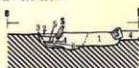


L=311.000m



- | | | | |
|----|-------|-----|------------|
| 1. | 10YR | 5/6 | 黑褐色土(高黄土) |
| 2. | 10YR | 5/6 | 红-棕色土(T=α) |
| 3. | 10YR | 5/6 | 黑褐色土 |
| 4. | 10YR | 5/6 | 暗褐色土(含Nbp) |
| 5. | 2.5YR | 5/6 | 褐色土(壤土) |
| 6. | 10YR | 5/6 | 褐色土(含Nbp) |
| 7. | 10YR | 5/6 | 褐色土 |

L=309.900m



- | | | | |
|----|-------|-----|---------|
| 1. | 10YR | 5/6 | 黑褐色土 |
| 2. | 10YR | 5/6 | 褐色土 |
| 3. | 10YR | 5/6 | 暗褐色土 |
| 4. | 7.5YR | 5/6 | 暗褐色土 |
| 5. | 7.5YR | 5/6 | 褐色土(壤土) |
| 6. | 7.5YR | 5/6 | 黑褐色土 |

L=309.900m



- | | | | |
|----|-------|-----|------|
| 1. | 10YR | 5/6 | 暗褐色土 |
| 2. | 7.5YR | 5/6 | 黑褐色土 |
| 3. | 7.5YR | 5/6 | 暗褐色土 |

0 0.5 1m

第31图 第9号住居址

(土器)すべて埋土中から出土する。329は撫糸圧痕文の間に綾絡文を施文した口縁部破片である。330～1は縄文を施文した上に細い隆帯を貼布している。332～3は肥厚した口唇部に1本の沈線がまわる。334～341は磨消を伴う沈線文である。342は細い沈線による沈線文である。器表面は赤く彩色されている。343は黒褐色の光沢をもち、隆沈線と太い棒状刺突文である。344は無文で口唇部付近に細い刺突文が施される口縁部破片である。345は平行沈線文で地文には細粒の斜縄文が施文される。346は2本の平行沈線がまわる口縁部破片で、表面は赤く彩色されている。347～350は縄文のみの鉢形土器の口縁部破片で、いずれも焼成が良く硬い。347は波状口縁である。351は胎土に繊維を含む羽状縄文である。352は無筋斜縄文が口唇部直下まで施文される緩やかな波状口縁である。353は口縁部が研磨されている。354は鱗状突起的に盛り上がる隆帯をもつが、小片のため細部は不明である。355は無文の突起部。356は縄文が最上部まで施文され、口唇部及び内側は丁寧に研磨されている。357は底部に網代痕を有する鉢形土器の底部片である。358は平底であるが、359は上げ底でやや台付状に近い底部片である。

(炭化材)本住居址の床面から炭化材が出土した。本資料を放射性炭素年代測定した結果、5370±130 B.P.、3420 B.Cという結果を得た。なお、炭化材の材質は不明である。

遺構の時期

以上の結果、本住居址の時期を決定できる資料が乏しく、ここでは不明としておきたい。

第10号住居址

本住居址は小判形の平面形であるが、南側は風倒木によって一部攪乱されているため、壁及び床の一部に詳細不明な点もある。また、埋土中に焼土が形成されている。

遺 構 (第35図、写真図版13)

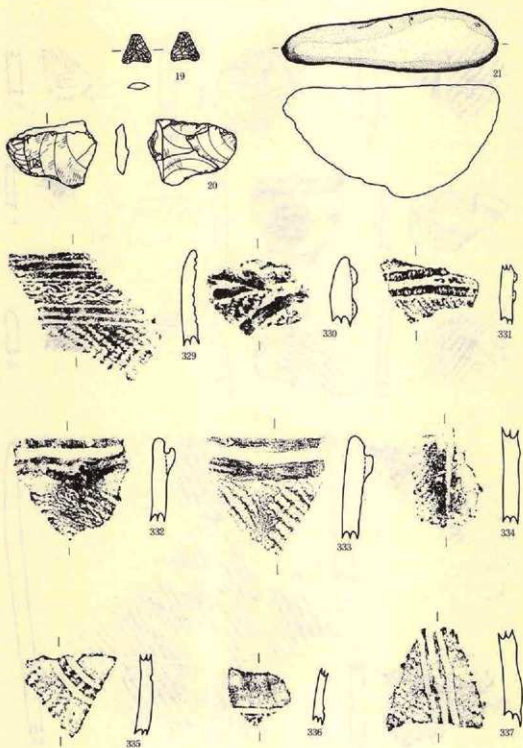
(位置)南区南斜面にあり、埋没谷から5mほど上方に位置する。

(重複)他の遺構との重複はないが、風倒木痕により一部攪乱されている。

(埋土)上位から黒色土と黒褐色土の2層に大別される。南側の風倒木痕による攪乱をのぞくと、レンズ状の自然堆積状況を示す。

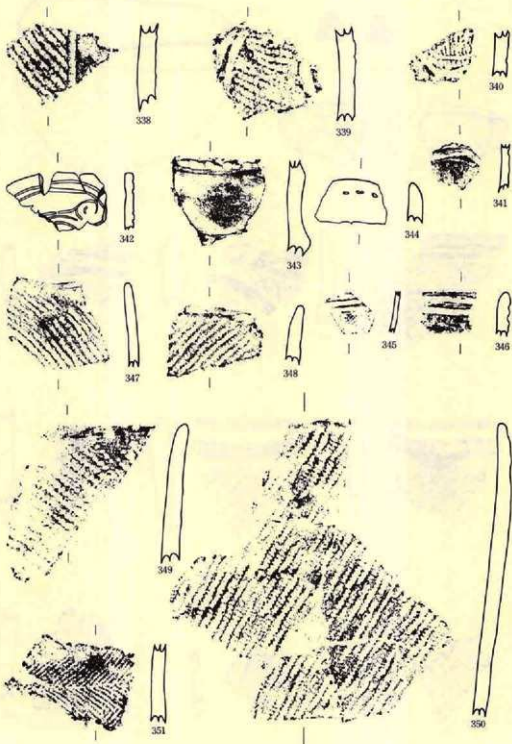
(平面形・規模)長軸方向が概ね南北をさす小判形である。長径約4.8m、短径約3mを測る。

(壁)壁の上位はⅣ～Ⅴ層で崩壊が進むが、中位より下位はⅧ層のため原形をとどめている。西壁で最大壁高60cmを測る。東壁から南壁にかけて低くなるが、37cm以上の壁高を保つ。



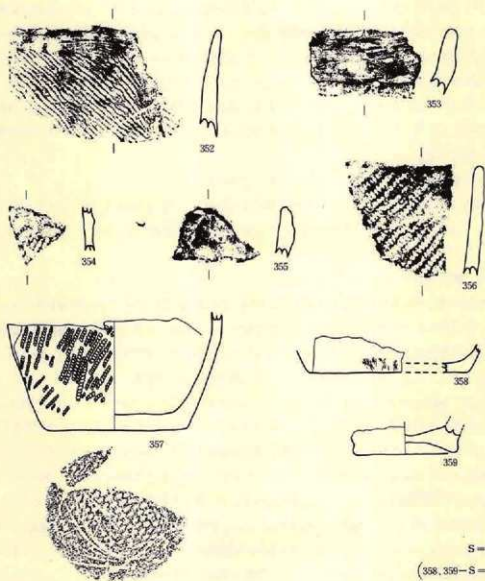
第32图 第9号住居址内出土遗物 (No. 1)

$S = \frac{1}{2}$
 $(21 - S = \frac{1}{3})$



第33图 第9号住居址内出土遺物 (No. 2)

S- $\frac{1}{2}$



第34図 第9号住居址内出土遺物 (No.3)

(床) X層を床面とし、水平かつ平坦である。全体によくしまっているが、炉の東西付近は特に硬い。北側は不整形な皿状土坑があり、凹凸がはげしい。南側は風倒木による擾乱がある。風倒木は北西から南東に倒れたもので、北西側の床は盛り上がり、南東側の土は擾乱されている。

(柱穴) 主柱穴はP₁～P₄で長方形の配置をとる。いずれも壁際に寄る。

(炉) 地床炉と石囲炉である。両方とも住居址の中軸線上に南北に並ぶ。炉の間は約30cm離れる。地床炉は直径約70cmの円形で黒褐色土となっている。焼土は薄いが炉床は硬く粉炭が多い。石囲炉は長方形で規模は30×50cmほどである。炉縁石にはチャート質粘板岩を用いており、造りは堅牢である。炉床は掘り込まれていない。また、加熱による変化はほとんど見られず、僅かに焼土が一部に形成されているのみである。風倒木の影響で、炉縁石の片はそのままの形で約20cmもち上げられており、炉が上下に引きさかれた形となっている。これらの炉の前後関係は不明である。

(その他) 焼土遺構：埋土2の上位に、焼土遺構がある。

遺物出土状況：北側床面から2個体の土器が出土する。いずれも北側で、361は若干埋設されており斜位に押しつぶされた形で出土した。360は半分しか残存していないが、横位に出土した。

遺物 (第35～37図、写真図版96～97)

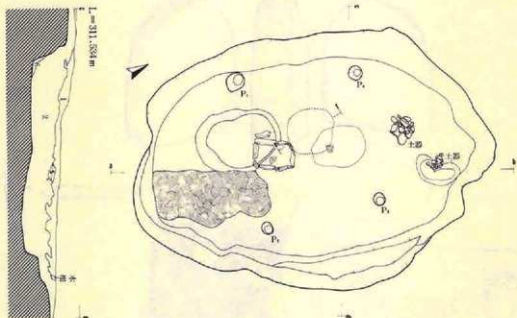
(石器) 埋土中から22の長方形扁平打製石器、23の磨石、24の凹石、25の磨製石斧が出土する。22は磨滅した面に両面加工し粗い刃部を作り出している。刃部には明瞭な敲打痕が認められる。一部火熱を受け赤化している。23は破片のため詳細は不明である。24は同一面に2ヶ所の凹をもっている。25は刃部が欠損しているため詳細は不明である。

(土器) 360～1は床面出土の土器である。360は無文でヘラミガキされている。色調は灰白色である。361は頂部が5の緩い波状口縁の深鉢である。頸部がややすばまり、体部にかけてゆるく張り出す。色調は暗灰色で、単節斜縄文が施文される。362～377は埋土中から出土した縄文土器片である。362は数条の縄文原体圧痕文であり、胎土に繊維を含む。363は縄文原体圧痕と隆帯の貼付文、364～370は地文の上に2～3本1組の曲線の沈線文が施文される土器群である。371～2は口縁部に隆帯を貼付した後、調整している。371は摺糸文が横走し、372は単節斜縄文である。373は小型鉢形土器の口縁部破片で、異条縄文が施文される。374は口唇部直下に隆帯が貼付した土器であるが、隆帯が剥落しており詳細は不明である。375～7は口唇部の形態に相違をもつが、すべて単節斜縄文が口縁部まで施文されるものである。

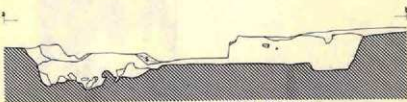
(炭化物) 本住居址の地床炉から出土した炭化材を放射性炭素による年代測定をした結果、4860±120 B・P、2910 B・Cの結果を得た。同炭化材の材質は不明である。

遺構の時期

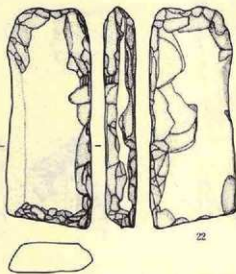
本住居址は、361の土器やC¹⁴の測定結果、あるいは埋土中の遺物等から中期と思われるが、明確に限定できない。中期後葉の可能性が高い。



1. 5YR 5/6 黑褐色土 (灰化腐植质层、壤土)
2. 7.5YR 5/6 暗褐色土(壤土)
3. 5YR 5/6 赤褐色土(壤土)
4. 5YR 5/6 棕褐色土(壤土)

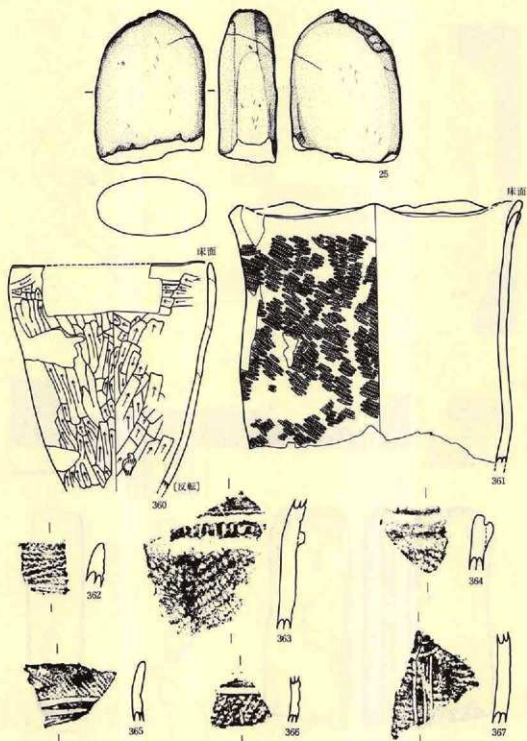


1. 10YR 5/6 棕色土 (Xhp)
2. 10YR 5/6 黑褐色土 (含Nhp)
3. 10YR 5/6 黄褐色土
4. 10YR 5/6 暗黄褐色土
5. 10YR 5/6 暗褐色土
6. 10YR 5/6 黄褐色土



第35图 第10号住居址及出土遗物 (No. 1)

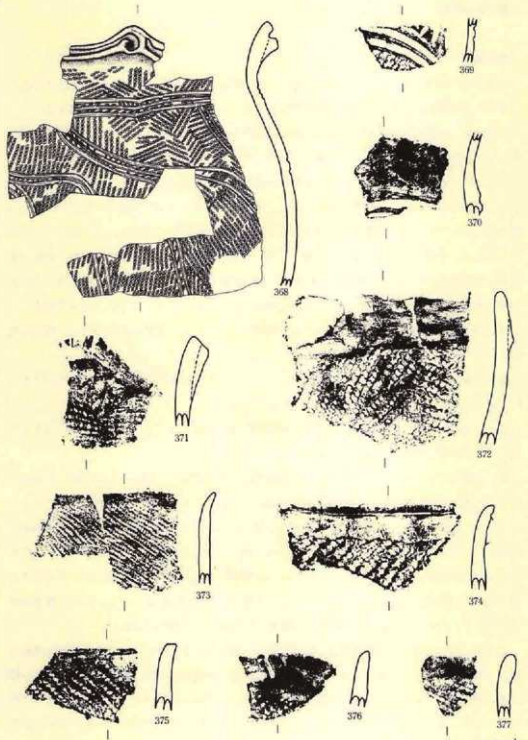
S=1/3



第36图 第10号住居址内出土遺物 (No. 2)

$$S = \frac{1}{2} \left(\frac{25-S}{\frac{1}{3}} \right)$$

$$\left(\frac{360, 361-S}{\frac{1}{4}} \right)$$



第37圖 第10号住居址内出土遺物 (No. 3)

$s = \frac{1}{2}$
 $(368 - s = \frac{1}{4})$

第11号住居址

遺構 (第38図、写真図版14)

(位置) 北区南西斜面にあり、沢に面した第5号住居址及び第6号住居址よりやや北に寄る。

(重複) 第17号住居址と重複する。本住居址がふるい。また、第114号土坑に隣接する。

(検出状況) 本住居址と第114号土坑との重複は容易に考えられた。また本住居址の中央部付近には溝状に十和田a降下火山灰が見られたが、第17号住居址との重複は分からなかった。

(埋土) 基本的には上位から黒色土、十和田a降下火山灰土、黒褐色(チョコレート色)、黒色土・暗褐色土・褐色土の6層に大別される。そのうち、2～3層の大部分は第17号住居址の埋土を構成している。4の黒色土には十和田b降下火山灰が僅かに含まれ、1の黒色土とは区別されるが、漸移しており、精査の段階では層を識別して掘ることはできなかった。なお、3と4も同様であった。下位3層はレンズ状の自然堆積状況を呈し、これが本住居址の埋土である。

(平面形・規模) 北西と南東に長軸を持つ長円形で、長径約4.0m、短径約3.0mである。

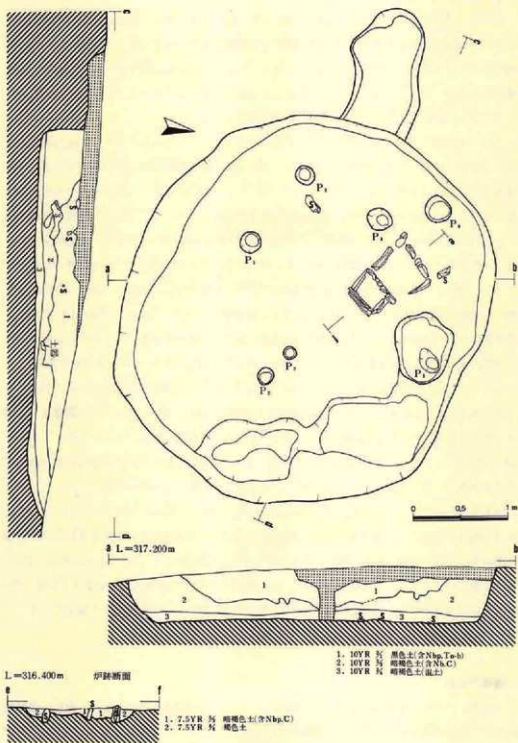
(壁) 西壁で最大壁高65cmであり、ほとんど垂直に立ち上がる。東壁は耕作地造成に伴ない削平されており、5～10cmの壁が残存する。

(床) X層を水平かつ平坦に切って床を作っている。全体に締まりがよい。炉と壁の間はきわめて硬い。北～東は深さ5cm程度の凹地となっている。

(柱穴) 主柱穴はP₁～P₄であり、ややゆがむが方形の配置となっている。P₁は浅いことから上位の第17号住居址に伴う柱穴の可能性が高い。

(炉) 石囲複式炉である。長さ30cm、厚さ10cm程度の石を使用し、僅かに石が床面に出るほど深く埋め込んで造られている。住居の中心側に仕切られた炉を第1炉、壁側を第2炉と呼ぶことにする。規模は第1炉が10(上底)×30(下底)×20(高さ)cm、第2炉は40×50×40cmで台形状のプランをえがく。第1炉は小さいが深く掘り込まれ、石組みもより緻密である。第2炉は大きいが掘り込みはやや浅くなる。石組みも間隔があく。第2炉の外側に1辺を延長する形に1個の石が埋設されている。埋土はどちらも黒褐色土で粉炭が混入する。焼土は埋土中に焼土粒として若干見られるのみである。炉縁石には加熱による変化はみられない。

(その他) 溝状遺構: 本住居址西側に長さ120cm、巾50cm、深さ10～15cmの溝状の浅い凹地がある。本遺構の埋土は住居址の埋土3と連続している。本遺構の底部は南部浮石層であり、特に硬い所はない。また、本遺構の底部と住居址床面とは35cmの段差がある。周囲に柱穴等は検出されなかった。本遺構がこの住居址に付属して、人為的に作られた何らかの施設であるかどうかは不明である。



第38图 第11号住居址

遺物 (第39～43図、写真図版97～99)

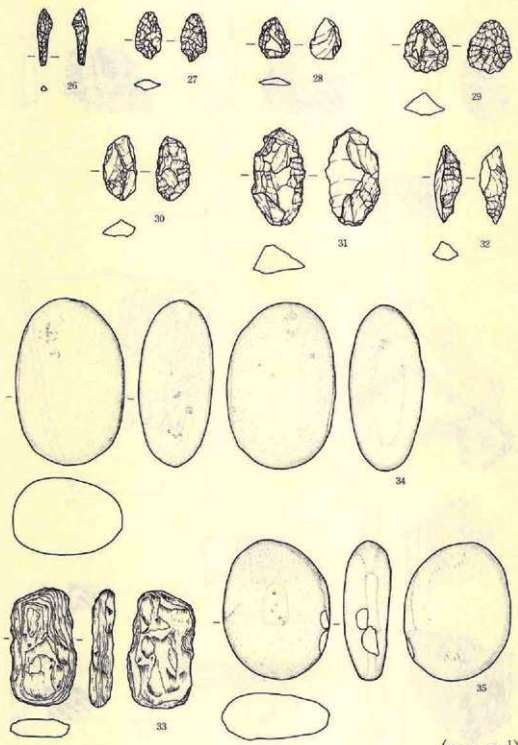
(石器) いずれも埋土中から出土したものである。26は石錘である。先端部が欠損する。27は無蓋、28は有蓋の石鉢である。29～31は削器、32は削器状と思われる。以上の石器は縁辺部に両面加工をして刃部を作り出している。33は中央よりやや寄った所に紐を巻いてできたような磨減痕がまわる。石錘と思われる。34は磨石、35は敲石であるが、両方とも磨耗痕・敲打痕を残している。34は前面に35は一部に火熱を受け赤化している。

(土器・土製品) 378～382の土器片が床面から出土したものである。378、381は磨消縄文、379は口縁部片で、器表面がそがれている。380は口縁部が研磨され口唇部が丸くなる。382は底部片で無文である。383～422は埋土中から出土した縄文土器片である。埋土中からは400点を越える土器片が出土したが、大半は縄文のみの小破片であった。383は口縁部の突起であるが、口唇部に幅の広い隆帯を貼付し、それに指頭圧痕を加えている。また、縄文を施文した後に隆帯を貼布する。384は網目状燃系文が縦位に施文される小型深鉢である。煤が付着している。385～6は地文の上に沈線文が施文される。387は縦位の燃系文、388、390は単節斜縄文、389は無節斜縄文をそれぞれ地文とする口縁部破片である。391はほぼ直線的に立ち上がる深鉢形土器の体部破片である。392は口縁部には三本の縄文原体圧痕文が平行に施文され、口唇部には竹管による連続刺突が施される。393は隆帯の貼付文である。394～396は磨消縄文、397～8は地文の上に沈線文が施文される。399～406は沈線文で沈線は細く深い。399は赤い彩色土器である。405は頸部がややくびれる深鉢で、口縁部は波状をえがく。いわゆる帯縄文が体部まで施文される。407は粗製深鉢である。408～9は鐎型土製品である。408は上部に1孔あり、縄文が施文される。409は上部が独立した形態である。体部には長方形に沈線で区画された中に棒状刺突が1列に充填される文様が縦位に6段並ぶ。上部にも棒状刺突文が加えられ、中央には1つの孔があげられている。410は折返し口縁、411は口縁部が2個1対の山形状の突起を持ち縄文原体圧痕が山形に沿うように施文されている。412はほぼ直立する円筒深鉢で全面に燃系文が縦位に施文される。薄手で焼きも硬く、胎土は緻密である。413と417は無文、414～6は単節斜縄文をもつ口縁部破片である。418は隆沈文の区画内に棒状刺突が加えられる。419～421は底部に網代痕や木葉痕を有する鉢形土器の底部である。422は深い沈線文である。

(その他) 北西壁際から炭化したクルミが2個出土する。

遺構の時期

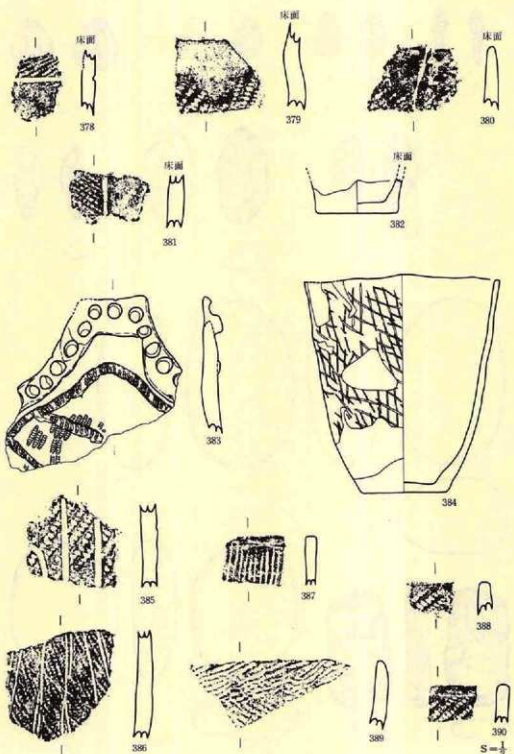
本遺構に共伴し、時期を決定できる遺物はない。よって時期は不明である。しかし、後期初頭に属する土器片が埋土2層より一括出土していることから、本遺構の時期もそれよりそう遠くない時期と想定される。



第39图 第11号住居址内出土遗物 (No. 1)

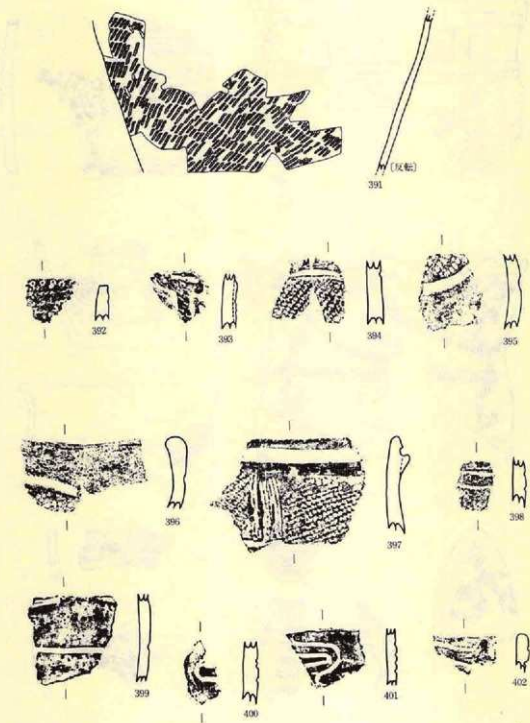
(25-33-5 = $\frac{1}{2}$)

(34-35-5 = $\frac{1}{3}$)



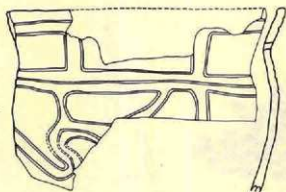
第40图 第11号住居址内出土遗物 (No. 2)

$S = \frac{1}{2}$
 $(382 \sim 384 - S = \frac{1}{3})$

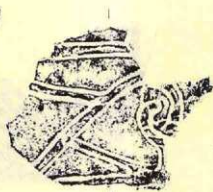


第41图 第11号住居址内出土遺物 (No. 3)

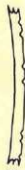
$S = \frac{1}{2}$
 $(391 - S = \frac{1}{3})$



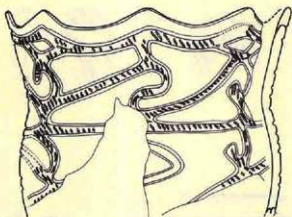
403



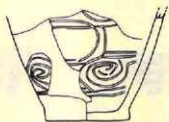
1



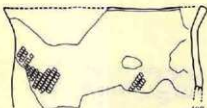
404



405



406



407



408



409



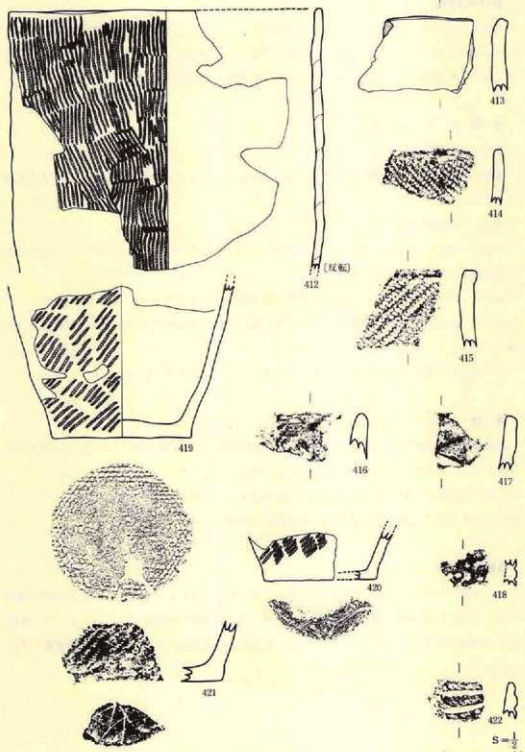
410



411

第42图 第11号住居址内出土遺物 (No. 4)

S = $\frac{1}{2}$
(403, 405~407 - S = $\frac{1}{3}$)



第43图 第11号住居址内出土遺物 (No. 5)

(412, 419-S = $\frac{1}{2}$)

第12号住居址

耕作地造成に伴い半分以上は削平を受け消失しており、更に中央部を水道管の埋設によって帯状に破壊されている。僅かに壁が1部残存すること、地床炉があること、柱穴状土坑があること等から住居址と認定されるが、全体として不明瞭な遺構である。

遺 構 (第44図、写真図版15)

(位置) 北区南側の緩斜面上に位置する。

(重複) 他の遺構との重複はないが、水道管の埋設によって中央部が巾20~30cmで帯状に破壊されている。

(埋土) 黒褐色の単層できわめて薄い。

(平面形・規模) 半分以上消失しており詳細は不明であるが、直径3m程度の円形と思われる。

(壁) 西壁で最大壁高15cmであるが、東へ行くにしたがい、低くなり不明瞭となる。

(床) 壁と同じくⅣ層である。平坦である。特に硬い部分はない。

(柱穴) P₁のみである。底部径15cmに対し開口部径45cmで楕円状である。埋土は黒褐色土の単層で、上位にレンガ大の石が入っている。

(炉) 地床炉で直径40cm程度の円形状に検出された。焼土の厚さは10cmである。

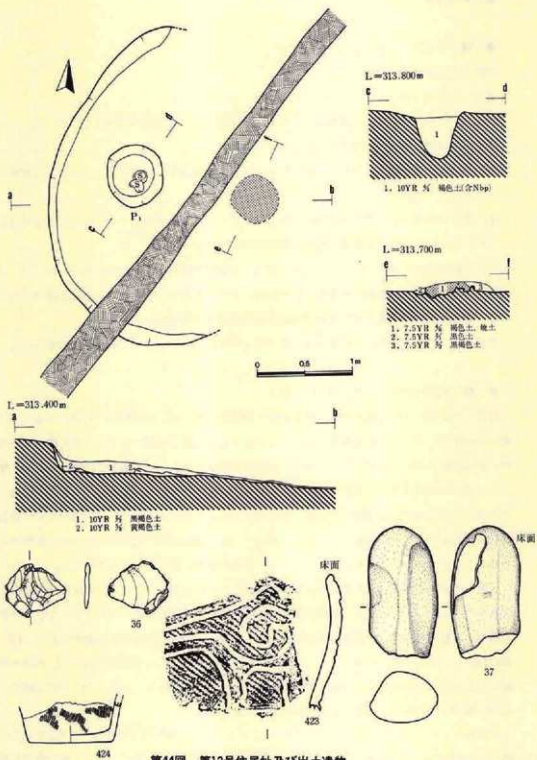
遺 物 (第44図、写真図版99)

(石器) 床面から37の棒状の磨石が出土する。全面で擦痕が、端部では若干の敲打痕が見られる。火熱を受け一部赤化している。埋土中から36の削器が出土した。

(土器) 床面から423が出土した。波状口縁で地文の上に沈線による曲線文が施されている。埋土中から424の底部片が出土する。単節斜縄文が施文される。

遺構の時期

37、423はいずれも床面からの出土ではあるが、埋土がきわめて薄く、しかも人為的に削平されたものであるため、本住居址に確実に相伴している遺物とは断定できない。よって、本住居址の明確な時期を決定できない。しかし、床面出土の遺物が相伴するなら、中期後葉と考えられる。



第44图 第12号住居址及び出土遺物

第13号住居址

遺 構 (第45図、写真図版16)

(位置) 北区の北西に位置している。

(重複) 第97号土坑と重複し、切っている。

(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を示している。

(平面形・規模) 直径3mほどの円形をなす。

(壁) 壁高は東壁で40cm、西壁で60cmを計測する。上半が崩壊している部分もあるが、直角に近い立ち上がりである。

(床) X層を床面とし、水平かつ平坦である。炉址の東側が幾分凹んでおり硬くしまっている。

(柱穴) P_1 ~ P_4 の4柱穴である。他には南壁に P_3 ・ P_4 がある。

(炉) 石囲複式炉である。中央より南東に寄る。炉縁石には偏平な垂角礫を横位に用いている。第2~3炉の北側では縁石が抜き取られており、このうち第2炉では抜き取り穴が確認されている。規模は幅40cm、最大長1.3mである。焼土の厚さは5cmほどである。

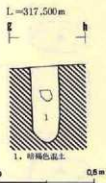
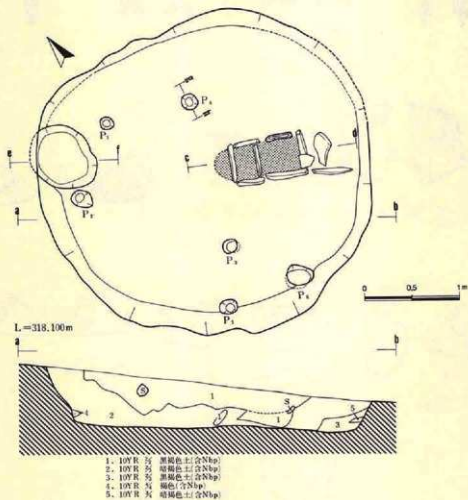
(その他) 土坑: 北西壁際に直径70cm、深さ15cmの土坑がある。埋土は褐色混土である。

遺 物 (第46~48図、写真図版99~100)

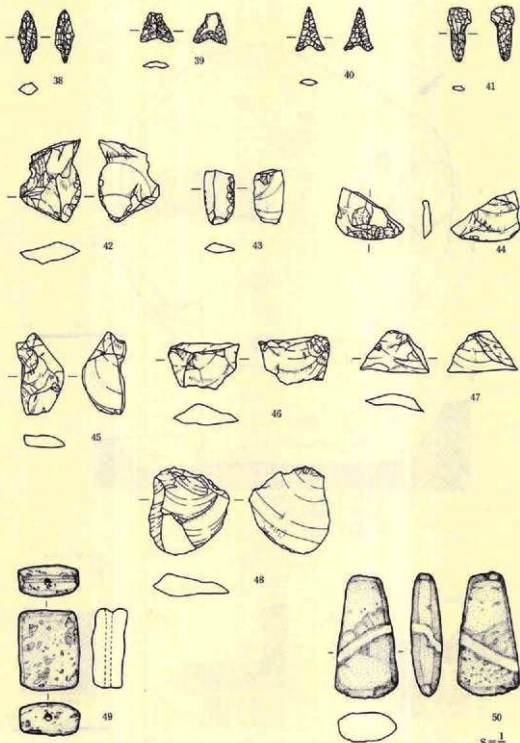
(石器・石製品) すべて埋土中から出土する。38は有茎の、39、40は無茎の石鎌である。39は先端部が欠損している。41は石錐である。これら4点は入念な剝離によって刃部を作っている。42~44は削器とみられる剥片石器である。42は両面加工、43~4は片面加工によって刃部を作っている。45~48はフレークである。49は直方体に加工された石製品である。長軸方向に沿って中央に直径4mmの孔が貫通している。孔とややずれるが直交する形に一方に溝がある。石質は軽石であることから、一般には浮子といわれている。50は形状は定角式磨製石斧に類似する石斧であるが、全面を細かく打って、巾1cmの帯を袈裟形に打ち出したものである。

(土器) 床面から出土した土器は425~6の縄文のみの口縁部破片である。425は前面に煤が付着する。426は器厚が薄く、焼成は良い。細粒の単節斜縄文が施文されている。427は隆帯の貼付文と割箸状工具による刺突文が施文される。428は沈線文、429は磨消縄文である。430、431は縦位の長楕円状に磨消している。432~9は太い沈線によって曲線が施され、外側を磨消したもので、439は太く浅い棒状刺突が施される。440は条痕文である。441~6は縄文のみの口縁部破片であり、447~8は胴体部破片である。

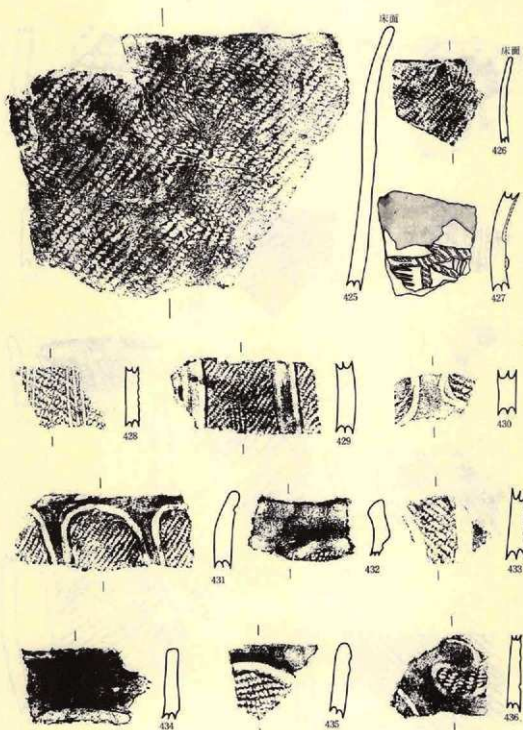
(炭化物) クリ・クルミ・いわゆるドングリ・およびトチ(?)等の堅果類が出土する。すべて小破片のため個数は不明であるが、クリ5個・クルミ10個・ドングリ2個・トチ(?)1個程度である。



第45图 第13号住居址

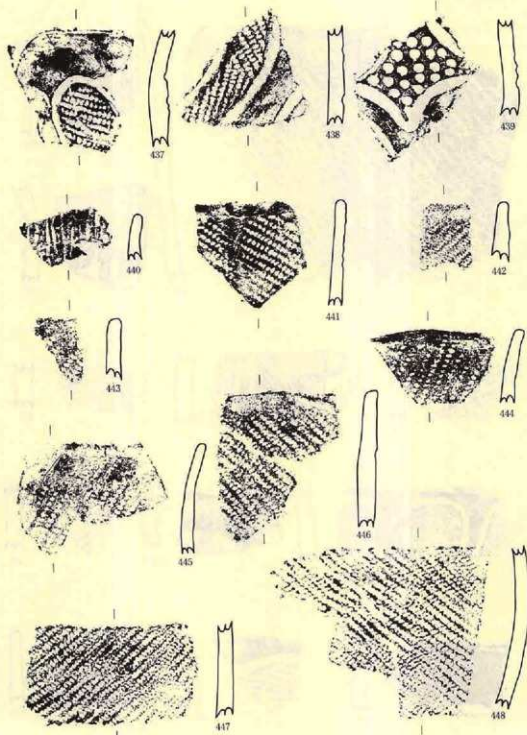


第46图 第13号住居址内出土遗物 (No. 1)



第47图 第13号住居址内出土遗物 (No. 2)

S=1/2



第48图 第13号住居址内出土遺物 (No. 3)

S = $\frac{1}{2}$

遺構の時期

本住居址に共伴し、時期を決定できる資料に乏しく、時期は不明である。しかし、炉の形態が石囲複式炉であること、埋土中の遺物は若干の混入をのぞくと、ほとんどが中期末葉に位置づけられる土器群であること等から、本住居址もこの土器群よりそう遠くない時期と想定される。

第14号住居址

本住居址は土坑と重複し、埋土の上位は耕作地の造成に伴い削平を受けるなど埋土の一部が不明瞭なところがあった。

遺 構 (第49図、写真図版17)

(位置) 北区中央部より西寄り、第2号住居址と第13号住居址の中間に位置する。

(重複) 第102号、第103号土坑と重複し、いずれも当住居址が切っている。

(埋土) ほとんど黒褐色土によって占められ、下位に僅かに褐色の混土がみられる。自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) 南北に長い楕円形をなす、規模は3.6×2.9mほどである。

(壁) 比較的保存がよく、西壁で最大80cmを計測する。東壁の上部は削平により消失しているため、壁高40cm程度である。

(床) X層を床面とし、ほぼ水平で平坦である。

(柱穴) 7柱穴が検出された。炉を通る長軸線で、ほぼ線対称に配置されている。

(炉) 石囲複式炉である。南隅に寄る。第1・2炉は石囲いで第3は素掘りである。炉縁石には拳大ほどの重角礫を使用し、縦位に埋設している。ただし、第2炉の南半はほとんど抜き取られている。第2・3炉の炉床は硬くなっており、第3炉はいわゆる前庭部にあたるものであろう。

(その他) その他の焼土: 床面中央部(炉の北約60cm)に不整形な焼土が形成されている。

周溝: 北壁の近くに深さ10cm前後の欄状の柱穴が並んでいる。周溝にあたるものと推測される。

遺 物 (第50～53図、写真図版100～101)

(石器・石製品) すべて埋土中から出土した。51～55は撞器・削器、56は石匙、57は浮子状石製品、58は棒状砥石である。剥片石器では53をのぞいて、片面加工されている。55は石匙とも考えられる。57は第13号住居址内から出土した49と同様のものと考えられるが、孔の一方の端

は磨耗し全体として円錐状の孔となっている。孔の両端が破損しているため、詳細は不明であるが、49に見られた孔に直交する溝は見られない。56は両面が浅い凹みを作るように磨耗している。

（土器・土製品）449は床面から、450～453は床直上から出土した縄文土器片である。449は磨消縄文である。450～2の3点は磨消縄文と棒状刺突文である。器面は入念に研磨され暗褐色の光沢をもつ。450の内面に残滓が付着している。少なくとも450～1は同一個体である。453は口唇部が細くなる地文のみの口縁部破片である。457～467は埋土中位（埋土3）から出土した土器片である。454は地文の上に細く浅い沈線が垂下する。455は磨消縄文である。456は楕円状に区画される磨消縄文である。457～464は太く浅い沈線が曲線を描き、外側を磨消している。457は磨消部が鋸状突起的に盛り上がる。地文は無節の斜縄文が斜位に施文される。458～464は入念なミガキによって光沢のある暗褐色の色調をもつ。465は黒褐色、466～7は明灰褐色で縄文のみの口縁部破片である。468～482は埋土上位（埋土2相当）から出土した土器である。468は口縁の突起部で隆帯の貼付と割箸状工具による刺突文である。469・470は磨消縄文で458～463の土器群と同様である。471は胴部中央がややふくらみ、底部にかけてすぼまる粗製深鉢であるが、小破片となって一定の範囲に散在していたものである。472は沈線文である。473～4は磨消縄文であるが、前者は細く鋭い沈線、後者は幅の広い沈線で文様は横位に流れる。475～479は粗製深鉢の口縁部破片、480はミニチュア土器の口縁部破片である。481は綾絡文を有する体部片である。482は縁辺を研磨して作った円盤状土製品である。以上の土器片のうち469、480、482をのぞくすべての土器は煤を付着している。

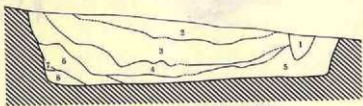
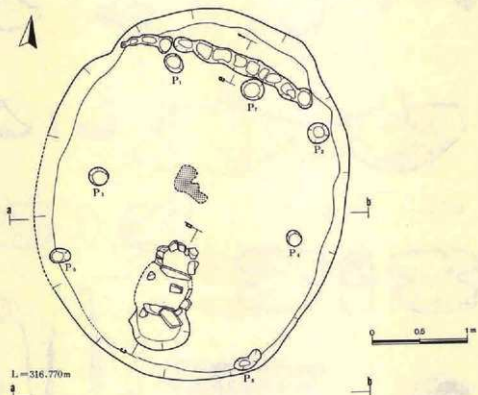
遺構の時期

本住居址に確実に共伴し、時期を決定できる資料に欠ける。よって不明である。しかし、その形態と埋土下位及び中位から出土した遺物は中期末葉が多いことから、本住居址もその時期よりそう遠くない時期が想定される。

第15号住居址

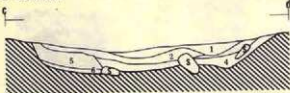
本住居址は床面から、完形及び復元可能な土器が合わせて5個が出土した。このように一括出土した例は本遺跡ではこの住居址だけである。また、埋土中からの出土は少なく、本報告書に掲載したもののみであった。

遺構（第54図、写真図版18）



- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 7.5YR 另 黑褐色土 | 5. 7.5YR 另 微暗褐色土 |
| 2. 7.5YR 另 褐色土(含Nhp) | 6. 7.5YR 另 黑褐色土 |
| 3. 7.5YR 另 黑褐色土(含Nhp) | 7. 7.5YR 另 暗褐色土 |
| 4. 7.5YR 另 暗褐色土(含Nhp) | 8. 7.5YR 另 微暗褐色土 |

L=315.900m



- | |
|-------------------------|
| 1. 7.5YR 另 黑褐色土 |
| 2. 7.5YR 另 暗褐色土(含C) |
| 3. 10YR 另 黑褐色土、灰土质土(含C) |
| 4. 7.5YR 另 褐色土 |
| 5. 10YR 另 暗褐色土(含C) |
| 6. 7.5YR 另 褐色土、灰土质土(含C) |

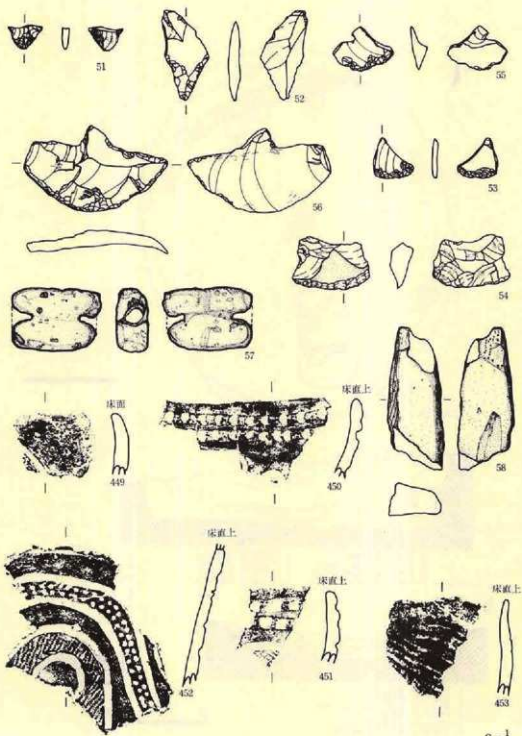
L=315.940m



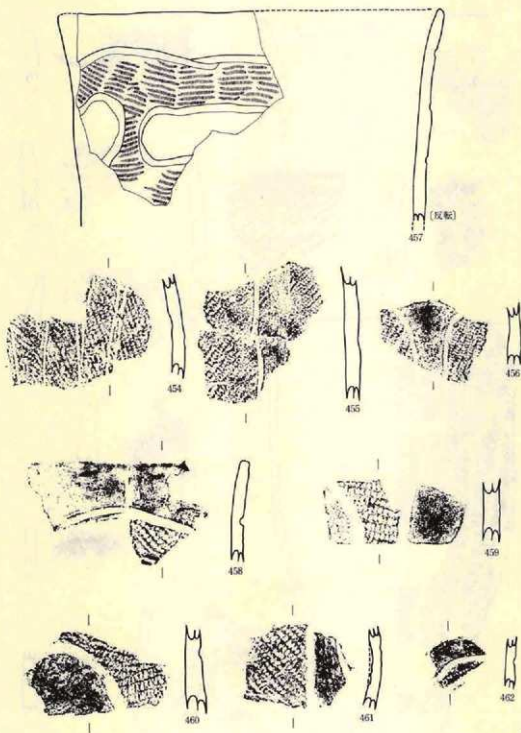
- | |
|----------------|
| 1. 10YR N 暗褐色土 |
|----------------|

0 0.5m

第49图 第14号住居址

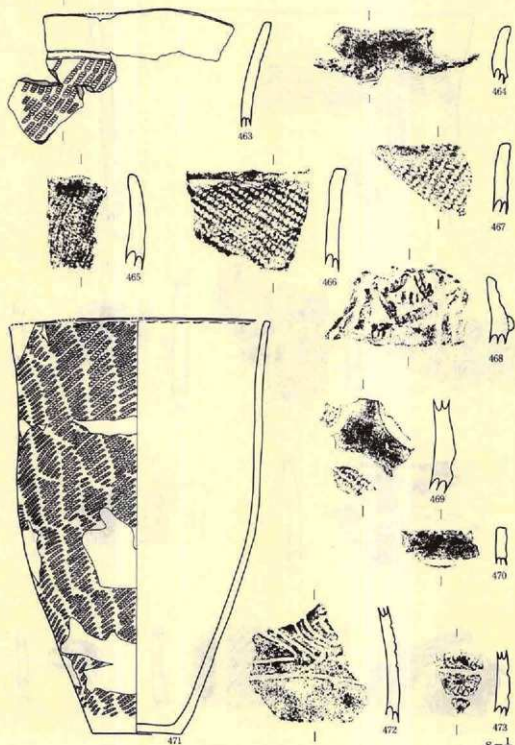


第50图 第14号住居址内出土遗物 (No. 1)



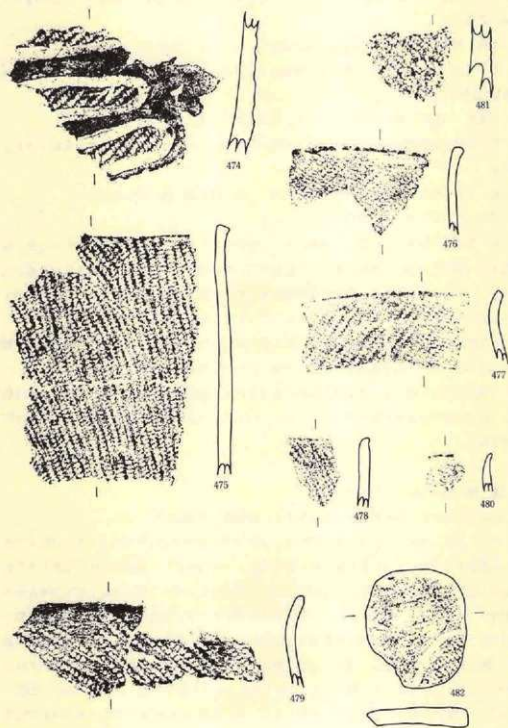
第51圖 第14号住居址内出土遺物 (No. 2)

$S = \frac{1}{2}$
 $(457 - S = \frac{1}{3})$



第52图 第14号住居址内出土遗物 (No. 3)

(471-S=1/4)



第53图 第14号住居址内出土遺物 (No. 4)

S=1/2

(位置) 南区の南緩斜面にあり、第1号住居址の南東約6mに位置する。南側の埋設谷まで7mである。

(重複) 第188号土坑、第190号土坑と重複し、どちらも本住居址が切っている。

(埋土) 上位から黒褐色土・黒色土・暗褐色土・褐色土の4層に大別される。レンズ状の自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) 西壁がややふくらむが、ほぼ円形である。直径約3.6mを測る。

(壁) 東壁で最大壁高65cm、南壁で最小壁高27cmを測る。外反ぎみではあるが直線的に立ち上がる。

(床) X層を床面とし、水平かつ平坦である。しまりは普通で特に硬い所はない。

(柱穴) P₁～P₃である。周溝等はない。

(炉) 石囲炉である。中央部より南西に寄る。形状はやや歪み、円形とも方形ともいえる。規模は30×50cmである。炉縁石はチャート質粘板岩の亜角礫である。縁石は埋置されたか差し込んだものかは不明であるが、堅牢な作りである。焼土は埋土中にブロック状にあるほか、炉床の地山が厚さ1cmほどの焼土となっている。埋土には粉炭が多く混入する。

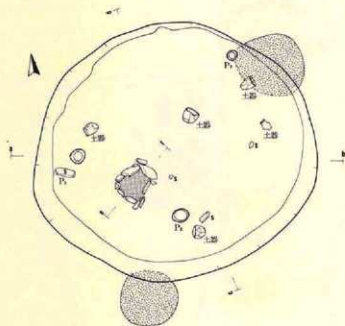
(その他) 第188号土坑との重複について：第188号土坑との切り合う点から488の深鉢が横位に出土しており、同土坑廃棄後に本住居址床面が作られたことを示している。

埋土中の炭化材：埋土1の下位中央部付近に炭化材及び粉炭がまとまって出土した。焼土は粒状のものが若干含まれる程度でほとんどない。出土状況からは、現地性が異地性のものかは不明である。

遺物 (第54～55図、写真図版102)

(石器) 埋土中から59の石匙が1点出土する。縁辺部を両面加工している。

(土器) 483、485～8の5点が床面から、484の底部片が埋土中から出土する。485をのぞく床面出土の土器はすべて押し潰された形でまとまって出土した。483は深鉢の体部下半であるが、他にまったく破片がなく、しかも上記のような出土状況から炉の埋設土器等の何らかの目的で二次加工された可能性が高い。器表面に集中的に2次焼成が見られる。484は底部が上げ底で無文である。地文は単節斜縄文で接地面まで丁寧に施文される。485は口唇部と体部の一部に若干の剥落が見られるが、ほぼ完形品である。細粒の単節斜縄文LRが縦回転された壺形土器である。全面がよく研磨され、頭部と体部下端は無文である。器表面の全面(底部を含む)と内側の頭部より上位は赤く彩色されている。器高18cmである。486～8は体部中央付近から急そくにすばむ器形の小型深鉢土器で、いずれも外面に煤が広く付着する。また、内面がより丁寧に研磨されている。



L=313.000m



1. 10YR 灰褐色土
2. 10YR 暗褐色土(含C)
3. 10YR 暗褐色土
4. 10YR 暗褐色土



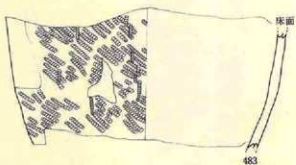
1. 10YR 与 暗褐色土(含C)
2. 10YR 与 暗褐色土
3. 10YR 与 暗褐色土
4. 10YR 与 暗褐色土

年时断面

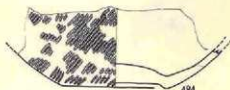
L=312.200m



1. 10YR 与 暗褐色土(含C)
2. 10YR 与 暗褐色土(含C)
3. 10YR 与 暗褐色土
4. 10YR 与 暗褐色土



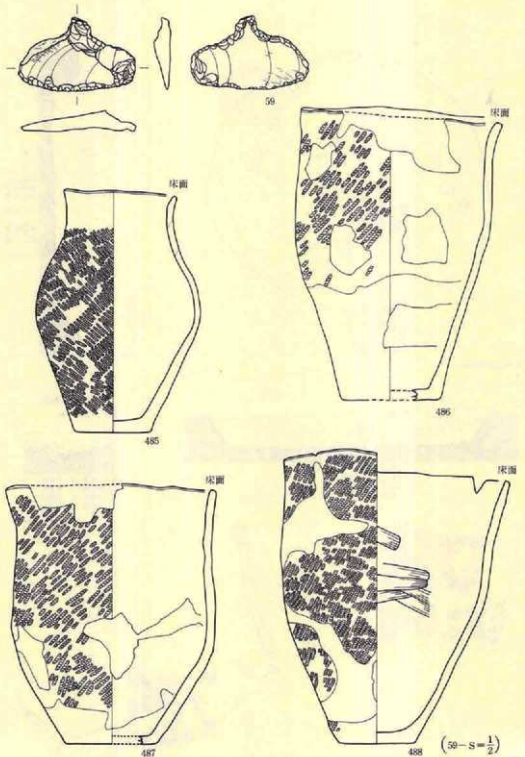
483



484

第54图 第15号住居址及び出土遺物(No.1)

S=1/3



第55图 第15号住居址内出土遺物 (No. 2)

$$(59-S=\frac{1}{2})$$

$$(485-8-S=\frac{1}{3})$$

遺構の時期

486～8の3点は中期末葉～後期に見られる器形である。また、485は器形としては中期末葉から見られるが、施文された細粒の縄文は、少なくとも本遺跡から出土した中期末葉と思われる土器群（後述する第4群及び第5群）の中には見られない。以上のことから、本住居址の時期は不詳である。

第16号住居址

本住居址は極めて小さな竪穴住居址である。土坑の密集地域に造られているため、複数の土坑と重複し、かつ埋土が混土で不明瞭なこともあって、詳細が不明な点が少なくない。

遺 構（第56図、写真図版19）

（位置）北区の中央部西側にあり、第13号住居址と第14号住居の中間に位置する。

（重複）第83・84・88・90・87号の各土坑と重複する。第83～90号の4土坑は本住居址を切っており、第87号土坑は胎床を除去した後に検出されたものである。

（検出状況）4土坑精査後、不明瞭な暗褐色の混土として検出されたものである。

（埋土）上位から暗褐色土・黒褐色土の2層に大別され、後者が大部分を占める。自然堆積とみられる。

（平面形・規模）残存部の状況から、南北に長い楕円形をなすと推測される。規模は2.8×2.0mである。

（壁）東壁については不明である。壁高は北壁が35～40cm、西壁が30cm程度である。西壁はややオーバーハングぎみである。

（床）Ⅴ層を主体とし、一部Ⅵを床面としている。

（柱穴） P_1 ～ P_3 であるが、 P_2 については主柱穴かどうか不明である。

（炉）南壁に寄った小さな石囲複式炉である。北西部の一部が土坑によって破壊されている。規模は幅20cm、長さ60cmである。焼土は極めて少ない。ただし、炉縁石は加熱により赤色変化している。

遺 物（第56図、写真図版103）

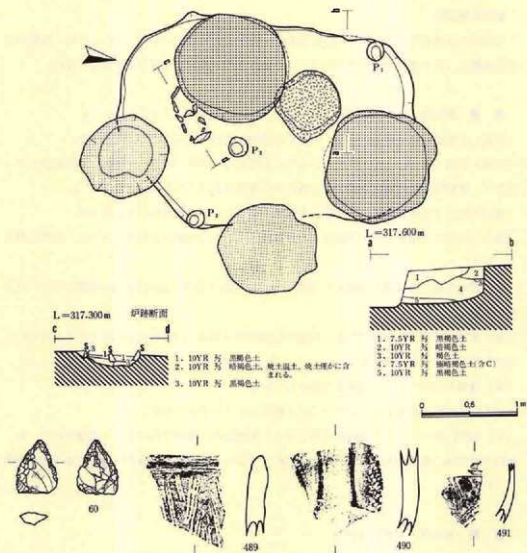
（石器）埋土中から60の石鏃1点が出土したのみである。無茎の石鏃で両面加工によって刃部が形成される。

（土器）埋土中から3片出土する。489は口縁部上端に2条の縄文原体圧痕がまわり、木目状

捲糸文が体部に施文される。胎土に繊維が混入する。490は貼付された隆帯の側面に入念な調整をした独特の波状の隆帯と磨消縄文を持っている。491は無文の器壁に細く鋭い沈線文が施文される。いずれも流れ込んだものと思われる。

遺構の時期

本住居址の時期を決定できる資料に乏しく、時期は不明である。



第56図 第16号住居址及び出土遺物(No.1)

S=1/2

第17号住居址

本住居址は検出時に第11号住居址の埋土と混同したため、同住居址の埋土（黒色土）中に作られていた本住居址の東半を破壊してしまったものである。したがって詳細は不明である。

遺構（第57図）

（位置）北区南西斜面にあり、沢に面した第5号住居址及び第6号住居址よりやや北に寄る。

（重複）第11号住居址と東半が、第114号土坑と北半が重複する。東半は第11号住居址の埋土を切っているのみであるが、北半は同土坑によって切られている。

（検出状況）3遺構の重複であったため、不定形な黒色土の広がりとして検出された。しかし、第11号住居址の埋土内に作られた本住居址の東半分は、平面プランとして把握することができなかった。本住居址を遺構として確認したのは、第11号住居址のセクション面（第50図のセクションa b）において、黒色土中に黒褐色土として把握した時点である。

（埋土）基本的には黒色土と黒褐色土の二層である。しかし、本遺構に対する地山は、暗褐色土と第11号住居址の埋土である黒褐色土であるため、埋土と地山が明瞭に分けられる部分と、ほとんど識別不可能な部とがあった。第50図のセクションは比較的容易に識別された部分である。

（平面形・規模）上記の理由により平面形・規模ともに不明である。

（壁）確認された西壁及びセクションでの壁高は約20cmである。西壁はほぼ直角に立ち上がるが、北壁は崩壊が著しい。また、東壁は耕作地造成に伴って削平されていた可能性が高い。

（床）西側は畳層の直上である。南西側の黒色土中に作られた床面は硬くしまっていた部分もあった。しかし東側の床は硬くない。水平、かつ平坦であったと推測される。

（柱穴）確認された柱穴は、セクションにかかったP₁のみである。床面からの深さは約40cmである。

（炉）石囲炉である。焼土の厚さは約10cmで硬く形成されている。炉の西側に1個の亜角礫がある。また焼土の周囲に石の抜き取り痕と思われる落ち込みがみられ、西壁際に3個の亜角礫がある。以上の状況から石囲炉が破壊された跡と推測される。

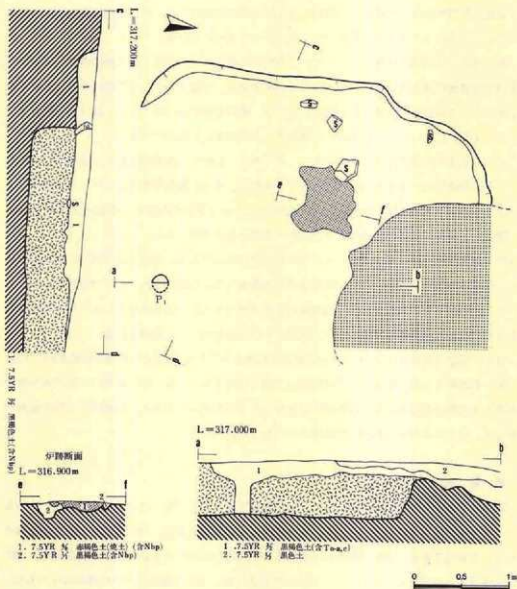
遺物（第58図、写真図版103）

（石器）床面から61の石鏃と埋土中から62の削器1点が出土する。61は先端部が破損している。

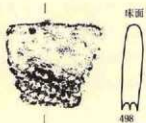
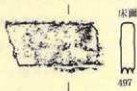
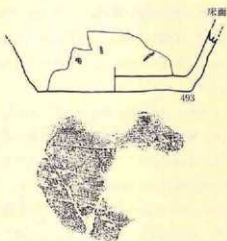
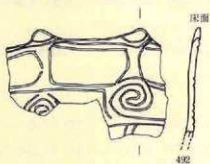
（土器）床面から492～8の7点が、埋土中から499が出土する。492は山形口縁の小型鉢である。沈線文である。493は底部に木葉痕をもつ平底の底部片である。494は磨消縄文、495は隆沈線文土器である。496～7、499は沈線文土器、498は縄文のみの口縁部破片である。

遺構の時期

7点が表面出土ではあるが、上記の理由により、本住居址に共伴する土器か、第11号住居址内の埋土に属するものであるかは判然としない。よってここでは後期初頭の可能性を指摘しながらも、時期不詳としておきたい。



第57図 第17号住居址



第58图 第17号住居址内出土遗物 (No. 1)

s-1/2

第18号住居址

埋土上位に径60cm、厚さ5～10cmの現地性焼土が形成されている。同焼土を境に土層が分かることから、2棟の重複も考えられたが、共存する柱穴が不詳なこと、壁が不明なこと、貼床がみられないこと等から、住居址とは認定できず、同焼土は焼土遺構として処理した。

遺構 (第59図、写真図版15)

(位置) 北区南東の緩斜面に位置する。沢から15mほどの位置にある。第21号住居址に隣接する。

(重複) 床面より40cmほど上位に焼土遺構がある。

(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土の3層に大別される。レンズ状の自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) 直径約2.6mの円形をなす。

(壁) 床面から15～20cmは良好な状態で残存するが、上部は崩壊が著しく不明瞭である。

(床) X層を床面とし水平である。南東側が扇状に凹む。明確な段を作らず緩く落ち込んでおり、他の床面から4cmほど低くなる。P₁～P₂間の床は硬くしまっている。

(柱穴) P₁～P₄が主柱穴である。P₃～P₄は壁際に回わり、床面からの深さは10～20cmである。

(炉) 直径40cmほどのほぼ円形となる地床炉である。中央部より僅かに南に寄る。焼土は薄く、層状を呈さない。しかし、粉炭は多い。

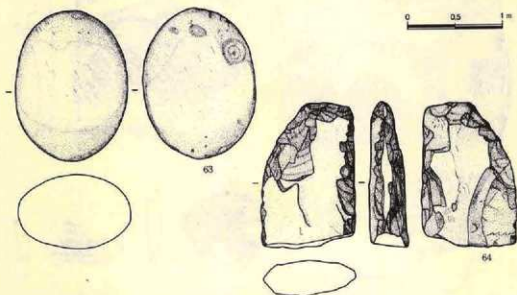
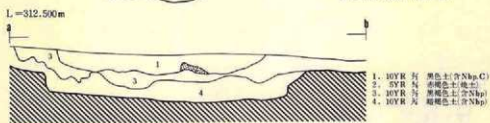
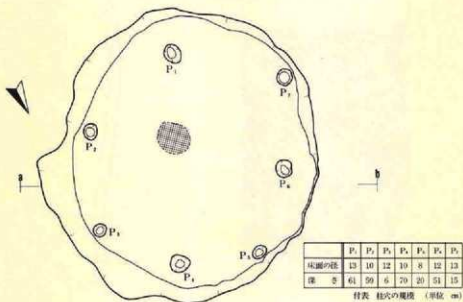
遺物 (第59～60図、写真図版103)

(石器・石製品) 埋土中からのみ出土した。63は磨石で両面とも同一方向に擦痕が見られる。また縁辺の一部に敲打痕が見られる。64は半円状扇平打製石器である。片面は明らかに研磨された後、加工されている。両面加工によって刃部が作られる。直線部は磨滅痕、曲線部には敲打痕が明瞭に見られる。65は玉石でよく研磨されている。

(土器) 床面から500の深鉢が甕位に出土した。体部下半は欠損している。501は肥厚する口唇部に深く深い沈線が、体部には深く浅い沈線が施文される。焼土遺構より下位の埋土から出土したものである。502は焼土遺構の中から出土した深鉢である。口縁部は外反して立ち上がる。基本的には平縁と思われるが小さな山形突起が1ヶ所に見られる。口縁部から体部下半部まで3本1組を単位とする沈線文が施文される。503～4は焼土遺構より上の埋土から出土した土器片で、503は沈線文、504は縄文原体圧痕文である。

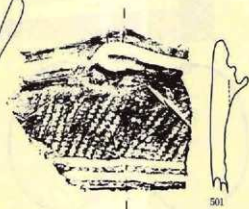
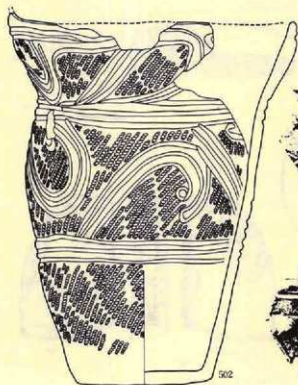
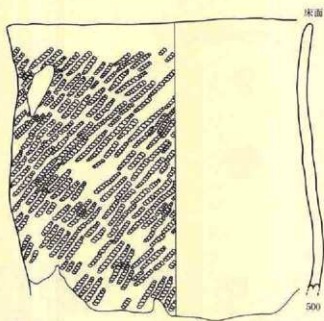
遺構の時期

時期決定できる資料に乏しく、時期は不詳である。しかし、焼土遺構が後期初頭、501が中期末葉と考えられることから、そのあたりに推定されるであろう。



第59図 第18号住居址及び出土遺物 (No. 1)

S=1/3



第60图 第18号住居址内出土遺物 (No. 2)

(501, 503-4-S- $\frac{1}{2}$)
(500, 502-S- $\frac{1}{4}$)

第19号住居址

本住居址の西半が調査区外にのびているため、詳細は不明である。また、本住居址の埋土及び床面からはまったく遺物が出土していない。

遺構 (第61図、写真版20)

(位置) 北区の西辺に位置する。東西に走る微高尾根上にあり、第7号住居址・第23号住居址と同じ尾根上にある。

(埋土) 埋土1は耕作土として利用されている。断面図の右側は畑に植えられていた小さな桃の木を抜根した際の攪乱を若干受けている。

(平面形・規模) 東側がややふくらむがほぼ円形であり、規模は直径3.8mと推定される。

(壁) 東壁でやや外反するが、ほぼ直角に近く立ち上がる。壁高は35cmで一定する。

(床) X層を床面とし水平かつ平坦である。全般によくしまっているが、特に硬い所はない。

(柱穴) P_1 ～ P_6 が主柱穴と考えられる。他に P_3 ～ P_5 がある。 P_1 と P_3 の間隔は90cm弱である。

(炉) 中央部より南に寄る。床面から10cmほど凹む。凹みの中ごろに3個の石が埋められており、石より北側に厚さ4～5cmの焼土が形成されている。凹みの南東に1個の石が埋められてある以外は計7個の石が炉の周辺に放置されている。これらの石は2個を除くすべてが多少の火熱を受け赤化している。凹地の周縁には石の抜き取り痕も幾つか見られる。以上のことから、破壊されてはいるが、石囲炉であったと思われる。ただし、複式であったか、単式であったかは不明である。

遺物

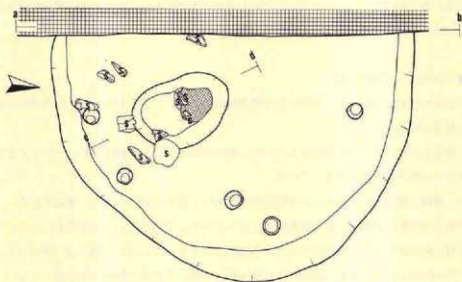
石器・土器とも出土していない。

遺構の時期

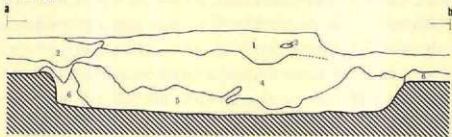
本住居址の時期を決定する資料に乏しく、時期は不明である。

第20号住居址

本住居址が構築されている南区南斜面の地層は、基本的には基本層序にのりながらも、埋没谷に近くなるほど基本層序V～Ⅷ層が混濁し不明瞭になる。その混土は砂が多く混入しているため崩壊が著しい。本住居址もこのような土層中に掘り込んで作られた竪穴住居址であるため一部に不詳なところがあった。



L. = 319.100m



1. 7.5YR 与 暗褐色土
2. 7.5YR 与 红-棕色-暗褐色土
3. 7.5YR 与 红-棕色
4. 7.5YR 与 黑色土(含Nhp,C)
5. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nhp,C)
6. 7.5YR 与 褐色土

L. = 316.300m



1. 7.5YR 与 暗褐色土(含C)
2. 10YR 与 棕-暗褐色土(含土)
3. 10YR 与 暗褐色土(含C)

0 0.5 1m

第61图 第19号住居址

遺構 (第62図、写真図版15)

(位置) 南区南斜面に位置する、埋没谷まで約6mである。

(検出状況) 暗褐色土の地山に黒～黒褐色土が不正形な小判形状に広がる。

(埋土) 上位から黒色土・暗褐色の混土・褐色の混土の3層に大別される。ほぼ、レンズ状の自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) 東側に張り出し部をもち、多少不正な楕円形である。規模は、3.1×2.8mほどである。

(壁) 東壁で最大壁高約46cmを測る。砂質土のため上部ほど崩壊が著しい。下部は層層を切り、Ⅸ・Ⅹ層に幾分くいこむ。

(床) Ⅹ層を床面とする。西側で若干高くなるが、ほぼ水平で平坦である。しまりは普通で特に硬い部分はない。

(柱穴) 床面では検出できず、床面を12cm掘り下げて検出した。主柱穴はP₁、P₂で炉を挟んで対峙する。他にP₃～P₆が検出されたが、いずれも壁に寄る。柱穴の埋土は南部浮石を主に砂と黒色土の混土である。粉炭を含んでいる。

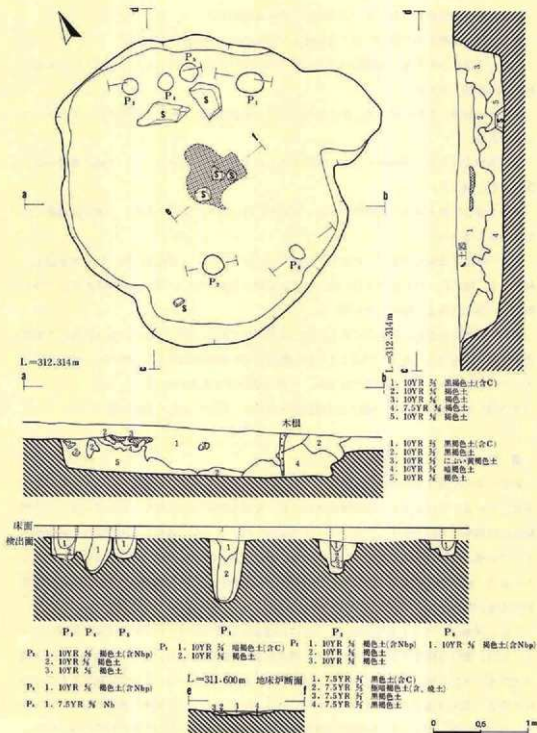
(炉) 中央部に位置し、地床炉である。形状は不整形である。焼土は僅かに焼土粒として黒色土中に散在するのみである。炉址は大部分が粉炭を含む黒褐色土である。炉内に3個の石が出土したが、埋置されているわけではない。一部に僅かな焼成痕がみられる。

(その他) 焼土遺構：埋土Ⅰ層中に現地性焼土がある。同層には広く粉炭が見られた。

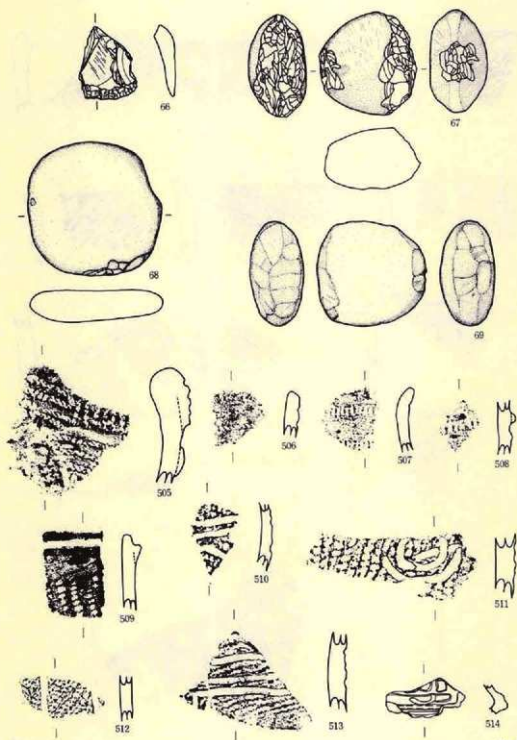
遺物 (第63～64図、写真図版104)

(石器) すべて埋土中から出土したものである。66は削器であるが片面加工によって刃部を作りだしている。67は全面が入念に研磨された後、刃部を作るように打ち欠かされている。その剝離面には明瞭な敲打痕が見られる。ここでは敲石としておくが、磨石を二次使用した可能性をもっている。68は縁辺部に敲打痕がみられる。69は全面を研磨した石をもちいている。図示したとおり、両端部は多面体状に磨滅している。一部は磨耗している部分もあるが、大部分は敲打によると思われる。石質は花崗岩で硬い。ここでは、一応、敲石としておきたい。

(土器) 床面からの出土土器はない。505は口縁部に隆帯が貼布されて肥厚する。隆帯にはコイル状に、他には隆帯に平行するように、縄文原体圧痕が施される。506～8は縄文原体圧痕文である。また508には隆帯も貼布される。509～513は縄文の上に沈線文が施文される土器片である。514は壺又は注口土器の体部片である。隆沈線文による文様であるが小片のため詳細は不明である。515～525は縄文のみを施文する土器である。ここでは口唇部の作り等なんらかの特徴をもつ土器のみをとり上げた。515は外側に、516は内側に隆帯を貼付し、入念に

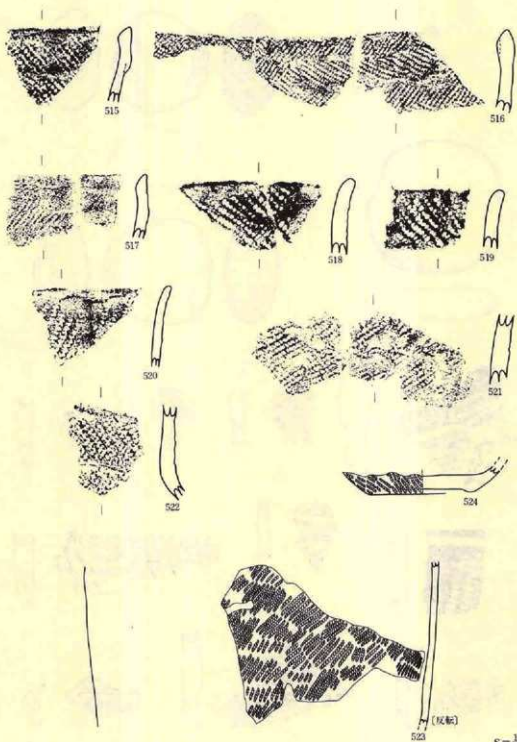


第62图 第20号住居址



第63图 第20号住居址内出土遗物 (No. 1)

S = $\frac{1}{2}$
(67-9 - S = $\frac{1}{3}$)



第64图 第20号住居址内出土遗物 (No. 2)

$S = \frac{1}{2}$
 $(521 - S = \frac{1}{3})$

器面調整を施している。516は若干の繊維が胎土に混入している。521は綾格文が横位に施文された体部片である。522は詳細は不明であるが、頭部と体部との境と思われる。524は上げ底の底部片である。523は反転実測によって体部の直径が推測された土器である。推定直径約38cmである。

遺構の時期

時期を決定できる資料に乏しく、不明である。

第21号住居址

本住居址は床面が僅かながらも2段になることから、2棟の重複も考えられたが、炉の作り替えの有無、埋土の状況、主柱穴の本数と配置等のことから単独の住居址と考えられ、有段を持つ住居址と考えられる。

遺 構 (第65図、写真図版21)

(位置) 北区南東端に位置し、沢に面する斜面の傾斜変換点に位置する。

(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。植生根等により部分的には土層が入り組むが、概ねレンズ状の自然堆積状況を呈する。

(平面形・規模) 長軸を南北にとる小判形である。規模は約5.8×4.5mである。

(壁) 西壁で最大壁高50~40cmを得、明瞭に壁が残存するが、東にいくほど壁が低くなり、東壁は一部を残すのみで大部分は不明となる。北壁の一部は風倒木痕と接する。

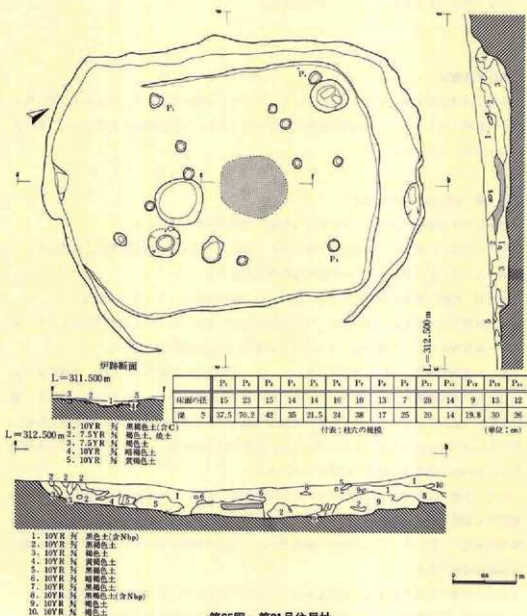
(床) 本遺構の内部は一段下げて床を作っている。その段差は西側で5~10cm、東側で10~20cmとなる。南側の段差は不明瞭である。したがって南床は壁に向かって緩やかに上がるが、他は水平かつ平坦でしまりもよい、Ⅹ層を床面とする。炉の北西側がやや硬い。北西隅に径60cm深さ8cmほどの風状の土坑がある。同土坑には2個の重角礫が入っていた。また、中央部南側寄りに径70cm、深さ8cm程度の同様な土坑がある。

(柱穴) 主柱穴はP₁~P₄で柱間2.5mの方形状の配置である。またはP₁、P₆を加えた6本柱の可能性も否定できない。これらは、いずれも床面からの深さが37cm以上である。他にP₇~P₈は深さ26cm程度、P₉、P₁₀は15cmの柱穴が検出された。柱穴の埋土はすべて黒褐色土で相互の相違は識別不可能である。

(炉) 中央部に地床炉がある。直径1mほどのほぼ円形をなす。炉はほぼレンズ状に凹み、中央部で約10cmほどの凹みとなっている。炉床は地山が加熱を受け焼土が形成されている。焼土

の上には粉炭を多く含む黒褐色土がのっている。

(その他) 焼土遺構：本住居址の埋土中に焼土が形成されている。現地性の厚い焼土である。拡幅・縮少について：本住居址の床面が2段となっているため、拡幅や縮少が考えられた。しかし、以下の理由でその可能性は少ないと考えられる。炉が一基であること、貼床がないこと、建て替えに伴う柱穴と考えられるものがないこと、埋土中に形成された焼土を拡幅に伴う炉と考えた場合、床面より更に上位になること、埋土の堆積状況にそのような痕跡がないこと。



第65図 第21号住居址

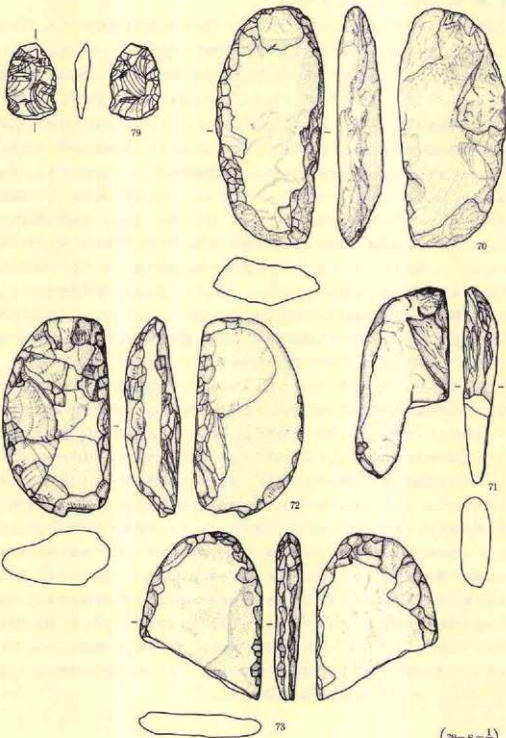
遺物 (第66~71図、写真図版104~106)

(石器) すべて埋土中から出土したものである。70~74は半円状扁平打製石器である。70は完形品であり、最長18cm・幅8cm・厚さ3cmを測る。研磨というほどではないが、磨滅し滑らかな石に両面加工によって刃部を作り出している。直線部の一部に磨耗痕が、曲線部には敲打痕がみられる。71は図のとおり一部破損しているが、ここには何の調整痕も見られない。刃部の直線部は両面加工されているが、他には加工痕が見られない。しかし、直線部と反対側の曲線部には明瞭な敲打痕がみられる。72も完形品である。これは70より一層顕著に研磨された面を剥離したものである。直線部は両面加工されているが曲線部はほとんど片面加工である。直線部は滑らかに磨耗しているが、使用に伴う痕跡かどうかは不明である。使用痕としての敲打痕は認められない。73はほとんど板状に扁平であり、僅かに磨滅している。直線部は両面加工によって作られる。直線部には磨耗と思われる使用痕が見られるが、曲線部には何らの使用痕も見られない。74は片面(図の右側)のみが研磨された後に剥離を施されている。直線部には不明瞭ではあるが磨耗痕(敲打痕かもしれない)が見られる。曲線部の一部に使用痕に伴うと思われる敲打痕がある。破損面以外は焼成を受け薄赤く変化している。75は板状に扁平な川原石状であるが、図の上部にあたる側縁部が磨滅している。磨石と思われる。76~8は石皿の破片である。79は削器である。作図は省略したがフレック・チップ類も若干出土している。

(土器) すべて埋土中から出土したものである。525~6は口縁部に縄文原体圧痕が施文される。526は口縁部文様帯と体部の境に綾絡文がまわる。528~531は口縁部と体部の境に微隆帯が1本貼付され、隆帯には連続刺突文が施される。529~530の口唇部には縄文が施文される。以上の土器は胎土に繊維を含んでいる。532~4は太い隆帯の貼布と縄文原体圧痕が施文される。535~7は隆帯の貼付と捻糸圧痕が施され、縄文原体を馬蹄形に折り曲げて施文した爪形文が充填される。539~544は沈線文であるが、前2例は地文の上に太い沈線が入るのに対し、後4例は細く鋭い独特の沈線による区画文が施文される。545は口縁部が外反ぎみに立ち上がり、体上部が緩く張り出す深鉢である。頸部に一本の沈線が回わる。薄手で焼成がきわめてよい。細粒の縄文が縦走するように施文される。546~550は縄文のみの土器片である。546は木目状捻糸文で胎土に繊維が含まれる。548は多軸絡糸体圧痕文、549は綾絡文である。550は波状口縁をもつ粗製深鉢で口縁部は研磨されている。器形は口縁部が内彎する。器面に煤が付着している。551はミニチュア土器で下半部を欠損する。552は捻糸文で横回転される。553は無文の折返し口縁をもつ。554は櫛歯状条痕文であり、555~8は口縁部に特徴をもつ土器片、559はミニチュアと思われる土器の底部片である。

遺構の時期

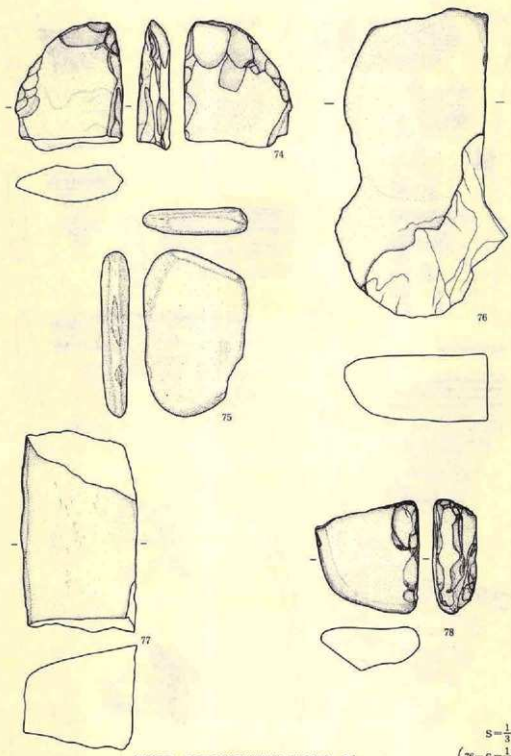
本住居址に共伴し時期を決定できる資料に欠け、時期は不明である。



第66图 第21号住居址内出土遗物 (No. 1)

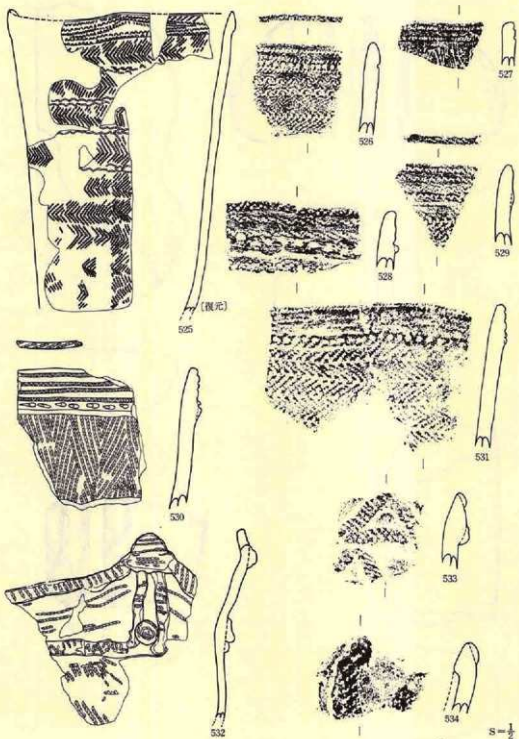
$$(79-S = \frac{1}{2})$$

$$(70-73-S = \frac{1}{3})$$



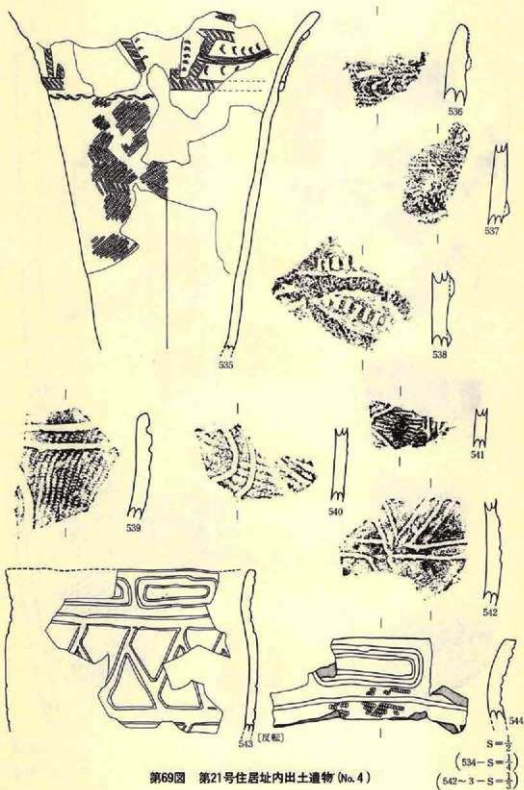
第67图 第21号住居址内出土遗物 (No. 2)

$S = \frac{1}{3}$
 $(76 - S = \frac{1}{4})$

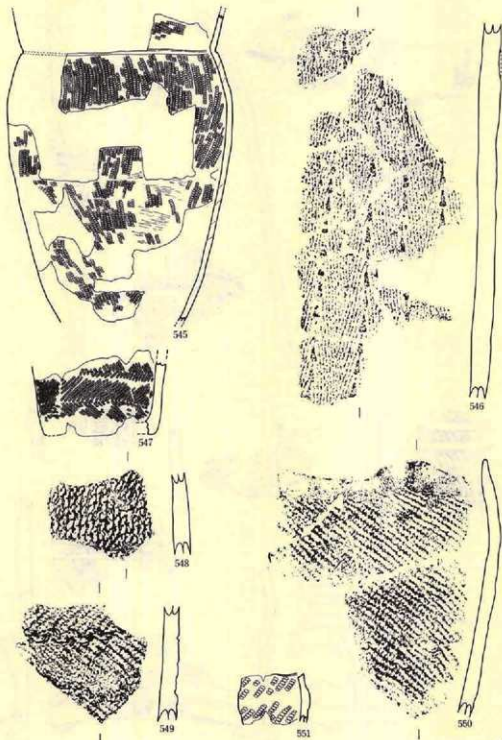


第68图 第21号住居址内出土遺物 (No. 3)

S=1/2
(524, 531-S=1/4)

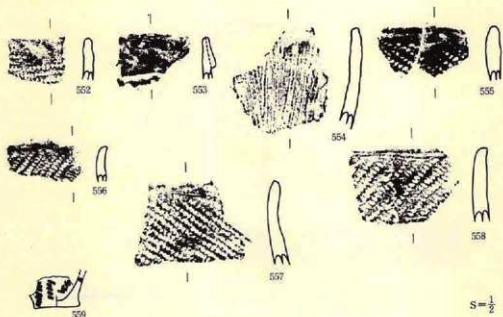


第69图 第21号住居址内出土遗物(No. 4)



第70图 第21号住居址内出土遗物 (No. 5)

$S = \frac{1}{2}$
 $(544 - S = \frac{1}{4})$



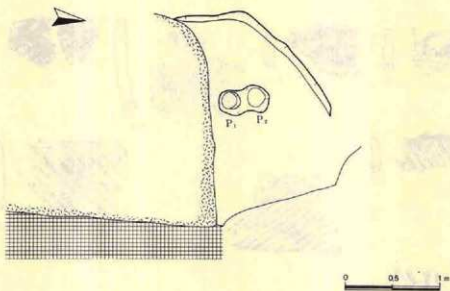
第72図 第21号住居址内出土遺物(No.6)

第22号住居址

本住居址は第26号住居址に南半を、東半は耕作地造成に伴ない削平を受けたため、西～北壁の一部と柱穴が検出されたのみである。よって詳細は不明で厳密には住居址状遺構と呼ぶべきものである。

遺 構 (第72図、写真図版21)

- (位置) 北区南東端に位置する。
- (重複) 本住居址は第26号住居址によって切られている。
- (埋土) 黒褐色土の単層である。
- (平面形・規模) 本遺構が調査できたのは瓦にもみたない。よって形状・規模とも不明である。
- (壁) 北西部に弧状に検出された。壁高15cm。Ⅱ層を掘り込んで作られているが、ほぼ直角に立ち上がる。東壁は削平され消滅している。
- (床) Ⅱ層を床面とし、水平かつ平坦でしまっている。
- (柱穴) P₁、P₂の隣接する2柱穴のみ検出された。埋土は黒褐色土の単層である。深さはどちらも床面から約50cmである。
- (炉) 検出されなかった。



第72図 第22号住居址

遺物 出土していない。

遺構の時期

資料に乏しく不明であるが、壁の作り方と柱穴内の埋土から縄文時代のもと考えられる。

第23号住居址

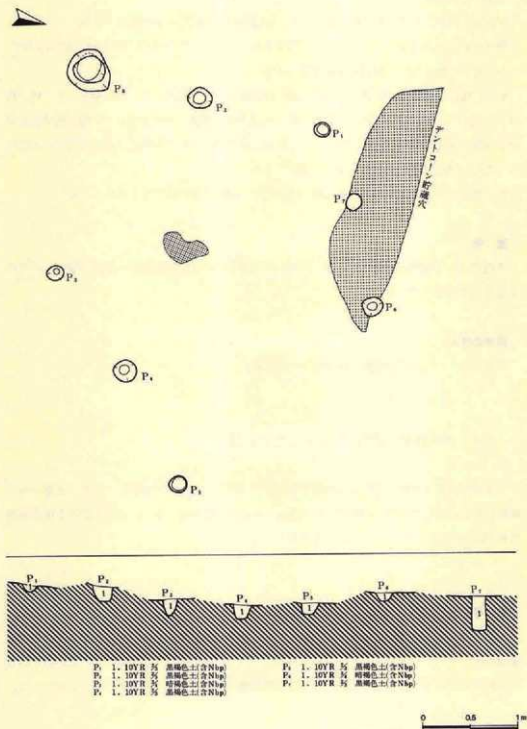
本住居址は柱穴も壁も不明であり、床面と思われるフラットと地床炉を検出したのみであった。そこで、第13号・第20号住居址で行ったと同様に床面を下げ、柱穴を確認したものである。第22号住居址と同様、厳密には住居址状遺構と呼ぶべきものである。

遺構 (第66図)

(位置) 調査区北端に位置し、東に傾斜する微高尾根上にある。

(重複) 他の遺構との重複はないが、北側にはデントコーンを貯蔵するための現在の土坑が掘られている。

(検出状況) 耕作地造成により大きく削平を受けていたが、暗褐色土に黒褐色土が不定形に広



第73図 第23号住居址

がる面として検出した。

(平面形・規模) 炉の位置と柱穴配置から、ほぼ円形で直径約3 mと推定される。

(壁・床) 上記の理由により、ともに不明である。ただし、炉の付近に平坦な部分が正円形に広がっている面があり、同面を床面ととらえた。

(柱穴) 床面の検出時には検出されず、10～15cm掘り下げた結果、P₁～P₆を検出した。P₁、P₂は炉に向かうように斜めになっている。P₃、P₄は土坑の壁際に残存しており、特にP₄は最も良好な状態で残存していた。P₁、P₂をのぞく柱穴は炉を中心とした半径1.5 mの円周上にははのってくる。埋土は南部浮石と黒色土の混土である。

(炉) 地床炉である。焼土の色調は薄い赤褐色で、層厚は厚い所でも1 cmにみえない。

遺物

本遺構に伴う遺物は不明であるが、周辺から出土した土器は後期後葉～晩期中葉にかけての土器片のみ出土している。

遺構の時期

以上のことから、本住居址の時期は不明である。

[2] 平安時代の竪穴住居址と出土遺物

平安時代に属する竪穴住居址は3棟である。いずれも、カマドが作られており、床面から土師器の裏を出土している。完掘された2棟はともに方形である。また、時期不詳の1棟も検出されたが、その住居址もここで述べることとする。

第24号住居址

内部に間仕切り施設をもつ住居址で、そこから鉄滓や鉄製品が出土したことにより、鍛冶場施設を有していたと推測される住居址である。カマドの煙道部の一部が調査区外にのびていたが、同地の所有者である松本義勝氏の了解を得て煙道部の先端部まで調査することができた。

遺構 (第74図、写真図版22)

(位置) 南区東端に位置する。尾根の北側斜面であるが、沢に向かう傾斜変換点に位置し、比

較的平坦な地形である。

(重複) 第185号土坑と重複し、同土坑を切っている。

(埋土) 植林されていたため、大小の植生根が入りこんで層が断続する。基本的には上位から黒色土と黒褐色土の2層に大別される。レンズ状の自然推積状況を呈する。埋土中に十和田a降下火山灰は含まれない。

(平面形・規模) 1辺が5.8mの隅丸方形である。南北の軸線は約18度東偏する。

(壁) 北西壁で最大壁高65cmを測る。ほぼ直角に立ち上がる。

(床) X層を床面とし、概ね水平であるが凹凸がある。南西隅に位置する第185号土坑の埋土をたたいて床面とはしているが、貼床はしていない。同土坑のわきに不定形な皿状土坑が2基あり、その一つには直角礫が数個入っている。また、南西隅には深さ10cmほどの皿状土坑がある。北及び東の床は一段高くなっている。北東隅は一段低くなっている。

(柱穴) $P_1 \sim P_4$ が主柱穴である。柱間は最大4.5m、最小3.5mを測る。他に $P_5 \sim P_8$ を検出したが、いずれも北半にある。 P_5 は土坑の埋土を切って構築したものであり、柱の底部は土坑の底部でとまっている。底部には柱の形状に、まるく酸化第2鉄がまわる。

(カマド) ○カマド……東壁の北寄りに作られている。カマド本体は大部分破壊されており、加熱を受けて変化した土層、残存する粘土塊、袖部の芯材として使用されたとと思われる襖等の配置から推測するのみである。しかし煙道部は比較的良好に保存されている。焚き口部は皿状に掘り込まれている。燃焼部の焼土は厚さ10~15cmで硬い。燃焼部の右袖部の下部に25×6×8cmの硬いレンガ状の粘土塊がある。これは、袖部を作っていた粘土が加熱されて固まったものと考えられる。煙道部に近い右袖部には土師器の襖が倒立して埋められてある。中は空である。厚い焼土が襖の付近までくるが、襖には二次加熱の痕跡はない。煙道部は緩やかに立ち上がる。煙道部は板状の粘板岩で作られており、規模はおよそ15×15×80cmである。左袖部の上方に10~20cmの板状の粘板岩やチャート質粘板岩の直角礫、土師器の破片、焼土等が廃棄されている。それらの一部は煙道部を押し潰し、内部に入っている。これらの石の一部は加熱を受け赤色変化している。焚き口部付近の焼土中に直径25cmと28cmの2つの穴がある。これは、同付近から出土した土器片と左袖部上方に廃棄されていた土器片が接合することから、土器を芯材として埋設した跡と考えられる。

○焼土……カマド以外の2ヶ所に焼土が形成されている。一つは鍛冶炉と思われる。もう一つは西側の床面に見られる。焼土の厚さは最大でも1cm未満である。

(その他)

○壇状施設：東壁に巾50~80cm、長さ4.2m、高さ20~30cmの壇がある。これは掘り残して作られたものである。この壇の上にカマドが構築されている。カマドと P_5 の間は削られ、壇が断

ち切られた形となっている。北壁にも壇がある。段差は10cm内外で西側は不明瞭になる。

○掘り込み施設：上記の東側の壇状施設と住居址中央部の間に隅丸長方形の掘り込みが検出された。規模は2.0×2.8m、軸線は住居址と一致し、長軸方向は南北線である。掘り込みは住居址床面から10cm程度である。周壁に沿って10本、南側の中央部よりに1本の柱穴がある。北壁にほぼはみ出す形で北東隅に焼土道構がある。道構はやや楕円形を呈し、中央に厚さ5cmほどの馬蹄形状で内部に向かって口を開くように焼土がある。もろくはなっているが、色調は白っぽい赤色で相当高温で加熱されたと考えられる。南西隅には直径90cmの正円形で、極めて硬い所がある。西壁際には深さ20cmほどの小土坑がある。

この掘り込み施設は本住居址の床と同じX層の土によって薄く覆われていたが、掘り込みが分かる程度であること、西壁際の土坑が埋めつくされてはいないこと等から貼床等は考えられない。また、土坑のわきから鉄滓が、同床面から鉄製品が出土した。以上のことから、本道構は住居址内に設けられた工房跡（鍛冶場跡）の可能性が強いと考えられる。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
底面の径	15	16	12	20	12	5	13	27	15
深さ	40.1	32.0	11.4	31.9	31.3	18.1	10.4	53.0	16.2

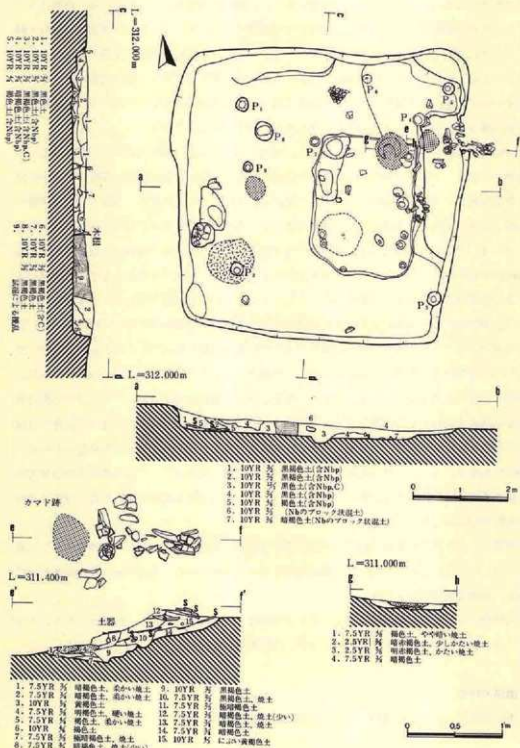
付表：柱穴の規模

(単位：cm)

遺物（第75～78図、写真図版107～109）

（石器）カマド内から80の砥石が出土した。底部を除く5面が使用されている。全面が火熱を受け赤色に変化している。83は床面から出土した砥石で、上面のみ使用されている。埋土中からは81の半円状扁平打製石器と82の播磨器が出土する。81は研磨された面に両面加工して刃部を作り出している。直線部は明らかな磨減痕であり、曲線部には敲打痕が見られる。82は押圧剝離によって刃部を加工している。

（土器）床面から土師器とはかに数片の縄文土器片が出土したが、縄文土器は流れ込んだものと考えられる。560～567、570～1の土師器は床面から出土したものである。器種はすべて甕である。大型の甕はみられず、最大のもでも560の30.1cmであり、ほとんどが20～30cm程度のものである。とくに565～7、569は小型で565は推定15cm程度のものである。器形、調整技法等は570を除き、すべて同じである。口縁部は短かく、外側にくびれるように外反する。口縁部の調整は560、567、569は指でつまみ、570は連続するヘラケズリをするほかは、すべてヘラ又は指等によるナデ調整である。また、572は内側にそく形になり、外側は直立する形であるが丁寧に成形される口縁部となっている。器表面はほとんどヘラケズリされたのち、多少ナデ調整をしている。561はヘラナデ調整である。565は体部上半がナデ調整され、ヘラ



第74図 第24号住居址

ケズリの跡はみられない。570の口縁部片もこれと同様の調整をしたと思われる。内側はすべてヘラナデの調整で、口縁部付近は指等のナデ調整をしている。これらの土師器は、小石・砂混りでざらざらした胎土をしているものと、若干の小石が含まれるが緻密な胎土をもつものに分かれる。前者に属するのは560、565、568～9、571等であり、他は後者に属する。

574～5は須恵器の破片で、今回の調査で出土した須恵器はこの二片のみである。器表面には縄の叩き目痕がみられる。いずれも埋土中から出土したものである。

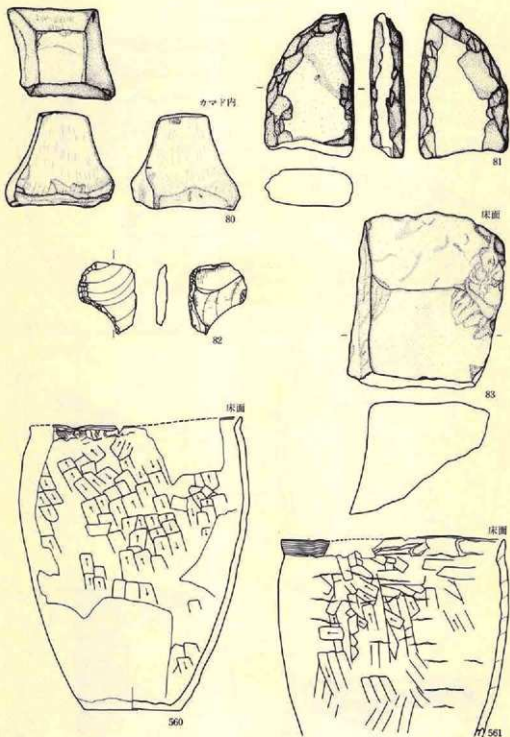
576～597はほとんどが埋土中から出土した縄文土器片である。576は具轂圧痕文である。577は撫糸圧痕文、578は口唇部に太い隆帯を貼付し、撫糸圧痕文を施文する。579は隆帯の貼付と撫糸圧痕文によって文様体がつくられ、体部には綾格文が施文される。580～582は隆帯の貼付と割箸状工具による連続刺突文が施文される。583は縄文を施文した上に細い隆帯を貼付している。584～5は縄文の上に沈線文が施される。前者は渦巻文、後者は平行沈線文である。586は口縁部がそがれた形に有段となり沈線が1本まわる。内側の口唇部にも1本の沈線がまわる。587は口唇部にキザミ目をもち、少なくとも3本の平行沈線がまわる。588は皿状の器形で、やや幅の広い沈線が工字文状に施文される。589は口唇部内側に1本の隆帯を貼付し、更に隆帯の上に1本の隆帯をおき、口唇部の真上から指頭圧痕を加えたものである。したがって上にある隆帯は波状を描いている。外側の口縁部直下に1本の沈線がまわる。590は口唇部に外側から指頭圧痕を加えている。591は口唇部まで羽状縄文が施文される。592は口唇部に外側から隆帯を貼付したのち縄文を施文している。593は口縁部と体部の境に微隆帯を貼付し口縁部には撫糸圧痕文、体部には結束第2種の羽状縄文が施文される。胎土に繊維を含んでいる。594は綾格文である。595は沈線文と貼瘤がつけられる。596はコップ状の器形を持つ無文の土器である。縦位に入念な調整痕がみられる。胎土からみて縄文土器と思われる。597は貼付した隆帯が剥落したものである。

(鉄製品)ノミ状の鉄製品(1501)1点と鉄滓(1502)1点とが出土する。1501は出土した時点では、錆がもり上がっていた。刃部は使用によって捲れている。全長7cm、最大幅2.7cmである。1502は重さ200gである。

(炭化材)カマド及び鍛冶が付近から多くの炭化材(小片)が出土した。材質は、ホウ、ナラ、カツラ、ケヤキ、クリ、マツである。また、材質不明の炭化材3点がある。

遺構の時期

本住居址は、出土した遺物によって平安時代中頃と思われる。

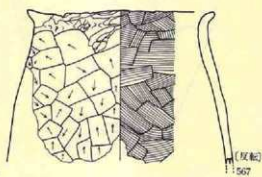
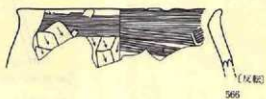
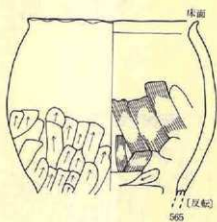
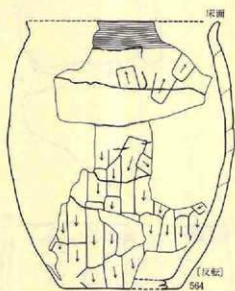
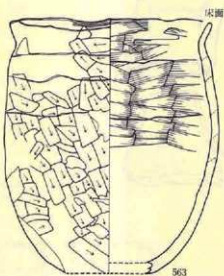
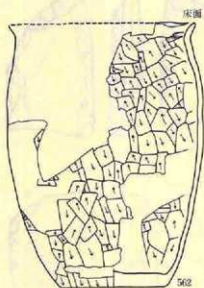


第75図 第24号住居址内出土遺物(No.1)

(80, 81, 83-S = $\frac{1}{3}$)

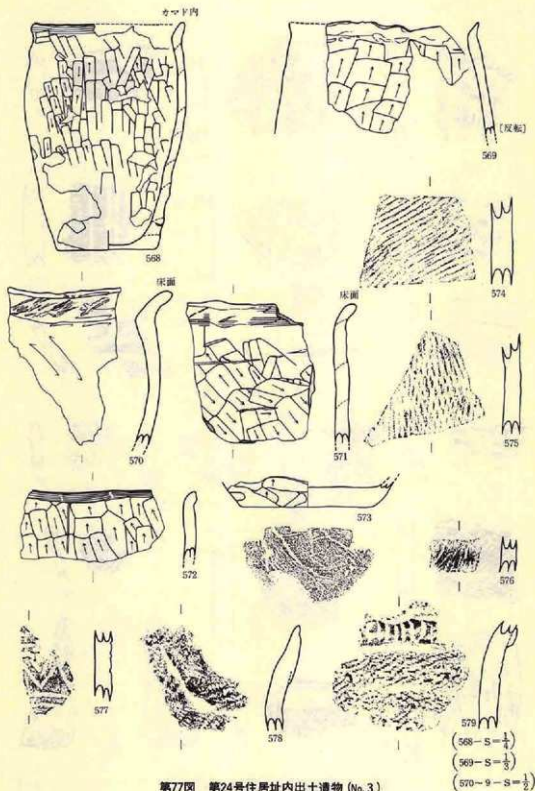
(82-S = $\frac{1}{2}$)

(560, 561-S = $\frac{1}{4}$)

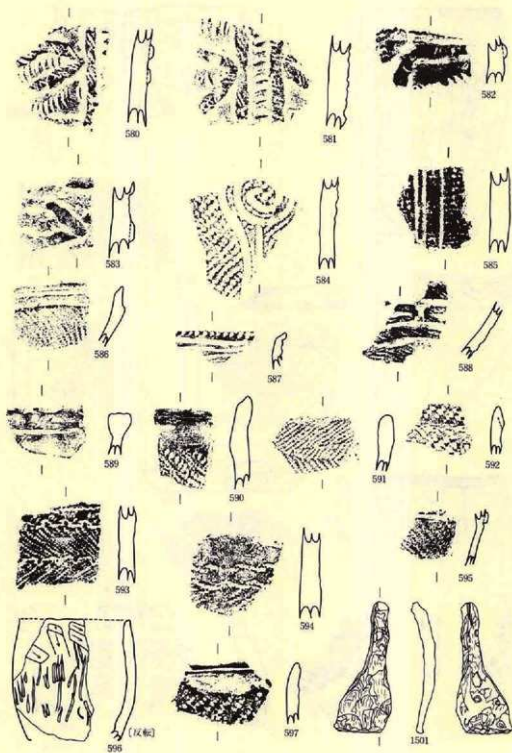


第76图 第24号住居址内出土遺物 (No. 2)

(562-3-S- $\frac{1}{4}$)
(564-7-S- $\frac{1}{3}$)



第77図 第24号住居内出土遺物 (No. 3)



第78图 第24号住居址内出土遗物 (No. 4)

S=1/2

第25号住居址

完全な平面プランを得た土師期の住居址である。カマドは煙道部を持っていない。

遺構（第79図、写真図版23）

（位置）南区の尾根の頂上部より僅かに北斜面に寄る。第24号住居址から7mほど西である。

（重複）第176号、第177号の各土坑と重複し、いずれも本住居址が切っている。

（埋土）黒色土と暗褐色土の2層に大別される。

（平面形・規模）1辺が約4.1mの隅丸方形である。軸線は第24号住居址とはほぼ同じである。

（壁）斜面上位にあたる南西で最大壁高40cmを測る。北東壁は4cmと低くなる。北壁の一部は抜根によって破壊されている。

（床）第176号、第177号土坑の埋土を叩いて床としているが、いわゆる貼床はみられない。また、第177号土坑の西半の埋土上位は風倒木の攪乱を一部受けている。X層上位を床面とし、平坦である。南西の床は緩やかに高くなっている。第24号住居址と同様、南西隅には皿状の土坑があり、壁の一部も抉られている。同土坑の深さは10cm程度で、楕円形状である。

（柱穴） P_1 ～ P_4 の4主柱穴である。 P_1 は第176号土坑内に作られている。

（カマド）住居址南東隅にあり、東壁に面している。破壊されており、上部構造はほとんど不明である。煙道部は検出されなかった。焚き口部は比較的良好に保存されており、焼土は最大厚20cmほど厚く形成され、全体としてせり上がるように形成されている。焚き口部に形成された焼土の下に、直径45cm、深さ50cmほどの柱穴状土坑がある。袖部と思われる所には、チャート質粘板岩の垂角礎が、にぶい黄褐色のシルトで半分ほど埋められている。燃焼部を覆う埋土のうち、焚き口部と燃焼部の奥に粘板岩と土師器の破片が敷き詰められたように並ぶ。この埋土は黒褐色のシルトで袖部のシルトとは区別され、住居址の埋土とは区別がつけにくい。しかし、その出土状況からみて、カマドの天井部を作る時の芯材として使用された可能性もある。

（その他）焼土遺構：住居址中央部から南西にかけて、性格不明の焼土が不整形に形成されている。層厚は5～10cmである。

遺物（第80～81図、写真図版109～110）

（石器）埋土中から84の磨製石斧と85の磨石が出土する。84は刃部側が欠損している。85は図示したように敲打痕も僅かにみえる。火熱をうけ赤化するともに全面に煤が付着している。

（土器）598～600はカマドから出土した土師器の一部である。第24号住居址から出土した土師器と胎土、調整技法等すべて同じである。598はヘラケズリののちヘラナデ調整、599はヘラケズリで底部に木葉痕を有する。600は唯一の上げ底の底部片で、ヘラケズリの調整である。

601～5は埋土中から出土した縄文土器である。601は、口縁部は摺糸圧痕による幾何学的文様を作り、体部は木目状摺糸文である。602は口縁部が摺糸圧痕と竹管による連続刺突文で、体部は第1種の結束ある羽状縄文が施文されるが、その間に特殊縄文帯が体上半部に3条横走する。以上2点はいずれも内面は丁寧に研磨されたものであり、胎土には多量の繊維維が包含されている^(註1)。603は隆帯の貼布と割箸状工具による刺突文である。604は細い隆帯が貼布され、隆帯に沿って上に摺糸圧痕が施される。605は縄文が口縁部まで施文される。

606～9は埋土中から出土した土師器である。606はコップ状の器種である。手握ねで作りに上げたのち、ヘラナデ調整を若干加えている。底部には木葉痕がみられる。607は口唇部が短かく「く」の字状に外反するが、608はほぼ直立する口縁をもつ土師器である。609は平底の底部片である。底部はナデ調整されている。

(鉄製品)1504が床面から出土する。釘状の製品であるが詳細は不明である。もう1点、同様のものが出土したが、小片であることと腐蝕が進んでいるため図化は省略した。

(木製品)1503が埋土下位から出土した。大部分が焼失しており詳細は不明であるが、内面は明らかに抉られており、人為的に作られたものである。材質は不明である。

遺構の時期

遺構の状態と出土遺物から、平安時代中頃と思われる。

第26号住居址

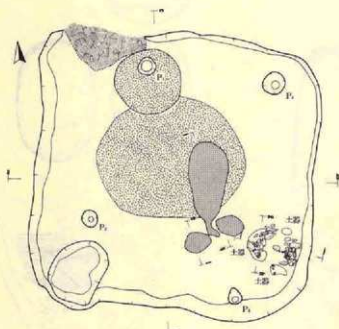
本住居址は東半が調査区外にのびているため、調査できたのは西半のみである。また、南西隅は袋状土坑の深い凹地となっており、西縁は不定形な形で溝状に深く曲りくねりながら落ち込んでいる。基盤層のⅩ層は北に向かって緩く傾斜し、北壁で急に立ち上がる。以上のような所を人為的に埋め戻し、床を貼って構築されたのが本住居址である。本住居址の下部は何かの遺構であるのかどうかは不明であり、西縁にははる溝や南西隅の凹地も人為的なものとするにはあまりにも不定形であった。よって、ここでは本住居址のみを遺構と認定した。

遺 構 (第82図、写真図版24)

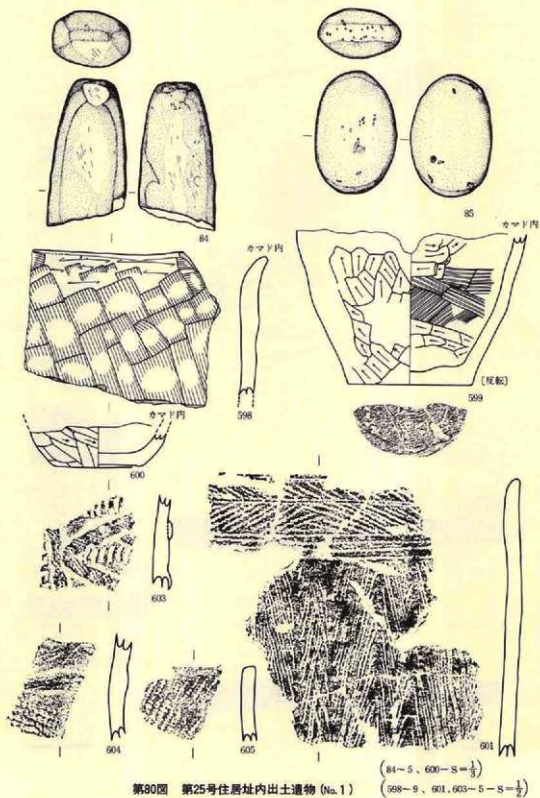
(位置) 北区の南東に位置する。緩斜面が一層ゆるくなり、ほとんど水平になる。

(重複) 第22号住居址と重複し、本住居址が切っている。

(埋土) 基本的には、上位から黒色土(耕作土)、黒色土、黒褐色土となっており、本住居址に伴う埋土は耕作土を除く2層である。埋土中には十和田 a 降下火山灰が含まれている。

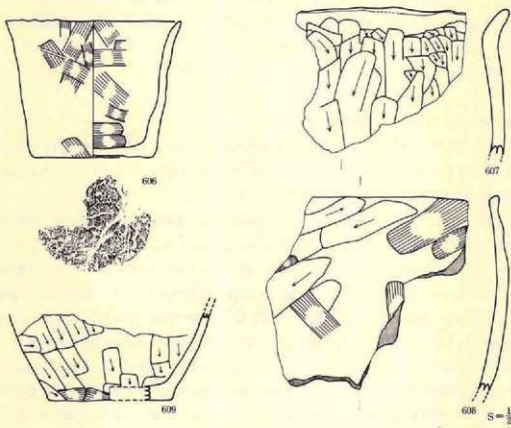
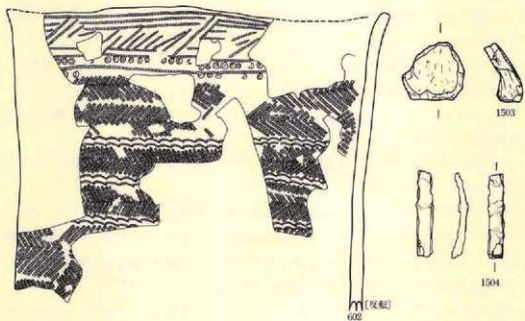


第79図 第25号住居址



第80図 第25号住居址内出土遺物 (No. 1)

(84-5, 600-S=1/3)
 (598-9, 601, 603-5-S=1/2)



第81图 第25号住居址内出土遺物 (No. 2)

(606, 609 - $S = \frac{1}{3}$)

(平面形・規模) 東半は未調査のため詳細な不明であるが、ほぼ隅丸方形で、1辺が約4.5mと推測される。

(壁) 南壁はⅩ層を15cmほど掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ち上がる。北壁は若干外反する。西壁の一部は不詳である。

(床) 黒褐色土の埋土に黒色土の貼床をしている。埋土に比してしまっているが、硬くはない。水平かつ平坦である。

(柱穴) P₁~P₆が検出された。床面からの深さは順に64・54・35・63cmである。南側には検出されていない。

(カマド) 南壁に面しているが、調査区境界線際に1端が検出されたのみであるため、規模、平面プラン等は不明である。このカマドも破壊されたものらしく、火熱を受け赤化した亜角礫が数個と土師器の破片が散乱していた。焼土は焚き口部付近に層厚5cmほどに硬く形成されており、もろい焼土がそこからせり上がるように上方へ続く。

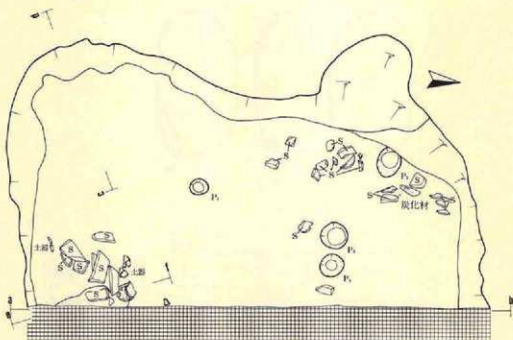
(その他) 出土遺物: 本住居址に伴う遺物は、カマド付近から出土した土師器と、北西隅に集中的に出土した礫である。この礫は板状の粘板岩とチャート質粘板岩の亜角礫で、使用痕等は見られない。礫そのものは折爪岳起源のもので、周辺から得られるものであるが、本遺構の周辺からは他に一切出土していない。

本住居址床面以下の埋土からは縄文土器片のみが出土している。

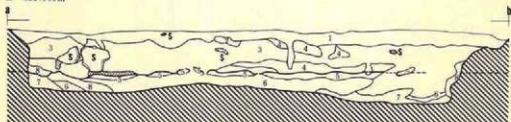
遺物 (第83~84図、写真図版110~111)

(石器) 埋土中から磨石が1点出土する。全面が磨滅しているが、とくに一面は光沢をおびるほど磨耗している。その面の中央部は凹石状に集中的な敲打痕がみられる。また、図の上下端部にも敲打痕がみられる。全面に煤が付着している。

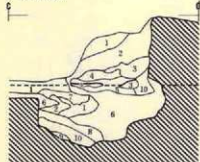
(土器・土製品) 610は口縁部付近がカマドの袖部と思われる所に倒立して埋設され、他の大部分はその周辺に散乱してあったことから、カマドを作るときの芯材として利用されたものと考えられる。また、611~2は同じく、カマド周辺から出土したものである。この3点は第24、25号住居址内から出土した土師器と、器種・器形・調整技法・胎土等まったく同様である。613は完形品のコップ形土器である。手握ねであるが胎土は緻密である。ミニチュア品というより実用品と考えられる。614~622は縄文土器である。614は無文の台付き底部の破片である。色調は灰白色で、第10号住居址から出土した360と同様な胎土・色調である。615は隅丸長方形に区画された磨消縄文である。616は細くて鋭い沈線が地文の上に施文される沈線土器である。617は薄手の口縁部片で外側には3本の平行沈線が、内側には1本の沈線がまわる。618は波状口縁で若干外反して立ち上がる。口縁部は研磨され無文となっている。619~620は



L=311.500m



L=311.700m



- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 10YR 5/ 褐色土 | 6. 10YR 5/ 黄褐色土(泥土) |
| 2. 10YR 5/ 黑褐色土 | 7. 10YR 巧/ 黒色土 |
| 3. 10YR 5/ 黄褐色土 | 8. 10YR 巧/ 暗褐色土 |
| 4. 10YR 巧/ 黒色土 | 9. 10YR 巧/ 黄褐色土(泥土) |
| 5. 10YR 巧/ 黑褐色土 | 10. 10YR 巧/ 明黄褐色土(Nh) |

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. 10YR 巧/ 黒色土 | 6. 10YR 巧/ 黑褐色土(含Nhp) |
| 2. 10YR 5/ 暗オリーブ色土(含Taa) | 7. 10YR 巧/ 褐色土 |
| 3. 10YR 巧/ 黒色土 | 8. 10YR 巧/ 暗褐色土 |
| 4. 10YR 巧/ 黄褐色土 | 9. 10YR 巧/ 黒色土 |
| 5. 10YR 巧/ 黒色土(含C) | |

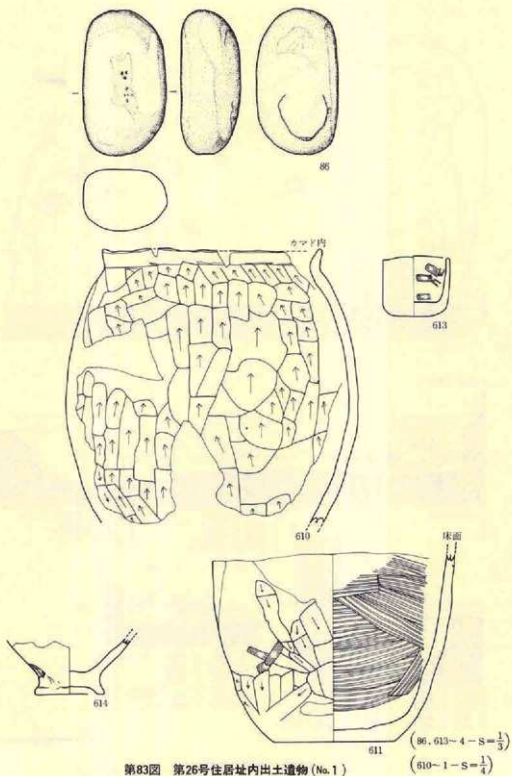
L=311.200m



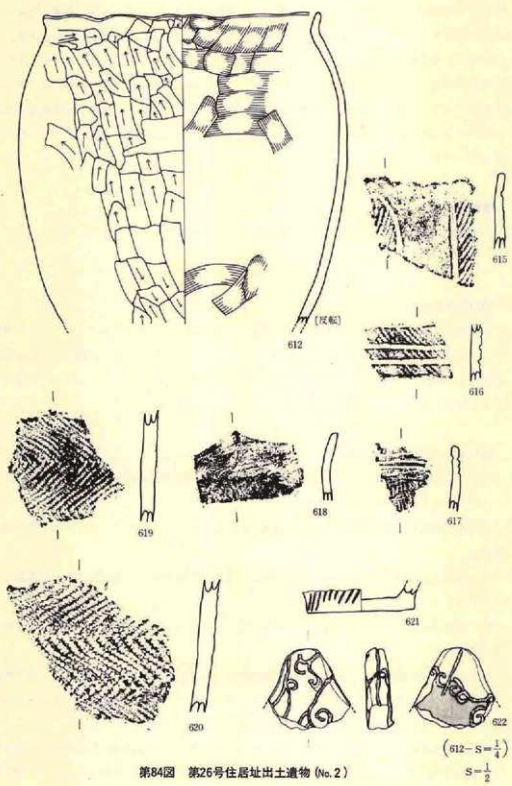
- | |
|--------------------------|
| 1. 10YR 巧/ 黑褐色土(含Nhp) |
| 2. 7.5YR 5/ 褐色土 |
| 3. 7.5YR 巧/ 暗褐色土 |
| 4. 10YR 巧/ 黄褐色土 |
| 5. 10YR 巧/ にじみ黄褐色土(含Nhp) |
| 6. 10YR 巧/ 黄褐色土(含Nhp) |
| 7. 7.5YR 5/ 褐色土(泥土) |

0 0.5 1m

第82図 第26号住居址



第83図 第26号住居址内出土遺物 (No. 1)



第84图 第26号住居址出土遺物 (No. 2)

結束第1種の羽状縄文をもつ体部片である。ともに繊維を含んでいる。621は平底の底部片で、底部は研磨されている。622は三角形の土版と考えられるが、版状土隅の可能性もある。全面に細い沈線を用いて渦巻を主にした曲線文が軸文される。色調は暗赤色である。他に作図は省略したが縄文のみの体部破片が若干出土した。これら縄文土器は、明瞭に本住居址に共伴するものではなく、厳密には遺構外遺物の中で取り扱うのが妥当と思われるが、出土地点が限定されているため、第24・25号住居址の埋土内から出土した縄文土器片と同様に、ここでとり上げたものである。

遺構の時期

本住居址はカマド付近から出土した土師器によって、平安時代中頃と考えられる。

第27号住居址

本住居址は東半が調査区外にあるため、西半のみの調査となった。埋土は浅く、しかも畑地として利用されていたため、内包する遺物はほとんどない。しかし、第2次調査中に東壁が想定される位置から、遊んでいた幼児が土師器と思われる土器を掘り出した。手にとって確認することはできなかったが、上半部を欠損した甕のようであった。

遺構 (第85図、写真図版25)

(位置) 北区南東端にあり、沢まで約20mである。北隣りは第26号住居址である。

(埋土) 黒色土(耕作土)の単層である。

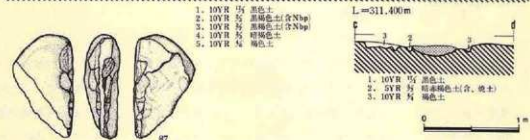
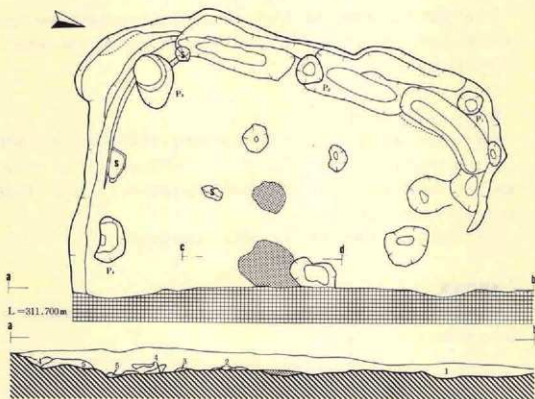
(平面形・規模) 詳細は不明であるが、周溝と柱穴配置から、1辺が約4mの隅丸方形が推測される。

(壁) 掘り込みが浅く、10~15cmの壁高である。北壁は不明である。検出された壁も直角に立ち上がるものはない。

(床) Ⅱ層を床面としている。ほぼ水平ではあるが凹凸がある。これは耕作や木根による攪乱等と思われる。

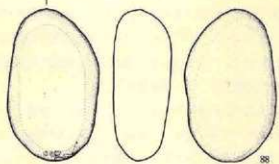
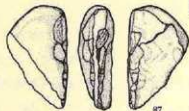
(柱穴) $P_1 \sim P_4$ を検出する。床面からの深さは P_1 から順に41・64・50・62cmである。他に西壁に平行するように皿状の凹が4つ検出された。いずれも深さ5~10cmである。住居址中央部付近の地床炉わきに、やや斜めの柱穴状の土坑がある。これは木根痕と思われる。

(炉) カマドは検出されず、地床炉が住居址の中央部と推定される調査区外郭線上に検出された。規模は直径50cm・厚さ10cmの焼土がレンズ状に形成されている。平面プランは、やや不整



1. 10YR 5/1 赤色土
2. 10YR 5/2 赤褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/3 赤褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/4 暗褐色土
5. 10YR 5/5 褐色土

1. 10YR 5/1 赤色土
2. 5YR 5/1 暗赤褐色土(含、燒土)
3. 10YR 5/1 褐色土



第85図 第27号住居址及び出土遺物

$S = \frac{1}{3}$
 $(623-S = \frac{1}{2})$

形な円形である。この炉の西側に小さく薄い焼土が形成されている。

(その他) 周溝：とくに西壁際に周溝がまわる。この周溝は南北壁では不明瞭になるが、全周すると推定される。周溝は柱間に作られており、柱を立てたのち周溝を作っている。床面からの深さは10～13cm程度である。

遺物 (第85図、写真図版111)

(石器) すべて埋土中から出土したものである。87は半円状扁平打製石器の破片である。磨耗している面に両面加工によって刃部を作り出しているが、刃部は直線部に限られる。刃部には敲打痕とも、磨耗痕ともとれる使用痕がある。88は側面には磨耗痕が残り、図示した上下の順部には僅かな敲打痕がみられる。

(土器) 埋土中から縄文土器1片が出土する。複々節斜縄文が施文される。

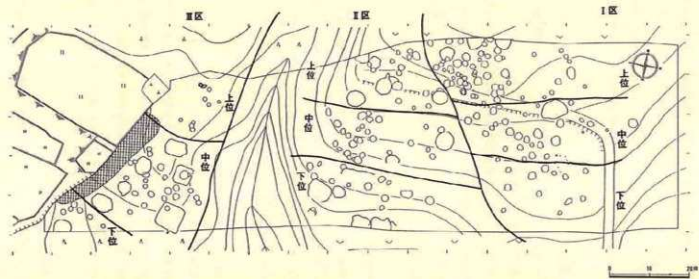
遺構の時期

本遺構に伴う遺物は出土していないため、時期は不明である。しかし、遺構の状態から、第24～6号住居址より新しいと推定される。

〔3〕土坑と出土遺物

主として、住居址内から検出されたいわゆる柱状土坑や皿状土坑を除いて、201基の土坑が検出された。検出された土坑にはその分布において片寄りがみられる。したがって、土坑の集中区域を次のように大別し位置を表わすことにした。北区は西辺から北東へ向かう微高の尾根上に位置するものをⅠ区、西辺から南東に向かう微高尾根に位置するものをⅡ区、南区をⅢ区とした。また、Ⅰ区は第23号住居址から東側(標高315m以下)を下位、概ね標高318m以上を上位とし、その間を中位とした。Ⅱ区は第8号住居址から東側を下位、第6号住居址から西を上位とし、その間を中位とした。Ⅲ区は第10号住居址から東側を下位、第1号住居址から西を上位とし、その間を中位とした。

土坑からの遺物の出土は少なく、また、確実に共伴し時期を決定できる土坑は少ないため、時期別の区分をせずに、原則として北側から南に向かって順番を付し遺構名とした。形態は断面で観察される形でもって表現することを原則とした。



第86図 土坑の配置と位置区分図

第1号土坑 (第87図、写真図版26)

(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形・規模) 開口部径約110cmの円形である。断面形はピーカー状であるが、下位の壁に一部挟りが入ることから、フラスコ状土坑だったと推測される。(壁) 下位は内彎しながら立ち上がり、中位から外反する。(底面) X層を底面とする。水平であるが、やや凹凸がある。検出面からの深さは約45cmである。(遺物) なし。

第2号土坑 (第87図、写真図版26)

(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土と暗褐色土の2層に大別され、暗褐色土は南部浮石粒と砂の混入の多少によって2分される。黒褐色土の上位に粒径10mm大の南部浮石粒が混入する。(平・断面形・規模) 底面径95cmの円形で、断面形はピーカー状である。(壁) 開口部付近は崩壊が進み1ヵ所は筒状に崩壊する。下位は袋状に内彎して立ち上がる。(底面) X層を僅かに掘り込んで作る。中央部がやや低くなり、平坦である。検出面からの深さは55cmである。(遺物) なし。

第3号土坑 (第87図、写真図版26)

(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 下位の埋土はほぼ水平に堆積し、斜面上位側の一部に埋土2の流れ込みの堆積が見られるほかは、黒褐色土が大部分を占める。(平・断面形・規模) 底面径約85cmの円形である。断面形はピーカー状である。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X層を僅かに掘り込んで作る。硬くしまっている。(遺物) なし。

第4号土坑 (第87図、写真図版27)

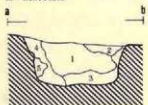
(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土と黒褐色土の2層に分けられる。どちらにも南部浮石粒が含まれる。(平・断面形・規模) 東側に木根痕があり、開口部付近は不整形である。底面形ではほぼ75cmの円形であり、断面形は楕円状である。(壁) 東壁の上位は攪乱され不明であるが、他は開口部付近まで、ほぼ直線的に立ち上がる。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約70cmである。(遺物) なし。

第5号土坑 (第88図、写真図版27)

(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 黒褐色土の単層であるが、粘性、南部浮石粒の混入等によって3層に細分される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形・規模) 開口部径約135cmの円形である。断面形は盤状である。(壁) 斜面の上位側は直線的に立ち上がり、下

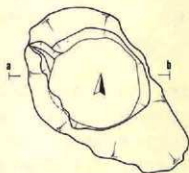


L=313.443m

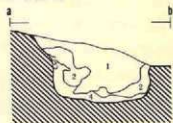


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 暗褐色土
5. 10YR 5/ 暗褐色土

第1号土坑

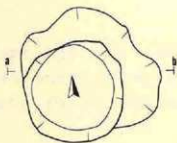


L=313.793m

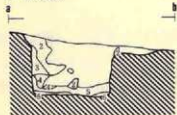


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/ 暗褐色土
3. 10YR 5/ 黄褐色土
4. 10YR 5/ 暗褐色土

第2号土坑

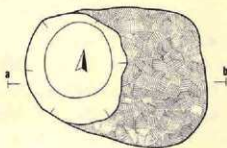


L=313.893m

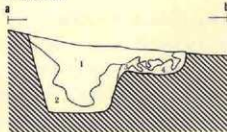


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/ 黄褐色土
4. 10YR 5/ 褐色土
5. 10YR 5/ 暗褐色土
6. 10YR 5/ 黑褐色土

第3号土坑

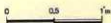


L=313.193m



1. 10YR 5/ 黑褐色土
2. 10YR 5/ 黑褐色土
3. 10YR 5/ 黑褐色土
4. 10YR 5/ 黄褐色土

第4号土坑



第87图 第1~4号土坑

位はなだらかに立ち上がる。上部の一部は耕作地造成に伴って削平を受けた可能性がある。

〔底面〕Ⅱ層を5～6cm掘り込んで作っており、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約35cmである。(遺物)なし。

第6号土坑 (第88図、第131図、写真図版27、111)

〔位置〕Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(検出状況)Ⅴ層下位面で検出されたが、平面プランも不整形で黒色土や褐色土等の混土である。(重複)遺構との重複はないが、北と東の2ヶ所が木根によって破壊されている。北は風倒木痕であるが、東は木根痕ではあるが風倒木かどうかは不明である。(埋土)上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土の4層に大別はされるが、その堆積は一部擾乱を受け層の逆転もみられる。(平・断面形、規模)詳細は不明であるが、底面径約155cmの円形と推測される。断面形はピーカー状を呈する。(壁)西～北壁に残存する壁はほぼ直角に立ち上がるが、一部は内傾して立ち上がる。(底面)Ⅹ層を底面とし、中央部が底くなるレンズ状で、平坦である。検出面からの深さは約70cmである。(遺物)埋土中から多数の縄文土器片が出土した。624～7は沈線文、628は磨消縄文である。625は赤い彩色土器である。629は小型の底部破片であり、630は下が体下端部であることから、小型の鉢と思われる。また、図示はしなかったが、他に縄文のみの鉢の体部片が多量に出土した。

第7号土坑 (第88図、写真図版28)

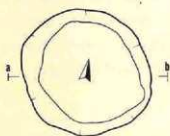
〔位置〕Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・褐色土・黒色土・黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約160cmの円形で、断面形はフラスコ状である。(壁)頭部から下位はⅩ層で内傾して立ち上がる。(底面)Ⅹ層で水平かつ平坦である。検出面からの深さは70cmである。(遺物)なし。

第8号土坑 (第88図、写真図版28)

〔位置〕Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)底面径約130cmの円形で、断面形はフラスコ状である。(壁)頭部から下はⅩ層でほぼ直線的に内傾し立ち上がる。上位は崩壊が進み、大きく外反する。(底面)Ⅹ層を底面とし水平かつ平坦である。強くしまっている。検出面からの深さは約80cmである。(遺物)なし。

第9号土坑 (第89図、写真図版28)

〔位置〕Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層



L=313,200m

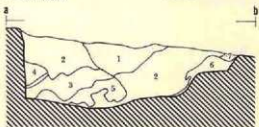


1. 10YR 与 黄褐色土
2. 10YR 与 黄褐色土(含Nhp)
3. 10YR 与 黄褐色土

第5号土坑

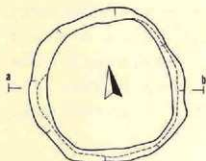


L=314,500m

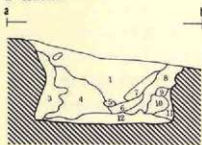


1. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
3. 10YR 与 暗褐色土(含Nhp)
4. 10YR 与 褐色土(含Nhp)
5. 10YR 与 黑褐色土
6. 10YR 与 黄褐色土
7. 10YR 与 黄褐色土

第6号土坑

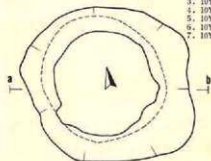


L=314,000m

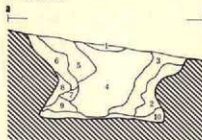


1. 10YR 与 黄褐色土(含Nhp)
2. 10YR 与 红土(含Nhp)
3. 10YR 与 褐色土(含Nhp)
4. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
5. 10YR 与 黄褐色土
6. 10YR 与 黑色土
7. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
8. 10YR 与 黑褐色土
9. 10YR 与 黑褐色土
10. 10YR 与 黑褐色土
11. 10YR 与 黄褐色土(含Nhp)
12. 10YR 与 黑色土

第7号土坑



L=314,700m



1. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黄褐色土(含Nhp)
3. 10YR 与 暗褐色土(含Nhp)
4. 10YR 与 暗褐色土(含Nhp)
5. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
6. 10YR 与 黄褐色土
7. 10YR 与 褐色土
8. 10YR 与 暗褐色土
9. 10YR 与 黑褐色土
10. 10YR 与 黑褐色土

第8号土坑

第88图 第5~8号土坑

に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)底面径約180cmの円形である。断面形は一部崩壊はしているがフラスコ状である。(壁)北壁は崩落しており、底面からはほぼ直角に立ち上がる。他の壁は鋭く内傾し直線的に上位の頸部に達する。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦であり、良くしまっている。検出面からの深さは約90cmである。(遺物)なし。

第10号土坑(第89図、写真図版29)

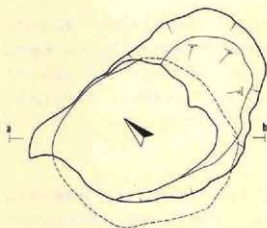
(位置)Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。木根痕状に凹凸がみられる堆積ではあるが、自然堆積と考えられる。埋土1と埋土7は明瞭に分かれる。(平・断面形、規模)開口部で直径約135cmの円形で、断面形はピーカー状である。(壁)北壁は袋状に内彎して立ち上がりフラスコ状であるが、他は直立し上位では外反する。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦で良くしまっている。検出面からの深さは約40cmである。(遺物)なし。

第11号土坑(第89図、写真図版29)

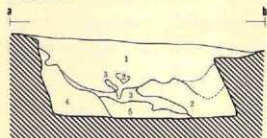
(位置)Ⅰ区下位南側斜面に位置する。(埋土)埋土の大半を占める埋土1は南部浮石粒を含む黒色土であるが、斜面下位側(断面図右側)では暗褐色土との混土である。埋土3は埋土1との混土である。(平・断面形、規模)北側は攪乱されており詳細は不明であるが、40×60cmほどの楕円形と思われる。断面形は盤状である。(壁)Ⅳ層の砂質シルトではあるが、ほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅳ層上位面を底面とする。中央部が底くなる皿状である。検出面からの深さは45cmほどである。(遺物)なし。

第12号土坑(第89図、写真図版29)

(位置)Ⅰ区下位北側斜面に位置する。(埋土)上位は耕作による攪乱を受けている。全体として、斜面上位側からの流れ込みを窺わせるが、人為的な埋め戻しの可能性もある。埋土2と埋土8、埋土8と埋土1はそれぞれ漸移する。(平・断面形、規模)開口部径約125cmの円形である。断面形はピーカー状である。(壁)壁の一部を構成する南部浮石層は崩壊が著しく、その部分だけ抉られたように凹凸ほかは、ほとんど直角に立ち上がる。(底面)Ⅹ層を20cm以上掘り込んで底面としている。水平かつ平坦である。検出面からの深さは約65cmほどである。(遺物)なし。

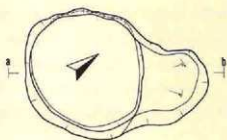


L=314,800m



1. 10YR 弱 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 弱 暗褐色土(含Nbp)
3. 10YR 弱 褐色土
4. 10YR 弱 黑褐色土(含Nbp)
5. 10YR 弱 暗褐色土

第9号土坑

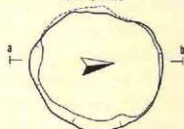


L=314,600m

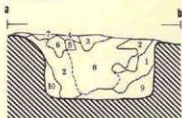


1. 10YR 弱 黑褐色土
2. 10YR 弱 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 弱 黄褐色土
4. 10YR 弱 暗褐色土(黏土)
5. 10YR 弱 黄褐色土
6. 10YR 弱 暗褐色土
7. 10YR 弱 黑褐色土

第10号土坑



L=314,603m



1. 10YR 弱 黑褐色土
2. 10YR 弱 黑褐色土
3. 10YR 弱 黄褐色土
4. 10YR 弱 暗褐色土(含Nbp)
5. 10YR 弱 褐色土(含Nbp)
6. 10YR 弱 黑褐色土
7. 10YR 弱 暗褐色土
8. 10YR 弱 黑褐色土(含Nbp)
9. 10YR 弱 黄褐色土
10. 10YR 弱 黄褐色土(含Nbp)

第12号土坑

L=314,600m



1. 10YR 弱 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 弱 暗褐色土(含、黏土)
3. 10YR 弱 褐色土

第11号土坑

0 0.5 1m

第89图 第9~12号土坑

第13号土坑 (第90図、写真図版30)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約120cmの円形である。断面形はピーカー状である。(壁) 北壁の一部が上位で外反し、南壁の一部は内彎して立ち上がりフラスコ状を呈するほかは、ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X層を底面とし、緩く大きく波うつがほぼ水平を保つ。検出面からの深さは約58cmである。(遺物) なし。

第14号土坑 (第90図、写真図版30)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・明黄褐色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 底面径約170cmの円形である。断面形はフラスコ状である。(壁) 頭部から下位はX層を掘り込んで作っており、内傾して直線的に立ち上がる。北壁は一部抉れるように内彎する。これは崩落によるものと思われる。(底面) X層を底面としている。水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約80cmである。(遺物) なし。

第15号土坑 (第90図、写真図版30)

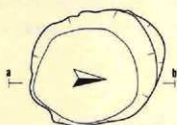
(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土と暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 底部径約80cmのほぼ円形である。断面形はピーカー状である。(壁) 上位は崩壊が著しく、全体として外反ぎみに立ち上がる。(底面) X層を底面とし、斜面下位側が低くなるが、平坦で良くしまっている。検出面からの深さは45cmである。(遺物) なし。

第16号土坑 (第90図、写真図版31)

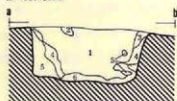
(位置) I区下位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約100cmのほぼ円形である。断面形はピーカー状である。(壁) V層であるが崩壊が進まず、ほぼ直角に立ち上がる。(底面) V層を5~10cmほど掘り込んで底面としている。やや斜面下位側が低くなるが、全体としてはほぼ水平であり、平坦である。検出面からの深さは約38cmである。(遺物) なし。

第17号土坑 (第91図、写真図版31)

(位置) I区中位北斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土の3層に大別される。木根によって多少の攪乱はみられるが、自然堆積状況を呈する。(平・断面形、

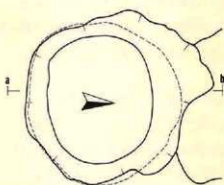


L=315.200m

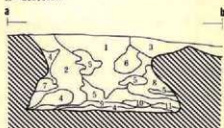


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/5 黑褐色土
4. 10YR 5/5 黑褐色土
5. 10YR 5/4 褐色土
6. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)

第13号土坑

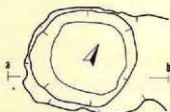


L=315.100m

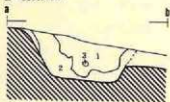


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/5 黑褐色土
4. 10YR 5/5 褐色土
5. 10YR 5/5 黄褐色土
6. 10YR 5/5 暗黄褐色土(Nb)
7. 10YR 5/5 褐色土
8. 10YR 5/5 黑褐色土
9. 10YR 5/5 黑褐色土
10. 10YR 5/5 黑褐色土
11. 10YR 5/5 黄褐色土(Nb)

第14号土坑

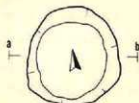


L=315.100m

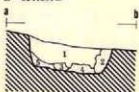


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/5 暗褐色土
3. 10YR 5/5 黑褐色土

第15号土坑

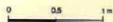


L=314.800m



1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/5 棕色土
3. 10YR 5/5 暗黄褐色土(Nhp)
4. 10YR 5/5 褐色土(含Nhp)
5. 10YR 5/5 黄褐色土(含Nhp)

第16号土坑



第90图 第13~16号土坑

規模) 開口部径約 220 cm の円形で、断面形はピーカー状である。(壁) 南西壁で最大壁高 55 cm を測る。ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X 層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約 55 cm である。(遺物) なし。

第18号土坑 (第91図、写真図版31)

(位置) I 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 斜面上位側の壁際に暗褐色土の流れ込みがみられるほかは黒褐色土のはほぼ単層であるが、中位に砂が薄くレンズ状に堆積する。(平・断面形、規模) 開口部径約 55 cm のやや不整な円形である。断面形はピーカー状である。(壁) 斜面上位側の壁はほぼ直角に立ち上がるが、下位側は外反する。(底面) Ⅵ層を底面とし中央部が僅かに低くなるが平坦である。検出面からの深さは約 25 cm である。(遺物) なし。

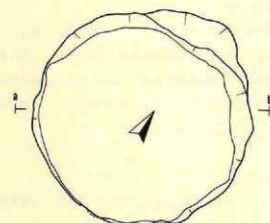
第19号土坑 (第91図、第131図、写真図版32)

(位置) I 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土・黒色土の3層に大別されるが、いずれも漸移する。埋土1には粉炭が集中的に混入する。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 60 cm のほぼ円形で、断面形はピーカー状である。(壁) 壁高は 15 cm ほどで浅いが、ほぼ直角に立ち上がる。(底面) Ⅵ層を底面としている。水平ではあるが凹凸がみられる。(遺物) 埋土中から、631の縄文のみの土器片が1片出土した。

第20号土坑 (第91図、第131図、写真図版32、111)

(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 最上位の埋土は赤褐色の焼土がブロック状に含まれる。また、土器片や暗褐色土も含まれる。その下の埋土は黒褐色土と暗褐色土に大別される。黒褐色土は更に3層に細分されるが、葉離線は不明瞭である。黒褐色土の中央部には南部浮石粒が集中的に混入する。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 北にややふくらむがほぼ円形である。開口部径 150 cm、底面径 80 cm であるが、断面形はピーカー状である。

(壁) はほぼ直角に立ち上がる。(底面) X 層を 7 cm ほど掘り込んで作っている。水平であるが僅かに凹凸がみられる。検出面からの深さは約 63 cm である。(遺物) 埋土中位から 632～3の縄文土器片が出土した。また、上位から地文のみの体部片3個が出土したが図は省略した。632は緩やかではあるが、「く」の字状に外反する口縁部をもち、体上半部が張り出す。口縁部は無文、体部は単節斜縄文が施文される。煤が付着する。633は口縁部まで縄文が施文される口縁部破片である。632は時期を推定できる資料ではあるが、本土坑に共伴するとはいいがたい。よって時期は不明である。

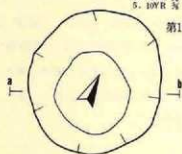


L=315.983m

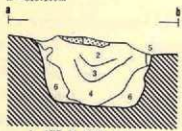


1. 10Y R 5/6 暗褐色土(含Nbp)
2. 10Y R 5/6 黑褐色土
3. 10Y R 5/6 黑褐色土
4. 5Y R 5/6 灰マリアーア
5. 10Y R 5/6 黄褐色土

第17号土坑

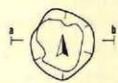


L=316.100m

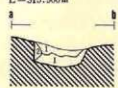


1. 5Y R 5/6 赤褐色土(變土)
2. 10Y R 5/6 黑褐色土(含Nbp)
3. 10Y R 5/6 黑褐色土(含Nbp)
4. 10Y R 5/6 黑褐色土(含Nbp)
5. 10Y R 5/6 紅褐色土
6. 10Y R 5/6 暗褐色土

第20号土坑



L=315.900m



1. 10Y R 5/6 黑褐色土
2. 10Y R 5/6 暗褐色土

第18号土坑

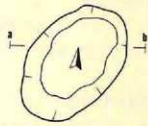


L=315.700m

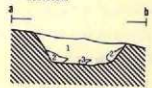


1. 10Y R 5/6 黑褐色土(含C)
2. 10Y R 5/6 暗褐色土(含Nbp)
3. 10Y R 5/6 黑褐色土(含Nbp)

第19号土坑

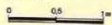


L=316.100m



1. 10Y R 5/6 黑褐色土(含C)
2. 10Y R 5/6 暗褐色土(含Nbp)
3. 10Y R 5/6 褐色土

第21号土坑



第91图 第17~21号土坑

第21号土坑 (第91図、第131図、写真図版32、111)

(位置) I区中位北側斜面に位置する。(埋土) 下位に褐色土がブロック状に入るほかは、黒褐色土の単層である。全体に粉炭が混入する。上位には南部浮石粒が若干混入する。(平・断面形、規模) 長軸100cm、短軸60cmほどの楕円形で、断面形は盤状である。(壁) 斜面上位側で外反するが、下位側は直立する。(底面) M層を底面とし、水平かつ平坦である。(遺物) 埋土中から89の磨石1点が出土した。側縁の一部に敲打痕がみられる。

第22号土坑 (第92図、第132図、写真図版33、112)

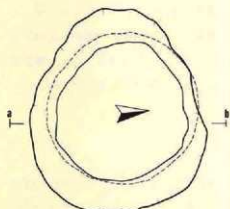
(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土・褐色土・黒色土・暗褐色土の4層に大別される。しかし、堆積状況は下位の埋土10~12とそれより上位の埋土とは分けられる。したがって、廃棄された土坑を二次使用したものか、又は、新しく土坑を作っている。上位の土坑の堆積は自然堆積状況を示めている。(平・断面形、規模) 単独の土坑と考えて半截したため詳細は不明であるが、開口部径は180×210cmの楕円形であるが、底面は約160cmの円形である。下位の土坑はフラスコ状である。(壁) 下位の壁は内傾して立ち上がる。上位はやや外反する。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。二基の重複と考えた場合、上位の土坑の底面にあたる面は、凹凸があるもののほぼ水平である。貼床のように硬く叩いているわけではない。検出面からの深さは上位面で約60cm、下位面で約86cmを測る。(遺物) 上位の底面上から634の深鉢が倒立の状態出土した。器高43cm、開口部径33.5cmの大型深鉢である。底部は破損している。(その他) 以上のことから、本土坑は二基の土坑の重複も考えられるが、その平面プランは把握できなかったため、二次使用されたものと考えておく。また、上位の堆積を丁寧に観察したが、人為堆積とは認められなかった。

第23号土坑 (第92図、写真図版33)

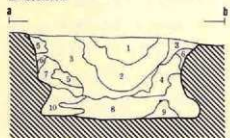
(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部は大きく外反するが、頸部径150cm・底面径180cmの円形であり、断面形はフラスコ状である。(壁) 下位の壁は20cm以上もX層を掘りこんでいるが、斜面の下位側では壁の剥落土が埋土中にみられる。西壁の下位は鋭く内傾して立ち上がる。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約80cmである。(遺物) なし。

第24号土坑 (第92図、写真図版33)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・黄褐色土の3層

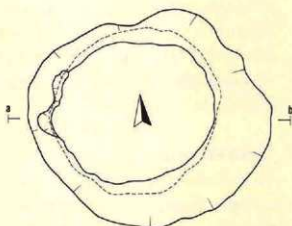


L=316.000m

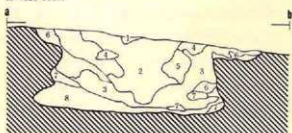


1. 7.5YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 7.5YR 5/4 褐色土(含Nbp)
3. 7.5YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
5. 10YR 5/4 褐色土
6. 10YR 5/4 暗褐色土
7. 10YR 5/4 暗褐色土
8. 10YR 5/4 暗褐色土(含Nbp)
9. 10YR 5/4 黑褐色土
10. 10YR 5/4 褐色土(含Nbp)

第22号土坑

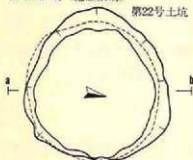


L=315.593m



1. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/4 褐色土(含Nbp)
5. 10YR 5/4 暗褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/4 暗褐色土(含Nbp)
7. 10YR 5/4 黄褐色土
8. 10YR 5/4 暗褐色土

第23号土坑

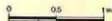


L=315.500m



1. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/4 棕色、黄褐色土
5. 10YR 5/4 黑褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/4 黄褐色土(含Nbp)
7. 10YR 5/4 黄褐色土

第24号土坑



第92图 第22~24号土坑

に大別される。堆積状況は一部に層の逆転があること、黒色土中にふい黄褐色土がブロック状に混入すること等から、人為的な埋め戻しの可能性もある。(平・断面形、規模)開口部径約150cmの円形である。断面形はフラスコ状である。(壁)北壁の一部は罫層を欠く。頸部までは内傾し直線的に立ち上がる。(底面)Ⅹ層を底面とし水平かつ平坦である。検出面からの深さは50cmである。(遺物)なし。

第25号土坑(第93図、写真図版34)

(位置)Ⅰ区中位南側斜面に位置する。(埋土)下位には黒褐色土が凹凸をもちながらもほぼ水平に堆積し人為的な埋め戻しも窺わせる。ただし、埋土は軟らかく、貼床のように硬く叩いたものではない。中・上位はほとんどが黒色土であり、自然堆積状況を呈する。斜面下位側の埋土中には壁からの崩落土が観察される。(平・断面形、規模)開口部及び頸部は崩壊が進んでいるため不整形であるが、底面は径165cmの円形である。断面はフラスコ状を呈する。(壁)内傾する角度は一様ではない。断面図左端が、より原形をとどめていると思われる。(底面)Ⅹ層を底面とし水平かつ平坦である。硬くしまっている。検出面からの深さは75cmである。(遺物)なし。

第26号土坑(第93図、写真図版34)

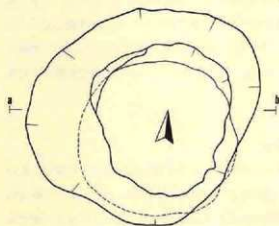
(位置)Ⅰ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土と黒褐色土の2層に大別される。埋土3・4はブロック状となって混入したものである。(平・断面形、規模)開口部径約100cmの円形で、断面は皿状である。(壁)全体に外反ぎみに立ち上がる。特に北側の1部は壁と底面の境が不明瞭にだらだらと立ち上がる。(底面)Ⅵ層上位面を若干掘り込んで作られ、僅かに北側が低くなる。検出面からの深さは32cmである。(遺物)なし。

第27号土坑(第93図、写真図版34)

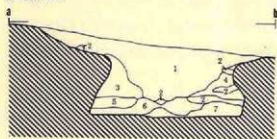
(位置)Ⅰ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約140cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)僅かに内傾し、下位は若干抉られてふくらむ。(底面)Ⅹ層を底面とししまりもよくほぼ水平であるが、凹凸をもつ。検出面からの深さは50cmである。(遺物)なし。

第28号土坑(第93図、第132図、写真図版35、112)

(位置)Ⅰ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位が削平されているため詳細は不明である

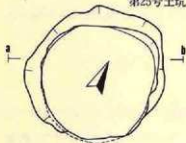


L.=316.000m

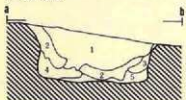


1. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 与 暗黄褐色土
3. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
4. 10YR 与 褐色土
5. 10YR 与 黑褐色土
6. 10YR 与 黑褐色土
7. 10YR 与 黑褐色土

第25号土坑

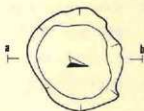


L.=315.600m

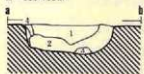


1. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黑褐色土
3. 10YR 与 褐色土
4. 10YR 与 褐色土
5. 10YR 与 黑褐色土

第27号土坑

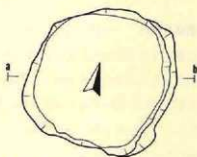


L.=315.700m

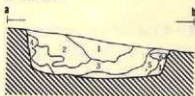


1. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
3. 10YR 与 暗黄褐色土
4. 10YR 与 黄褐色土

第26号土坑

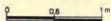


L.=315.800m



1. 10YR 与 褐色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黑褐色土
3. 10YR 与 暗褐色土
4. 10YR 与 黄褐色土
5. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
6. 10YR 与 黑褐色土

第28号土坑



第93图 第25~28号土坑

が、褐色土と黒褐色土が一部逆転しているところがあるが、自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約150cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) ほぼ直に立ち上がる。(底面) Ⅱ層の上位を底面とする。僅かに中央部が凹むがほぼ水平で平坦である。(遺物) 底面直上から635の深鉢の破片が出土した。口縁部は破損している。単面斜縄文を横位に施文する。器表面に煤が付着している。

第29号土坑 (第94図、第132図、写真図版35)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 中位から下は黒褐色土と褐色土が交互に堆積しており、人為的な埋め戻しも考えられる。上位はほぼ自然堆積と考えられる。(平・断面形、規模) 開口部はやや不整形に広がるが、頸部径約150cmの円形である。断面はフラスコ状である。(壁) 下位の一部は鋭く抉られる。側壁は不整形な凹凸を示して立ち上がる。(底面) X層を底面とし水平かつ平坦である。(遺物) 埋土中から破片数にして50片以上の土器片が出土したが、637を除きすべて縄文のみの体部片である。637は口縁部内側には1本の隆帯が貼付されている。637は沈線文である。

第30号土坑 (第94図、写真図版35)

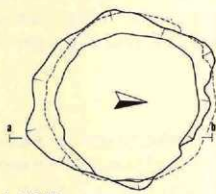
(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。いずれにも粒径5~10mmの南部浮石粒が混入する。自然堆積状況を呈する(平・断面形、規模) 開口部径約120cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X層上位面を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは40cmである。(遺物) なし。

第31号土坑 (第94図、写真図版36)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径135cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) 斜面上位側は内彎し、下位側は外反するように立ち上がる。壁と底面の境は丸くなり不明瞭である。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。締まりもよい。(遺物) なし。

第32号土坑 (第94図、写真図版36)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 中位から下の堆積は一部に層の逆転があること、堆積が水平化すること等から、人為的な埋め戻しも考えられる。上位は自然堆積状況を呈

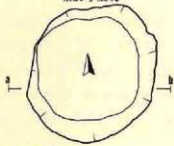


L=315.800m

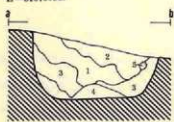


- 1. 10YR 弱 黄褐色土(含Nhp)
- 2. 10YR 弱 黑色土(含Nhp)
- 3. 10YR 弱 黄褐色土(含Nhp)
- 4. 10YR 弱 黄褐色土
- 5. 10YR 弱 褐色土(含Nhp)
- 6. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
- 7. 10YR 弱 黄褐色土(Nh)

第29号土坑

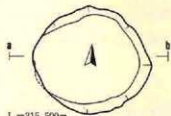


L=316.000m

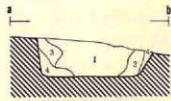


- 1. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
- 2. 10YR 弱 黄褐色土(含Nhp)
- 3. 10YR 弱 暗褐色土(含Nhp)
- 4. 10YR 弱 褐色土(含Nhp)
- 5. 10YR 弱 黄褐色土(含Nhp)
- 6. 10YR 弱 黄褐色土

第31号土坑

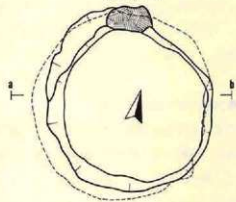


L=315.500m

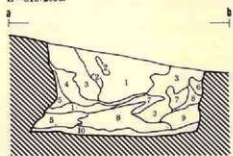


- 1. 10YR 弱 黑色土(含Nhp)
- 2. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
- 3. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
- 4. 10YR 弱 褐色土(含Nhp)

第30号土坑

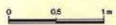


L=316.200m



- 1. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
- 2. 10YR 弱 黄褐色土
- 3. 10YR 弱 褐色土(含Nhp)
- 4. 10YR 弱 褐色土(含Nhp)
- 5. 10YR 弱 黄褐色土
- 6. 10YR 弱 黄褐色土(含Nhp)
- 7. 10YR 弱 明黄褐色土(含Nhp)
- 8. 10YR 弱 棕色(含Nhp)
- 9. 10YR 弱 暗黄褐色土
- 10. 10YR 弱 黄褐色土

第32号土坑



第94图 第29~32号土坑

する。(平・断面形、規模) 開口部径 170 cm の円形で、断面はフラスコ状を呈する。(壁) 斜面上位側は底面が広がり側壁も内傾するが、下位側は凹凸をもちながら立ち上がる。(底面) X 層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約 85 cm である。(遺物) なし。

第33号土坑 (第95図、写真図版36)

(位置) I 区中位南側斜面に位置する。(埋土) 黒褐色土と黄褐色土に大別される。黒褐色土は南部浮石の混入率や色調によって二分されるが、上位では漸移し不明瞭となる。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 115 cm の円形で、断面はフラスコ状である。

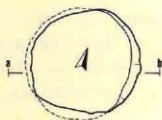
(壁) 全体として緩く内傾するが、部分的には大きく内傾する。斜面上位側に 2 個 (P_1P_2) 下位側に 2 個 (P_3P_4) の小穴がある。規模はすべて径約 5 cm、奥行き 5 cm で、横位につく。 P_1 、 P_2 は縦に並び、それぞれ底面から 20 cm、8 cm の高さにある。 P_3P_4 はどちらも 3 cm の高さである。 P_2 、 P_3 の間隔は 22 cm である。 P_1 又は P_2 と P_3 を結ぶと、土坑の中央部を通過する。用途不明である。(底面) X 層を底面とし、平坦ではあるが中央部が低くなる。検出面からの深さは約 45 cm である。(遺物) なし。

第34号土坑 (第95図、写真図版37)

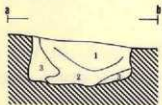
(位置) I 区中位南側斜面に位置する。(埋土) 黒褐色土と褐色土の 2 層に大別される。(平・断面形、規模) 開口部径約 110 cm の円形で、断面はピーカー状である。(壁) はほぼ直に立ち上がる。西壁に 4 個の小穴が横に並び、いずれも径約 3 cm、奥行き 5 ~ 8 cm でやや上向きである。南側寄りの方の穴のみ底面から約 18 cm の高さにあるが、他はすべて 8 cm の高さに並び、それぞれの間隔は 28 cm、43 cm、15 cm ほどである。用途は不明である。(底面) X 層を底面とし、水平かつ平坦でよくしまっている。(遺物) なし。

第35号土坑 (第95図、写真図版37)

(位置) I 区中位南側斜面に位置する。(埋土) 暗褐色土の単層である。(平・断面形、規模) 底面径約 80 cm の円形で、断面は残存する斜面上位側でフラスコ状を呈する。(壁) 耕作地造成に伴い大部分が削平されている。斜面上位側が内傾して立ち上がる。最大壁高約 30 cm を測る。(底面) X 層を僅かに掘り込んで作られ、中央部がやや低くなる。平坦でしまりもよい。(遺物) なし。

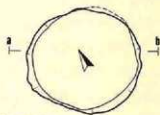


L=316.200m

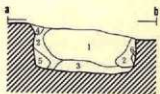


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/5 黄褐色土(含Nbp)

第33号土坑

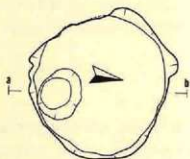


L=316.200m

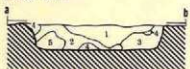


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/5 红棕色土(含Nbp)
3. 10YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/5 暗黄褐色土(含Nbp)
5. 7.5YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/5 黄褐色土

第34号土坑

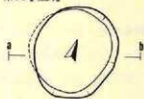


L=316.200m

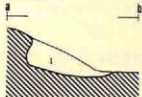


1. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/5 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/5 红棕色土(含Nbp)
5. 10YR 5/5 红棕色土

第36号土坑

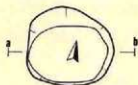


L=316.800m

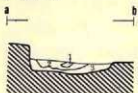


1. 10YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)

第35号土坑



L=317.200m



1. 10YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/5 黑褐色土
3. 10YR 5/5 暗褐色土(含Nbp)

第37号土坑

0 0.5 1m

第95图 第33~37号土坑

第36号土坑 (第95図、写真図版37)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。主に黒褐色土中にふい黄褐色土が硬いブロック状で混入する。(平・断面形、規模) 開口部径約150cmの円形で、断面は盤状である。(壁) ほとんどが覆層であるが崩壊はみられず、直角に立ち上がる。(底面) II層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約25cmである。南側に底面を破って木根痕が入る。(遺物) なし。

第37号土坑 (第95図、写真図版38)

(位置) I区中位南側上位に位置する。(埋土) 暗褐色土と褐色土の2層に大別される。埋土Iは植生根に伴うものである。(平・断面形、規模) 底面径約60×80cmの楕円形で、断面は盤状である。(壁) ほとんど削平され残っていない。(底面) X層を僅かに掘り込んで作られている。水平かつ平坦でしまりもよい。(遺物) なし。

第38号土坑 (第96図、写真図版38)

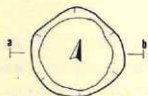
(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から暗褐色土と褐色土の2層である。(平・断面形、規模) 開口部径約100cmの円形で、断面は盤状である。(壁) 覆層からなり外反ぎみに立ち上がる。(底面) 覆層を底面とし、斜面に平行するように傾き、多少凹凸がある。検出面からの深さは22cmである。(遺物) なし。

第39号土坑 (第96図、写真図版38)

(位置) I区上位南斜面に位置する。(埋土) 不明。(平・断面形、規模) 底面径約80cmのほぼ円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 南壁が比較的良好に残存し、内傾して立ち上がる。(底面) X層を水平かつ平坦に掘り込んで作っている。(遺物) なし。(その他) 本土坑は黒褐色土の落ち込みを精査中に検出したものである。

第40号土坑 (第96図、写真図版39)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。褐色土は硬いブロック状に混在する。(平・断面形、規模) 開口部径約105cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) 緩やかに立ち上がる。(底面) 覆層を底面とし壁際が僅かに低くなる。平坦である。検出面からの深さは22cmである。(遺物) 埋土中から単節斜縄文のみの体部片4片が出土した。



L=316,800m



1. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp,C)
2. 10YR 灰 褐色土(含Nbp)

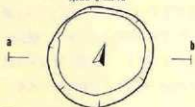
第38号土坑



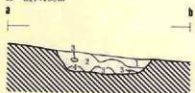
L=318,000m



第39号土坑



L=317,100m



1. 7.5YR 灰 黑色土(含Nbp)
2. 7.5YR 灰 灰褐色土(含Nbp)
3. 7.5YR 灰 褐色土
4. 7.5YR 灰 暗褐色土

第40号土坑



L=316,600m

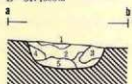


1. 10YR 灰 黑色土(含Nbp)
2. 10YR 灰 灰褐色土
3. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)

第41号土坑

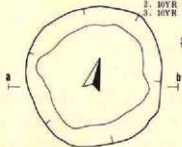


L=317,000m



1. 10YR 灰 暗褐色土
2. 10YR 灰 灰褐色土(含Nbp)
3. 10YR 灰 暗褐色土
4. 10YR 灰 褐色土
5. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)

第42号土坑

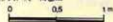


L=317,500m



1. 7.5YR 灰 黑色土(含Nbp,C)
2. 7.5YR 灰 灰褐色土
3. 7.5YR 灰 褐色土

第43号土坑



第96图 第38~43号土坑

第41号土坑（第96図、第132図、写真図版39、112）

（位置）Ⅰ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約125cmのほぼ円形で、断面は皿状である。（壁）緩やかに立ち上がり、壁と底面の境は不明瞭である。（底面）中央部が低くなる丸底で、平坦である。検出面からの深さは約20cmである。（遺物）埋土中から638とほかに単節斜縄文のみの縄文土器片3点が出土した。638は平行沈線文の口縁部土器片で赤く彩色されている。

第42号土坑（第96図、写真図版39）

（位置）Ⅰ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。自然堆積と思われる。（平・断面形、規模）開口部径約85cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）外反きみではあるが、ほぼ直角に立ち上がる。（底面）Ⅳ層を底面とし、ほぼ水平かつ平坦である。やや硬くしまっている。検出面からの深さは約30cmである。（遺物）なし。

第43号土坑（第96図、写真図版40）

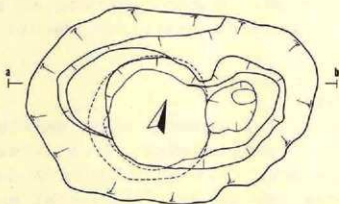
（位置）Ⅰ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黒褐色土の2層に大別される。（平・断面形、規模）開口部径約150cmの円形で、断面は盤状である。（壁）Ⅳ層で外反きみに立ち上がる。（底面）Ⅳ層を底面とし、ほぼ水平ではあるが凹凸がある。検出面からの深さは約35cmである。（遺物）なし。

第44号土坑（第97図、写真図版40）

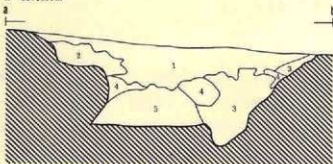
（位置）Ⅰ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土に大別される。全体に南部浮石粒が混入するが、特に4層に多い。1層と5層上位に粉炭が集中的に混入する。（平・断面形、規模）開口部は大きく崩壊が進む。頸部径約110cmのほぼ円形と思われる。断面はフラスコ状である。（壁）斜面の上位側の壁は残存しているが、下位側は木根によって破壊されている。（底面）Ⅳ層を底面とし、水平かつ平坦でよくしまっている。検出面からの深さは約85cmである。（遺物）なし。

第45号土坑（第97図、写真図版40）

（位置）Ⅰ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土と褐色土の2層である。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約90cmの円形で、断面は盤状である。（壁）

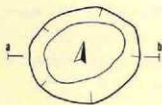


L=317,300m



1. 10VR 号 黑色土(含Nhp,C)
2. 10VR 号 暗褐色土(含Nhp)
3. 10VR 号 暗褐色土(含Nhp)
4. 10VR 号 褐色土(含Nhp,C)
5. 10VR 号 暗褐色土(含Nhp,C)

第44号土坑

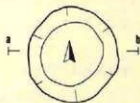


L=317,800m

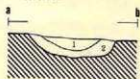


1. 7.5YR 号 暗褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 号 暗褐色土(含Nhp)
3. 7.5YR 号 褐色土

第46号土坑

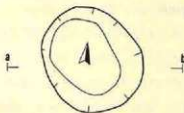


L=317,700m



1. 10VR 号 暗褐色土
2. 10VR 号 褐色土(含Nhp)

第45号土坑

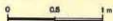


L=317,900m



1. 7.5YR 号 暗褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 号 暗褐色土

第47号土坑



第97图 第44~47号土坑

一部には壁の立ち上がりが見られるが、全体として壁と底面の境が不明瞭である。(底面)Ⅳ層を底面とする。中央部が低くなる。若干の凹凸がある。検出面からの深さは約20cmである。(遺土)なし。

第46号土坑 (第97図、写真図版41)

(位置) I区上位北側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。暗褐色土中には、ブロック状の褐色土や南部浮石等を含んでいる。(平・断面形、規模)開口部径約100×120cmの楕円形で、その長軸方向は斜面の傾斜と一致する。断面は盤状である。(壁)大きく外反する。(底面)Ⅳ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約28cmである。(遺物)なし。

第47号土坑 (第97図、写真図版41)

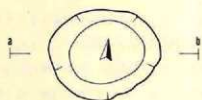
(位置) I区上位北側斜面に位置する。(埋土)黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。暗褐色土の下位には南部浮石がはいる。(平・断面形、規模)開口部径で約95×110cmの楕円形で、断面は盤状を呈する。(壁)緩やかに立ち上がる。(底面)Ⅳ層の直上を底面とし、平坦である。斜面に沿うように若干傾斜する。検出面からの深さは約20cmである。(遺物)なし。

第48号土坑 (第98図、写真図版41)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。上位に南部浮石粒が多く混入する。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部で径約95×120cmの楕円形で、断面は盤状である。(壁)Ⅳ層で大きく外反する。(底面)Ⅳ層で緩い凹凸がある。斜面に沿って低くなる。検出面からの深さは約25cmである。(遺物)なし。

第49号土坑 (第98図、写真図版42)

(位置) I区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土と褐色土に大別される。自然堆積と思われる。(平・断面形、規模)底面径が約120cmのやや不整な円形で、断面はピーカー状である。(壁)大部分が削平されている。斜面上位部は直角に立ち上がるが、他は崩壊が著しい。(底面)Ⅳ層を底面としシルトでかためている。水平かつ平坦である。検出面からの深さは約33cmである。(遺物)なし。

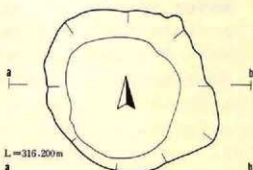


L=318.100m



1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp,C)
2. 10YR 5/ 暗褐色土
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)

第48号土坑

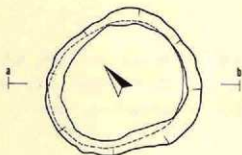


L=316.200m

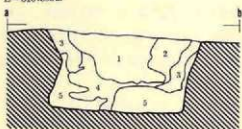


1. 10YR 5/ 暗褐色土
2. 10YR 5/ 暗褐色土
3. 10YR 5/ 褐色土
4. 10YR 5/ 黄褐色土
5. 7.5YR 5/ 明褐色土(含Nbp)

第49号土坑

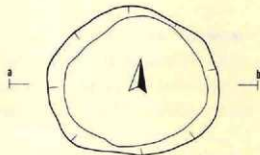


L=316.300m

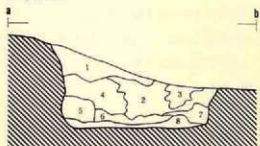


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/ 黑褐色土
3. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/ 黑褐色土
5. 10YR 5/ 褐色土

第50号土坑



L=317.000m



1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp,C)
2. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp,C)
4. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nbp,C)
5. 10YR 5/ 黄褐色土(含Nbp,C)
6. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp,C)
7. 10YR 5/ 黄褐色土(含Nbp)
8. 10YR 5/ 明黄褐色土

第51号土坑

0 0.5 1m

第98图 第48~51号土坑

第50号土坑（第98図、第132図、写真図版42、112）

（位置）Ⅰ区中位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。埋土5は崩壊土によるものであり、上部には南部浮石が多量に入る。また、底面との境には帯状に黒色土が入る。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径が約135×165cmの楕円形であり、断面はフラスコ状である。（壁）斜面上位側は内傾して立ち上がるが、下位側は崩落しほぼ直角に立ち上がる。（底面）Ⅱ層上位面を底面とし、水平かつ平坦でよくしまっている。検出面からの深さは約84cmである。（遺物）埋土中から639～640の二点が出土した。639は磨消縄文、640は沈線文である。

第51号土坑（第98図、写真図版42）

（位置）Ⅰ区中位南側斜面に位置する。（埋土）8層に大別される。上位が削平されているため堆積状況についての詳細は不明であるが、人為的に埋め戻した可能性が強い。（平・断面形、規模）開口部が径160～180cmの不整形円で、断面はフラスコ状である。（壁）上位は外反するが、下位は袋状に挟まれる。（底面）Ⅱ層を底面とし、水平かつ平坦である。（遺物）なし。

第52号土坑（第99図、写真図版43）

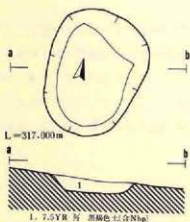
（位置）Ⅰ区中位南側斜面に位置する。（埋土）黒褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径が約140×105cmの楕円形で、断面は盤状である。（壁）外反して立ち上がる。（底面）Ⅲ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約13cmである。（遺物）なし。

第53号土坑（第99図、写真図版43）

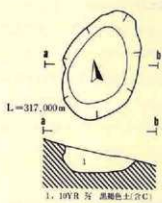
（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（埋土）黒褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径が約82×120cmの楕円形で、断面は盤状である。（壁）斜面上位側はほぼ直角に立ち上がるが下位側は崩壊が著しい。（底面）Ⅳ層を底面とし、平坦ではあるが若干丸くなる。（遺物）なし。

第54号土坑（第99図、写真図版43）

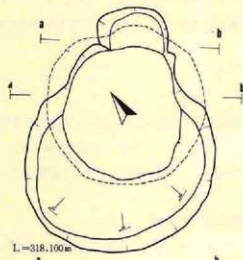
（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（重複）第55号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。（埋土）南部浮石粒が混入する黒褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径約75cmのほぼ円形で、断面は盤状である。（壁）斜面下位側の壁は明瞭に立ち上がるが、下位側は緩やかに立ち上がる。（底面）Ⅴ層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。（遺物）なし。



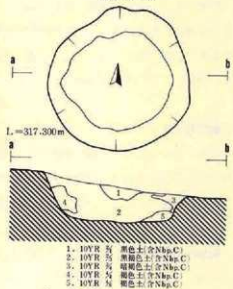
第52号土坑



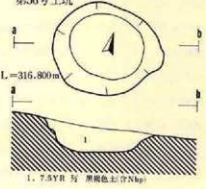
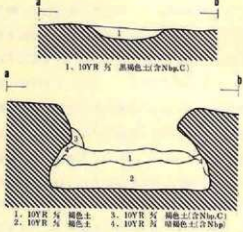
第53号土坑



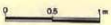
第54、55号土坑



第56号土坑



第57号土坑



第99图 第52~57号土坑

第55号土坑（第99図、写真図版43）

（位置）I区上位南側斜面に位置する。（重複）第54号土坑と重複する。（埋土）確認できたのは下位の埋土のみである。褐色土と暗褐色土の2層に大別される。人為堆積と思われる。

（平・断面形、規模）底部径約170cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）大きく内傾して立ち上がる。（底面）Ⅱ層を20cmほど掘り込んで作られている。水平かつ平坦である。地山の上位面からの深さは約90cmである。（その他）南側は緩い陥ち込みとなっている。抜根痕と思われる。（遺物）なし。

第56号土坑（第99図、写真図版43）

（位置）I区上位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別される。（平・断面形、規模）開口部径約150cmの円形で、断面はビーカー状である。（壁）緩く外反し立ち上がる。（底面）Ⅹ層を底面とし、中央がやや窪むが平坦である。検出面からの深さは38cmである。（遺物）なし。

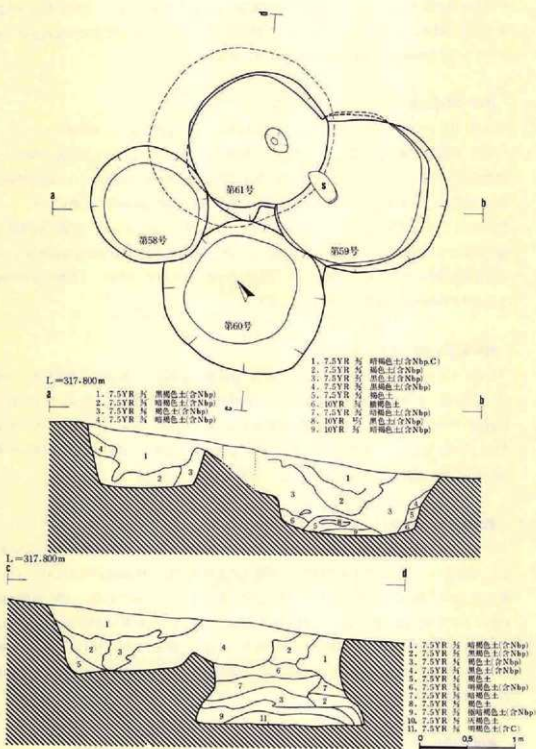
第57号土坑（第99図）

（位置）I区上位南側斜面に位置する。（埋土）黒褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径約110cmのほぼ円形で、断面は盤状である。（壁）崩壊が進み、上部は外反する。

（底面）Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは25cmである。（遺物）なし。

第58～61号土坑（第100図、第133図、写真図版44、112～113）

（位置）I区上位南側斜面に位置する。（重複）この4土坑は互いに重複する。61号、59号、58号、60号の順に新しくなる。（埋土）（60号）上位から暗褐色土、黒色土、黒褐色土、褐色土の4層に大別される。（58号）大部分は黒褐色土であり、底面や壁際に暗褐色土や褐色土が堆積する。（59号）上位は暗褐色土、褐色土、黒色土の3層に大別され、いずれにも南部浮石粒が含まれる。下位は同様な土層が薄い層となるが南部浮石を含まない。以上の3土坑は自然堆積状況を呈する。（61号）上位は自然堆積と思われるが、下位の堆積は水平化し人為的な埋め戻しが考えられる。（平・断面形、規模）平面形はすべて円形、断面は61号のみフラスコ状であり、他はビーカー状である。58号から順に底部径は、100cm、140cm、120cm、180cmほどである。（壁）切り合う部分は崩壊が著しいが、他は比較的良好に保存されている。61号の下位の壁は内傾し、59号は上位で外反するほかは、開口部へ直線的に立ち上がる。（底面）58号、60号の底面は斜行し、59号はレンズ状に彎曲する。61号は水平かつ平坦である。いずれもⅩ層を底面とする。検出面からの深さは順に、60cm、75cm、65cm、105cmである。（その他）61号



第100图 第58~61号土坑

の底面に柱穴状土坑が一基ある。規模は開口部径20cm、深さ22cmである。(遺物)59号の底面から90の石皿が出土する。61号の埋土中から91の凹石が出土した。ともに若干の火熱を受け赤化している。91は砥石又は石皿を転用したものである。

第62・63号土坑(第101図、写真図版45)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複)62号と63号は重複する。63号を切っている。

(埋土)62号は南部浮石が混入する黒褐色土の単層である。63号は上位から暗褐色土・褐色土・黒褐色土の3層に大別され、自然堆積状況を呈する。(平・断面形・規模)62号は開口部径約90cmの円形で、断面はピーカー状である。63号は開口部径約165cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)62号はほぼ直角に立ち上がる。63号は内傾して立ち上がる。(底面)62号はⅩ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは2.5cmである。63号はⅩ層を底面とし、一部は壁に向かってゆるやかに上がるが、全体として水平かつ平坦である。(遺物)63号の埋土中より腰部に単節斜縄文が施文される底部片1コが出土した。

第64号土坑(第101図、写真図版45)

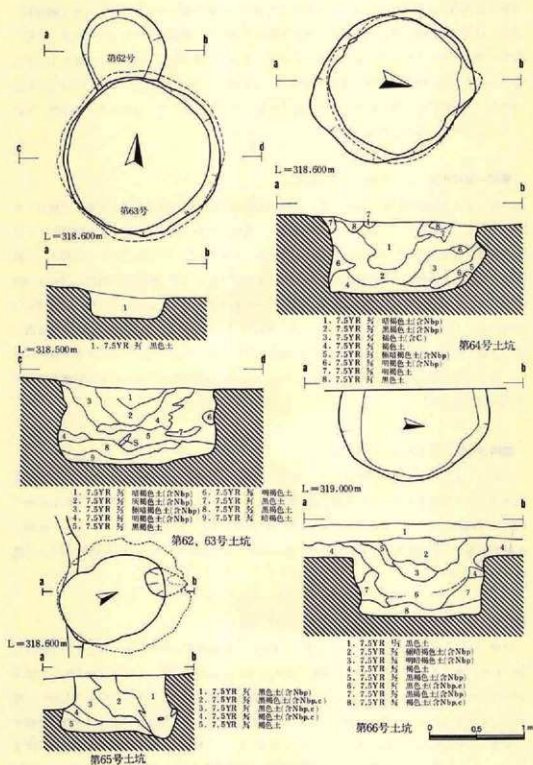
(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土・褐色土・黒褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形・規模)開口部径約150cmのほぼ円形で断面はフラスコ状である。(壁)崩落の痕跡を大きく残す所が数ヶ所あるが、崩落しない所は内傾して立ち上がる。(底面)Ⅹ層上位に相当する面で、灰白色状の粘土である。水平かつ平坦である。検出面からの深さは75cmである。(遺物)なし。

第65号土坑(第101図、第133図、写真図版45、112)

(位置) I区上位西縁に位置する。(重複)第4号住居址と重複し、同住居址によって切られる。(埋土)上位から黒色土・黒褐色土・褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形・規模)開口部径約90×130cmの楕円形で、断面はフラスコ状である。(壁)南壁は住居址によって、北壁は木根によって一部が破壊されている。残存する壁は内傾して立ち上がる。(底面)第Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。(遺物)埋土下位から641が出土した。研磨され光沢をもつ器面に半肉彫りのな入組文が施文される。他に、縦に綾絡文が施文される腰部片1個も埋土中から出土する。

第66号土坑(第101図、第133図、写真図版46、112)

(位置) I区上位西縁に位置する。(埋土)上位から極暗褐色土・褐色土・黒色土・黒褐色土



第101图 第62~66号土坑

褐色土の5層に大別される。埋土1は耕作土である。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)はほぼ写が調査区外に広がるが、径約160cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)全体に凹凸しているが、ほぼ直角に立ち上がる。下位には抉りもみられる。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。(遺物)埋土8の上位面から642の鉢形土器が出土した。完形品である。口縁部には2個1対の突起が貼付される。口唇部にはキザミ目が入る。(時期)642により晩期中葉と考えられる。

第67～68号土坑 (第102図、写真図版46)

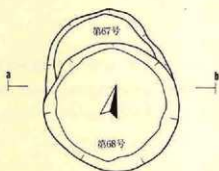
(位置)I区上位南側斜面に位置する。(検出状況)67号土坑は68号土坑を精査中に検出したものであり、68号検出時には分からなかった。(重複)67号と68号は重複する。68号によって切られる。(埋土)67号はⅣ層とほぼ同じ暗褐色の単層である。68号は上位から黒色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)67号は詳細不明である。68号は開口部径約140cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)67号はほぼ直角に立ち上がる。68号は下位に抉りが入り、内傾して立ち上がる。上位は外反する。(底面)67号はⅣ層を僅かに掘り込み、68号はX層を底面とする。ともに水平かつ平坦である。検出面からの深さは67号は約25cm、68号は約50cmである。(遺物)68号埋土中位から単節斜縄文のみの5個の破片が出土した。

第69号土坑 (第102図、写真図版46)

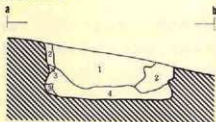
(位置)I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土・褐色土・黒褐色土・黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約120cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)僅かに内傾するが、直線的に立ち上がる。(底面)X層を底面とし平坦である。皿状に中央が低くなる。検出面からの深さは約65cmである。(遺物)なし。

第70号土坑 (第102図、第134図、写真図版47、113)

(位置)I区上位南側に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。埋土1・5の中心部には南部浮石粒が多く混入する。埋土8は均一の土性で南部浮石等は一切含まれない。また、地山との境には帯状に黒色土が入る。下位の埋土は人為的な埋め戻しも考えられる。(平・断面形、規模)開口部径約180cmの円形で、断面はフラスコ状を呈する。(壁)内傾して立ち上がり、上位は外反する。(底面)X層下位を底面とし、ほぼ水平かつ平坦である。検出面からの深さは約80cmである。(遺物)643を含む縄文のみの破片

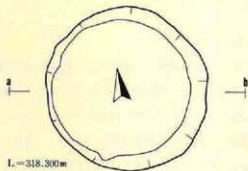


L=318.000m

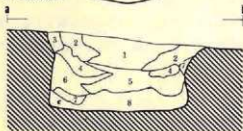


1. 10YR 5/ 黑色土(含Nhp.e)
2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/ 褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/ 暗褐色土

第67、68号土坑

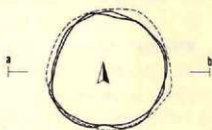


L=318.300m

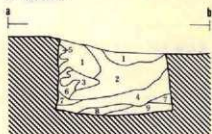


1. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp.e)
2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp.e)
3. 10YR 5/ 褐色土
4. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp.e)
5. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp.e)
6. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含Nhp.e)
7. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
8. 10YR 5/ 褐色土(含)

第70号土坑



L=318.500m

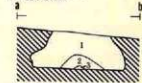


1. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 5/ 褐色土(含Nhp)
3. 7.5YR 5/ 黑色土
4. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
5. 7.5YR 5/ 褐色土
6. 7.5YR 5/ 暗褐色土
7. 10YR 5/ 褐色土
8. 10YR 5/ 暗褐色土
9. 10YR 5/ 暗褐色土

第69号土坑

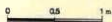


L=318.200m



1. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含C)
2. 7.5YR 5/ 暗褐色土
3. 7.5YR 5/ 褐色土

第71号土坑



第102图 第67~71号土坑

3片(単節斜縄文2、羽状縄文(横雑含まず)1)が埋土下位から出土した。

第71号土坑(第102図、写真図版47)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約65cmの円形で、断面はフラスコ状である。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約40cmである。(遺物)なし。

第72号土坑(第103図、第134図、写真図版47、113)

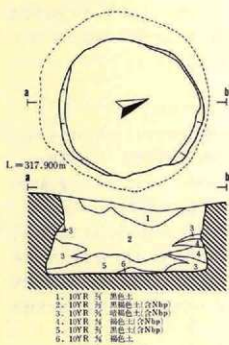
(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土・黒褐色土・黒色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径150cmほどの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)底面から内傾して立ち上がり、上位は外反する。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約75cmである。(遺物)644~7が埋土中から出土した。644は埋土上位の壁際から縦位に出土した。多少欠損するが、完形に近い。口唇部は内側にそがれている。補修孔が口縁部付近に明けられる。器表面全体に煤が付着する。645~6は縄文のみ、647は沈線文である。

第73号土坑(第103図、第134図、写真図版113)

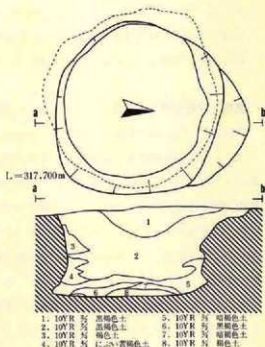
(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約178cmの円形で、断面形はフラスコ状である。(壁)北壁の一部に崩壊がみられるが、他は内傾して立ち上がる。(底面)X層を底面とし、ほぼ水平かつ平坦である。検出からの深さは95cmである。(遺物)埋土中から648~651の土器片が出土した。648は沈線文、649は縄文単体圧痕の上にボタン状の突起が貼付される。650は口縁部に縄文原体圧痕が施された上に口唇部から垂下する隆帯と頸部に1本の隆帯がまわる。隆帯にはコイル状に縄文が圧痕される。651は単節斜縄文のみが施文される。

第74・75号土坑(第103図、第135図、写真図版48)

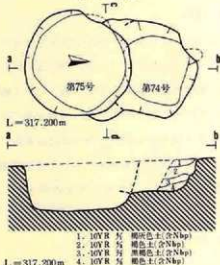
(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複)74号と75号は重複し、74号が75号によって切られる。(埋土)74号は上位から褐灰色土・褐色土・黒褐色土・褐色土に大別される。75号は上位から黒褐色土・黒色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土に大別される。ともに自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)74号はおよそ95cm、75号は112cmの直径をもつ円形で、断面は



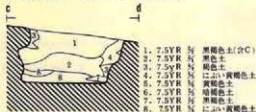
第72号土坑



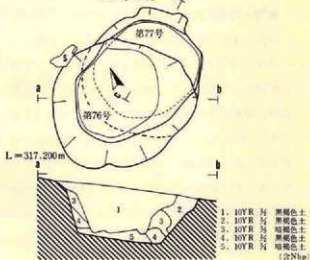
第73号土坑



L=317.200m



第74、75号土坑



L=317.100m



第76、77号土坑

0 0.5 1m

第103图 第72~77号土坑

ともにピーカー状である。(壁)ともに多少の凹凸をもちながらも、ほぼ直角に近く立ち上がる。(底面)ともにX層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは33cmと50cmである。(遺物)75号の埋土から652が1点出土した。沈線文である。

第76・77号土坑(第103図、第135図、写真図版48、113～114)

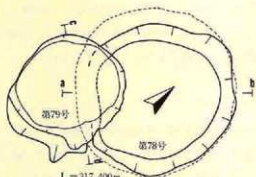
(位置)I区上位南側斜面に位置する。(重複)76号と77号は重複する。76号が77号を切る。(埋土)76号は黒褐色土と暗褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。77号は暗褐色土、褐色土・暗褐色土・褐色土に大別され、上位は人為的な埋め戻しも考えられる。(平・断面形、規模)76号は開口部径140cm、77号は推定で125cmほどの円形で、断面はピーカー状である。(壁)77号は外反して立ち上がる。76号は一部でほぼ直角に立ち上がるのがみられる。(底面)ともにX層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは、76号が約57cm、77号は約50cmである。(遺物)76号の底面から石鏃(92)、埋土中から磨石(93)の2点の石器と653～4の縄文土器2片が出土した。92は無茎の石鏃である。653～4はともに単節斜縄文を施文する。654は縄文原体圧痕が口縁部にまわる。

第78・79号土坑(第104図、第135図、写真図版48、114)

(位置)I区上位南側斜面に位置する。(重複)78号と79号は重複する。79号が78号を切る。(埋土)78号は上位から暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土に大別される。79号は上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。ともに自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)78号は開口部径約160cm、79号は120cmの円形で、断面は78号はフラスコ状であるが、79号はピーカー状である。(壁)78号は下位に大きく抉りが入るが、79号はほぼ直角に立ち上がる。(底面)78号は皿状に彎曲するのに対し、79号は水平である。ともにX層を底面とする。検出面からの深さは、78号は98cm、79号は約50cmである。(遺物)78号の埋土から655・656のともに縄文原体圧痕が施文された口縁部破片が出土した。655の口縁部は肥厚し、口唇部に縄文圧痕が施文される。これらは同一個体の可能性がある。

第80・81号土坑(第104図、第135図、写真図版49)

(位置)I区上位南側斜面に位置する。(重複)80号と81号土坑は重複する。81号は80号を切る。(埋土)80号は壁際と底面に暗褐色土と褐色土が入るほかは黒褐色土である。81号は上位から暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土の3層に大別される。ともに自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)80号は開口部径約100cmの円形で、断面はフラスコ状である。81号は開口部が94×120cmの楕円で、断面はピーカー状である。(底面)80号は水平、81号は皿状であるが、



L = 317.400m

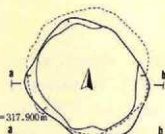


L = 317.500m



1. 7.5YR 与 黑褐色土(含Nbp)
2. 7.5YR 与 暗褐色土
3. 7.5YR 与 黄褐色土(含Nbp)
4. 7.5YR 与 褐色土
5. 7.5YR 与 棕色土(含Nbp)

第79、78号土坑

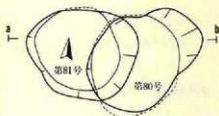


L = 317.900m

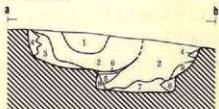


1. 7.5YR 与 暗褐色土
2. 7.5YR 与 黑褐色土(含Nbp.e)
3. 7.5YR 与 黑褐色土
4. 7.5YR 与 暗褐色土

第82号土坑

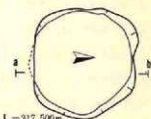


L = 317.900m



1. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nbp)
2. 7.5YR 与 黑褐色土
3. 7.5YR 与 暗褐色土
4. 7.5YR 与 褐色土
5. 7.5YR 与 暗褐色土
6. 7.5YR 与 褐色土
7. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nbp)
8. 7.5YR 与 褐色土(含Nbp)

第81、80号土坑

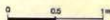


L = 317.500m



1. 7.5YR 与 黑色土
2. 7.5YR 与 黑褐色土
3. 7.5YR 与 暗褐色土(Nb)
4. 7.5YR 与 暗暗褐色土

第83号土坑



第104图 第78~83号土坑

ともにⅩ層を底面とする。検出面からの深さは80号は約55cm、81号は31cmである。(遺物) 657～8の2点が埋土中から出土した。657は体下半がふくらむ小型の壺の破片であり、658は体下端部の破片である。ともに単節斜縄文が施文される。81号からは出土していない。

第82号土坑 (第104図、第135図、写真図版49、114)

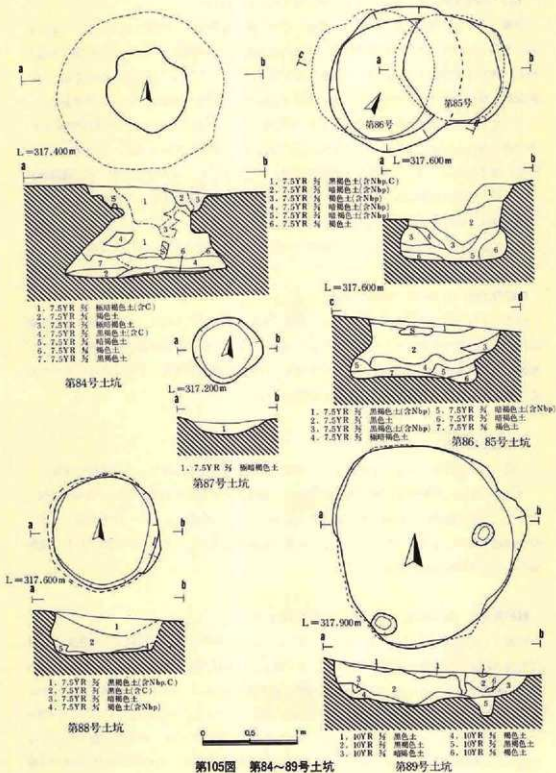
(位置) I区上位南斜面に位置する。(埋土) 上位から暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約130cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 内傾して立ち上がる。(底面) Ⅹ層を底面とし、皿状を呈する。検出面からの深さは約60cmである。(遺物) 659～661が埋土中から出土した。659は一部欠損するが、ほぼ完形の台付鉢である。磨消縄文を使用した入組文が体下半部まで施文される。口縁部には1個、口唇部には、いわゆるB型突起が二対付けられる。660は太い隆帯の貼付によって肥厚した口縁部に縄文原体圧痕が施文される。661は沈線文である。(時期) 659が埋土中位から出土したことにより、縄文時代晩期中葉と考えられる。

第83号土坑 (第104図、第136図、写真図版49)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複) 第16号住居址と重複し、同住居址を切る。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・明褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約110cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 下位は内傾して立ち上がるが中位から上はほぼ直角に立ち上がる。(底面) Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約36cmである。(遺物) 埋土中から662の口縁部片が1点出土した。器表面に2本の、口唇部内側に1本の平行沈線がまわる。

第84号土坑 (第105図、第136図、写真図版50、114)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複) 第16号住居址と重複し、同住居址を切っている。(埋土) 上位から極暗褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 頸部径約85cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) ほとんど直線的に内傾して立ち上がり、崩壊のあとがみられないが、左右同形とはならない。(底面) Ⅹ層を底面とし水平かつ平坦である。検出面からの深さは約90cmである。(遺物) 3点の縄文土器片が埋土中から出土した。663は沈線文、664は磨消縄文、665は単節斜縄文が口唇部まで施文される。他に6個の垂角礫が埋土中から出土する。これらの礫は上位から順次に落ち込んでいる。同時にその層は焼土粒と粉炭が多量に含んでいることから、人為的に廃棄された可能性を含んでいる。炭の材質はナラである。



第105图 第84~89号土坑

第89号土坑

第85・86号土坑（第105図、第136図、写真図版50、114）

（位置）Ⅰ区上位南側に位置する。（重複）85号と86号は重複し、85号が86号によって切られる。（埋土）85号は上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土・暗褐色土・褐色土の5層に大別される。86号は黒褐色土・暗褐色土・褐色土に大別される。ともに自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）85号は開口部径110cm、86号は150cmの円形で、断面はフラスコ状である。

（壁）ともに下位ほど内傾して立ち上がる。（底面）ともにⅩ層を底面としほぼ水平であるが、多少凹凸がみられる。検出面からの深さは、85号は83cm、86号は57cmである。（遺物）669が85号の埋土中から、666～8の3点は86号の埋土から出土した。666は縄文のみの口縁部破片であるが、内側に隆帯を貼付し口縁部を肥厚させている。補修孔をもつ。667は口縁部に平行に縄文原体圧痕が施される。668は縄文原体圧痕と割箸状工具による連続刺突文である。また、図示しなかったが、単節斜縄文のみの体部片が85号からは2点、86号からは5点出土している。

第87号土坑（第105図、写真図版50）

（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（重複）第16号住居址と重複し、同住居址によって切られる。（埋土）極暗褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径約74cmの円形で、断面は盤状である。（壁）緩やかに立ち上がる。（底面）Ⅳ層を底面とする。皿状で平坦である。検出面からの深さは12cmである。（遺物）なし。

第88号土坑（第105図、写真図版51）

（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（重複）第16号住居址と重複し、同住居址を切る。（埋土）上位から黒褐色土・黒色土・暗褐色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況呈する。（平・断面形、規模）開口部径約115cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）やや内傾するが、ほぼ直に立ち上がる。（底面）Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約38cmである。（遺物）なし。

第89号土坑（第105図、第136図、写真図版51、114）

（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径で193×213cmの楕円形で、断面は盤状である。（壁）一部は内彎ぎみに立ち上がる。（底面）第Ⅳ層下位を底面とし、皿状で、多少凹凸がある。検出面からの深さは約37cmである。2基の柱穴状土坑を有する。（遺物）埋土中から670～1が出土した。670は底部が欠損している。体上半に最大のふくらみをもち底部にかけてすばまる器形の深鉢である。器表面には煤が、内側の下位には残滓が付着

している。671は無筋斜縄文のみである。口縁部はやや研磨され、波状口縁となっている。
(時期) 670が埋土中から単一体として出土したことにより、中期末葉と考えられる。

第90号土坑 (第106図、写真図版51)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複) 第16号住居址と重複し、同住居址を切る。
(埋土) 上位から暗褐色土、黒色土、極暗褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。
(平・断面形、規模) 開口部径約95cmの円形で、断面は盤状である。(壁) 大きく外反する。
(底面) M層を底面とし、皿状で平坦である。検出面からの深さは23cmである。(遺物) なし。

第91号土坑 (第106図、第136図、写真図版52、114)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約134cmの円形で、断面はフラスコ状を呈する。(壁) 下位は内傾して立ち上がる。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約60cmである。(遺物) 埋土中から有茎の石鏃(94)と縄文土器片(673)、土製品(672)、炭化物(1505)が出土した。672は土偶の手であり、1505は網代の残片と思われる。

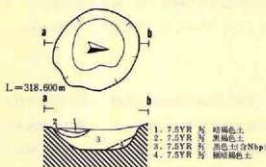
(注2)

第92、93号土坑 (第106図、写真図版52)

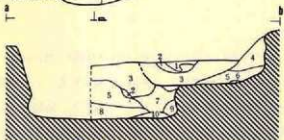
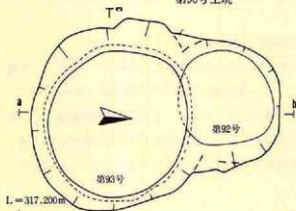
(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複) 92号と93号は重複し92号が93号に切られる。
(埋土) 92号は上位から褐色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別される。上～中位は人為的埋め戻しも考えられる。93号は、上位から黒色土、黒褐色土、明褐色土、暗褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 92号は推定で開口部径約130cmの円形で、断面はピーカー状と考えられる。93号は開口部径約190cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 92号はほぼ直角に立ち上がる。93号は下位は傾られ、内傾して立ち上がる。(底面) ともにX層を底面とするが、92号は平坦ではあるが皿状に中央部が低くなる。93号は水平かつ平坦である。検出面からの深さは、92号は52cm、93号は78cmである。(遺物) なし。

第94号土坑 (第106図、第137図、写真図版52、114)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、褐色土、黒色土、暗褐色土の4層に大別される。下位は自然堆積と思われるが上位は人為的な堆積と考えられる。(平・断面形、規模) 開口部径190cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 東壁はほぼ直角に立ち上がるが、西壁の下位は明瞭に傾られている。(底面) X層を底面とし平坦であるが、中



第90号土坑

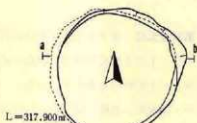


L=317.200m



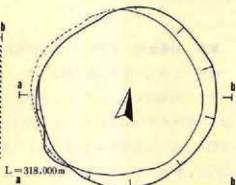
1. 7.5YR 与 黑色土(含Nbp)
2. 7.5YR 与 暗褐色土
3. 7.5YR 与 棕色土
4. 7.5YR 与 黑褐色土
5. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nbp)
6. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nbp)
7. 7.5YR 与 棕色土(含Nbp)
8. 7.5YR 与 黑褐色土
9. 7.5YR 与 暗褐色土(含Nbp)
10. 7.5YR 与 暗褐色土

第92、93号土坑



1. 7.5YR 与 黑褐色土(含Nbp, C)
2. 7.5YR 与 棕暗褐色土(含Nbp, C)
3. 7.5YR 与 暗褐色土
4. 7.5YR 与 棕色土(含Nbp)
5. 7.5YR 与 棕暗褐色土
6. 7.5YR 与 棕色土
7. 7.5YR 与 黑褐色土

第91号土坑



L=318.000m



1. 10YR 与 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 与 棕色土(含Nbp)
3. 10YR 与 黑色土(含Nbp)
4. 10YR 与 暗褐色土
5. 10YR 与 黑褐色土
6. 10YR 与 暗褐色土

第94号土坑

0 0.5 1m

第106图 第90~94号土坑

尖部が低くなる皿状である。検出面からの深さは約37cmである。(遺物)埋土中から縄文土器5片が出土した。うち2片を図示した。674は太い沈線を使用し曲線的な磨消縄文である。675は平行沈線と羊歯状文的な文様が施文される。図示しなかった3片はすべて単節斜縄文のみの体部破片である。以上の遺物はすべて埋土上位の出土である。

第95号土坑 (第107図、第137図、写真図版53、115)

(位置) I区上位西縁に位置する。(埋土)上位から黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約110cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)上位は耕作土となっており破壊されている。下位は内傾して立ち上がる。崩落は認められないが、左右対称とはならない。(底面)X層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。(遺物)埋土中から単節斜縄文のみが施文されている土器5片が出土した。うち、2片を図示した。676は外反ぎみに立ち上がる。677は内側に隆帯を貼付する。内嚙して立ち上がる。器表面に煤が付着する。

第96号土坑 (第107図、第137図、写真図版53、115)

(位置) I区上位西縁に位置する。(埋土)上位から黒色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、褐色土の5層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)西半の一部が調査区外にあるため推定であるが、開口部径約160cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)下位は傾内傾するが中～上位はほぼ直に立ち上がる。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約85cmである。(遺物)縄文土器5片が出土した。678は細い隆帯の貼付と割箸状工具による連続刺突文が施文される。679は結束の異条縄文である。胎土に繊維が含まれる。680は沈線文である。他に図示しなかったが、単節斜縄文のみの体部片と口縁部が研磨され沈線文が施される土器片である。これらはすべて、埋土上位から出土したものである。

第97号土坑 (第107図、写真図版53)

(位置) I区上位南側斜面に位置する。(重複)第13号住居址と重複し、同住居址によって切られる。(埋土)黒褐色土の単層である。(平・断面形、規模)検出面上で直径110cmの円形となり、断面はフラスコ状である。(壁)検出された壁はきちんと内傾して立ち上がる。(底面)X層を底面とし、ほぼ水平である。若干の凹凸がみられる。検出面からの深さは約17cmである。(遺物)なし。

第98、99号土坑（第107図、第138図、写真図版53、54、115）

（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（重複）98号と99号は重複するが新旧関係は不明である。（埋土）98号は上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。99号は上位から褐色土、黒褐色土、黒色土、暗褐色土の4層に大別される。上位は人為的な堆積と思われる。（平・断面形、規模）ともに開口部径105cmの円形で、断面は下位がフラスコ状となる。（壁）99号の東壁は外反するが他はほぼ直角に立ち上がる。（底面）ともにⅩ層を底面と水平かつ平坦である。検出面からの深さは98号は約66cm、99号は76cmである。（遺物）98号の埋土中から95のマイクロ・コアと作図は省略したが縄文土器4片（網目状捺糸文、割箸状工具の連続刺突文、単節斜縄文、底部）が出土した。

第100号土坑（第107図、第138図、写真図版54、115）

（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（埋土）上位から褐色土、暗褐色土、明褐色土、極暗褐色土の4層に大別される。上位は人為的な堆積と考えられる。（平・断面形、規模）開口部径約140cmのやや不整な円形で、断面はフラスコ状を呈する。（壁）下位は内傾して立ち上がり、上位は外反ぎみに立ち上がる。（底面）Ⅹ層を底面とし、平坦ではあるが中央が低くなる皿状を呈する。（遺物）埋土2から96の磨石の破片と681～4の土器片等が出土した。96は縁辺部が磨滅している。681と682は同一個体である。口唇部には太い隆帯が貼付される。口縁部には磨消縄文による長方形の文様が施文される。磨消部は丁寧に研磨される。全面に煤が付着する。683は太い隆沈線に区画された中に棒状刺突が加えられる。684は縄文原体圧痕文である。作図は省略したが、無文に沈線による渦巻文や単節斜縄文のみの土器3片等が出土した。

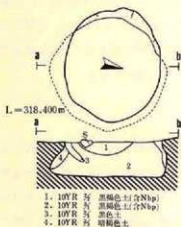
（時期）681等の土器が小破片の状態で一括出土したことにより、この土器とそう遠くない時期が想定される。よって、中期末葉～後期初頭と考えられる。

第101号土坑（第108図、写真図版54）

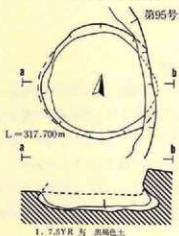
（位置）Ⅰ区上位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土、褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約87cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）ほぼ直角に近い立ち上がりである。（底面）Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約54cmである。（遺物）なし。

第102号土坑（第108図、写真図版55）

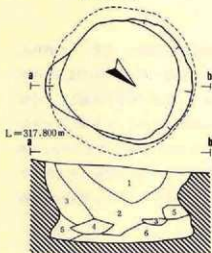
（位置）Ⅱ区上位東側斜面に位置する。（重複）第14号住居址と重複し、同住居址に切られる。（埋土）上位から黒褐色土と暗褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、



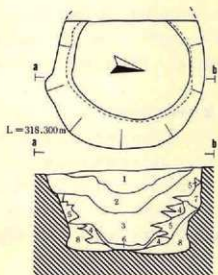
第95号土坑



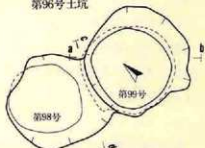
第97号土坑



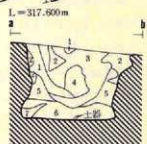
第100号土坑



第96号土坑



1. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 暗褐色土
3. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp)
4. 7.5YR 暗褐色土
5. 7.5YR 暗褐色土(Nh)
6. 7.5YR 暗褐色土



1. 10YR 灰褐色土(含Nhp)
2. 10YR 暗褐色土(含Nhp)
3. 10YR 暗褐色土(含Nhp)
4. 10YR 灰褐色土(含Nhp)
5. 10YR 灰褐色土
6. 10YR 暗褐色土
7. 10YR 暗褐色土

第98、99号土坑

0 0.5 1m

第107图 第95~100号土坑

規模) 東半が消失しているため推定であるが、開口部で長径が175cmの楕円形で、断面はピーカー状と思われる。(壁) 崩壊が進んでおり、外反ぎみに立ち上がる。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約50cmである。西隅に柱穴状土坑が一基あるが、本土坑に伴うか、第14号住居址に伴うものかは不明である。(遺物) なし。

第103号土坑 (第108図、写真図版55)

(位置) II区上位東側斜面に位置する。(重複) 第14号住居址と重複し、同住居址によって切られる。(埋土) 黒褐色土の単層である。自然堆積状況を呈する。(平・断面形) 東半を欠くため推定であるが、径122cmの円形で、断面はフラスコ状と考えられる。(壁) 大部分は直角に立ち上がるが、一部に挟りが認められる。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約32cmである。(遺物) なし。

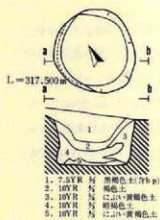
第104号土坑 (第108図、第139図、写真図版55、115～116)

(位置) I区上位西縁に位置する。(埋土) 上位から暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約130×160cmの不整な楕円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 下位は内傾して立ち上がる。(底面) X層を底面とし水平である。やや凹凸がみられるがほぼ平坦である。検出面からの深さは約64cmである。

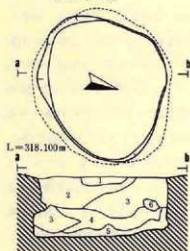
(遺物) 埋土中から687～8が出土した。687は口縁部上端まで単節斜縄文が施文される。688は上部を欠き器種は不明である。厚手で砂が多く混入した粘土である。無文であるが研磨はされていない。

第105号土坑 (第108図、第139図、写真図版56、115)

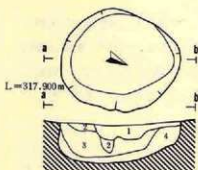
(位置) II区上位西縁に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約115cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X層を底面とし、中央が低くなる皿状を呈する。平坦である。検出面からの深さは約40cmである。(遺物) 埋土上位から出土した。98は有基の石鐮の完形品である。689はやや細い沈線の磨消し縄文であるが690、691は太く深い沈線で曲線を描き丁寧な磨消を施す。同一個体と思われるが690は赤く彩色されているのに対し691にはみられない。また作図は省略したが690と同一個体と思われる土器が4片、単節斜縄文のみの体部片が2片出土した。



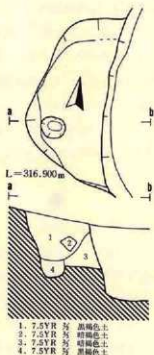
第101号土坑



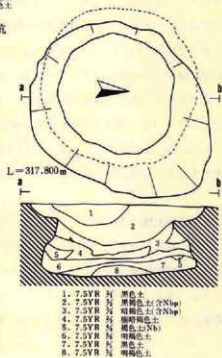
第102号土坑



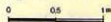
第103号土坑



第104号土坑



第105号土坑



第108图 第101~106号土坑

第106号土坑 (第108図、第138図、写真図版56、115)

(位置) II区上位西辺に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、暗褐色土、明褐色土、黒色土、明褐色土の5層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約182cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 上位は崩壊が進み外反するが中～下位は内傾する。(底面) X層を底面とし、皿状を呈する。平坦である。検出面からの深さは約76cmである。(遺物) すべて埋土中から出土した。97は有茎の石甌で完形品である。685は磨消縄文である。686は頸部に1本の隆帯を貼付する。口縁部は縄文原体圧痕によって幾何学的文様を構成する。胎土に繊維が含まれる。

第107号土坑 (第109図、第139図、写真図版56、116)

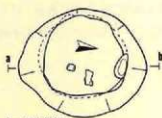
(位置) II区上位西辺に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約120cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 中～上位の壁は凹凸をもって外反する。下位は一樣に内傾する。(底面) X層を底面とし平坦である。皿状に中央が低くなる。検出面からの深さは82cmである。垂角礫が出土する。(遺物) いずれも埋土中から出土した。99は有茎の石甌である。692は条痕土器である。693はやや内唇ぎみに立ち上がる口縁部破片である。口唇部の端には縄文が圧痕される。口縁部には上下に数条の捺糸圧痕が横位に施文された後、中央部には縦位に捺糸圧痕が施文される。口縁部と頸部の境には微隆帯が貼付され。その上に連続刺突文が施文される。体部は絞絡文が横位まわる。内側は丁寧に研磨され光沢を帯びる。器表面に煤が付着している。694は山形口縁の突起部である。細い隆帯とボタン状の円い突起が貼付されその上に縄文が押圧される。胎土には多量の小石が混入する。695は山形口縁で縄文が弧状に押圧される。作図は省略したが他に羽状縄文を施文した体部片が1片出土した。

第108号土坑 (第109図、写真図版57)

(位置) II区上位西辺に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、明褐色土、褐色土とに大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約100cmの円形で、断面は盤状である。南半の一部は風倒木によって破壊されている。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。(底面) VII層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは23cmほどである。(遺物) なし。

第109号土坑 (第109図、写真図版57)

(位置) II区上位西辺に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土、褐色土、暗褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 上位から黒褐色土、褐色土、暗褐色

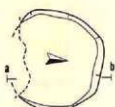


L=317.700m

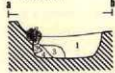


1. 7.5YR 弱 黑褐色土
2. 7.5YR 弱 黑褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 棕暗褐色土
6. 7.5YR 弱 黑褐色土
7. 7.5YR 弱 黑褐色土
8. 7.5YR 弱 褐色土

第107号土坑

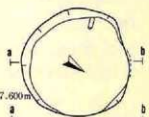


L=317.800m

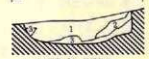


1. 7.5YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 黑褐色土

第108号土坑

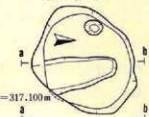


L=317.600m



1. 7.5YR 弱 黑褐色土
2. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nhp,C)
3. 7.5YR 弱 暗褐色土

第109号土坑

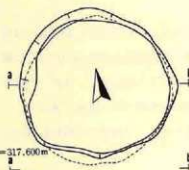


L=317.100m



1. 7.5YR 弱 黑褐色土
2. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nhp)

第112号土坑

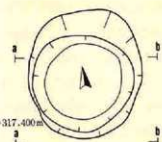


L=317.600m

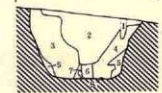


1. 10YR 弱 黑色土
2. 10YR 弱 暗褐色土(含Nhp)
3. 10YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
4. 10YR 弱 暗褐色土
5. 10YR 弱 暗褐色土
6. 10YR 弱 暗褐色土
7. 10YR 弱 黄褐色土(Nb)
8. 10YR 弱 黑褐色土
9. 10YR 弱 暗褐色土

第110号土坑

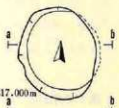


L=317.400m



1. 7.5YR 弱 黑色土
2. 7.5YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nhp)
6. 7.5YR 弱 黑褐色土
7. 7.5YR 弱 褐色土

第111号土坑



L=317.000m



1. 7.5YR 弱 黑褐色土(含Nhp)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 黑褐色土
6. 7.5YR 弱 褐色土

第113号土坑



第109图 第107~113号土坑

土の3層に大別される。(平・断面形、規模)開口部径114cmほどのやや不整な円形で、断面は盤状である。(壁)ほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅱ層上位を底面とし平坦である。皿状である。検出面からの深さは約25cmである。(遺物)作図は省略したが、縄文のみの体部小破片1点が埋土中より出土した。

第110号土坑 (第109図、第139図、写真図版57、116)

(位置)Ⅱ区上位北斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、暗褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約165cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)内傾して立ち上がる。(底面)Ⅱ層を底面とし、やや皿状で平坦である。検出面からの深さは約70cmである。(遺物)いずれも埋土中から出土した。100～102は削器である。101は両面加工であるが100と102は片面加工である。697は沈線文である。表に赤く彩色されている。696と698は口縁部の器形に違いがみられるが、単節斜縄文が口縁部まで施文されている。作図は省略したが、他にも縄文のみの体部片が5点出土している。底面から小石が1個出土する。

第111号土坑 (第109図、第140図、写真図版58)

(位置)Ⅱ区上位北側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約125cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)底面から外傾しながらも直線的に立ち上がるが、上位は外反する。(底面)Ⅱ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約68cmである。

(遺物)埋土中から699が出土した。口唇部には上からコイル状に、口縁部には横位に縄文が押圧される。底面から垂角礫が6個出土する。

第112号土坑 (第109図、写真図版58)

(位置)Ⅱ区上位南側斜面に位置する。(重複)第5号住居址と重複し、同住居址によって切られる。(埋土)上位から黒褐色土と暗褐色土に大別される。自然堆積と思われる。(平・断面形、規模)開口部径約110cmの円形で、断面は盤状である。(壁)ほぼ直角に立ち上がる。

(底面)Ⅱ層下位を底面とする。南北に長い落ち込みがある。西に柱穴状土坑がある。やや南に傾斜し、若干の凹凸がある。(遺物)なし。

第113号土坑 (第109図、写真図版58)

(位置)Ⅱ区上位南側斜面に位置する。(重複)第5号住居址と重複し、同住居址を切る。

(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。
(平・断面形、規模) 開口部径約90×100cmの長円形で、断面は盤状である。(壁) 下位の一部は抉られて広がる。(底面) Ⅴ層直上を底面とし水平かつ平坦である。検出面からの深さは28cmである。(遺物) なし。

第114号土坑 (第110図、写真図版59)

(位置) Ⅱ区上位北側斜面に位置する。(重複) 第17号住居址及び柱穴状土坑と重複し、第11号住居址に隣接する。同住居址を切り、同土坑に切られる。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・極暗褐色土・灰黄褐色土・褐色土の5層に大別される。底面中央部に40×40×25cm程の十和田a降下火山灰土の堆積土を検出したが、これは検出面から連続する流れ込みとしてとらえられる。北側の底面には厚さ30cmもの褐色の土塊が環状に検出されたが、これは上位の壁が崩落したものである。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約210cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 南西壁を除く底面から壁の崩落土が検出されたが、全体になお内彎して立ち上がる。(底面) X層下位面を底面とし、ほぼ水平かつ平坦である。検出面からの深さは85cmである。(遺物) なし。

第115号土坑 (第110図、第140図、写真図版59)

(位置) Ⅱ区上位東斜面に位置する。(埋土) 上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約145cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 中～上位は崩壊が進み、下位はほぼ直角に立ち上がる。最も良好に保存されていた西壁は内傾して立ち上がる。(底面) X層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約38cmである。(遺物) 700を含め5片が埋土中から出土した。すべて単節斜縄文のみの体部片であり、700を除いて作図は省略した。

第116号土坑 (第110図、第140図、写真図版59、116)

(位置) Ⅱ区上位東斜面に位置する。(埋土) 上位から極暗褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況である。(平・断面形、規模) 開口部径約120cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。(底面) X層上位を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約33cmである。(遺物) 埋土中から701を含む2点出土した。701は太い沈線で区画する磨滑縄文である。他の1片は単節斜縄文の体部片であり作図は省略した。

第117号土坑（第110図、写真図版60）

（位置）Ⅱ区上位東側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約80～85cmのやや不整形円で、断面は盤状である。（壁）上位は削平され消失する。斜面の下位側はほぼ直に立ち上がる。（底面）Ⅱ層を底面としほぼ水平かつ平坦である。検出面からの深さは約22cmである。（遺物）縄文のみの小破片1点が埋土中から出土した。作図は省略した。

第118号土坑（第110図、写真図版60）

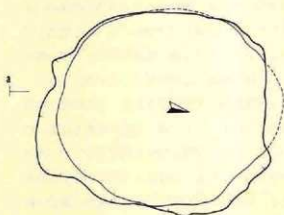
（位置）Ⅱ区上位北側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土・褐色土・暗褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約140cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）中～下位は内傾して立ち上がる。（底面）Ⅱ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約65cmである。（遺物）縄文のみの小破片2点が出土した。作図は省略したが、いずれも単節斜縄文で埋土中から出土した。

第119号土坑（第111図、第140図、写真図版60、116）

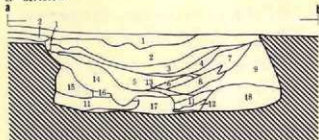
（位置）Ⅱ区上位尾根上に位置する。（重複）第6号住居址と重複し、同居居址によって切られる。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約85cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）ほとんど大きな崩落はみられず、左右対称の形で内傾して立ち上がる。（底面）Ⅱ層を底面とし、斜面下位側が僅かに低くなる。平坦である。検出面からの深さは90cmである。（その他）西壁の一部が木根によって内側に大きく押し出されているが、壁は破壊されていない。（遺物）底面の北及び東側には炭化材、北西側には702の土器と礫石、南隅に粘土塊、中央部から斜面下位側にかけて数センチの板状の粘板岩の小石が多数出土した。炭化材は長さ30cmほどのものを最大に他に数点出土した。材質はナラである。702は口縁部が外反ぎみに立ち上がる。ボタン状の瘤が貼付されたのち口縁部及び瘤に縄文原体が押圧される。また、口縁部は山形であり、頂部にはコイル状に縄文が押圧される。頸部には浅い沈線が一本まわる。体部は単節斜縄文が横位に回転施文される。胎土は緻密であるが、繊維が混入している。焼成は良い。

第120号土坑（第111図、第140図、写真図版61、116～117）

（位置）Ⅱ区中位南側斜面に位置する。（重複）遺構との重複はないが、水道管の埋設に伴い帯状に一部攪乱を受けている。（埋土）セクションベルトがちょうど攪乱痕にかかったため、本土坑の埋土は不明である。（平・断面形、規模）平面形は攪乱や急斜面に位置するため、一部流失し不明瞭となっている。底面径85×115cmほどの楕円状で、断面はフラスコ状である。

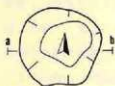


L=317.000m

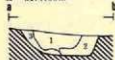


- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 7.5YR 弱黑褐色土 | 10. 7.5YR 弱黑褐色土 |
| 2. 7.5YR 弱黑褐色土 | 11. 7.5YR 弱黑褐色土 |
| 3. 7.5YR 弱黑褐色土(含C) | 12. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 4. 7.5YR 弱黑褐色土 | 13. 7.5YR 弱黑褐色土 |
| 5. 7.5YR 弱黑褐色土 | 14. 7.5YR 弱黑褐色土(含Tea) |
| 6. 7.5YR 弱黑褐色土 | 15. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 7. 7.5YR 弱黑褐色土 | 16. 10YR 弱黑褐色土 |
| 8. 7.5YR 弱暗褐色土(含Tea) | 17. 10YR 弱黑褐色土 |
| 9. 7.5YR 弱暗褐色土 | 18. 7.5YR 弱黑褐色土 |

第114号土坑

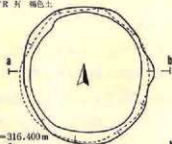


L=317.700m

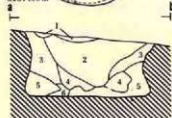


- | |
|---------------------|
| 1. 7.5YR 弱黑褐色土 |
| 2. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 3. 7.5YR 弱褐色土(含Nbp) |

第117号土坑

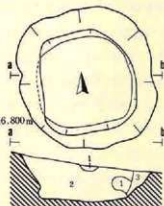


L=316.400m



- | |
|----------------------|
| 1. 7.5YR 弱褐色土 |
| 2. 7.5YR 弱暗褐色土(含Nbp) |
| 3. 7.5YR 弱褐色土 |
| 4. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 5. 7.5YR 弱褐色土(含Nbp) |
| 6. 7.5YR 弱黑褐色土 |

第118号土坑

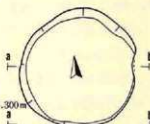


L=316.800m



- | |
|----------------|
| 1. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 2. 7.5YR 弱黑褐色土 |
| 3. 7.5YR 弱褐色土 |

第115号土坑



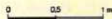
L=316.300m



- | |
|----------------------|
| 1. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 2. 7.5YR 弱暗褐色土(含Nbp) |
| 3. 7.5YR 弱暗褐色土 |
| 4. 7.5YR 弱褐色土 |

第116号土坑

第110图 第114号~118号土坑



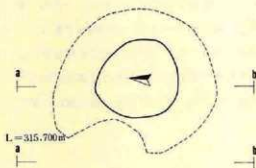
(壁) 大部分の壁は緩く立ち上がるが、北壁の下位は明瞭に内傾して立ち上がる。(底面) X層を底面とし、ほぼ水平であるが、大きな凹凸となっている。検出面からの深さは約60cmである。(遺物) ほとんどが埋土中～下位から出土した。103は扁平で全面がつるつると磨滅している。三角形の1つの角が使用されている。敲石である。703は細い隆帯を貼付し、その間に原体を折り曲げて押圧する爪形文が施される。704は口縁部の山形突起で、孔があけられている。瘤と隆帯を貼付し、間に細い割箸状工具による連続刺突文が施文される。705は瘤と隆帯が貼付される山形口縁の突起部である。706は縄文を施文した上に細い隆帯が貼布される。隆帯の剥落が目だつ。707は磨消縄文である。708は口唇部に隆帯を貼付し肥厚させ、太い沈線がはいる。山形口縁の頂部にはドーナツ状に隆帯が貼付される。口縁部まで縄文が施文された上を3本1組の浅い沈線による沈線文が施される。709～710も縄文の上に沈線文が施文される。711は口縁部が直立する小型の壺又は注口土器状の口縁部破片である。口唇部直下と頸部に沈線が平行にまわり、間を磨消している。胎土は小石混りできわめて粗い。712は隆帯を口唇部に貼付し肥厚させ、縄文を口縁部まで施文する。その上に細い隆帯を貼付したものであるが、隆帯は剥落している。713は単節斜縄文のみの口縁部破片である。714は平底の底部片であり、715はミニチュア土器の底部片である。715一は口縁部が外反するように膨らみ、隆帯が口唇部に液状に貼布される。体部には羽状縄文が施文される。胎土には繊維が混入している。以上の土器片のほかに、多数の土器片が出土したが、いずれも同一個体か又は同系統の破片であること、極小破片であること等により作図は省略した。以上の遺物は本土坑の位置からみて流入したものであるが、人為的かどうかは不明である。

第121号土坑(第111図、写真図版61)

(位置) II区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土・暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土の4層に大別される。埋土8は砂・粘土、南部浮石・黒色土等の混土であり、人為的な堆積の可能性がある。1～7は自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約180cmの不整円で、断面はフラスコ状である。(壁) 頸部から下位は大きな崩落はなく、内傾する。(底面) X層下位を底面とし、水平かつ平坦であるが、斜面の上位側は緩く上がる。検出面からの深さは約120cmである。(遺物) 埋土中から縄文のみの体部片3片が出土した。作図は省略した。

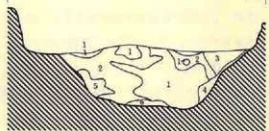
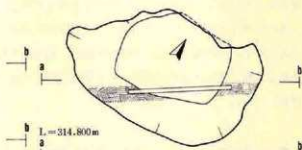
第122号土坑(第112図、第141図、写真図版61、117)

(位置) II区中位尾根上に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黄褐色土・黒褐色土・濃い黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 頸部径150cmの



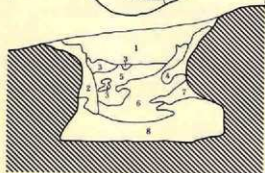
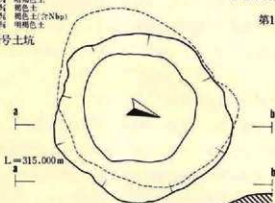
1. 7.5YR 灰 黑褐色土
2. 7.5YR 灰 暗褐色土
3. 7.5YR 灰 暗褐色土
4. 7.5YR 灰 暗褐色土
5. 7.5YR 灰 暗褐色土
6. 7.5YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
7. 7.5YR 灰 暗褐色土

第119号土坑



1. 10YR 灰 黑色土
2. 10YR 灰 黑褐色土
3. 10YR 灰 褐色土(含Nbp)
4. 10YR 灰 褐色土
5. 10YR 灰 黄褐色土(含Nbp)
6. 10YR 灰 棕色-黄褐色土

第120号土坑



1. 10YR 灰 黑色土(含Nbp)
2. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
3. 10YR 灰 暗褐色土
4. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
5. 10YR 灰 暗褐色土
6. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
7. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
8. 10YR 灰 暗褐色土

第121号土坑

第111图 第119号~121号土坑



円形で、断面はフラスコ状である。(壁)凹凸をもちながら内傾して立ち上がる。(底部) X層下位を底面とし、水平かつ平坦で硬くしまっている。検出面からの深さは約85cmである。

(遺物) 埋土中から 716 と他に縄文のみの土器片 1 片が出土した。716 は口縁部が外反きみに立ち上がる山形口縁である。器面が磨滅し、縄文が不鮮明であるが、口縁部には縄文圧痕が二条施文され、体部には単面と思われる縄文が僅かに見られるが、不明である。器表面には煤が付着している。胎土には繊維が含まれる。

第 123 号土坑 (第 112 図、第 141 図、写真図版 62、117)

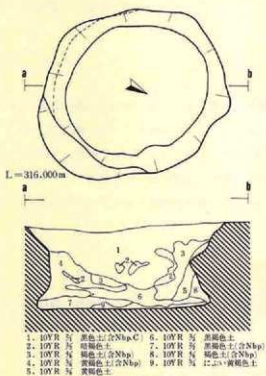
(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 底面に薄く褐色土が堆積するほかは、黒褐色土の単層である。(平・断面形、規模) 開口部径約 130 cm の円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 全体に内傾して立ち上がり、下位には挟りもみられる。(底面) X 層を底面とし、平坦でしまりもよい。中央が低くなる皿状である。検出面からの深さは 45 cm である。(遺物) 717 は口唇部に隆帯を貼付し肥厚させている。肥厚した口唇部には波状に隆帯が貼付され、隆帯上には隆帯に沿って縄文原体が押圧される。口縁部は縄文原体を平行に押圧した後隆帯が平行に貼付され、隆帯間を隆帯で結ぶ。隆帯にはコイル状に縄文原体が押圧される。718 は 717 と同一個体と思われる。体部は単面斜縄文である。719 は口唇部に隆帯を貼付し、折り返し口縁状になっている。720 は平底の底部片で繊維が含まれている。作図は省略したが、他に 7 点の小破片の土器が出土した。いずれも図示した土器のいずれかと同一個体と思われる。

第 124・125 号土坑 (第 112 図、写真図版 62)

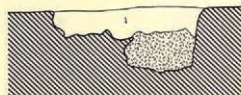
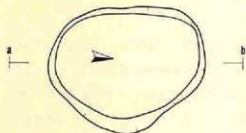
(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(重複) 124 号と 125 号は重複し、124 号が 125 号を切る。(埋土) 124 号は暗褐色土の単層である。125 号は黒褐色土と暗褐色土の 2 層に分かれる。(平・断面形、規模) 124 号は開口部径約 130 × 160 cm の不整楕円形で、断面はピーカー状である。125 号は開口部径約 85 cm のやや不整な円形で、断面はピーカー状である。(壁) ともに直角に立ち上がる。(底面) ともに水平ではあるが凹凸がある。124 号は IX 層を底面とし、検出面からの深さは約 25 cm であり、125 号は XI 層を底面とし 125 号の検出面からの深さは約 70 cm である。(遺物) 埋土中から、縄文のみの土器片と底部片が出土した。作図は省略した。

第 126 号土坑 (第 113 図、写真図版 62)

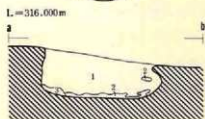
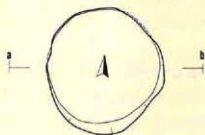
(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の 3 層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 150 cm の円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 上位の壁は削平されている。全体に内傾するが、下位の一部は



第122号土坑

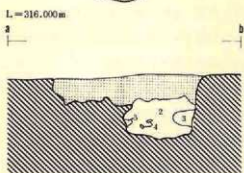
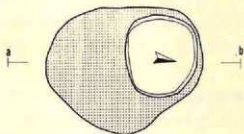


第124号土坑



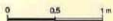
1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nhp)
 2. 10YR 5/ 褐色土(含Nhp)
 3. 10YR 5/ 褐色土(Nh)

第123号土坑



1. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
 2. 10YR 5/ 黑褐色土
 3. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
 4. 10YR 5/ 黑褐色土

第125号土坑



第112图 第122号~125号土坑

鋭く抉られる。(底面)Ⅹ層を底面とし、中央が低くなる皿状である。平坦である。(遺物)埋土中から縄文のみの土器片が1片出土した。

第127号土坑(第113図、写真図版63)

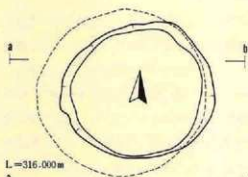
(位置)Ⅱ区中位尾根上に位置する。(埋土)黒褐色土と褐色土の2層に大別される。褐色土は南部浮石や黒色土が混土となっている。人為的な埋め戻しと考えられる。(平・断面形、規模)開口部がやや東西に広がるが、径110cmのほぼ円形で、断面はフラスコ状である。(壁)一部に崩落もみられるが、ほぼ内傾して立ち上がる。(底面)Ⅹ層の最下位を底面とし、一部はⅪ層となっている。平坦で皿状を呈する。検出面からの深さは約60cmである。(遺物)埋土中から縄文のみの土器片4片が出土した。

第128号土坑(第113図、写真図版63)

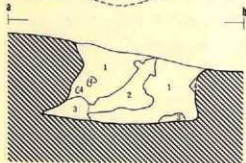
(位置)Ⅱ区中位尾根上に位置する。(埋土)暗褐色土の単層である。(平・断面形、規模)開口部径約100cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)大きく削平を受け、大部分は消失している。斜面の上位側に僅かに壁が直に立ち上がる。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは最大で約20cmである。(遺物)埋土中から縄文のみの体部片、20片出土した。すべて単節斜縄文である。作図は省略した。

第129号土坑(第113号、第142図、写真図版63、117)

(位置)Ⅱ区中位尾根上に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)西側の開口部は崩壊が進んでいるため開口部は楕円形となる。頸部は径約100cmのほぼ円形で、断面はフラスコ状である。(壁)斜面上位側の壁は上位は大きく外反し、下位は内傾して立ち上がる。斜面下位側は削平され、壁高僅かに20cmを測るのみである。(底面)Ⅹ層を底面とし、ほぼ水平かつ平坦である。検出面からの深さは約40cmである。(遺物)埋土中から石器は104が1点出土した。破片であるが、一面のみつるつるに磨滅している。砥石と思われる。土器もすべて埋土中から出土したものである。721は隆帯と割箸状工具による連続刺突文である。722は山形に縁の頂部に隆帯が貼付される。隆帯は口唇部の上と口縁部側に垂下するように付けられ、最頂部には棒状刺突が1点施される。口縁部には2本1組の沈線が施文される。723は磨消縄文が幾何学的文様をえがく。724～5はともに口唇部に隆帯を貼付し肥厚させている。作図は省略したが723と同様な土器片1片及び縄文のみの体部片6片が出土している。

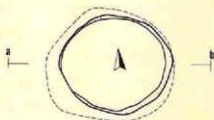


L=316.000m



1. 10YR 5/2 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/2 暗褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/2 褐色土
4. 10YR 5/2 红土(含C)

第126号土坑

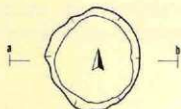


L=315.500m

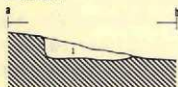


1. 10YR 5/2 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/2 暗褐色土(含Nbp)
3. 10YR 5/2 褐色土(含Nbp)

第127号土坑

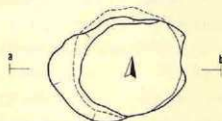


L=315.300m



1. 10YR 5/2 暗褐色土(含Nbp)

第128号土坑



L=315.000m



1. 10YR 5/2 暗褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/2 黑褐色土
3. 10YR 5/2 黑褐色土(含Nbp)
4. 10YR 5/2 褐色土(含Nbp)
5. 10YR 5/2 暗黄褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/2 暗褐色土(含Nbp)

第129号土坑

0 0.5 1m

第113图 第126号~129号土坑

第130号土坑 (第114図、第142図、写真図版64、118)

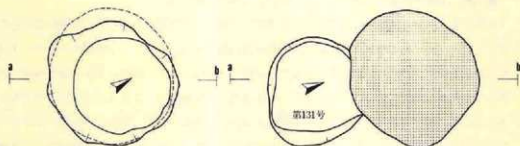
(位置) II区中位尾根上に位置する。(埋土) 上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黒褐色土の5層に大別される。埋土6は粉炭と南部浮石を含む混土であり、埋土5は同じ褐色土の中にも硬いブロック状の土塊が混入する。この5・6の埋土は人為的な埋め戻しと考えられる。上位は自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部は径120～140cmの不整形で、断面はフラスコ状である。(壁) 斜面の下位側の壁は凹凸をもちながらもほぼ直角に近い立ち上がりとなるが、斜面上位側の壁は頸部付近で急に内傾する。(底面) X層下位を底面とし一部はY層に達する。緩く波打つがほぼ水平である。検出面からの深さは115cmである。(遺物) 作図した3片のほかに6片の縄文のみの体部片が埋土中から出土した。726は隆帯と瘤が貼付される山形口縁の突起部である。727は網目状捻糸文と思われる。728は口縁部がナテ調整される縄文のみの口縁部破片である。

第131・132号土坑 (第114図、写真図版64)

(位置) II区中位北側斜面に位置する。(重複) 131号と132号は重複し、131号は132号によって切られる。(埋土) 131号は暗褐色土と褐色土の2層に大別される。褐色土はいろいろな土の混土で、堆積も不規則であることから、人為的な埋め戻しと考えられる。なお、埋土中から2個の垂角礫が出土する。132号の埋土は上位から黒褐色土と黒色土に分かれる。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 131号は開口部径約110cmの円形で、断面はピーカー状である。132号は開口部径約140cmの円形で、断面はフラスコ状を呈する。(壁) 131は直角に立ち上がり、132号の下位は内傾する。(底面) ともにX層を底面とするが、131は多少の凹凸が見られるがほぼ水平であるのに対し、132号は平坦で皿状を呈する。検出面からの深さは131号は約30cm、132号は約65cmである。(遺物) なし。

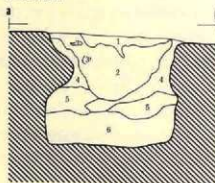
第133号土坑 (第114図、第142図、写真図版64、118)

(位置) II区中位北側斜面に位置する。(埋土) 埋土2は壁の崩落土である。ほぼ黒褐色の単層である。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約120cmの円形で、断面形はフラスコ状である。(壁) 底面から直線的に内傾して立ち上がる。(底面) X層を底面とし水平かつ平坦でよくしまっている。検出面からの深さは約45cmである。(遺物) 図示した2点以外の縄文のみの体部片6片も含めすべて埋土中から出土した。729は羊歯状文である。730は口縁部付近まで縄文が施文される。体部片6片の中には網目状捻糸文1片が含まれる。



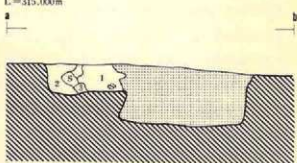
L=314.800m

L=315.000m



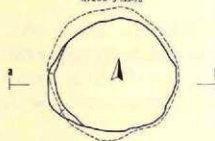
1. 10YR 5/ 黑色土
2. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nkp)
3. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nkp)
4. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nkp)
5. 10YR 5/ 褐色土
6. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nkp,C)

第130号土坑

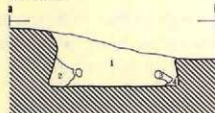


1. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nkp)
2. 10YR 5/ 褐色土
3. 10YR 5/ 褐色土

第130号土坑

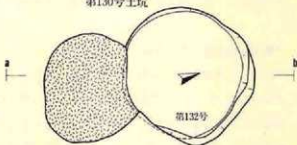


L=315.300m

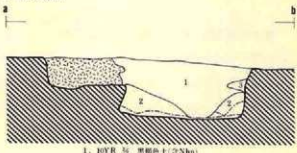


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nkp)
2. 10YR 5/ 暗褐色土(Nh)
3. 10YR 5/ 褐色土
4. 10YR 5/ 暗褐色土

第133号土坑



L=315.000m



1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nkp)
2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nkp)
3. 10YR 5/ 黄褐色土

第131、132号土坑

0 0.5 1m

第114图 第130号~133号土坑

第 134、135 号土坑 (第 115 図、第 142 図、写真図版 65、118)

(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(重複) 134 号と 135 号は重複し、135 号が 134 号を切っている。(検出状況) 135 号は南部浮石粒を含む黒褐色の円形プランが確認されたが、134 号は地山と識別がつかず、135 号を精査中に壁面から検出した。(埋土) 134 号は暗褐色ではあるが詳細は不明である。135 号は上位から黒褐色土、暗褐色土、黒色土の 3 層に大別される。下位の埋土は漸移する。自然堆積か人為堆積かは不明である。(平・断面形、規模) 134 号は開口部径が約 85cm の円形で断面はピーカー状である。135 号は開口部径が約 110cmほどの不整円形であり、断面はフラスコ状である。(壁) 134 号はほぼ直角に近い立ち上がりを呈し、135 号は下位で広がる。(底面) 134 号はⅡ層、135 号はⅤ層を底面とし、ともに水平かつ平坦である。検出面からの深さは 134 号は約 16cm、135 号は 45cm である。(遺物) 図示した 2 点を含み 4 点が 135 号の埋土中から出土した。731 は埋土下位(断面図の点線部)より横位の状態で出土した台付鉢の完形品である。口縁部の一部は多少破損している。口縁部には羊歯状文が口唇部にはキザミ目が施文される。口縁部の 1ヶ所に突起が付けられる。体部は単節斜縄文である。台部は入念にヘラミガキされ、先端部には帯状に縄文が施文される。台部は赤色で彩色されている。体上半部には煤の付着が、入念にヘラミガキされた内側には残滓が付着している。体部に施文される縄文は細粒の単節斜縄文である。732 は平行沈線文である。

第 136 号土坑 (第 115 図、写真図版 65)

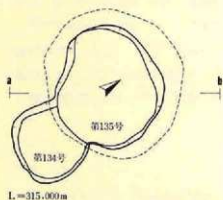
(位置) II 区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土、にぶい黄褐色土、褐色土の 3 層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 125cm の円形で断面はピーカー状である。(壁) 下部は直角に立ち上がるが、しだいに外反する。(底面) Ⅴ層を底面とし、水平かつ平坦でよくしまっている。検出面からの深さは 60cm である。(遺物) なし。

第 137 号土坑 (第 115 図、写真図版 65)

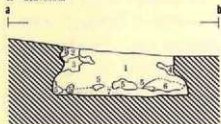
(位置) II 区中位南側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土と褐色土の 2 層である。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 78×125cm の楕円形で、断面は浅鉢状である。(壁) やや外反ぎみに立ち上がる。(底面) Ⅴ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは 35cm である。(遺物) なし。

第 138 号土坑 (第 115 図、第 143 図、写真図版 66、118)

(位置) II 区中位北側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土、黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の 5 層に大別される。1 を除く各層とも黒色土や褐色土の混土であり、層の逆転



L=315.000m



1. 10YR 5/1 黑褐色土(含Nhp, C)
2. 10YR 5/1 褐色土
3. 10YR 5/1 暗褐色土
4. 10YR 5/1 黄褐色土(含Nhp)
5. 10YR 5/1 暗褐色土
6. 10YR 5/1 黑色土
7. 10YR 5/1 褐色土

第134、135号土坑

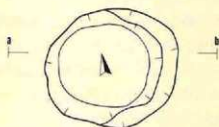


L=314.100m



1. 10YR 5/1 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/1 褐色土

第137号土坑

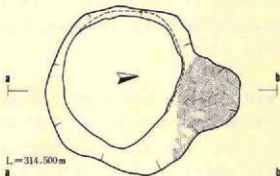


L=314.300m



1. 10YR 5/1 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 5/1 黑-黄褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/1 褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/1 褐色土
5. 10YR 5/1 黄褐色土
6. 10YR 5/1 黄褐色土
7. 10YR 5/1 褐色土

第136号土坑

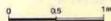


L=314.500m



1. 10YR 5/1 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 5/1 黄褐色土
3. 10YR 5/1 褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/1 黑色土
5. 10YR 5/1 黄褐色土(含Nhp)
6. 10YR 5/1 黄褐色土
7. 10YR 5/1 黄褐色土(Nhp)
8. 10YR 5/1 暗褐色土
9. 10YR 5/1 褐色土

第138号土坑



第115图 第134号~138号土坑

もみられることから人為的な堆積と考えられる。(平・断面形、規模) 頸部は東西に長くなる楕円形で規模は125×140cmである。断面はフラスコ状である。(壁) 斜面上位側にフラスコ状の袈りが残る。大きく凹凸しながらも直角に近い立ち上がりとなる。(底面) X層を底面とし、皿状に平坦である。検出面からの深さは73cmである。(遺物) 埋土中位から733と体部片2片が出土した。733は磨消縄文であるが、磨耗しており原体は不明である。作図を省略した体部片はともに単節斜縄文である。

第139、140号土坑(第116図、写真図版66)

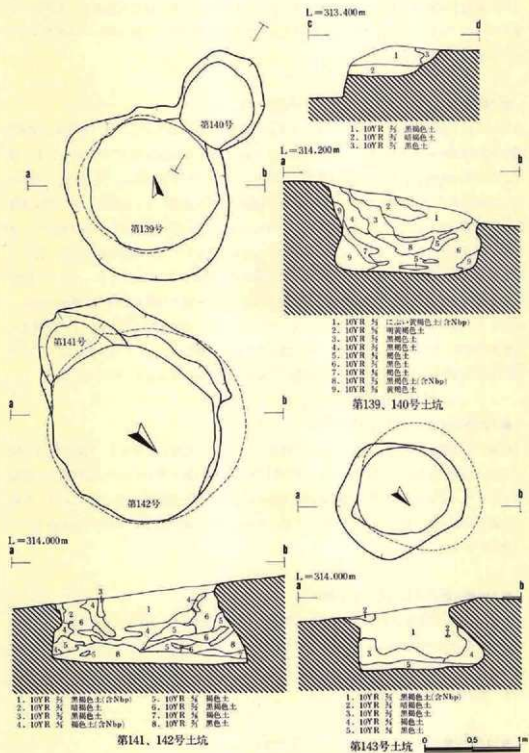
(位置) II区中位北側斜面に位置する。(重複) 139号と140号は重複する。139号が140号の壁の一部を切っている。(埋土) 139号は上位から、濃い黄褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、黒色土、褐色土の5層に大別される。下位は自然堆積状況を呈するが、上位は層が逆転し人為的な堆積と考えられる。140号は黒褐色土、暗褐色土、黒色土の3層である。全体に硬い。自然堆積と考えられる。(平・断面形、規模) 139号は頸部径約140cmの円形で断面はフラスコ状である。140号は開口部径90cmの円形で断面は盤状である。(壁) 139号の下位は内傾して立ち上がる。140号は緩く立ち上がる。(底面) 139号はX層を底面とし検出面からの深さは80cmである。140号はⅢ層を底面とし検出面からの高さは約30cmである。ともに水平かつ平坦である。(遺物) なし。

第141、142号土坑(第116図、第143図、写真図版66、118)

(位置) II区中位北側斜面に位置する。(重複) 141号と142号は重複する。141号が142号を切っている。(埋土) 141号は黒色土の単層である。142号は上位から黒褐色土、褐色土、黒色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 141号は開口部径約90cmの円形で断面はピーカー状である。142号は開口部径約170×200cmの楕円形で、断面はフラスコ状である。(壁) 141号は直に近い立ち上がりである。142号はほぼ直線的に内傾して立ち上がるが、上部は削平されている。(底面) 141号はⅢ層を、142号はX層の下位を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは141号は約20cm、142号で約75cmである。(遺物) 142号埋土中から734及び単節斜縄文のみの体部片3片が出土した。734は単節の縄文が横走る底部片である。底部は平底でヘラナデ調整をしている。

第143号土坑(第116図)

(位置) II区中位北側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒褐色土と褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 頸部径で95cmの円形で、断面はフラスコ状である。



第116图 第139号~143号土坑

(壁) 斜面上位側は内傾し直線的に立ち上がるが、斜面の下位側はほぼ直立する。上位は削平されている。(底面) X層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約65cmである。(遺物) なし。

第144号土坑(第117図、第143図、写真図版67、118)

(位置) II区中位東側斜面に位置する。(埋土) 暗褐色土の単層である。(平・断面形、規模) 開口部径約100cmのはほぼ円形で、断面は盤状である。(壁) 斜面上位側は外反するが、下位側はほぼ直角に立ち上がる。(底面) VIII層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約25cmである。(遺物) 735～740及び単節斜縄文のみの体部片3片が出土した。735は磨消縄文で縄文帯の交差点に瘤が貼付される。壺又は注口土器の破片である。736は小破片となつて一括出土したものである。口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、体中央部が最大の張り出しとなる壺である。頸部は2本の平行沈線により区画され、研磨された無文帯となっている。頸部以外は羽状縄文である。底部は小さいが明瞭な台付である。胎土は緻密で薄く、焼成は良い。接合しない破片もあるが、ほぼ完形となる。737～9は同一個体の破片である。よく研磨された器表面に細い帯が浮き彫りにされ、その帯に連続刺突が施文される。帯状文の上にドーナツ状の隆帯が貼付される。器種は不明である。740は平底の底部であるがやや凸状である。

第145号土坑(第117図、写真図版67)

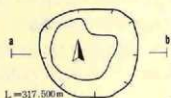
(位置) II区中位東側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約150cmのはほぼ円形で、断面は、ピーカー状である。(壁) ほぼ直角に立ち上がる。上位は削平されている。(底面) X層上位面を底面とし、水平ではあるが凹凸となっている。検出面からの深さは約60cmである。(遺物) なし。

第146号土坑(第117図、写真図版67)

(位置) II区中位東側斜面に位置する。(埋土) 上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約118cmの正円で、断面はピーカー状である。(壁) 上位は崩壊が進む。(底面) X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約55cmである。(遺物) なし。

第147号土坑(第117図、第143図、写真図版68、118)

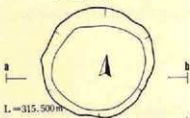
(位置) II区中位東側斜面に位置する。(埋土) 黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。堆



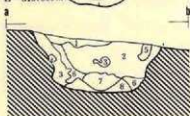
L=317.500m



第144号土坑

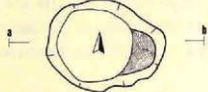


L=315.500m

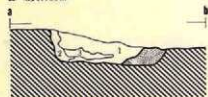


- | | | |
|-----------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 10YR 5/ 黑色土 | 5. 10YR 5/ 黑色土 | 7. 10YR 5/ 暗褐色土 |
| 2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp) | 6. 10YR 5/ 暗褐色土 | 8. 10YR 5/ 暗褐色土 |
| 3. 10YR 5/ 暗褐色土 | 7. 10YR 5/ 暗褐色土 | |
| 4. 10YR 5/ 暗褐色土 | 8. 10YR 5/ 暗褐色土 | |

第145号土坑

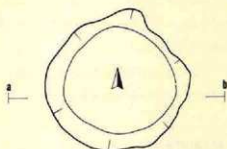


L=314.700m

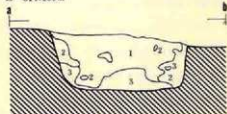


- | |
|-----------------------|
| 1. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp) |
| 2. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp) |
| 3. 10YR 5/ 暗褐色土 |

第146号土坑

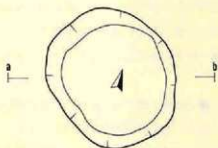


L=314.800m

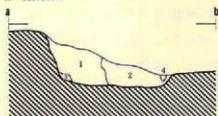


- | |
|-----------------|
| 1. 10YR 5/ 黑色土 |
| 2. 10YR 5/ 暗褐色土 |
| 3. 10YR 5/ 暗褐色土 |

第147号土坑

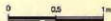


L=315.500m



- | |
|-----------------------|
| 1. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nbp) |
| 2. 10YR 5/ 黑色土 |
| 3. 10YR 5/ 暗褐色土 |
| 4. 10YR 5/ 暗褐色土 |

第148号土坑



第148号土坑

第117图 第144号~148号土坑

積状況は不明である。(平・断面形、規模)底部径約110cmのは円形で、断面はピーカー状を呈する。(壁)斜面の下位側はほとんど削平されている。(底面)X層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。硬くしまっている。最大壁高約50cmである。(遺物)埋土中より3点出土した。741～2は縄文が口縁部まで施文される。単節斜縄文である。743は肥厚する口唇部に渦巻状の沈線文が施文される。

第148号土坑(第117図、写真図版68)

(位置)Ⅱ区中位東側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の3層に大別される。(平・断面形、規模)底部径約80cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)斜面の上位側は直線的に立ち上がるが、下位側は地山との境が不明瞭なため一部掘り過ぎた。(底面)Ⅳ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約20cmである。(遺物)なし。

第149号土坑(第118図、写真図版68)

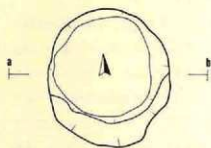
(位置)Ⅱ区中位東側斜面に位置する。(埋土)黒色土と黒褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約120cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)斜面下位側の壁は緩く立ち上がるが、上位側はほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅳ層下位を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約35cmである。(遺物)なし。

第150号土坑(第118図、写真図版69)

(位置)Ⅱ区下位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)頸部径約110cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)底面から中位までは内湾ぎみに立ち上がり、上位は大きく外反する。(底面)X層下位を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約80cmである。(遺物)なし。

第151号土坑(第118図、写真図版69)

(位置)Ⅱ区下位尾根上に位置する。(埋土)上位から黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約85×120cmの楕円形で長軸方向は斜面の方向と一致する。断面は盤状である。(壁)斜面下位側の壁は一部不明瞭なところもある。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約30cmである。(遺物)なし。

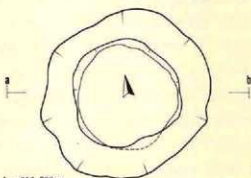


L=314.500m

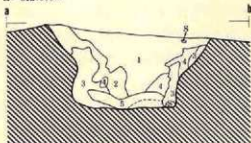


1. 10YR 与 黑色土
2. 10YR 与 黑褐色土
3. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
4. 10YR 与 黑褐色土
5. 10YR 与 褐色土
6. 10YR 与 黑褐色土

第149号土坑



L=312.500m



1. 10YR 与 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp,C)
3. 10YR 与 褐色土(含Nhp)
4. 10YR 与 暗褐色土
5. 10YR 与 黑褐色土

第150号土坑

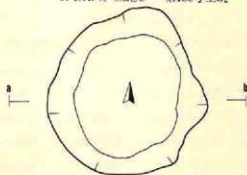


L=313.000m

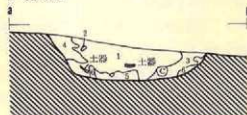


1. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 与 暗褐色土(含Nhp)
3. 10YR 与 暗褐色土

第151号土坑



L=312.500m



1. 10YR 与 黑色土(含Nhp,C)
2. 10YR 与 黑色土
3. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp,C)
4. 10YR 与 黑褐色土(含Nhp)
5. 10YR 与 暗褐色土
6. 10YR 与 暗褐色土
7. 10YR 与 褐色土

第152号土坑

0 0.5 1m

第118图 第149号~152号土坑

第 152 号土坑 (第 118 図、第 144 ~ 145 図、写真図版 69、118 ~ 119)

(位置) II 区下位尾根上に位置する。(埋土) 上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土の 3 層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模) 開口部径約 165 cm の円形で、断面は盤状である。(壁) 斜面上位側は外反しながらも直線的に立ち上がるが、下位側は緩やかな曲線を描いて立ち上がる。(底面) X 層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約 35 cm である。(遺物) 本土坑から出土した遺物は、すべて埋土中～下位から一括して出土したものである。105 は半円状扁平打製石器である。弧状の刃部には使用痕はみられず、直線部は磨滅している。106 は図の上の部分で磨滅していることから砥石として使用された可能性がある。その後、打ち欠いているが未完成品と思われる。用途不明である。744 は体下半部を欠く壺である。頸部と口唇部に一本の沈線がまわる。頸部は無文帯である。口縁部の 1ヶ所が小さな山形状となり両脇に B 型突起が付けられる。口縁部内側に一本の沈線がまわる。体部は細粒の単節斜縄文が施文される。内面は丁寧にミガキが施される。745 は 744 と同様に短い頸部が直立する。体上半部が膨らみ、体下半部にかげすばまる小型の鉢である。口縁部内側に沈線が一本まわる。口唇部には刻み目がつけられ、頸部は無文である。体部は無節斜縄文が施文される。体下半部を欠く。746 は全体の坯が残存する。口縁部には 3 本の平行沈線がまわり、その間には細い割箸状工具による連続刺突文が細かく施文される。口唇部には二又状の突起が付けられ、両側には B 型突起が付けられる。同突起により口縁部は 4 分割される。また口唇部にもキザミが付けられる。体部には単節斜縄文が施文される。体部下端に沈線が一本まわる。底部は平底である。外側には煤が、内側には残滓が付着する。747 は口唇部は一部欠損するがほぼ完形品に近い。小型の台付鉢である。体下半部まで入組文が施文される。口縁部上端には部分的に隆帯が貼付され、B 型突起も付けられる。高台は透かし影りとなっている。口唇部は欠損が著しいため詳細は不明であるが、内側に沈線がまわる。全面に残滓が付着する。748 は 2 本の沈線によって口縁部を作り、口唇部は側面から指頭圧痕が、上には沈線がまわる。749 ~ 750 は平底の底部片である。751 は沈線によって区画された口縁部は無文帯である口唇部は肥厚し、内側に沈線が一本まわる。752 は口唇部に縄文原体圧痕が 2 条まわる。結束第 1 種の羽状縄文である。胎土に多量の繊維が混入する。753 は口縁部には 4 条の縄文原体圧痕がまわり、体部との境には微隆帯が貼付され、その上に棒状刺突が施される。体部は木目状撫糸文である。胎土に繊維が含まれる。754 は 2 本の沈線によって無文帯の口縁部が作られる。口唇部は二又状の突起が付き、キザミも施される。作図を省略したこの他の土器片には、ミニチュア土器と思われる小さな底部片を含み約 50 点出土する。これらはすべて縄文のみの体部小破片である。このほかに、丸太状の 3 本の炭化材が底面直上から出土する。2 本は 30 cm ほど、1 本は 10 cm ほどの大きさである。材質はナラとセンである。(遺構の時期) 744 ~ 8 の土器が一括し下位か

ら出土したことにより、本土坑は晩期中葉と考えられる。

第153号土坑（第119図、写真図版70、119）

（位置）Ⅱ区下位北側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径が約105×135cmの南北に長軸をとる楕円形で、断面はピーカー状である。（壁）斜面の上位側はほぼ直角に立ち上がるが、下位側は外反する。上部は削平されている。（底面）X層上位を底面とし、平坦でしまりもよい。やや斜面の下位側に傾むく。検出面からの深さは35cmである。（遺物）755は口縁部には4段に単軸絡条体側面圧痕文が押圧され、体部には木目状縹糸文が施文される。胎土に繊維が含まれる。756は隆帯にコイル状に縄文が押圧される。757は口縁部と体部との境に隆帯が貼付され、隆帯にはコイル状の縄文が押圧される。口縁部には単軸絡条体側面圧痕文が施文される。758は無文である。折り返し口縁となっている。作図は省略したが、このほかにも縄文のみの体部片3片が出土した。これらは、いずれも埋土中から出土したものである。

第154号土坑（第119図、写真図版70）

（位置）Ⅱ区下位北側斜面に位置する。（重複）第8号住居址と重複し、同住居址によって切られている。（埋土）上位から黒色土、褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約130cmの円形で、断面は盤状である。（壁）外反ぎみに立ち上がる。（底面）Ⅱ層直上を底面とし、水平かつ平坦であるが、壁際はやや高くなる。検出面からの深さは約30cmである。（遺物）なし。

第155号土坑（第119図、写真図版70）

（位置）Ⅱ区下位東側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約150cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）底面から直線的に内傾して立ち上がる。（底面）X層を底面とし、平坦でしまりもよい。皿状である。検出面からの深さは70cmである。（遺物）なし。

第156号土坑（第119図、写真図版70）

（位置）Ⅱ区下位東側斜面に位置する。（埋土）上位から黒色土、黒褐色土、暗褐色土（シルト）、暗褐色土（Ⅱ層の崩壊土）の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）

開口部径約90cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)緩く立ち上がる。上位は削平されている。(底面)Ⅳ層上位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは30cmである。(遺物)なし。

第157号土坑(第120図、写真図版71)

(位置)Ⅱ区下位東側斜面に位置する。(重複)第8号住居址と重複し、同住居址によって切られている。また、開口部は2つの木根痕によって一部が破壊されている。(埋土)黒褐色土と暗褐色土に大別される。暗褐色土は、第8号住居址の柱穴の埋土に伴うものと思われる。

(平・断面形、規模)頸部径約85cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)南壁を除いて鋭く挟りが入る。開口部付近は崩壊が進み外反する。(底面)Ⅳ層を底面とし、平坦で硬くしまっている。皿状を呈する。検出面からの深さは約50cmである。(遺物)なし。

第158号土坑(第120図、第145図、写真図版71、119)

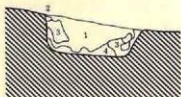
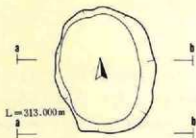
(位置)Ⅱ区下位東側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積と思われる。(平・断面形、規模)開口部径約95×115cmの楕円形状で、断面は盤状である。(壁)著しく削平されている。斜面の下位側を除くと、浅いながらも直角に近い立ち上がりとなる。(底面)Ⅳ層を底面とし、水平である。一部に凹凸が見られる。検出面からの深さは約20cmである。(遺物)759と作図は省略したが縄文のみの体部小破片1点、および垂角礫が1個出土した。759は体下半部の鉢形土器片である。単節斜縄文が施文されているが磨耗が著しい。底部は黒斑となっている。胎土は砂が多く粗い。

第159号土坑(第120図、写真図版71)

(位置)Ⅱ区下位東側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土と黒褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約110cmの円形で、断面は盤状である。(壁)斜面の下位側の一部を除くと、浅いながらも直角に近い立ち上がりとなる。上位は大きく削平されている。(底面)Ⅳ層下位面を底面とする。平坦ではあるが皿状となる。検出面からの深さは約25cmである。(遺物)なし。

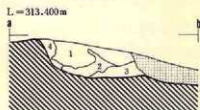
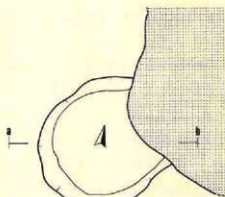
第160号土坑(第120図、写真図版72)

(位置)Ⅱ区下位東側斜面に位置する。(埋土)上位から黒色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約170cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)下位はやや内傾するが、ほぼ直角に立ち上がる。南北の両側に木



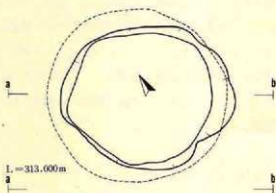
1. 10YR 5/ 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 5/ 黄褐色土
3. 10YR 5/ 暗褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/ 黑褐色土

第153号土坑



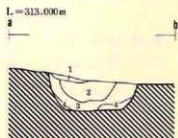
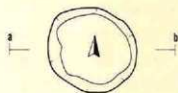
1. 10YR 5/ 黑色土
2. 10YR 5/ 黑褐色土
3. 10YR 5/ 棕色-黄褐色土
4. 10YR 5/ 褐色土

第154号土坑



1. 10YR 5/ 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nhp)
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 黄褐色土
5. 10YR 5/ 黑褐色土
6. 10YR 5/ 黑褐色土

第155号土坑



1. 10YR 5/ 黑色土
2. 10YR 5/ 黑褐色土
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 暗褐色土

第156号土坑



第119图 第153号~156号土坑

根痕がみられ、壁の一部に影響をあたえている。(底面)Ⅹ層下位面を底面とし、水平かつ平坦でしまりも良い。検出面からの深さは約83cmである。(遺物)なし。

第161号土坑(第121図、写真図版72)

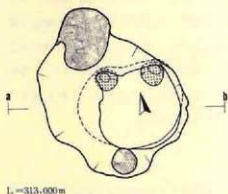
(位置)Ⅱ区下位東斜面に位置する。(重複)本土坑は2基の土坑の重複が考えられるが、平面からも、埋土の状態からも重複と断定することはできなかった。(埋土)上位から黒褐色土・褐色土・黒色土・暗褐色土・黒褐色土の5層に大別される。自然堆積と思われる。(平・断面形、規模)開口部は中央部でややくびれる楕円形状である。規模は約150×285cmである。断面は作図の右側ではフラスコ状であり、左側ではピーカー状である。(壁)図右側は下位において明瞭に内傾して立ち上がるが、左側はほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅹ層下位面を底面とする。中央部付近から、やや左に傾くがほぼ水平かつ平坦である。底面には明瞭な段差はみられない。検出面からの深さは約100cmである。(遺物)埋土中から縄文のみの体部小破片が8点出土した。作図は省略した。

第162号土坑(第121図、写真図版72)

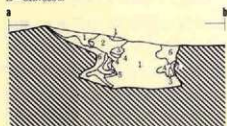
(位置)Ⅱ区下位東斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。上位は自然堆積状況を呈すが、下位は人為的な堆積と思われる。(平・断面形、規模)開口部径約165cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)開口部付近では僅かに外反するが、内壁に大きな崩壊の跡は見られない。(底面)Ⅹ層を底面とし、平坦で僅かにしまっている。皿状を呈する。検出面からの深さは約80cmである。(遺物)無文の口縁部小破片が1個出土した。縄文土器である。作図は省略した。

第163号土坑(第121図、第145図、写真図版73、119)

(位置)Ⅱ区下位尾根上に位置する。(検出状況)本土坑の上に大きな木根があった。黒褐色土の黒い落ち込みとして円形プランを把握する。鋸を使用し抜根した。その際、根の間に土器が挟まれるようにあったため、抜根は困難をきわめ、同時に遺構の大半も破壊されてしまったものである。(埋土)上位から黒褐色土・黒色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積と思われる。(平・断面形、規模)詳細は不明であるが、底面径約100cmの円形で、断面は盤状と考えられる。(壁)斜面の上位側に一部確認された。(底面)Ⅳ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約20cmである。(遺物)ほぼ底面に近いところから2点出土した。760は口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品である。口縁部は液状をえがき、平行沈線が2本まわる。頸部から体上半部に「垂」字状の磨消縄文による文様が施文される。文様体の

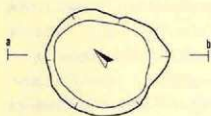


L=313.000m

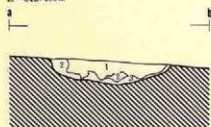


1. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nhp)
2. 10YR 5/ 黑色土
3. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nhp)
4. 10YR 5/ 暗褐色土
5. 10YR 5/ 黑褐色土
6. 10YR 5/ 暗褐色土
7. 10YR 5/ 褐色土

第157号土坑

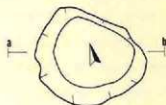


L=312.400m



1. 10YR 5/ 黑色土
2. 10YR 5/ 黑褐色土
3. 10YR 5/ 黑褐色土

第159号土坑

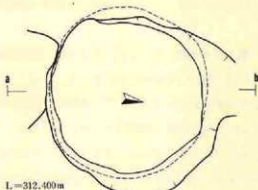


L=312.900m

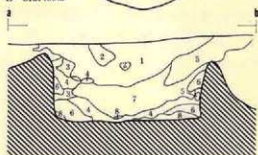


1. 10YR 5/ 黑色土
2. 10YR 5/ 暗褐色土
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 褐色土(腐土)

第158号土坑

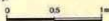


L=312.400m



1. 10YR 5/ 黑色土(含Nhp)
2. 10YR 5/ 灰黄褐色土
3. 10YR 5/ 暗褐色土
4. 10YR 5/ 褐色土
5. 10YR 5/ 黑褐色土
6. 10YR 5/ 黑褐色土(Nh)
7. 10YR 5/ 黑褐色土(含Nhp)
8. 10YR 5/ 黑褐色土

第160号土坑



第120图 第157号~160号土坑

中に施文された縄文は、区画された後から充増されたものである。文様は4区画される。体下半部には細粒の単節斜縄文が施文される。磨消部以外には赤色が彩色される。体下半部には煤が付着する。底部は平底である。761は頸部に平行沈線がまわり、肩部が張る小型の壺である。肩部から下部の縄文は横走する。細粒の単節縄文である。全面に赤色が彩色されている。外側には煤、内側には残滓が付着している。(遺構の時期)出土した2点の土器はいずれも弥生式土器の中期とみられることから、本土坑も弥生時代中期と考えられる。

第164号土坑(第122図、第145図、写真図版73)

(位置)Ⅲ区上位尾根上に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約105cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)崩壊の跡が見られず、ほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅳ層下位面を底面とし、一部はⅤ層となっている。水平かつ平坦で硬くしまっている。検出面からの深さは約33cmである。(遺物)埋土中から縄文のみの体部小破片11片と762が出土した。762は上げ底のミニチュア土器の底部片である。体部片は作図を省略した。

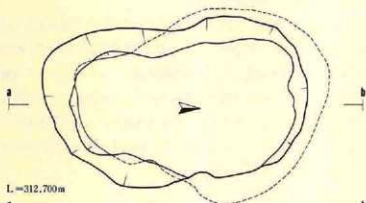
第165号土坑(第122図、第146図、写真図版73、119)

(位置)Ⅲ区上位尾根上に位置する。(埋土)上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径が約95×115cmの楕円形である。南北方向に長軸をとる。断面はピーカー状である。(壁)斜面上位側は外反し、下位側はほぼ直角に近い立ち上がりである。壁面には多少の凹凸が残る。(底面)Ⅴ層を底面とし、水平かつ平坦である。中央部に柱穴状の浅い凹が1つ検出される。検出面からの深さは約50cmである。

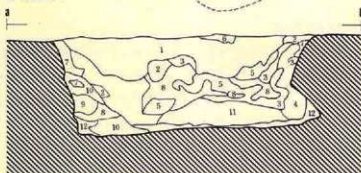
(遺物)埋土中から107、763と縄文のみの体部小破片3片が出土した。107は石斧と思われる。先端に使用痕と思われる剥離痕がみられる。763は隆帯の貼付と割箸状工具の連続刺突文である。

第166号土坑(第122図、写真図版73)

(位置)Ⅲ区上位尾根上に位置する。(埋土)上位から極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約90cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)東壁の一部が抜根によって破壊されている。大部分の壁は直角に近い立ち上がりを示す。(底面)Ⅴ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約55cmである。(遺物)埋土上位から縄文土器の体部小破片7片が出土した。1片は胎土に横縷を含む羽状縄文である。他は単節斜縄文である。作図は省略した。

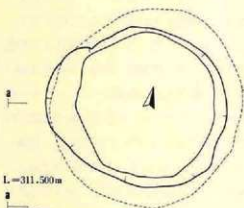


L=312,700m

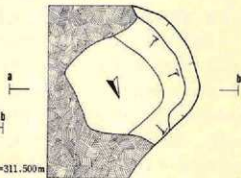
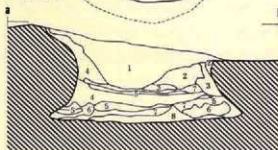


1. 10YR 5/1 黑褐色土(含Nbp)
2. 10YR 5/1 黑褐色土
3. 10YR 5/1 黑褐色土
4. 10YR 5/1 黑褐色土
5. 10YR 5/1 褐色土(含Nbp)
6. 10YR 5/1 褐色土
7. 10YR 5/1 暗褐色土
8. 10YR 5/1 暗褐色土
9. 10YR 5/1 黄褐色土
10. 10YR 5/1 黄褐色土
11. 10YR 5/1 黄褐色土
12. 10YR 5/1 褐色土

第161号土坑



L=311,500m



L=311,500m



1. 10YR 5/1 黑褐色土
2. 10YR 5/1 黑褐色土(含C)
3. 10YR 5/1 黑褐色土
4. 10YR 5/1 褐色土
5. 10YR 5/1 暗褐色土

第163号土坑

第162号土坑

0 0.5 1m

第121图 第161号~163号土坑

第167号土坑（第122図、第146図、写真図版73、119）

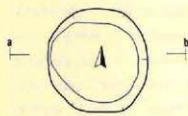
（位置）Ⅲ区上位北斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約80cmの円形で、断面は浅鉢状である。（壁）斜面の上位側はほぼ直立するが、下位側は緩るく立ち上がる。（底面）Ⅳ層上位面を底面とする。フラット部分は狭く、椀状の曲面をえがく。検出面からの深さは約25cmである。（遺物）埋土中位から764が1点出土した。764は耳飾りの土製品である。1端は径1.4cm、他の1端は径0.9cmの円形となり、中央部には径3mmの孔があく。高さは約1cmである。全面が赤色に彩色されている。完形品である。

第168号土坑（第122図、写真図版74）

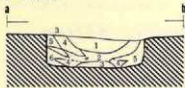
（位置）Ⅲ区上位南側斜面に位置する。（埋土）セクション・ベルトが壁際に寄ったため不明である。（平・断面形、規模）開口部径が約90cmの円形で、断面形はピーカー状である。（壁）僅かに外反するが、ほぼ直角に近い立ち上がりである。（底面）Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約40cmである。（遺物）なし。

第169～171号土坑（第123図、第146図、写真図版74、119）

（位置）Ⅲ区上位尾根上に位置する。（重複）169～171号は互いに重複する。170号が169号と171号のどちらも切っている。（埋土）169号は極暗褐色土の単層である。170号は上位から極暗褐色土・黒褐色土・褐色土、の3層に大別される。171号は上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。いずれも自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）169号は開口部径約85cm、同じく170号は120cm、171号は100cmの円形である。断面はともにピーカー状である。（壁）169号と171号はほぼ直角に近い立ち上がりとなるが、170号は体下端部は彎曲しややフラスコ状的である。しかし、全体的にはほぼ直角に近い立ち上がりである。（底面）169号はⅩ層上位面、170～171号はⅩ層下位面を底面とする。いずれも水平かつ平坦である。検出面からの深さは169号は約20cm、170号は約84cm、171号は約78cmである。170号の底面から2個の直角礫が出土する。1つはレンガ大であり、もう1つはその半分ほどである。171号は埋土中位からは直角礫が出土し、底面からも2個の扁平な直角礫が出土する。（遺物）169号からは出土していない。170号からは765～6の2片が埋土中から出土した。765は隆帯の貼付と割箸状工具による連続刺突文である。766は縄文を施文した上に沈線で縦位の長方形の区画文が施文される。171号からは作図は省略したが、埋土上位から土師器の体部破片10点、及び縄文のみの体部片7点出土した。

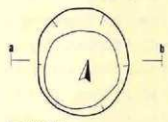


L=313.900m

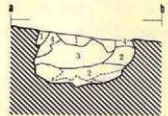


- 1. 7.5YR 5/ 黑褐色土(含C)
- 2. 7.5YR 5/ 棕褐色土
- 3. 7.5YR 5/ 黑褐色土
- 4. 7.5YR 5/ 暗褐色土
- 5. 7.5YR 5/ 暗褐色土(含Nbp)
- 6. 7.5YR 5/ 褐色土

第164号土坑

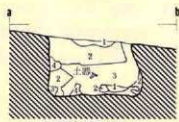
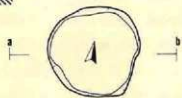


L=313.900m



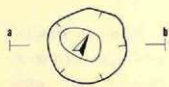
- 1. 7.5YR 5/ 黑褐色土(含Nbp)
- 2. 7.5YR 5/ 暗褐色土
- 3. 7.5YR 5/ 暗褐色土
- 4. 7.5YR 5/ 褐色土(含Nbp)

第165号土坑



- 1. 7.5YR 5/ 棕暗褐色土
- 2. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)
- 3. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)
- 4. 10YR 5/ 褐色土

第166号土坑

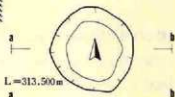


L=313.100m

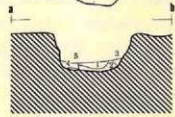


- 1. 10YR 5/ 暗褐色土
- 2. 10YR 5/ 黑色土
- 3. 10YR 5/ 暗褐色土
- 4. 10YR 5/ 黑褐色土
- 5. 10YR 5/ 黄褐色土
- 6. 10YR 5/ 暗褐色土
- 7. 10YR 5/ 暗褐色土
- 8. 10YR 5/ 黑褐色土
- 9. 10YR 5/ 褐色土(含Nbp)

第167号土坑

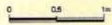


L=313.500m



- 1. 7.5YR 5/ 暗褐色土
- 2. 7.5YR 5/ 褐色土
- 3. 7.5YR 5/ 褐色土
- 4. 7.5YR 5/ 褐色土
- 5. 7.5YR 5/ 褐色土

第168号土坑



第122图 第164号~168号土坑

第172号土坑(第123図、第146図、写真図版75、119)

(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から極暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)頸部径約85cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)中位から上は外反し、とくに開口部付近は崩壊が進む。下位はほぼ直角に立ち上がる。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。大小7個の垂角礫が底面から出土する。大きい石は17×13×12cm、小さい石は18×8×5cmほどである。検出面からの深さは約70cmである。(遺物)埋土上位から縄文土器片7点が出土した。大半が縄文のみの土器片のため767のみ図示した。767は単節斜縄文を施文した上に沈線による渦巻文が施文される。

第173号土坑(第123図、第146図、写真図版75、120)

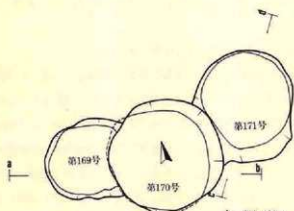
(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(埋土)黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部付近は崩壊が進み不整な円形となる。頸部径約100cmである。断面はピーカー状である。(壁)中位から下はほぼ直角に近い立ち上がりとなるが、上位は外反する。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。しまりもよい。検出面からの深さは60cmほどである。(遺物)埋土上位から40点を越える縄文土器片と石器が出土した。うち6点のみ図化した。108は完形の石鏃である。有蓋で体部が厚い。768と771は隆帯と縄文原体圧痕文、769は縄文原体圧痕文で胎土には繊維が含まれる。770は沈線文、772は単軸絡条体側面圧痕文である。

第174号土坑(第124図、第146図、写真図版75、120)

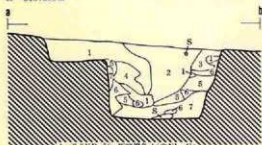
(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土の5層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約190cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)底面から中位にかけて内傾し、直線的に立ち上がる。(底面)Ⅹ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約55cmである。(遺物)埋土上位から土師器2点、縄文10点以上出土した。大部分は体部の小破片であり、口縁部は作図した3点のみである。773～5はいずれも隆帯と縄文原体圧痕文である。

第175号土坑(第124図、写真図版76)

(位置)Ⅲ区中位尾根上に位置する。(埋土)土層観察用のベルトが北壁の一部にかかる状態にずれたため、埋土は不明である。(平・断面形、位置)開口部径が約90×120cmの楕円形状であるが一部に掘り過ぎも認められる。断面はピーカー状である。(壁)南壁の一部を除いてほぼ直角に近い立ち上がりとなる。(底面)Ⅹ層上位面を底面とし、平坦でしまりもよい。斜



L=313,500m



1. 7.5YR 弱 棕褐色土(含Nhp,C)
2. 7.5YR 弱 黑褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 黑褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 褐色土(含Nhp,C)
6. 7.5YR 弱 褐色土(含Nhp)
7. 7.5YR 弱 褐色土(含Nhp)

L=313,400m

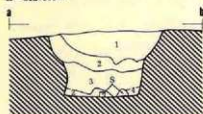


1. 7.5YR 弱 暗褐色土
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 黑褐色土
4. 7.5YR 弱 褐色土
5. 7.5YR 弱 褐色土(含Nhp)
6. 7.5YR 弱 褐色土

第169、170、171号土坑

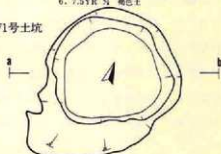


L=312,600m

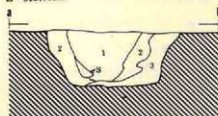


1. 7.5YR 弱 棕褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土

第172号土坑



L=312,700m



1. 7.5YR 弱 黑褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 黑褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
4. 7.5YR 弱 黑褐色土

第173号土坑

0 0.5 1m

第123图 第169号~173号土坑

面と同じ方向に僅かに傾むく。検出面からの深さは約64cmである。(遺物)なし。

第176号土坑(第124図、第147図、写真図版76、120)

(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(重複)第25号住居址及び第177号土坑と重複する。177号土坑を切り、25号住居址に切られる。(埋土)上位から黒褐色土・褐色土・暗褐色土の3層に大別される。自然堆積か人為堆積かは不明である。また、本土坑の埋土中に25号住居址に伴う柱穴が1本確認される。(平・断面形、規模)開口部径約95cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)北東壁は内傾して立ち上がる。(底面)X層上位面で水平かつ平坦である。しまりもよい。検出面からの深さは約35cmである。(遺物)底面から109の石皿が出土した。また、縄文のみの体部小破片が数点出土したが、作図は省略した。

第177号土坑(第124図、第147図、写真図版76、120)

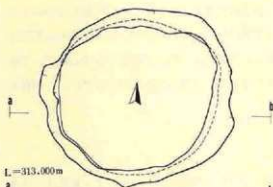
(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(重複)第25号住居址及び第177号土坑と重複する。同住居址より古く、177号にも切られている。(埋土)上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)東西に長い楕円形で、規模は約1.9×2.3mである。断面はフラスコ状を呈する。(壁)全体に内傾して立ち上がる。(底面)X層下位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約60cmである。(その他)埋土最上位はそれ程硬くはない。南西側の埋土上位には一部貼床が残存する。南西は風倒木痕によって埋土の一部と貼床に使用されていたと思われるほぼX層に近い褐色の火山灰土がまぐれ上がっているのが断面で把握された。(遺物)埋土中から40点以上の縄文土器片が出土した。776を除くすべての破片は縄文のみの体部小破片であり、大部分は作図を省略した。776は口縁部を磨消している。777は小型の鉢の体下半部で、底部は平底である。

第178号土坑(第125図、写真図版77)

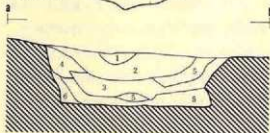
(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。埋土中位から長さ30cmほどの垂角礫が出土する。(平・断面形、規模)開口部径約150cmの円形で、断面はピーカー状である。(壁)下位はほぼ直角に近い立ち上がりとなるが、上位は外反する。(底面)X層下位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約85cmである。(遺物)なし。

第179号土坑(第125図、第147図、写真図版77、120)

(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(埋土)上位から極暗褐色土・暗褐色土・黒褐色土・

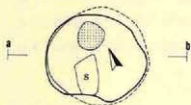


L=313.000m

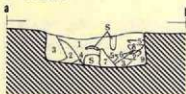


1. 7.5YR 灰 黑褐色土
2. 7.5YR 灰 棕暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 灰 黑褐色土(含C)
4. 7.5YR 灰 暗褐色土
5. 7.5YR 灰 暗褐色土
6. 7.5YR N 褐色土

第174号土坑

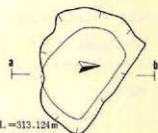


L=312.300m



1. 10YR 灰 黑褐色土
2. 10YR 灰 褐色土(含Nbp)
3. 10YR 灰 褐色土
4. 10YR 灰 暗褐色土
5. 10YR 灰 暗褐色土
6. 10YR 灰 暗褐色土(含Nbp)
7. 10YR 灰 暗褐色土
8. 10YR 灰 暗褐色土
9. 10YR 灰 棕暗褐色土(含Nbp)

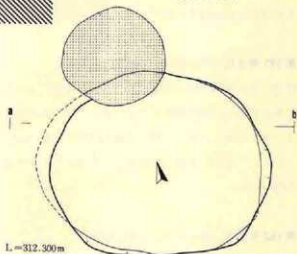
第176号土坑



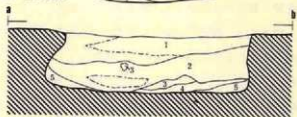
L=313.124m



第175号土坑

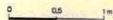


L=312.300m



1. 10YR 灰 褐色土(含Nbp)
2. 10YR 灰 黑褐色土(含Nbp)
3. 10YR 灰 暗褐色土
4. 10YR 灰 暗褐色土
5. 10YR 灰 褐色土

第177号土坑



第124图 第174号~177号土坑

褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約110cmの円形で、断面形はフラスコ状である。(壁)北壁は崩壊しているが、他は内傾して立ち上がる。(底面)X層下位面を底面とし、水平かつ平坦である。斜面上位側にあたる南側底面には板状の小石が流れ込んでいる。(遺物)埋土中から3点出土した。778は小波状口縁で、779は平縁でともに口唇部まで単筋斜縄文が施文される。780は縁辺部を磨滅させて作った円盤状土製品である。

第180号土坑(第125図、写真図版77)

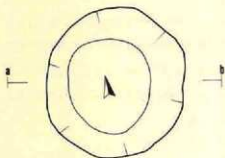
(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)頸部径約140cmのはほぼ円形で、断面はフラスコ状である。(壁)斜面上位側は大きく崩壊しているが、下位側は内傾して立ち上がる。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約65cmである。斜面上位側の底面から、大小20個あまりの石が出土した。板状の小石が大部分であるが、大きいものは15×20cmほどの礫である。(遺物)なし。

第181号土坑(第125図、写真図版78)

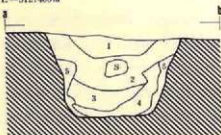
(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(埋土)上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)開口部径約125cmの円形で、断面はフラスコ状である。(壁)斜面上位側は崩壊し広がっているが、斜面下位側は内傾して立ち上がる。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約60cmである。(遺物)なし。

第182号土坑(第126図、写真図版78)

(位置)Ⅲ区中位北側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。ただし、埋土7はきわめて硬い。また、埋土7の下位に大小4個の垂角礫が入っている。大きいもので43×31×7cm、小さいものは15×14×4.5cmである。よって下位の2層は人為的に埋め戻された可能性もある。(平・断面形、規模)開口部径160cmで、断面はピーカー状である。(壁)三段に扶りかはいり、提燈状を呈する。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約90cmである。(遺物)埋土上位から土師器3点、縄文のみの体部片約10点ほど出土した。いずれも体部片の小破片のため作図は省略した。

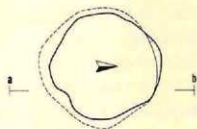


L=312.400m

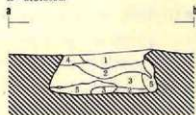


1. 7.5YR 弱 棕褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 棕褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 褐色土
4. 2.5YR 强 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 暗褐色土

第178号土坑

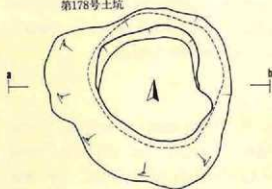


L=312.300m

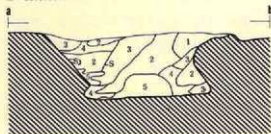


1. 7.5YR 弱 棕褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 暗褐色土

第179号土坑

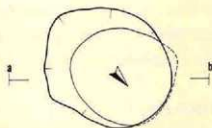


L=310.700m

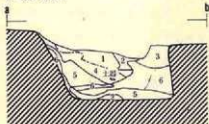


1. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nhp)

第180号土坑 第125图 第178号~181号土坑

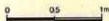


L=311.700m



1. 7.5YR 弱 棕褐色土(含Nhp,C)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
4. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nhp)
6. 7.5YR 弱 暗褐色土

第181号土坑



第183号土坑（第126図、第147図、写真図版78、120）

（位置）Ⅲ区中位北側斜面に位置する。（埋土）斜面の上位側に暗褐色土が僅かに流れ込むが、大部分は黒褐色土の単層である。（平・断面形、規模）開口部径約125cmのやや不整な円形で、断面は盤状である。（壁）外反ぎみに立ち上がる。（底面）Ⅳ層を底面とし、下位側がやや低くなるが平坦である。検出面からの深さは約15cmである。（遺物）埋土中から1点出土した。781は歯状条痕文である。口縁部にはミガキがかけられる。

第184号土坑（第126図、第147～8図、写真図版79、120～121）

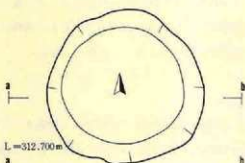
（位置）Ⅲ区中位北側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と黒褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径165cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）下位の壁はほぼ直角に近い立ち上がりであるが中位より上は外反する。（底面）Ⅳ層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約100cmである。底面から大小4個の甕が出土する。大きい甕でも拳大である。（遺物）埋土中から8点の縄文土器片と若干のフレーク・チップ類が出土した。782は二又突起を口縁部にもち磨削縄文が横位に流れるように施文される。縄文は細粒の単節斜縄文である。783は山形口縁部で口縁部に平行に隆起帯がまわる。色調は暗赤色で、焼きは硬い。全面に単節斜縄文が施文される。784は磨削縄文で文様は横位に流れる。785はよく研磨された面に牛肉彫り状の文様が施文される。786は口縁部内側に隆帯を貼付する。787は沈線文である。他の遺物は作図を省略した。

第185号土坑（第126図、第148図、写真図版79、121）

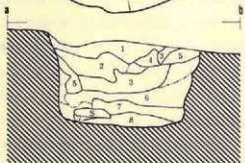
（位置）Ⅲ区中位北側斜面に位置する。（重複）第24号住居址と重複し、同住居址によって切られる。（埋土）上位から黒色土・暗褐色土・黒褐色土・褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。なお、同埋土を切って24号住居址に伴う柱穴1本が検出された。（平・断面形、規模）開口部径約95cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）ほとんど崩壊はみられず、底面から内傾して直線的に立ち上がる。上位は24号住居によって削平されている。（底面）Ⅳ層下位面を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約54cmである。底面に、柱穴に伴う酸化第二鉄が環状にまわる。（遺物）788が埋土中から出土した。単節斜縄文のみの体部片である。

第186号土坑（第127図、写真図版79）

（位置）Ⅲ区中位尾根上に位置する。（埋土）上位から暗褐色土・焼土・褐色土の3層に大別される。焼土は異地性である。埋土の大部分を占める褐色土には薬理が見られ、自然堆積状況

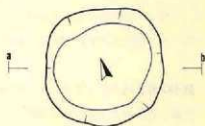


L=312.700m

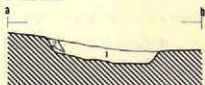


1. 7.5YR 5/6 黑褐色土
2. 7.5YR 5/6 棕暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 5/6 暗褐色土(含C)
4. 7.5YR 5/6 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 5/6 褐色土
6. 7.5YR 5/6 暗褐色土
7. 7.5YR 5/6 褐色土(含Nhp)
8. 7.5YR 5/6 黑褐色土

第182号土坑

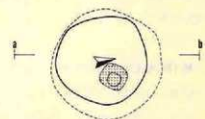


L=312.600m

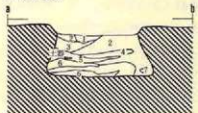


1. 7.5YR 5/6 黑褐色土(含C)
2. 7.5YR 5/6 暗褐色土

第183号土坑

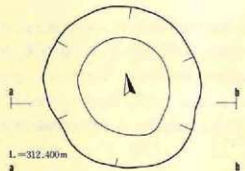


L=311.100m

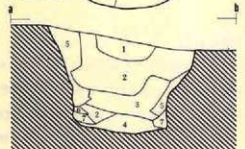


1. 10YR 5/6 黑色土
2. 10YR 5/6 暗褐色土
3. 10YR 5/6 暗褐色土
4. 10YR 5/6 黑褐色土(含C)
5. 10YR 5/6 褐色土
6. 10YR 5/6 褐色土
7. 10YR 5/6 黄褐色土

第185号土坑



L=312.400m



1. 7.5YR 5/6 黑褐色土
2. 7.5YR 5/6 暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 5/6 暗褐色土(含C)
4. 7.5YR 5/6 棕暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 5/6 褐色土(含Nhp)
6. 7.5YR 5/6 暗褐色土(含C)
7. 7.5YR 5/6 褐色土

第184号土坑

第126图 第182号~185号土坑



を呈する。(平・断面形、規模)開口部径140×160cmの不整形円で、断面はピーカー状である。(壁)ほぼ直角に立ち上がる。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。南西に張り出すが、隅丸長方形状である。検出面からの深さは約43cmである。(遺物)なし。

第187号土坑(第127図、第149図、写真図版80、121)

(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。しかし、上位の黒褐色土と暗褐色土は漸移しており不明瞭である。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)頭部径95×120cmの楕円形で、断面はピーカー状である。

(壁)Ⅳ層以下の土層で構成する壁には大きな崩壊は見られずほぼ直角に立ち上がる。Ⅳ層より上位は崩壊が著しい。(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦である。よくしまっている。検出面からの深さは約80cmである。(遺物)埋土中位から50点以上もの石器・土器片等が出土した。そのうち10点を図化した。110～2は刮器で両面加工によって刃部を作っている。113はフレークである。797～9の3点は隆帯の貼付と縄文原体圧痕文、800は隆帯と割箸状工具による連続刺突文、801は縄文を施文した上に細い隆帯を貼付したものである。802は平行沈線文である。

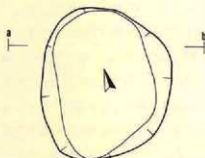
第188号土坑(第127図、写真図版80)

(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(重複)第15号住居址と重複し、同住居址によって切られる。(埋土)上位から黒褐色土・褐色土・暗褐色土・黄褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)底部径約90cmのほぼ円形で、断面はピーカー状である。(壁)西壁は15号住居址により破壊されている。他は外反ぎみに直線的に立ち上がる。

(底面)X層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約70cmである。(遺物)なし。

第189号土坑(第127図、第149図、写真図版80、121)

(位置)Ⅲ区中位南側斜面に位置する。(埋土)上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。(平・断面形、規模)底部径65×80cmほどの楕円形で、断面はピーカー状である。(壁)上位は崩壊が著しいが、下位は比較的よく残存する。(底面)Ⅳ層上位を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約40cmである。(遺物)埋土中から10点ほどの縄文土器片が出土した。うち、4点を図化した。803～4は太い隆帯の貼付と縄文原体圧痕文である。803は平縁の単節斜縄文のみの土器片である。806は平底の底部片である。

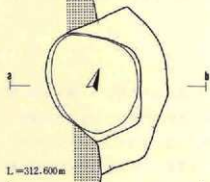


L=312.100m



1. 7.5YR 弱 暗褐色土
2. 5YR 弱 淡褐色土(壤土)
3. 7.5YR 弱 褐色土
4. 7.5YR 弱 褐色土
5. 7.5YR 弱 褐色土

第186号土坑

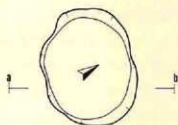


L=312.600m

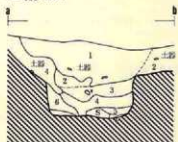


1. 10YR 弱 黑褐色土
2. 10YR 弱 褐色土
3. 10YR 弱 暗褐色土(含Nbp)
4. 10YR 弱 黄褐色土

第188号土坑

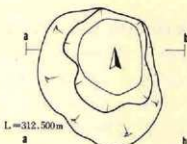


L=312.400m



1. 7.5YR 弱 黄褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 暗暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 黄褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 弱 褐色土
6. 7.5YR 弱 褐色土
7. 7.5YR 弱 暗褐色土(Nb)

第187号土坑

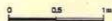


L=312.500m



1. 7.5YR 弱 黑褐色土
2. 7.5YR 弱 暗暗褐色土(含C)
3. 7.5YR 弱 褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 暗褐色土

第189号土坑



第127图 第186号~189号土坑

第190号土坑（第128図、第148図、写真図版80、121）

（位置）Ⅲ区中位南側斜面に位置する。（重複）第15号住居址と重複し、同住居址によって切られる。（埋土）上位から黒褐色土・橄暗褐色土・褐色土の3層に大別される。埋土1と3の間から掘りこぶし大ほどの重角礫2個が出土する。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約90cmの円形で、断面は盤状である。（壁）北壁は15号住居址によって破壊されるが、他はほぼ直角に近い立ち上がりを示す。（底面）X層を10cmほど掘りこんで底面とする。水平かつ平坦である。検出面からの深さは約20cmである。（遺物）埋土中から789～790の2点が出土した。789は口縁部に太い隆帯を貼付し肥厚させている。790は上げ底の底部片である。

第191号土坑（第128図、第148図、写真図版81、121）

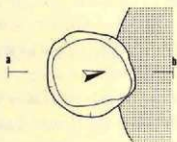
（位置）Ⅲ区中位南側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）頸部径約90cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）大きく外反するように立ち上がる。（底面）X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約65cmである。大小11個の重角礫が出土する。（遺物）埋土中から10片ほどの縄文土器片が出土した。うち、2点のみ図化した。残りはすべて縄文のみの土器片である。791は隆帯と縄文原体圧痕文である。792は隆帯と扁平な瘤を貼付し、割箸状工具による連続刺突文である。隆帯には縄文は施文されない。

第192号土坑（第128図、第148図、写真図版81、121）

（位置）Ⅲ区中位南側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況である。（平・断面形、規模）頸部径約110×145cmで、断面はピーカー状である。（壁）開口部付近が崩壊し外反するが、他はほぼ直角に近い立ち上がりとなる。北壁の下位には一部挟りかはある。（底面）X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約63cmである。（遺物）埋土上位から約10点の縄文土器が出土した。うち、4点を図化した。残りは縄文のみの体部片である。793・795は沈線文、794は隆帯と縄文原体圧痕文である。796は口縁部が内彎する平縁である。

第193号土坑（第128図、写真図版81）

（位置）Ⅲ区中位南側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径105cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）内傾して立ち上がる。（底面）X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約37cmである。（遺物）埋土上位から縄文のみの体部片2点が出土した。

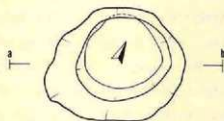


L=312.200m

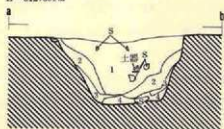


1. 7.5YR 灰 暗棕色土(含C)
2. 7.5YR 灰 暗棕色土
3. 7.5YR 灰 暗棕色土
4. 7.5YR 灰 棕色土

第190号土坑

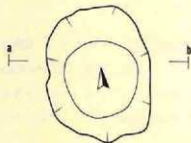


L=312.300m

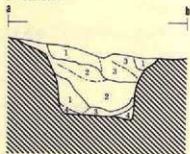


1. 7.5YR 灰 暗棕色土
2. 7.5YR 灰 棕色土(含Nbp)
3. 10YR 灰 棕色土(含Nbp)
4. 10YR 灰 暗棕色土

第191号土坑

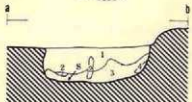
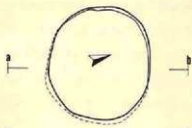


L=312.300m



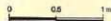
1. 7.5YR 灰 暗棕色土(含C)
2. 7.5YR 灰 暗棕色土(含C)
3. 7.5YR 灰 暗棕色土
4. 7.5YR 灰 棕色土

第192号土坑



1. 10YR 灰 暗棕色土(含C)
2. 10YR 灰 棕色土
3. 10YR 灰 棕色土(含C)
4. 7.5YR 灰 暗棕色土(Nh)

第193号土坑



第128图 第190~193号土坑

第194号土坑（第129図、第150図、写真図版82、121～122）

（位置）Ⅲ区中位尾根上に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約130cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）北壁は崩壊が進むが、他はほぼ直角に立ち上がる。（底面）X層上位面を底面とし、硬くしまっている。両側にやや傾き凹凸が激しい。検出面からの深さは約60cmである。（遺物）埋土中から約10点の縄文土器及び若干のチップ類が出土した。807は隆帯と縄文原体圧痕文、808は縄文が施文された上に隆帯が貼付される。809は隆帯と割箸状工具による連続刺突文である。810は口唇部に隆帯が貼付され肥厚する。811は口唇部に隆帯が貼付され、口縁部には縄文原体圧痕が施文される。

第195号土坑（第129図、写真図版82）

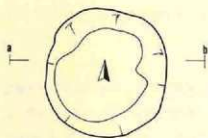
（位置）Ⅲ区中位尾根上に位置する。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約115cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）ほぼ直角に立ち上がる。（底面）X層を底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約40cmである。（遺物）なし。

第196号土坑（第129図、写真図版82）

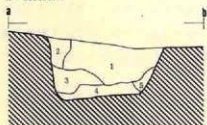
（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）上位から極暗褐色土・暗褐色土・褐色土・黒褐色土の4層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）頭部径約95cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）ほぼ直角に近い立ち上がりとなる。（底面）X層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約40cmである。（遺物）なし。

第197号土坑（第129図、第150～1図、写真図版83、122）

（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）頭部径約120cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）底面から頭部までは内傾して立ち上がるが、上位は崩壊が著しい。（底面）X層下位面を底面とし、水平かつ平坦である。しまりもよい。検出面からの深さは約73cmである。（遺物）埋土中～上位から50点以上の土器及びフレーク・チップ類が出土した。812は円筒深鉢形土器である。下半部を欠く。口縁部は縄文原体圧痕文である。縄文原体は撚りの異なる2本を束ねたものであり、体部は複節斜縄文である。813は口縁部に縄文原体圧痕により幾何学的文様が施される。体部は撚糸文である。814は縄文の回転圧痕と思われるが、原体及び施文法については不詳である。以上の3点は胎土に多量の繊維を含んでいる。815は

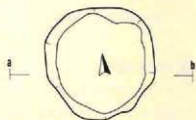


L.=311.900m

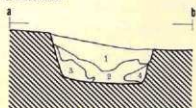


1. 7.5YR 弱暗褐色土
2. 7.5YR 褐色土
3. 7.5YR 暗褐色土
4. 7.5YR 褐色土
5. 7.5YR 暗褐色土(Nh)

第194号土坑

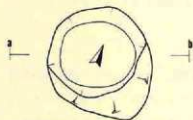


L.=311.600m

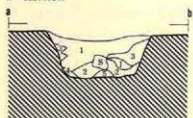


1. 7.5YR 弱暗褐色土(含C)
2. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp,C)
3. 7.5YR 褐色土(含Nhp)
4. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp)

第195号土坑

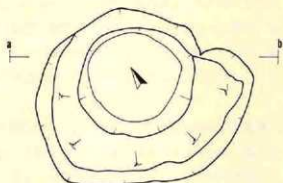


L.=311.000m

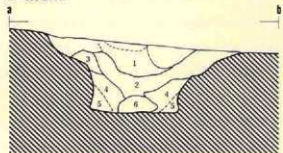


1. 7.5YR 弱暗褐色土
2. 7.5YR 褐色土
3. 7.5YR 暗褐色土
4. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp)
5. 7.5YR 暗褐色土

第196号土坑

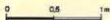


L.=311.200m



1. 7.5YR 暗褐色土
2. 7.5YR 暗褐色土
3. 10YR 暗褐色土
4. 7.5YR 褐色土
5. 7.5YR 暗褐色土
6. 7.5YR 暗褐色土(含Nhp)

第197号土坑



第129图 第194号~197号土坑

太い隆帯と縄文原体圧痕文による口縁部破片である。816～7は沈線文である。作図を省略した土器片の残は胎土に繊維が含まれる土器片で、そのほとんどが燃糸文である。

第198号土坑（第130図、第151図、写真図版83、122）

（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）下位に暗褐色土が薄く堆積するほかは黒褐色土の単層である。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約135cmの円形で、断面形は盤状である。（壁）ほぼ直角に近い立ち上がりである。（底面）Ⅱ層を数センチ掘り込んで底面とし、水平かつ平坦である。検出面からの深さは約25cmである。（遺物）埋土中から壺・土器片・フレーク等が出土した。818は口縁部が欠損する壺である。頸部に2本の沈線がまわる。底部は上げ底である。819は縄文原体圧痕文の中に綾絡文が施文される口縁部片である。作図は省略したが、他に綾絡文が施文される体部片やフレーク2点等が出土した。

第199号土坑（第130図、写真図版83）

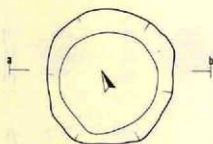
（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約150cmのやや不整な円形で、断面はピーカー状である。（壁）大部分の壁はやや内彎しながら立ち上がる。（底面）Ⅱ層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約50cmである。（遺物）なし。

第200号土坑（第130図、第151図、写真図版84、122）

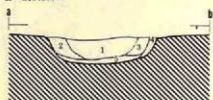
（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）上位から暗褐色土と褐色土の2層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）頸部径約90cmの円形で、断面はピーカー状である。（壁）下位は丸く立ち上がる。（底面）Ⅱ層下位面で水平かつ平坦である。検出面からの深さは約48cmである。（遺物）埋土上位から出土した。820は口縁部は外反ぎみに立ち上がる。縄文の上に隆帯が貼付される。821は浮き彫り状に磨消縄文がはいる。作図は省略した土器の体部片と縄文のみの体部片が10点以上出土している。

第201号土坑（第130図、写真図版84）

（位置）Ⅲ区下位南側斜面に位置する。（埋土）上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土の3層に大別される。自然堆積状況を呈する。（平・断面形、規模）開口部径約140cmの円形で、断面はフラスコ状である。（壁）北壁は内傾して立ち上がる。（底面）Ⅱ層を底面とし、水平かつ平坦でしまりもよい。検出面からの深さは約90cmである。（遺物）なし。



L=310.900m

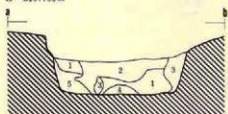


1. 7.5YR 弱 暗褐色土
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土
5. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nbp)

第198号土坑

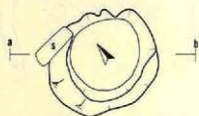


L=310.700m



1. 7.5YR 弱 暗褐色土
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 10YR 弱 棕色土
5. 10YR 弱 棕色土(含Nbp)

第199号土坑

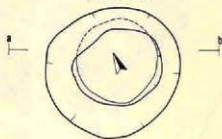


L=310.700m



1. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
5. 7.5YR 弱 暗褐色土(含Nbp)

第200号土坑



L=310.500m

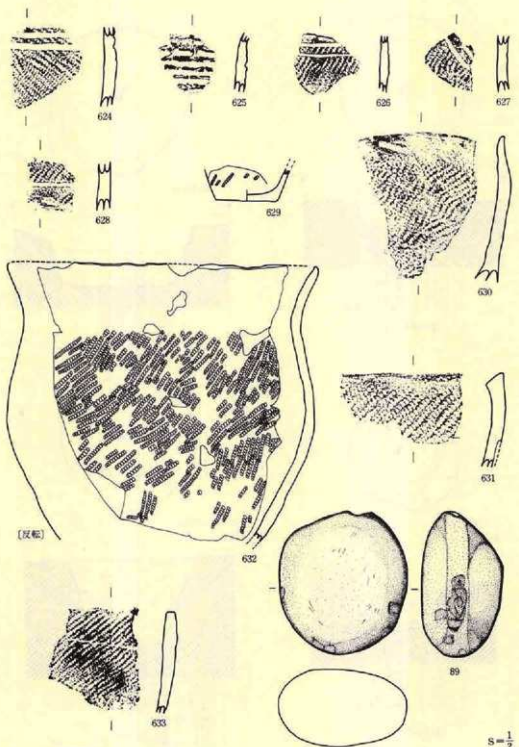


1. 7.5YR 弱 暗褐色土(含C)
2. 7.5YR 弱 暗褐色土
3. 7.5YR 弱 暗褐色土
4. 10YR 弱 棕色土(含Nbp)
5. 10YR 弱 棕色土
6. 10YR 弱 棕色土
7. 10YR 弱 棕色土(含Nbp)
8. 10YR 弱 棕色土

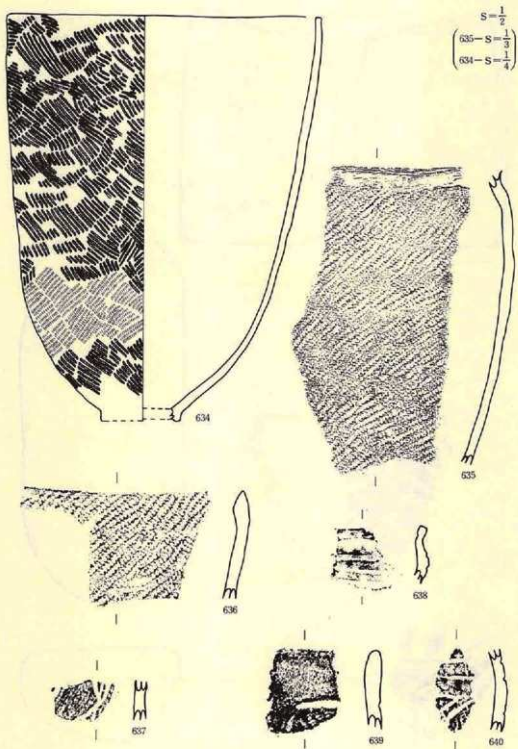
第201号土坑

第130图 第198号~201号土坑

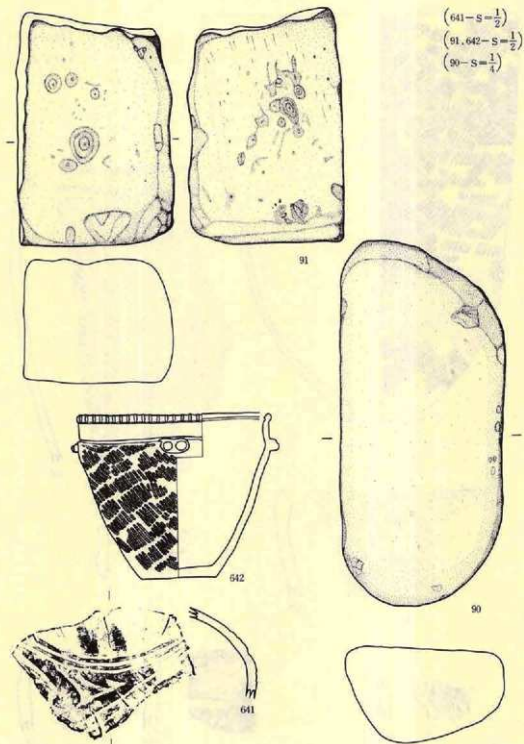
0 0.5 1m



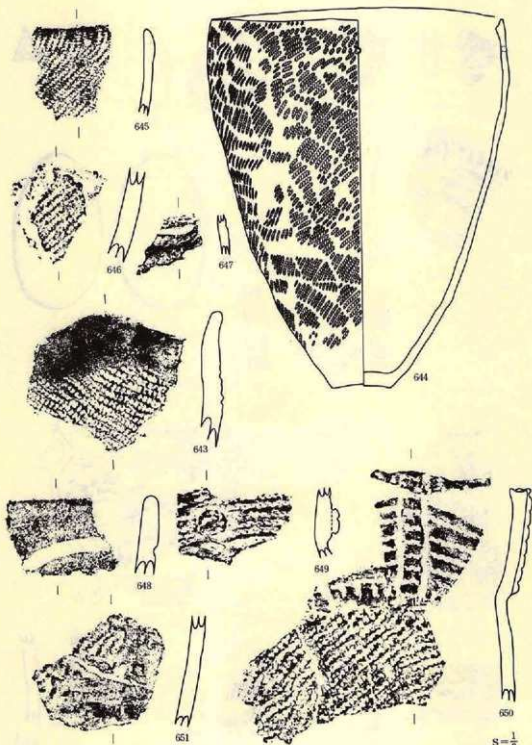
第131图 土坑内出土遗物 (No. 1)



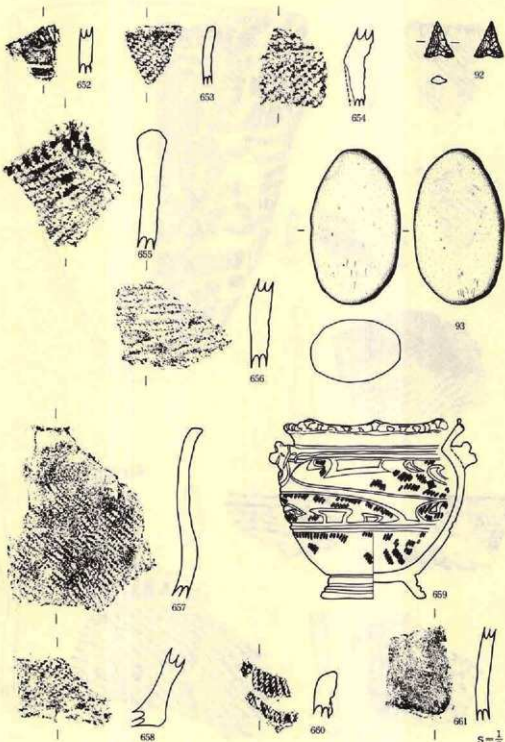
第132圖 土坑內出土遺物 (No. 2)



第133图 土坑内出土物 (No. 3)

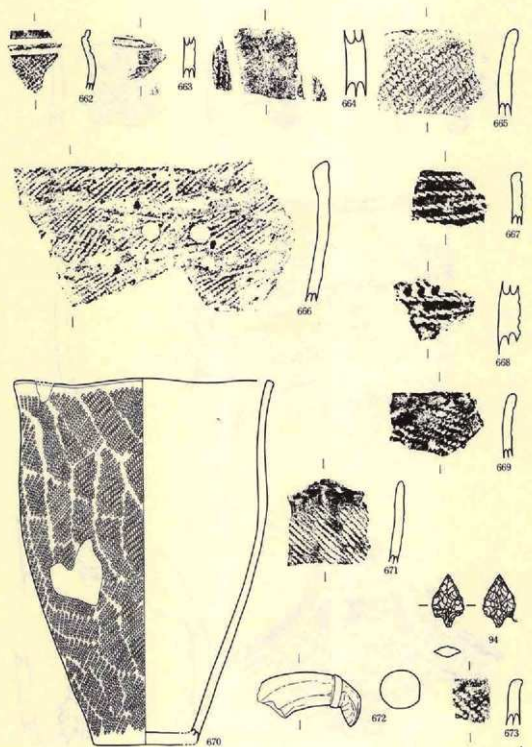


第134圖 土坑内出土遺物 (No. 4)



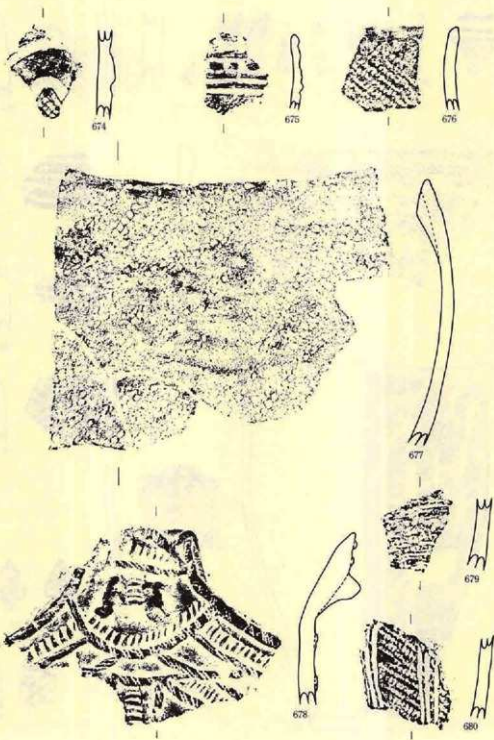
第135圖 土坑內出土遺物 (No. 5)

$S = \frac{1}{2}$
 $(93, 659 - S = \frac{1}{3})$



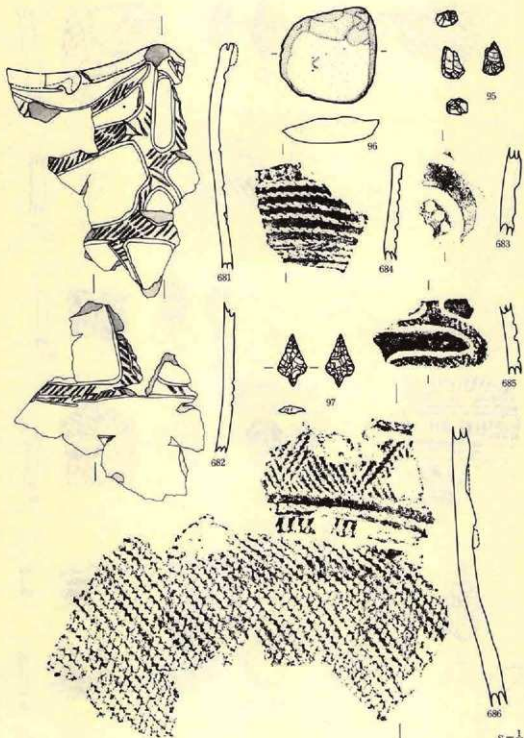
第136图 土坑内出土遗物 (No. 6)

$S = \frac{1}{2}$
 $(670 - S = \frac{1}{3})$



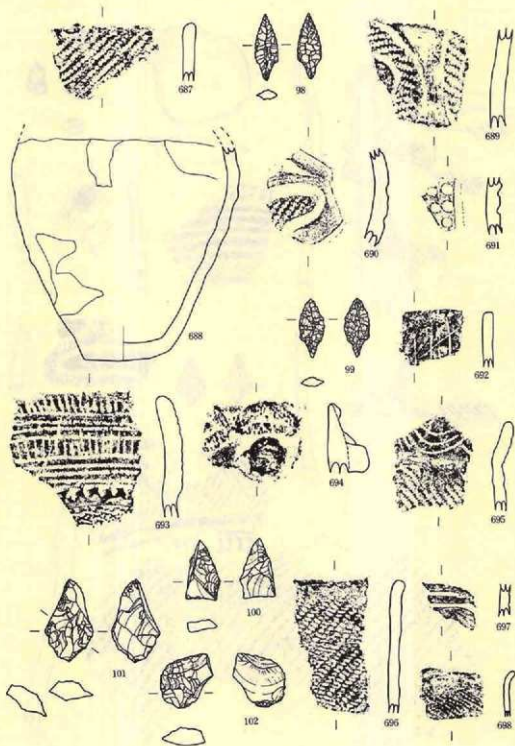
第137图 土坑内出土遗物 (No. 7)

S=1/2



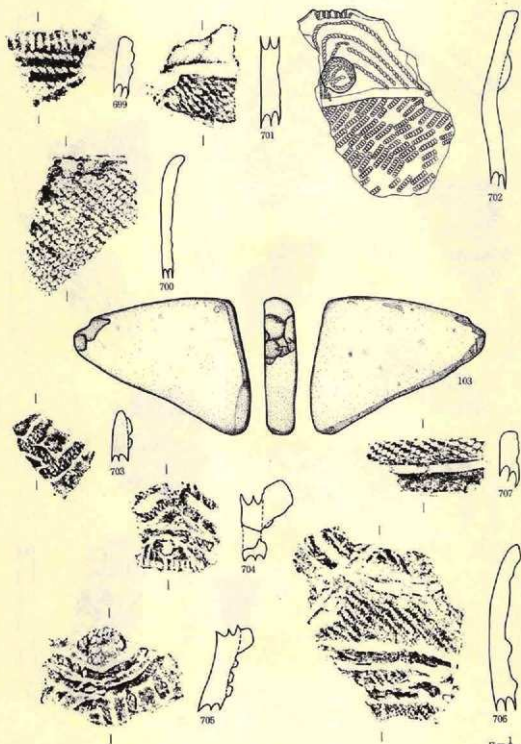
第138图 土坑内出土遺物 (No. 8)

$S = \frac{1}{2}$
 $(96 - S = \frac{1}{2})$

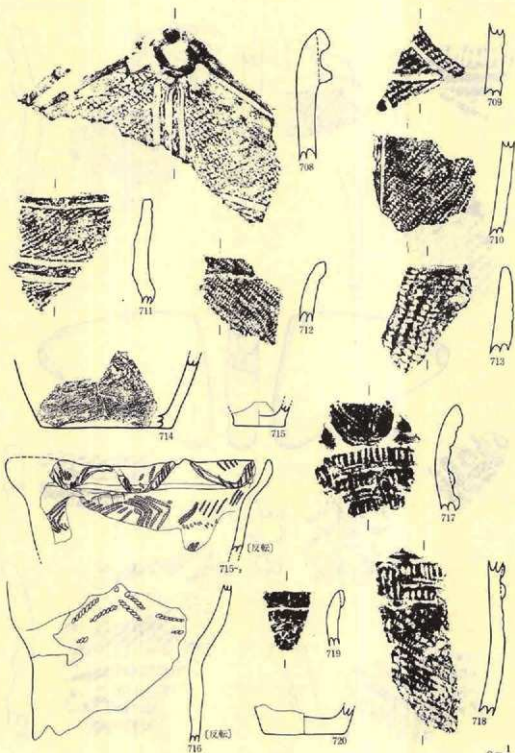


第139圖 土坑內出土遺物 (No. 9)

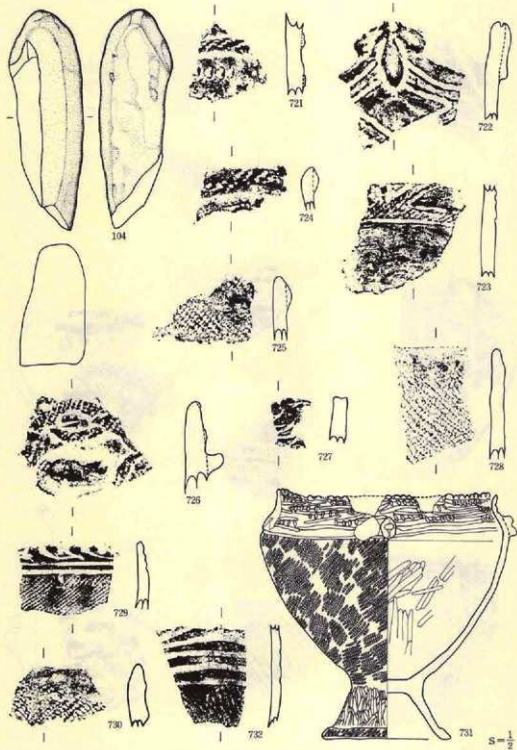
S = $\frac{1}{2}$
 (688-S = $\frac{1}{3}$)



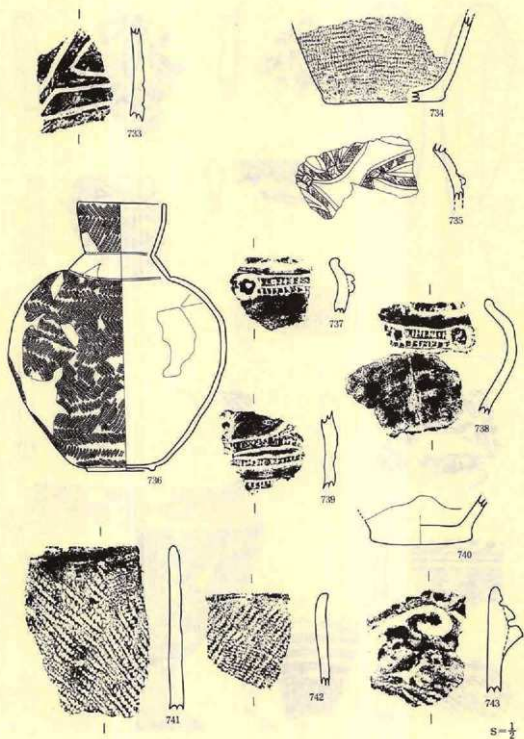
第140圖 土坑內出土遺物 (No.10)



第141圖 土坑内出土遺物 (No.11)

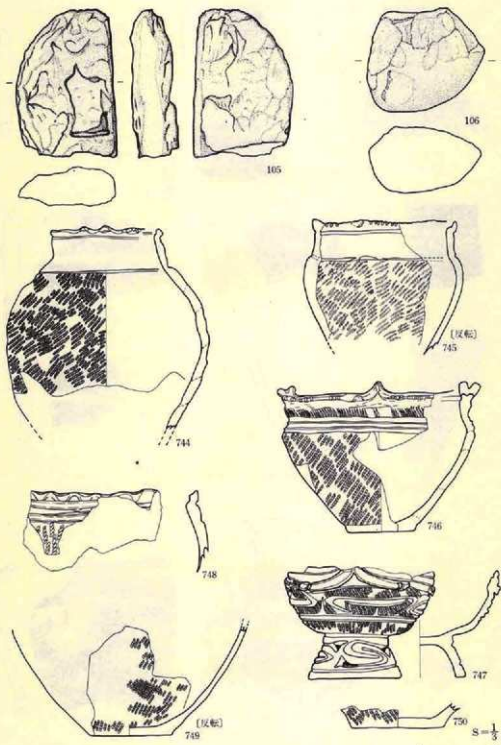


第142图 土坑内出土遗物 (No.12)



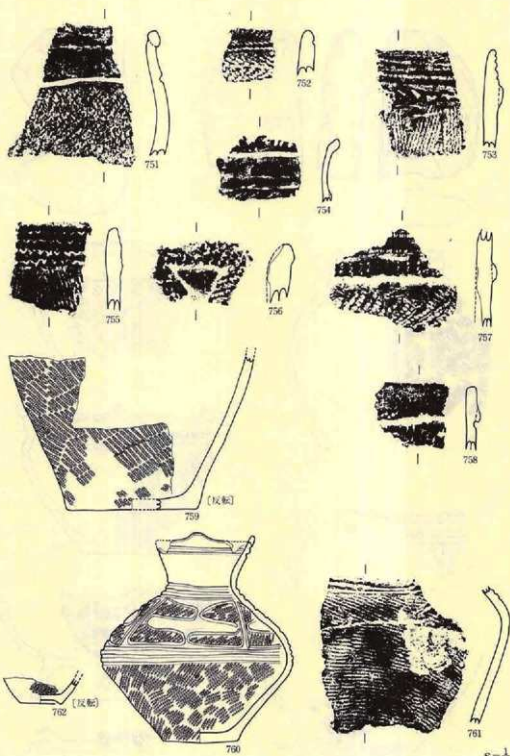
第143图 土坑内出土遗物 (No.13)

(736-S= $\frac{1}{4}$, 740-S= $\frac{1}{3}$)



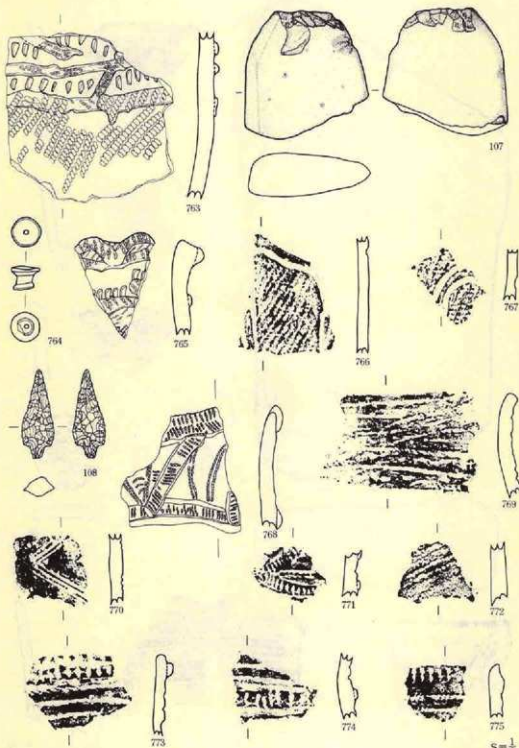
第144图 土坑内出土遗物 (No.14)

(748~750— $S = \frac{1}{2}$)



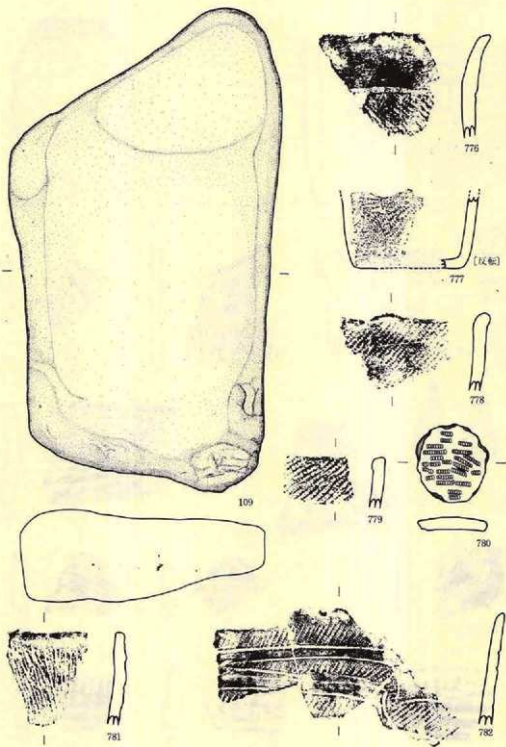
第145图 土坑内出土遗物 (No.15)

S = $\frac{1}{2}$
 (759, 760, 762 - S = $\frac{1}{3}$)



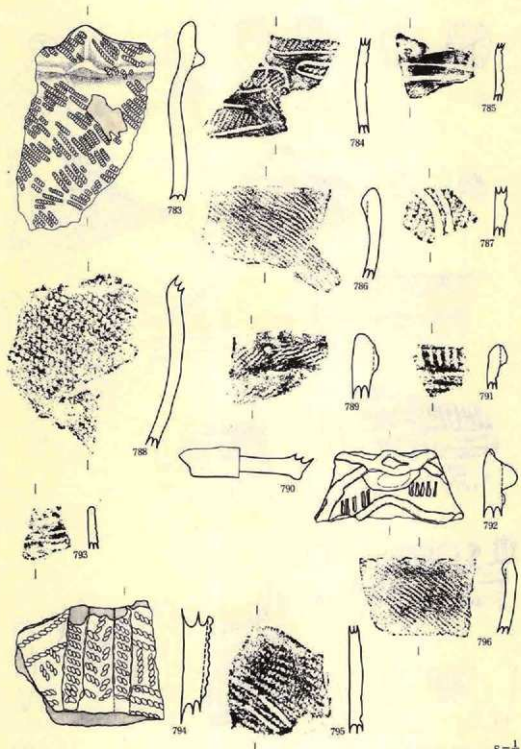
第146图 土坑内出土遗物 (No.16)

(107. 768-S- $\frac{1}{2}$)



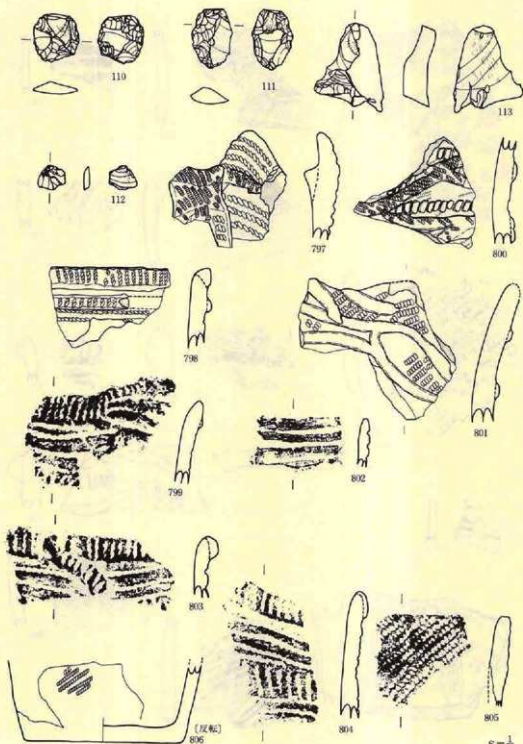
第147圖 土坑內出土遺物 (No.17)

$S = \frac{1}{2}$
 $(109 - S = \frac{1}{4})$

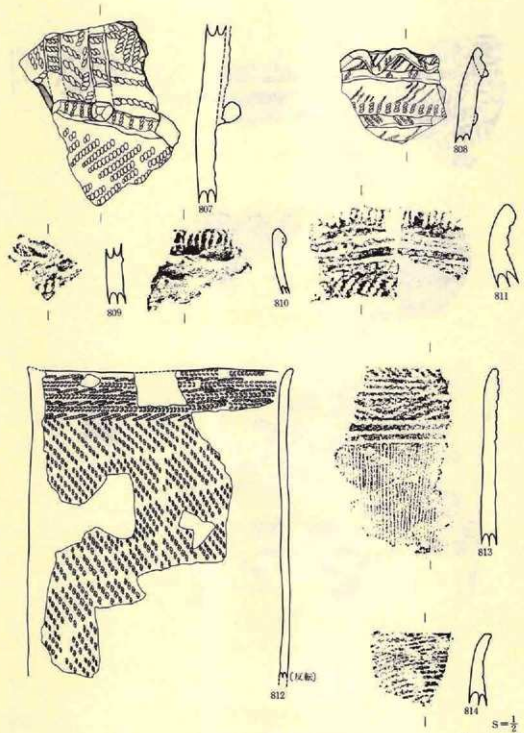


第148图 土坑内出土遗物 (No.18)

$S = \frac{1}{2}$
 (790 - $S = \frac{1}{3}$)

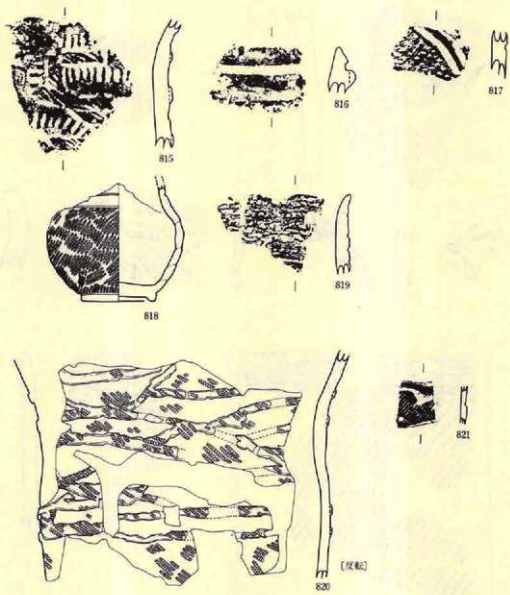


第149圖 土坑內出土遺物 (No.19)



第150图 土坑内出土遗物 (No.20)

S = $\frac{1}{2}$
(812-S = $\frac{1}{3}$)



第151图 土坑内出土遺物 (No.21)

$S = \frac{1}{2}$
 (818, 820 - $S = \frac{1}{3}$)

〔4〕焼土遺構

本調査に於て、焼土が15地点で検出された。これらを焼土遺構として一括した。これらは第3表のように分類される。

	場 所	検 出 さ れ た 地 点				
現地性	住居址内埋土	① (13号住)	② (6号住)	③ (18号住)	④ (21号住)	⑤ (1号住)
	地 山	⑥ (15号住)	⑦ (20号住)	⑧ (10号住)	⑨ (9号住)	
		⑩ (DV-g3)	⑪ (DV-i4)	⑫ (DV-k4)	⑬ (DV-j9)	
異地性	土坑内埋土	⑭ (84号土坑)	⑮ (186号土坑)			

第3表 焼土遺構検出地点一覧

現地性の焼土遺構が形成された地点は、住居址の埋土中のものが圧倒的に多い。地山に形成された⑩～⑬はきわめて薄く、ほとんど層状を呈さない。したがって、この4地点の焼土は断ち割りができなかった。以下その概略について述べることにする。なお、住居址の埋土中に形成された焼土の記述にあたって、(高さ)とは焼土の最上位面と同住居址の床面との距離のことである。

第1号焼土 (第152～3図)

(位置) 第13号住居址中央部西寄りの埋土2 (暗褐色土) 中に形成される。

(高さ) 30cm。(規模・形状) 50～60cmの楕円形である。厚さ15cm。

(状況) 特に硬い焼土層はない。

第2号焼土 (第152～3図)

(位置) 第6号住居址の北半に寄り、埋土5 (黒色土) の上位に形成される。

(高さ) 50cm。(規模・形状) 直径約60cmの円形で、厚さ20cmである。

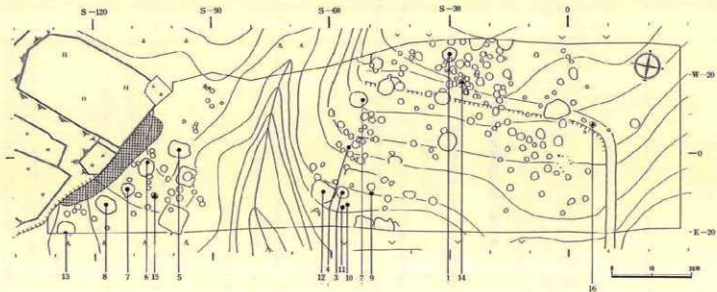
(状況) 硬い部分は最大2cmの厚さで、レンズ状に形成される。

第3号焼土 (第152～3図)

(位置) 第18号住居址の中央部、埋土1 (黒色土) の下位に形成される。

(高さ) 40cm。(規模・形状) 一辺が60cmの三角形で厚さ16cmである。

(状況) 硬く板状に形成される。焼土内から502の深鉢が出土する。縄文時代後期初頭に属する。



第152図 焼土遺構配置図

第4号焼土 (第152～3図)

(位置) 第21号住居址の中央部、埋土5 (黒褐色土) の上位に形成される。

(高さ) 20cm。(規模・形状) 90×145cmの楕円形である。厚さ10cm。

(状況) きわめて硬い焼土が二層に分かれて板状に形成されている。

第5号焼土 (第152～3図)

(位置) 第1号住居址の中央部、埋土2 (暗褐色土) の上位に形成される。

(高さ) 25cm。(規模・形状) 55×80cmの不整楕円形である。厚さ14cm。

(状況) 硬い焼土は扁平な塊となっている。

第6号焼土 (第152・154図)

(位置) 第15号住居址の西半部、埋土1 (黒褐色土) の中位に形成される。

(高さ) 28cm。(規模・形状) 不明。

(状況) 焼土は形成されていない。炭化物が集中的に出土した。異地性の可能性もある。

第7号焼土 (第152・154図)

(位置) 第20号住居址西半部、埋土4 (暗褐色土) の上位に形成される。

(高さ) 40cm。(規模・形状) 50×100cmの帯状である。厚さは10cmである。

(状況) 硬い焼土はレンズ状に形成されている。

第8号焼土 (第152・154図)

(位置) 第10号住居址中央部、埋土2 (黒褐色土) の中位に形成される。

(高さ) 20cm。(規模・形状) 直径約65cmの円形である。厚さ10cm。

(焼土) 凹凸のはげしい土塊となっている。焼土内から368に接合した土器片が出土する。よって縄文時代中期末葉の可能性が強い。

第9号焼土 (第152図)

(位置) 第9号住居址南半部、埋土3 (黒褐色土) の上位に形成される。東半部は調査区外へ広がる。(高さ) 約45cm。(規模・形状) 直径75cmほどの円形と思われる。

(状況) 黒色土中に粒状の焼土が淡く形成されている。

第10号焼土 (第152図)

(位置) DⅥ区g3グリッドに位置する。

(規模・形状) 40×70cmの楕円形である。薄く淡い焼成である。

第11号焼土 (第152図)

(位置) DⅥ区j4グリッドに位置する。

(規模・形状) 直径60cmほどの円形である。薄く淡い焼成である。

第12号焼土 (第152図)

(位置) DⅥ区K4グリッドに位置する。第11号焼土の南、約1mである。

(規模・形状) 直径60cmほどの円形である。薄く淡い焼成である。

第13号焼土 (第152図)

(位置) DⅤ区j9グリッドに位置する。

(規模・形状) 30×50cmの楕円形である。きわめて薄く、淡い焼成である。

第14号焼土 (第152図)

(位置) 第84号土坑内の埋土1内から検出される。

(状況) 垂角礫と同時に焼土粒が検出されたものであり、廃棄された可能性が高い。

第15号焼土 (第152・154図)

(位置) 第186号土坑の埋土1上位から検出される。

(状況) ブロック状に幾つかに分かれて出土したもので、廃棄されたと思われる。

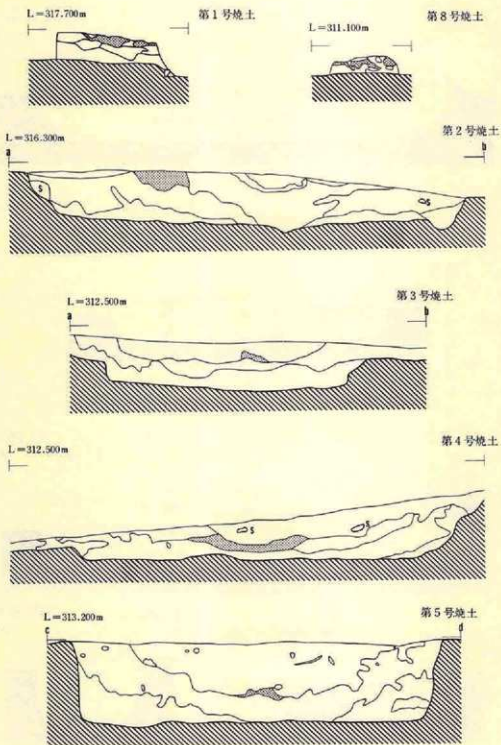
第16号焼土 (第152・154図)

(位置) 第20号土坑の埋土1上位から検出される。

(状況) ブロック状に幾つかに分かれて出土したものである。

[5] 集石遺構 (第155図)

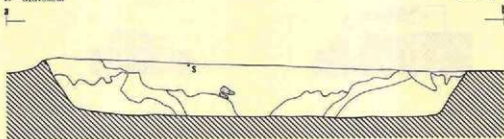
南区上位尾根上 (FⅤ区a4グリッド) に位置する。Ⅵ層上位面で検出された。20cm程度の



第153图 烧土遺構断面図 (No. 1)

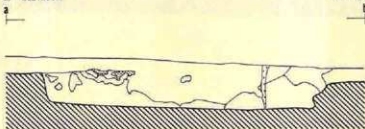
L = 313.000m

第6号烧土



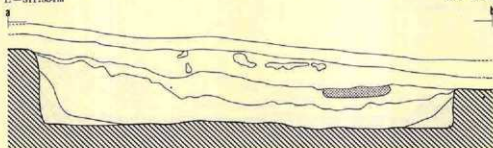
L = 312.314m

第7号烧土



L = 311.534m

第9号烧土



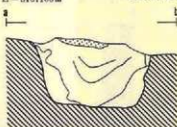
L = 312.100m

第15号烧土



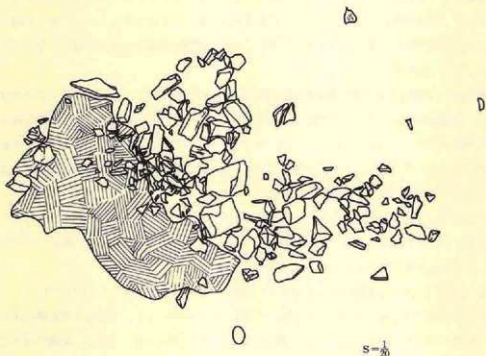
L = 316.100m

第16号烧土



第154图 烧土遗構断面图 (No. 2)

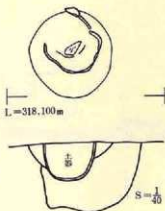
石も3割含まれるが、大部分は10cm未満の板状の小石である。石質は粘板岩である。平面プランは不整形で埋置されたものでも、葺石状に丁寧に敷かれたものでもない。しかし、薄く層的に広がる。しかも、大部分の石は火熱を受け、薄く赤化している。周囲には土坑4基が検出されるのみで、掘り込み等の痕跡や擾乱もない。検土や炭化物も検出されていない。当遺構の用途・機能については不明である。一部、掘り過ぎた。



第155図 集石遺構

〔6〕埋設土器 (第156図)

遺構に伴わない埋設土器である。DV区b Oグリッド内より1点出土する。M層上位面で小土坑状に掘り方が見られ、その中に、壁に寄って埋設されている。地山と土坑の埋土はほぼ同じ土であり、その境は不明瞭である。出土した土器は1093の粗製の小型深鉢である。体下半部が欠損している。埋設された意図等については不明である。



第156図 埋設土器

〔7〕遺物包含層

遺物包含層は調査区の最南端に位置する。現状では山林と水田の境界付近で、若干南にあたっている。埋没した小さな谷の南斜面である。

埋没谷は調査区の西においては幅50cmほどの用水路として利用されているが、調査地内では開田事業によって完全に埋められたものである。谷の南半（南斜面）については、その工事に伴ってほとんど削平されており、センター杭以东では一部左岸も破壊されていた。谷の方向はほぼ北北西から南南東を指し、幾分南に彎曲している。調査区東端では急激に幅広くなっており、南に大きく折れ曲がっている。

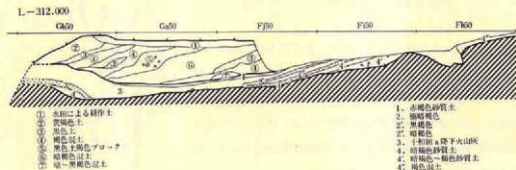
調査の結果、埋没谷の断面形は幅約4.5m、深さ1.0mの逆台形をなす小さな谷であることが判明した。谷底は幅3.0mほどの平坦地となっており、左岸の斜面には流路変更に伴うとみられる旧河川の跡が凹地として3条遺存していた。北から谷1・谷2・谷3と仮称すると、谷1は最北端に位置するもので、Fe12グリッド付近で本流から分れ、Fj56グリッド付近で消滅している。調査区西側からほぼ直線的に伸びている。

谷2はFi50グリッドからFj53グリッドにかけて認められるもので、僅か凹地として残っていたにすぎない。谷3はGa53グリッドからGd59グリッドにかけてみられるもので、現状の谷底に平行している。3条の中では最下位にあたっている。

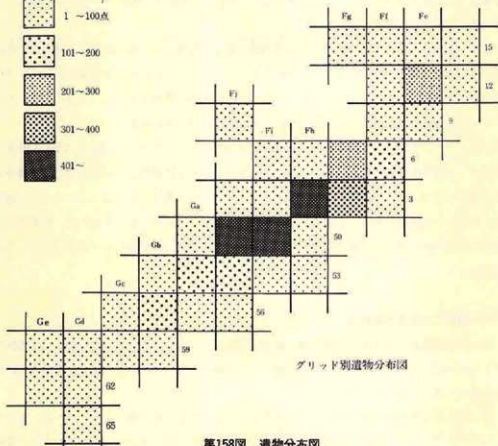
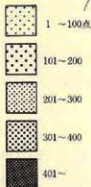
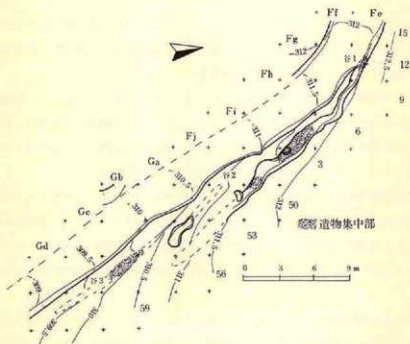
斜面（壁面）には斜面崩落に伴う大ブロックが認められ、蛇行あるいは入り組んでいる。

埋土は水田化に伴う盛土（②～⑦）を除いて基本的に4層からなる。1層は赤褐色砂質土で細かい植物の根がぎっしり入っている。開田以前の表土層（旧表土層）である。遺物はほとんど認められない。

2層は暗褐色～黒褐色砂質土で、植生根を大量に含む。腐植した堆のように水分を大量に含



第157図 遺物包含層土層断面図



第158図 遺物分布図

んでいる。ある時期の表土層と考えられる。この層からは谷全体に磨滅した土器片が僅か発見されている。3層は十和田a 降下火山灰層である。両岸にのみ認められ、中央部では欠落している。層厚は4.5～15cmほどで、遺物は含まない。

4層は黒褐色・暗褐色～黄褐色砂質土で、礫を含む場合もある。ほとんどの遺物はこの層から発見されたものである。遺物包含層である。3層と同様に両岸にのみ認められ、中央部では僅か痕跡を残すのみである。下位には酸化鉄の集積している部分、あるいはグライ化している部分などがあり、また、凹地や堅い平坦面をなす所もみられる。

遺物包含層は主にこの谷の北岸（北側）、南斜面に形成されたものである。ただし、西端部では北斜面においても遺物が採集されており（Fg15、Fj9グリッド）、元来は両斜面に形成されたものと推測される。南半の遺物の分布状況は開田事業の際に破壊されたこともあって、それほど多いものではない。したがって、主に小さな谷の南斜面に形成された遺物包含層と言える。

発見された遺物は縄文土器と石器で、縄文土器が約3500点、石器は僅か17点である。石器は石鏃2・石匙2・搔器2・削器2・笥状石器1・石斧1・磨石2・凹石4・石剣1などで、土器の場合にはすべて破片となっていた。

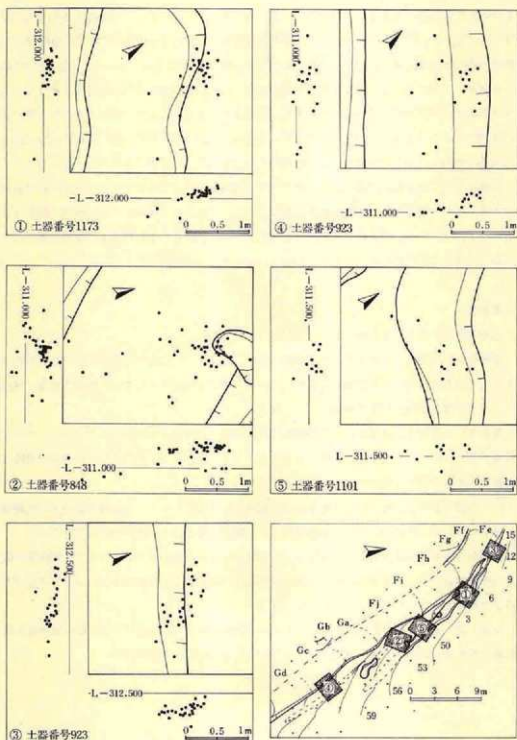
遺物の分布は、全体的には谷の左岸・南斜面に濃密に分布している。斜面の上部から下部にかけて分布し、底面では細片を除いて極めて少ない。グリッドによっては粗密があり、1グリッド400点を越すものが3グリッド存在する。以下300点以上が1グリッド、200点以上が2グリッド、100点以上が4グリッド、100点未満が29グリッドである。

また、グリッドの中でも粗密があり、200点以上の6グリッドのうち、Fg6、Fg3、Fh3の3グリッドが谷1に集中し、Fi50、Fj50の2グリッドが谷2に密集している。また、数はそれほど多いものではないが、Ga53、Gt56の2グリッドが谷3に集中している。このことから遺物は、旧河川の流路跡に濃密に分布し、それぞれ対応していると言える。すなわち、巨視的には斜面に形成された遺物包含層であるが、微視的には旧流路跡に集中したあり方を示しているとも言えよう。

同一個体における分布状況

第159図、第160図は同一個体（接合資料①～⑨）における分布図である。個々の平面図の下と左は遺物の投影図であり、前者が斜面における遺物のあり方を示し、後者が流路方向における遺物のあり方を示している。

同一個体の分布範囲は3.0×1.5mを最大とし、1.4×1.0mを最小となっている。2.0×1.2mの範囲におさまるものがほとんどであり、比較的まとまっている。そのあり方は、直径



1.0mほどを中心にとままっているもの(①、②、③、⑨、⑩)と、やや散在するあり方をなすもの(⑥、⑦、⑧)とがある。前者のうち③は帯状に分布しているもので、②、⑨の2例は数点が中心から幾分離れた位置に分散している。後者のうち⑥は2群に分かれているものである。

位置的には①、③、⑤、⑩の4例が1谷に対応し、⑦、⑧、⑨の3例が2谷に、そして、④が3谷にそれぞれ対応している。このうち、③は1谷の上流部にあたっているもので、②、⑥の2例は1谷から2谷にかけて分布するものである。なお、2谷の⑦、⑧、⑨はレベル的にも広範囲に分散しており、凹地がかなり埋没してから形成されたものであろう。

斜面に対しては山側が高位となるもの、すなわち斜面に添って傾斜するものが①～⑥の6例である。また、流路方向では西方が高位となるもの、すなわち上流から下流にかけて傾斜するものが①、③、⑧、⑨の4例である。山側と上流が共に高位となるものは①、③の2例のみである。いずれも相対的には斜面上部が上位で、斜面下部が下流部となっている。

まとめ

遺物包含層をまとめると次のようになる。

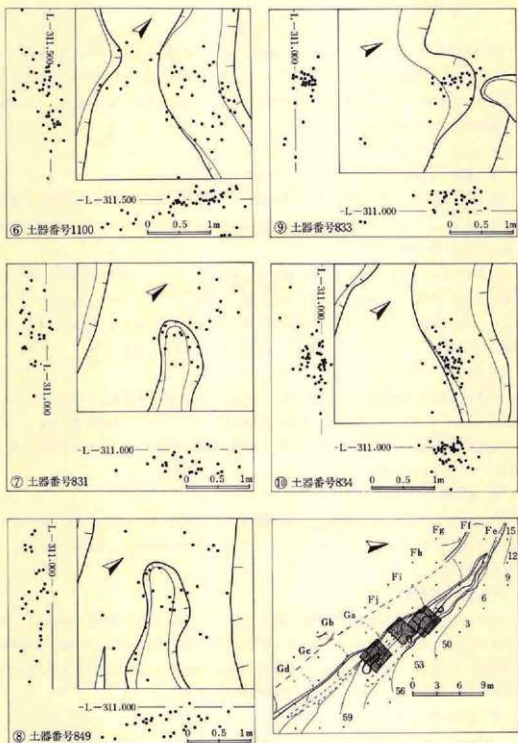
遺物包含層は埋没した小さな谷の南斜面に立地している。主に谷の北岸に形成されたものである。一部右岸においても遺物が採集されており、両岸に形成されたものと推測される。層位的には第4層が遺物包含層である。

発見された遺物は、縄文土器が約3500点、石器が17点である。その分布はグリッドによって粗密があり、1グリッド400点を越すものが3グリッド存在する。その中では旧河川の流路に濃密に分布するあり方をなす。

同一個体における分布では2.0×1.2mの範囲におさまるもので、ある程度限定された範囲に分布している。相対的には山側上位が高く、谷側下流部が低く斜めに分布している。

遺物包含層の性格は、巧あるいは巧ほどで完形となるものは1点もなく、また、個体別の破片投影図においてはかなりうねっているものがあり、流水による移動が少なからず存在したとみなければならないであろう。

反面、同一個体における分布が2.0×1.2mの範囲に限定されており、それほど原位置から移動したとは見られなく、「投棄」という人為的行為の反映と理解される。



〔8〕遺構外出土遺物

今回の調査において、多数の石器・土器等が出土した。遺構外から出土した遺物は前述のとおり、層位的に把握されたものではない。よって、層序から切り離して一括処理とした。また、遺構内出土遺物にも、この分類は適用されるものである。以下、石器、及び石製品、土器の順に概略を述べることにする。

(1) 石器・石製品 (第161～171図、写真図版123～127)

出土総数300点以上であるが、本報告書で取り上げ、作図をしたものは181点である。割愛したものは、フレーク・チップ・未製品等である。181点中、遺構外から出土した石器・石製品は70点である。内訳は次のとおりである。

石鏃……7点、石匙……2点、搔器・削器……9点、フレーク……1点、石斧……5点、石剣……3点、石槍……1点、加工痕のある礫石器……1点、石棒……1点、凹石……14点、磨石……13点、敲石……1点、半円状扁平打製石器……2点、砥石……2点、石皿……4点、打痕のある礫石器……1点、円盤状石製品……2点、石錘……1点である。

① 石 鏃

石鏃の細分は、鈴木道之助氏の分類に基づいている。115は基部が欠損しているかどうかは^(注1)必ずしも明瞭ではないが、^(注1)は欠損したものである。よって、すべて有茎石鏃である。114は先端部も基部も欠損している。体部は厚く、横断面は菱形に近い。114～7は平基有茎鏃、118～120は凸基有茎鏃に細分される。

② 石 匙

121は乳白色の玉ずいを材質としている。体部の一部が欠損する。122は上位の一部は両面から加工しているが、基本的には片面からの加工によって刃部を作り出している。2点とも、縦形石匙である。

③ 搔器・削器類

石鏃・石匙以外の加工痕を有する剥片石器を一括した。明瞭に搔器と認められるのは124の1点のみで、削器は123、127、130～1の4点である。128は側縁部の一部に、片面からの押圧剝離痕がみられるが、全体としてはフレーク又は半製品と思われる。129は両面加工により刃部を形成する。搔器とも、石槍又は石鏃の半製品とも考えられる。

④ フレーク

100点以上のフレーク・チップ類の石片が出土しているが、その一例として132のみを図示した。フレークの石質は132を含む花崗閃緑岩と、ホルンフェルス粘板岩・粘板岩・チャート

がほとんどである。

⑤ 石斧

133～7の5点が石斧であるが、すべて磨製である。133は板状の粘板岩であり、裏面は平に剥離している。表面には2ヶ所に凹がある。側縁が研磨されている。134は全面を研磨し、刃部は鋭利である。135～6は刃部が破損しているため詳細は不明であるが、135は全体が丸味をおびるように研磨するのに対し、136は稜線部が比較的明瞭である。137は刃部のみの破片であるが、極めて鋭い。

⑥ 石剣

139～140は研磨によって石剣を作り出したものであるが、138は石刀の形である。鋒は平に研磨され、図の下端部が丸く研磨されて刃部を作っている。ただし、破損がはげしく詳細は不明である。

⑦ 石槍

141は側縁部の大部分が剥離によって刃部が作られるが、先端の一部は磨製である。図の上端部から3.5cmの所に横位に磨滅痕がある。石質は板状の粘板岩である。

⑧ 石棒

特別の文様はないが、頭部の一部が沈線状に凹む。全体が打ち出しによって作られたものであり、研磨はされていない。

⑨ 凹石

144～157の14点が凹石である。使用面の相違によって3つに細分される。表裏二面に凹を持つもの……144、146、148～152、154～5、157の9点、一面にのみ凹を有するもの……156の1点、四面に凹を有するもの……147の1点である。145と153は破片であり不明である。148は完全な凹にはなっていない。敲石とも考えられる。156は側縁部が敲石として使用されている。157は扁平な粘板岩であるが、側縁の一部が研磨されて刃部状となっている。磨滅痕は、使用に伴う磨滅であるか、研磨を目的としたものかは明らかではないが、152～3、155～6の4点を除くと、他の10点はすべて磨滅痕を有する。

⑩ 磨石

158～170、172の14点が磨石である。潰痕を有し、敲石としても使用されたと考えられるものは158、162、164、167、172の5点がある。161は全体がほぼ一様に磨滅しており、磨石かどうかは疑問である。140は上下両面は扁平に磨滅している。風化が著しい。165は形状は半円状扁平打製石器に似ているが、直線の刃部のみが明瞭に磨滅しているほかは一部に潰痕的な欠損部を有するのみである。169は隅丸方形か、隅丸長方形のものに横に切った形をしている。しかし、その断面も磨滅しており、この形で完形と言える。火熱を受け赤化してい

るものは158、162、169～170の4点である。160は1.5cmほどの厚さで赤化している。

⑪ 半円状扁平打製石器

173～4の2点である。173は厚さ1cmほどの半円状をした川原石を使用している。直線部と弧状の一部に両面から打ち欠いて刃部を切り出している。使用痕は不明瞭である。174は約3.5cmほどのやや厚手である。欠損する。直線の刃部は平に磨減（ほとんど研磨と同様な状態）しており、両側面も研磨されている。火熱を受けている。

⑫ 敲石

敲打痕のみの敲石は175の1点のみである。しかし、156の凹石と、172の磨石等のように他の機能と合わせ持つ敲石は多い。175は一稜部のみ使用されている。

⑬ 石皿

179～182の4点が出土している。179は播鉢状に1点が凹む形となっているのに対し、180、182は磨面が扁平である。181は小破片であり詳細は不明である。

⑭ 円盤状石製品

176は磨減した扁平な石を両面から打ち欠いて作っている。円盤状というより、やや方形に近い。粗雑な調整である。177は同様に磨減した扁平な石を用いているが、やや丁寧に調整している。石質は前者が硬砂岩、後者は花崗閃緑岩である。

⑮ 石鏟

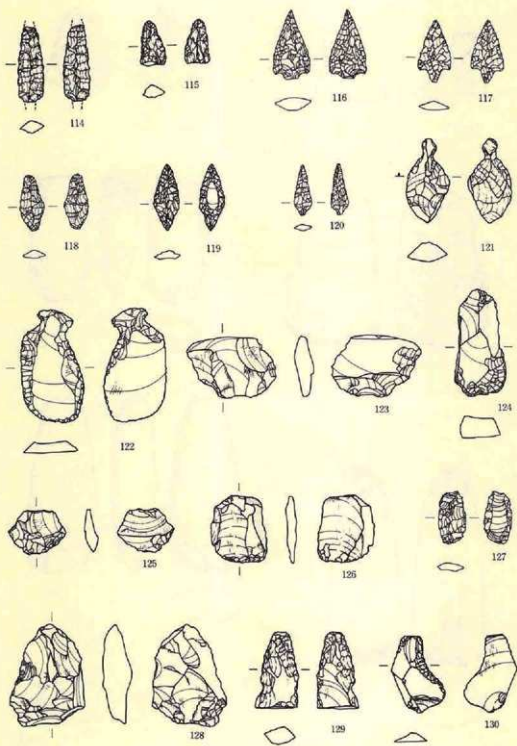
178の切目石鏟が1点出土している。長軸の両端に溝がある。短軸にはない。薄く扁平な粘板岩で磨減して滑らかとはなっているが、研磨されたものではない。

⑯ 打製機器

142は板状の打製石器で先端部が磨耗する。石鏟とも考えられる。

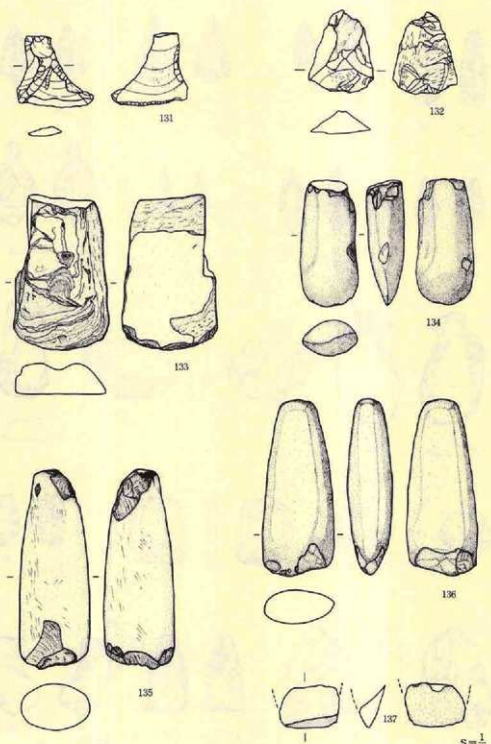
183は半円状の形をし、扁平に剥離されている。欠損とも考えられる。弧状の縁辺部には打面調整が加えられる。火熱を受け淡く赤化しているが、裏の剥離面にはその痕跡はない。石質は硬砂岩である。用途等については不明である。

以上16項目に分類される。以上の外に未製品と思われる礫5点、風化の著しい礫2点が出土している。未製品には173と同様な半円状の扁平な礫や加工痕等の痕跡のない径2cm程の玉石等が含まれる。また、風化の著しい礫は磨石又は敲石状の丸石である。いずれも石質は花崗岩である。



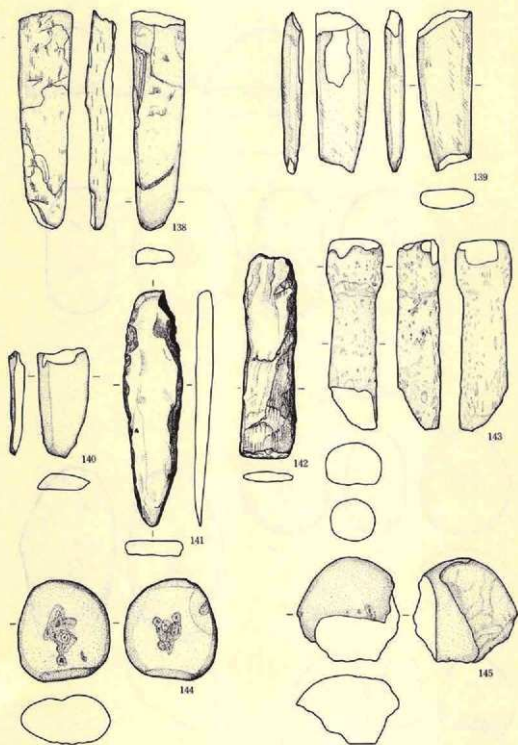
第161图 遺構外出土遺物 (No. 1)

S = $\frac{1}{2}$



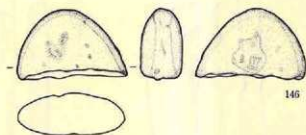
第162图 遺構外出土遺物 (No. 2)

$S = \frac{1}{3}$
 $(131, 132 - S = \frac{1}{2})$

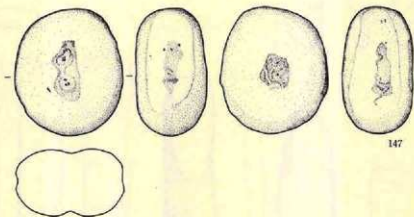


第163图 遺構外出土遺物 (No. 3)

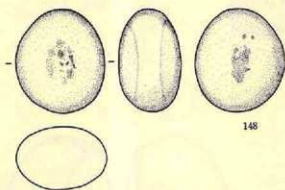
S = $\frac{1}{3}$



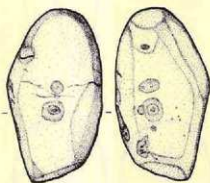
146



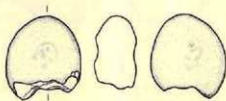
147



148



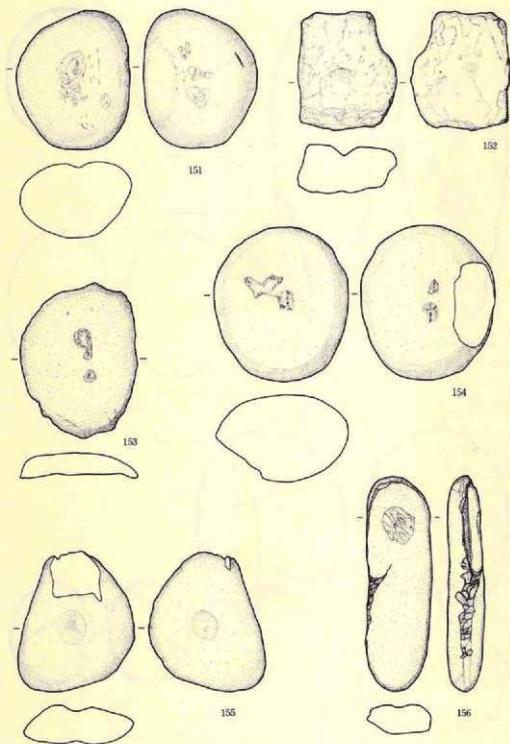
149



150

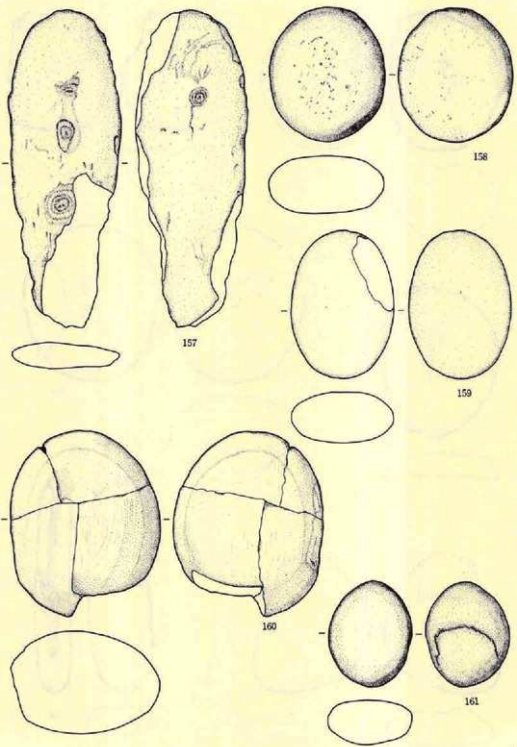
第164圖 遺構外出土遺物 (No. 4)

S = $\frac{1}{3}$



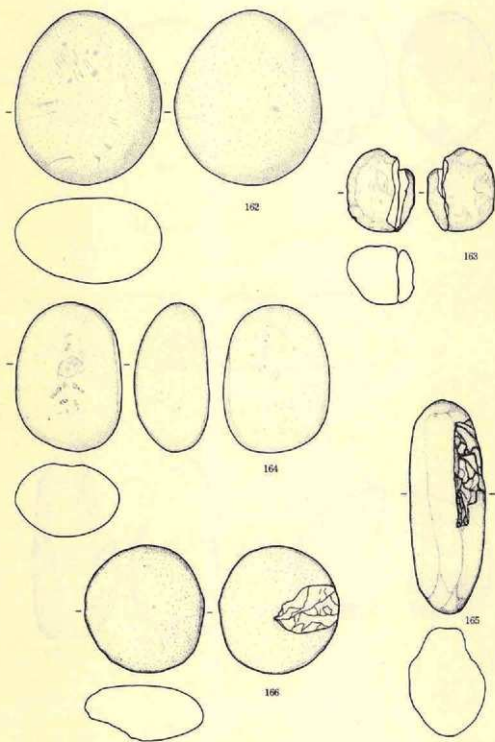
第165圖 遺構外出土遺物 (No.5)

S- $\frac{1}{3}$



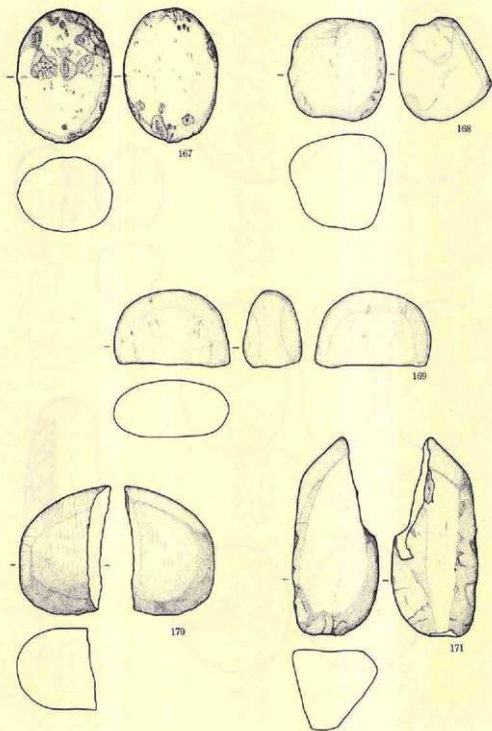
第166圖 遺構外出土遺物 (No. 6)

s = $\frac{1}{3}$



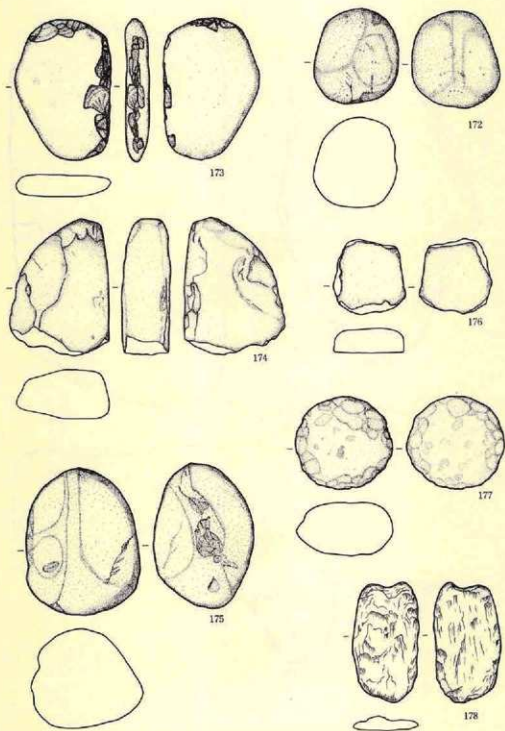
第167圖 遺構外出土遺物 (No. 7)

5
10



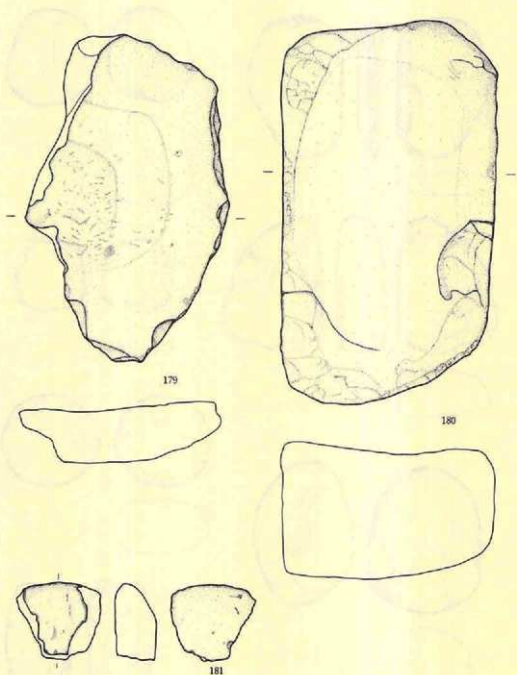
第168圖 遺構外出土遺物 (No. 8)

$s = \frac{1}{3}$



第169圖 遺構外出土遺物 (No. 9)

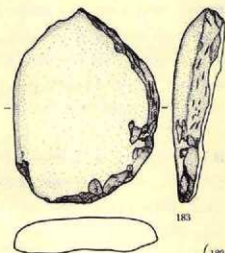
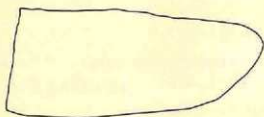
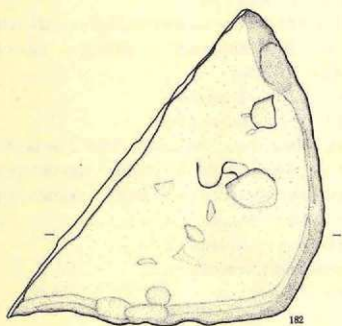
S=1/3



第170圖 遺構外出土遺物 (No.10)

$$S = \frac{1}{4}$$

$$(181 - S = \frac{1}{3})$$



第171圖 遺構外出土遺物(No.11)

(182-S- $\frac{1}{4}$)

(183-S- $\frac{1}{3}$)

(2) 土器 (第172～206図、写真図版128～148)

遺構外から出土した土器は、縄文式土器は早期から晩期までの各期と弥生式土器・土師器等である。これらを時期別に分類し、第1群～第10群土器とした。各群の区分は、下記のとおりである。第1群～第8群は縄文式土器群である。

第1群土器……早期に属する土器群で、2類に細分される。

第2群土器……前期に属する土器群で、4類に細分される。

第3群土器……中期に属する土器群中、円筒土器上層式に属する土器群で、5類に細分される。

第4群土器……中期に属する土器群中、大木式土器に属する土器群で、4類に細分される。

第5群土器……中期に属する土器群中、大木系土器に属する土器群で、2類に細分される。

第6群土器……後期に属する土器群で、3類に細分される。

第7群土器……晩期に属する土器片で、3類に細分される。

第8群土器……縄文式土器の粗製土器で、4類に細分される。

第9群土器……弥生式土器を一括した。

第10群土器……土師器を一括した。

以下、各群の概略について述べる。

第1群土器 (第172図、写真図版128)

縄文式土器の早期に属する土器で貝殻文である。沈線の有無によって2つに細分される。この1群土器はすべて、南区から出土したものである。出土層位は表採も含めて、すべて浅い位置からの出土である。完形品はなく、すべて小破片である。

第1類 822～5の土器片である。外面にそがれた口唇部には貝殻腹縁文が連続して押圧される。口縁部は4本1組の沈線が2段に回わる。その沈線間を垂直又は斜行に4本1組の沈線が区画する。その区画内に2個1対の棒状刺突が、縦1列又は縦横2列に充填される。体部は貝殻圧痕文である。胎土はやや緻密であるが、多量の繊維を含んでいる。小破片のため器形等については不明である。本類に属するのはこの4片のみであり、しかもこれらは同一個体と思われる。

第2類 826の土器片である。貝殻圧痕文である。合計10点が出土しているが口縁部や底部は出土していない。これらは胎土・焼成・器厚等から少なくとも3個体分は含まれると思われる。いずれにも繊維が含まれる。本類に属する土器のうち826が最大の破片であり、すべて小破片である。器形等については不明である。

第2群土器

本群は前期に属する土器群で、円筒土器下層式に属するものを一括した。出土地点はDⅥ区と南区に集中する。出土層位は1群土器と同様である。完形品はないが、復元できたのは5点のみで、それらはいずれも包含層から出土したものである。本群は4つに細分されるが、細分にあつては村越氏の分類に基づくとともに「縄文土器大成」も参考とした。

第1類 (第172図、写真図版128)

本類に属するのは827～9の3点である。827は小型深鉢である。口縁部には2～3条の縄文原体圧痕文が施される。体部は撚糸文が主として縦位に施文されている。底部は上げ底である。胎土には夥しい繊維が含まれる。828の口縁部文様は827と同様であるが、体部文様は羽状縄文である。829は器面調整が粗雑で口唇部は外側にまくれ、器壁は凹凸がはげしい。いわゆる口縁部文様体はなく、撚糸文が口縁部まで横位に施文される。胎土には夥しい繊維が含まれる。

本類は円筒土器下層a式に比定される。

第2類 (第172図、写真図版128)

本類に属するのは830の1点のみである。口縁部と体部との境に隆帯が1本貼付される。口縁部には縄文原体圧痕文が大波状をえがくように施文される。隆帯上には竹管による刺突文が加えられる。体部には太い多輪絡糸体回転圧痕文が施文される。

本類は円筒土器下層b式に比定される。

第3類 (第172～5図、写真図版128～130)

本類に属するのは、831～849の19点である。831は縄文原体圧痕によって幾何学的文様を構成する。口縁部文様体の幅は4～4.5cmである。体部は結束第1種の羽状縄文である。832～3、835～6は縄文原体圧痕が緩やかな大波状をえがくように押圧される。832の体部部文様は撚糸文を縦位に施文した後、綾絡文を横位に回転させ簾状としたものである。833は結束1種の羽状縄文である。834、838の口縁部には単輪絡糸体(第G A類)が回転施文され、体部は木目状撚糸文(註5)である。ただし、834には口縁部と体部の境に2条の縄文原体圧痕が施文されるが、838にはない。口縁部文様体の幅は2.5～3cmである。837は口縁部文様は二段にわかれ、上段は縄文原体圧痕により幾何学的文様を構成する。下段は撚糸側面圧痕文が幅広く横位に施文される。839は撚りの異なる縄文原体を重ねて押圧したのち、緩い綾絡文を回転施文させている。840は縄文原体圧痕文の間に2個1対の細い棒状刺突が二段に施文され、口縁部と体部の境には2条の綾絡文が横位に回転施文されている。体部は単筋斜縄文である。841は撚りの同じ縄文を重ねて押圧し、その間に綾絡文と棒状刺突が加えられる。小片のため不詳である。842は縄文圧痕が大波状に押圧され、体部文様との間に棒状刺突が2列に施文される。口縁部文様は6～6.5cmと広がっている。843は口縁部の上方が短かく外反する。小片のため詳細は不詳であるが、縄文原体圧痕に

綾絡文が施文される。844は上下两段に縄文原体圧痕が平行に押圧され、その間には斜に縄文原体が押圧される。845は縄文が波状に押圧され、体部文様との境には棒状刺突が2列にまわる。体部は撚糸文である。805は口縁部には幅広く縄文原体圧痕が施される。体部は多輪軸状体回転圧痕文である。806は口縁部が鋭く外反する。3段に棒状刺突文が施文される。その間に縄文原体圧痕が、上段には幾何学的な、中・下段には平行に押圧される。体部は羽状縄文と思われる。848は数条の縄文原体圧痕が平行に押圧され、その間に綾絡文が施文される。口縁部文様体は5～5.5cmである。849は口縁部付近からやや外反する器形である。平行ないし波状に押圧された縄文原体圧痕の間に竹管の刺突が2段に施文される。中央部には綾絡文が施文される。口縁部文様体は4～4.5cmである。口唇部にはキサミ目が施文される。体部は結束一種の羽状縄文である。以上、本類に属するすべての土器は、その胎土に繊維が含まれている。

以上、本類は円筒土器下層C式に比定される。

第4類 (第175図、写真図版130)

本類に属するのは850～6の7点である。隆起帯の有無によって更に2分される。850～2、の3点は隆起帯をもたず、853～6の4点はある。850は縄文原体圧痕と棒状刺突の交互の施文によって、口縁部文様体を構成する。851は上下に3条の縄文圧痕が押圧され、その間に綾絡文が施文される。852は平行ないし斜行の縄文原体圧痕が施文される。853は縄文原体圧痕文で、隆起帯上には半截竹管による連続刺突が加えられる。854は隆起帯をはさんで上下に綾絡文が施文される。隆起帯上には細い2個一対の棒状刺突が加えられる。855～6は単輪軸状体側面圧痕文が口縁部及び隆起帯上に施文される。ただし、856は隆起帯を越えて2～3条施文される。

以上の土器は胎土に繊維が含まれるが、内面は光沢がでるほど研磨されている。体部文様は羽状縄文がほとんどと思われる。

本類は円筒土器下層d式に比定される。

第3群土器

本群は中期前半に位置づけられる土器群で、円筒土器上層式に属するものを一括した。出土地点は調査区全域に広がるが、B V区・B VI区からはほとんど出土していない。

第1類 (第176～8図、写真図版131～132)

本類に属するのは857～883の29点である。口唇部には厚い隆帯が貼付され、その上にコイル状に縄文原体圧痕が施文される。また、隆帯の貼付と縄文又は撚糸圧痕により口縁部文様体を構成する。文様構成の相違により細分が可能である。857～861の5点は口唇部のみに隆帯が貼付される。857の波状口縁で、口縁部まで単筋斜縄文が施文される。同原体のルーブ痕が顕著にみられる。858は口唇部に隆帯は貼付されないが、口唇部にはコイル状に縄文原体が側面から押圧

される。861も同様に隆帯をもたないが、口唇部に上から縄文原体がコイル状に押圧される。860は857と同様に扁平な隆帯を貼付し、その隆帯部まで単節斜縄文が施文される。858～9、861の3点は縄文原体圧痕が何条にも平行に押圧される。862～870の9点は4つの山形口縁で頂部には突起部を持つと思われる土器群で、口縁部は縄文原体圧痕と隆帯により、長方形の区画を作る。862は単軸絡条体側面圧痕文である。871～9の9点は組紐又は縄文原体側面圧痕によって彫刻状の文様を作る土器群である。880、884はやや細めの隆帯をもつ。881～883は隆帯を貼付した突起部である。885は隆帯によって区画された中に縄文原体圧痕文が垂下又は弧状に施文される。以上の土器群の胎土には繊維は含まれない。

本類は円筒土器上層 a 式に比定される。

第2類 (第179～180図、写真図版132～133)

本類に属するのは886～892の7点である。太い隆帯によって区画された中に、縄文原体圧痕文や組紐の圧痕と、縄文原体を折り曲げた瓜形文が施文される土器群である。886、890のように、口縁部は4つの山形口縁で、頂部は二又になると思われる。体部は結束第1種の羽状縄文(886)や、綾絡文(890～1)、単節斜縄文(892)等がみられるが、いずれも横位に回転施文したものである。

本類は円筒土器上層 b 式に比定される。

第3類 (第180～1図、写真図版133～134)

本類に属するのは893～908の16点である。隆帯の貼付によって区画された中に、割箸状工具等による連続刺突文が充填される土器群である。隆帯上には縄文が押圧又は回転施文される。口唇部には隆帯が液状に貼付される(893～5、897、904～5)。907は隆帯は細く、いわゆる隆起線であり、刺突もきわめて細い。905は棒状刺突、908は竹管刺突、896は半截竹管刺突である。

本類は円筒土器上層 c 式に比定される。

第4類 (第182図、写真図版134～135)

本類に属するのは909～915の7点である。口縁部まで縄文が施文されたのちに隆帯を貼付する土器群である。隆帯は細くなり、貼付も雑であるため、剥落が多くみられる。909は口縁部が大きく外反するとともに、隆帯の作る文様も第3類に近い。しかし、914になると簡略になってくる。

本類は円筒土器上層 d 式に比定される。

第5類 (第182図、写真図版135)

本類に属するのは916～9の4点である。これらは円筒土器の様式を残しながらも、大木式の影響を受けて成立した土器と思われる土器群である。916は頸部がややくびれ、内傾するよ

うに立ち上がる。口縁部文様は半截竹管による連続刺突が口唇部付近につけられる。刺突文から斜行するように6～7本の沈線が引かれる。沈線と同じ方向に2列に半截竹管の押しびき文がつけられる。その下には2本の平行沈線の間に鋸歯状の沈線文がえがかれる。体部は無節斜縄文である。胎土は緻密で内面は黒褐色に光沢を放す。この916に類似する土器は、鳩岡崎遺跡から出土しており、大木6式に相伴する。876～8は縄文原体圧痕による文様構成である。

本類は中期中葉(註6)と思われる。

第4群土器

本群は中期中葉から末葉に位置づけられる土器群で、大木式土器に属するものを一括した。出土地点はB V区、B VI区を除く全域から出土する。

第1類 (第183図、写真図版135)

本類に属するのは920～1の2点である。ともに破片で詳細は不詳であるが、器形は浅鉢形と思われる。縄文原体圧痕により波状、不整な楕円形、渦巻文等の文様が構成される。強い圧痕のため、一部は隆沈線状となる。文様の区画内にも縄文が回転施文される。内面は褐色の光沢を帯るほどよく研磨されている。

本類は大木7b式に比定される。

第2類 (第183～4図、写真図版135)

本類に属するのは922～936の15点である。本類は沈線文土器と隆沈線文土器に細分される。沈線文土器は922のみである。器種はキャリバー形の深鉢と思われる。923～936は隆沈線による渦巻文様がえがかれる。923は口唇部の大部分と体部の一部が欠損するが、ほぼ完形に近い。内傾する口縁部にのみ渦巻文、円形・長円形文が施文される鉢形土器である。924は渦巻状の突起部で赤色の彩色土器である。925～6は波状口縁の波頂部である。隆沈文内には複節斜縄文が施文される。927は把手で沈刻文が施される。928～933は縄文を施文した上に渦巻状の隆帯を貼付した体部片である。934～5は渦巻文ではないが、同様の手法による文様体である。936は沈線と沈刻文で、赤く彩色されている。924と同一個体の可能性がある。

本類は大木8式に比定される。また、922は大木8a式、923～936は大木8b式に比定される。

第3類 (第185図、写真図版136)

本類に属するのは937～943の7点である。いずれも小破片で細部は不詳であるが、937のように縦位の楕円形状の磨消縄文である。937は縄文を施文した後沈線で区画し、外部を磨消しているのに対し、942は沈線による区画内に縄文を充填させたものである。

本類は大木9式に比定される。

第4類 (第185～7図、写真図版136～137)

本類に属するのは944～976の33点である。944を除けばすべて小破片のため文様の単位は不明なものが多いが、すべて磨消縄文である。944は「J」字状文が横位に連結する文様体である。長方形に磨消しが行なわれるもの(946～950)、曲線で区画され磨消されるもの(951～972)、磨消部が鱗状に隆起するもの(973～6)に分けられる。950と955は口唇部に、968と974は区画内に棒状刺突文が施される。958～960は胎土も緻密で内外をよく研磨し、暗褐色の光沢をもつ。

本類は大木10式に比定される。

第5群土器

本群は中期中葉から末葉に位置付けられる土器群で、大木系土器に属するものを一括した。出土地は調査区全域に広がるが、B V区、B VI区は少ない。沈線の使い方によって二分される。

第1類 (第188図、写真図版137～138)

本類に属するのは977～1003の27点である。977～988は口縁部破片であるが、口唇部に太い沈線がはいるもの(977～982)、口唇部に細い沈線がはいるもの(943～4)、口唇部には沈線がはいらないもの(985～7)に細分される。977は368と同一個体と思われる。986を除くと他はすべて波状口縁と思われる。口縁部から体下半部まで縄文を施文した上に2～3本1組の沈線が弧状又は円形等のモチーフをえがく。987は沈線間に棒状刺突が加えられる。

本類は複林式に比定される。

第2類 (第190図、写真図版138～139)

本類に属するのは1004～1014の11点である。これらは沈線文ではあるが、器面調整、文様構成等から第1類とは区別される。1004～5は胎土や研磨等からは第4群第4類に類似する。沈線の状態からみると1004、1010～1は第4群第4類に、1005～8、1012～4は第5群第1類に類似する。1009は縄文原体圧痕文が口縁部と平行に4本押圧される。原体はRLRの複節である。押圧縄文の下に沈線によって鋏形状の文様がえがかれる。焼成は良好である。この文様体に類似するのは、大湯式にみられる。1004、1006～7の3点は口縁部文様の最上部に棒状刺突(註7)が加えられる。そのうち1006～7の2点は押し引きしたものである。以上、小片なため細部が不詳なものを一括したことにより、本類は中期末葉から後期初頭のいずれかの形式に細分されるであろう土器群であり、本類として独立しているものではない。

第6群土器

本群は後期に属する土器を一括した。本群は前葉に位置付けられる沈線文と磨消縄文の一群

と後末葉の土器群とに細別される。

第1類 (第191～2図、写真図版139～140)

本類に属するのは1015～1044、1048の31点である。1015～1032は沈線文土器である。1015は口縁部に長方形の区画文と小さな縦位の突起が貼付される。体部文様は網目状襷糸文である。1016は口縁部文様は1015と同様であるが、体部文様は網目状襷糸文にかわって沈線文となる。1017～1022は沈線区画文、1023～1032は沈線曲線文である。1020、1022、1032の3点はミニチュア土器で、1032は小型蓋付き壺の蓋である。なお、1026と1032は赤く彩色されている。1033～1041は磨消部が広がる所謂、帯縄文である。1042～4は一部磨消しもみられるが基本的には地文の上にやや太めの鋭い沈線をいれる沈線文である。掘の内2式に類似する。1048は鐙型土製品である。上部は独立せず、孔が一つあけられる。体部文様は細い沈線と棒状刺突である。文様体を除くと、形態的には408と同様である。

本類は十腰内工式に比定される。

第2類 (第192図、写真図版140)

本類に属するのは1045～7の3点である。1045は器種は不明であるが、鉢形土器の口縁部が外反する土器の頸部と思われる。1046は壺又は注口土器状の体部片である。この2点は磨消縄文である。縄文は1045ではR Lの単節斜縄文を施文したのち、L Rを施文し、一見羽状縄文に見える。1046は器表面の磨耗が著しく細部は不詳であるが、同様にR Lを施文したのち、L Rを施文し羽状的にしたものと思われる。頸部に瘤が貼付される。1047は棒状刺突と曲線沈線文の浅鉢である。2列にまわる刺突帯間に、縦位に2個一対の瘤が貼付されている。外面は磨耗が著しいが、内外とも赤く彩色されている。口縁部及び体下半部を欠損する。

本類は後期後葉に属する土器群である。

第7群土器

本群は晩期に属する土器群を一括した。文様体の形式により3類に分類する。また、類も更に細分される可能性を持っている。調査区全域から僅かずつ出土するが4ヶ所から一括出土する。

第1類 (第193図、写真図版140)

本類に属するのは1049～1050の2点である。1049は口唇部直下にキザミ目帯がまわり、その下には磨消し縄文が浮き彫りされる。1050は口唇部とその下にキザミ目をもち3本の平行沈線をもつ。本類は晩期前葉、大洞B-Cに比定される。

第2類 (第193～5図、写真図版140～142)

本類に属するのは1051～1079の38点である。1051は1050の文様体が一層簡略化し沈線化したものである。口唇部には菊目とB型突起が付き、口縁部に二本の平行沈線がまわる。1052は

口唇部には外側に2個1対、内側の上に1個の小突起がつく。内側の口唇部直下には一本の、外側には2本の平行沈線がまわる。器壁には単節斜縄文を施文したのち、雲形文が沈刻される。体下端部に沈線が1本まわる。底面は無文でミガキがかけられる。1053は小型の浅鉢で口唇部内側に沈線が1本めぐり、口唇部外側には2個1対の小突起がつく。口唇部直下は一段低くなり無文である。体部は単節斜縄文を施文した上に沈線文が横位に流れる。1054は小型の鉢形土器で内面に残滓が付着している。口縁部は短いが大きく外反する。口唇部は1052と同様であるが、口縁部は無文帯となる。体部は影らみをもち、器面には縄文が施文され、縄文本体は直前段多条L $\begin{matrix} | \\ R \\ R \\ R \end{matrix}$ である。

1055は小型の鉢である。口唇部にキザミ目がつけられ、2個1対の小突起がつく。口縁部は一段低くなり無文帯となる。体部上端部に2個1対の瘤が貼付される。1056は鳥の首状の突起である。1057は磨消縄文ではあるが、詳細は不明である。1058は口唇部はキザミ目と内側に沈線1本、口縁部には3本の平行沈線がまわる。1059～1060は2個1対の小突起が口唇部に多数貼付される。口縁部は無文帯、体部は磨消縄文で浮き彫り状の沈刻文である。内外面に入念なミガキが施される。1061は小型の浅鉢型土器である。口唇部直下の内外に沈線1本がまわるほか、口唇部上に小突起がつけられる。1062～3は口縁部の補強のため内側に太い隆帯を貼付する。口唇部は指頭圧痕により波状の凹凸をもつ。口縁部はそかれたように凹む。1064～9は平行沈線文である。1067は口唇部にキザミ目がつく。1070は壺の肩部と思われる頭部には2本の沈線がまわる。赤く彩色されている。1071は1070と同一個体と思われる、壺の頭部である。口唇部直下に2本の沈線がまわる。1072～3は口唇部に2個1対の小山形突起がつき、口縁部先端にまで縄文が施文される。1074は口縁部がやや外反し、1076は太い平行沈線がまわる。1079は内側口縁部に隆帯が貼付されるという特徴はあるが、この3点はいずれも口唇部の上から指頭圧痕がつけられ、小波状口縁となる。1075は基本的には1062と同じ様式であるが、頭部が長い。1077は壺の口頭部であるが、口唇部直下に沈線がまわる。1078は壺の体部片である。肩部が張り、頭部付近に沈線がまわる。

本類は晩期中葉に属する。1051～1054は大洞C₁に、1055～1079は大洞C₂に比定される。

第3類 (第196図、写真図版142)

本類に属するのは1080～1090の11点である。器種は皿、台付き鉢・鉢・壺等と豊富になる。

1080は皿である。接地面を除く外側にはエ字文状の平行沈線がえがかれる。口唇部には2個1対の小突起がつけられる。沈線文の中にも彫り残す形で2個1対の瘤がつけられる。赤く彩色された土器である。1081は台付き浅鉢形土器の鉢部と思われる。エ字文状の文様である。

1082もエ字文状の沈線文、1083は小山形口縁の頂部であり沈線が施される。いずれも赤く彩色される。1084は口唇部直下の内側に1本、外側に2本の沈線がまわる壺形土器の口頭部である。

内外ともに入念な研磨が施され赤褐色の光沢を帯びる。1085～8の4点は口唇部直下に沈線が入らないもの(1085)、1本入るもの(1086)、2本入るもの(1087～8)の相違はあるものの、口唇部に二又の山形小突起を持ち、その直下まで縄文が施文されるという点において共通する。1089は口唇部は内外に沈線が入るため凸状となる。沈線文と棒状刺突文が施文され、瘤が貼付される。1090は台付き深鉢であるが台部及び口縁部の一部が欠損する。平行沈線文で2個1対の瘤が彫り残しの形でつけられる。

本類は晩期後葉に属する。1080～1、1082～4は大洞Aに、1081、1085～1090は大洞A'に比定される。

第8群土器

本群は無文様体の土器群を一括した。本群を4つに分けたが、これは時期別による細分ではなく、本群に包括される土器を説明するための便宜的な分類である。

第1類(第197～9図、写真図版143～145)

本類の対象となるのは、時期不詳の土器群のうち、実測可能に復元された土器及び何らかの特徴を有する土器(1091～1119)である。1091は結束第1種の羽状縄文が施文される円筒深鉢型土器で、胎土に多量の繊維が含まれる。1092は円筒深鉢型土器で器厚は厚い。赤褐色の色調をし、胎土に繊維は含まれない。1093は体中央部が膨らむ。DV区の遺構外から出土した埋設土器である。1094の器高は堆定で約9cmの小型のコップ状の土器である。櫛歯状条痕文が縦位に施文される。1095は灰白色で無文のコップ状の土器である。台付きであるが、台部は欠損しており不明である。輪積み痕が明瞭である。1094～5の2点は小型ではあるが実用品と考えられる。1096は底部から緩く内彎するように立ち上がり、口縁部付近で最大径となる深鉢である。1097は1093と同様の器形である。1098は1063と同様の口縁部を持つ。1099は明灰褐色できわめて硬く焼成されている。口唇部に上から縄文が回転施文される。1100は口縁部内側に補強の隆帯が貼付される。1101は口縁部の作りは1098と同様であるが、指頭圧痕が丁寧に押圧されたのち、ナデ調整をしたものである。1102は壺又は注口土器の体部である。暗灰白の色調で硬く焼成されている。1103は壺の口頸部である。1104は手捏ねのコップ型土器である。ミニチュアか実用品かは不明である。完形品である。1105は深鉢型土器であるが、上部は無筋、下部は単筋斜縄文である。1106は燃糸文が横位に施文される体部片である。

1107は内彎して立ち上がる口縁部片である。ミガキが施され無文である。1108は口唇部直下に沈線がまわり、沈線と口唇部間には縄文が施文される。1109は綫い大波状口縁となる網目状燃糸文である。1110は燃糸文である。1111は壺又は注口土器の体部片と思われる。細粒の単筋斜縄文である。頸部には太い沈線がまわる。1112は頂部が平らな山形突起である。1113は磨消縄文で口唇部には小さな突起がつまみ出されたようにつけられる。1114は幅の広い無文の口縁

部がやや外反ぎみに立ち上がる。1115はやや肥厚した口唇部に指頭圧痕が弱く押圧される。1116～7は歯状条痕文であるが、前者は大型の鉢形土器で、放射状に施文されるのに対し、後者はクロスする。1118は「く」の字状に大きく外反する鉢又は壺形土器の口縁部破片で、頸部に2本の平行沈線がまわる。1119は注口部である。先端部はくびれて肥厚する。

第2類 (第200～2図、写真図版145～146)

本類は口縁部の形状の相違に着目して、口縁部片を一括した。立ち上がりの相違によって3つに細分される。

第1項 (1120～1125) 本項は、体部から口縁部上端までほぼ直線的に立ち上がる器形である。口唇部の整形法により、次のように細分される。①口唇部が平らなもの(1120)、②内側に直線的にそがれるもの(1121)、③内側に大きく滑めらかにそがれ、口唇部が細くなるもの(1122)、④口唇部内側に隆帯が貼付されるもの(1123)、⑤口唇部が丸くなるもの(1124)⑥口唇部が内外からそがれ、角ばるもの(1125)等がある。

第2項 (1126～1134) 本項は、口縁部が外反する器形をもつものである。口唇部の調整法及び屈折度により、次のように細分される。①口縁部上端部に隆帯が貼付されるものである。図示した1126は僅かに外反するが、この種のもので、ほぼ直立するものもある。②口縁部付近で緩く外反し、口唇部は外側にそがれるもの(1127)、③口縁部の上端が短く屈折するもの、(1128)、④大きく直線的に外反するもの(1129)、⑤口縁部が短かく曲線的に外反するもの(1130)、⑥口縁部が大きく曲線的に外反するもの(1131)、⑦口縁部上部がまくれるように短かく外反するもので、図示したのは大波状口縁である(1132)、⑧先端部に向かってしだいに細くなり、全体が緩く外反するもの(1133)、⑨無文の幅の広い口縁部が「く」の字状に外反する(1134)。

第3項 (1135～1141) 本項は内彎して立ち上がる器形のものである。①口縁部が内側から輪積み状に接合され、外側はそがれたように凹む。口唇部は丸く外反する(1135)。②作りは①と同様であるが、口縁部はほぼ直立し、口唇部は平らになる(1136)。③口唇部が直線的に内側にそがれるもの(1137)。④口縁部外側がやや急角度に内傾するもの(1138)。⑤先端が先細りするもの(1139)。⑥口唇部が丸くなるもの(1140)。⑦口縁部が外側にそがれた形になっているもの(1141)。

以上に分類されるが、第2群に共伴すると思われる胎土に繊維を含む土器群は、第1項②③のみにみられる。

第3類 (第202～5図、写真図版146～147)

本類は底部片又は底部を含む体部を一括した。底部の形状により3つに細分される。

第1項 (1142～1165) 本項は平底の土器を一括した。底部の圧痕の有無によって細分さ

れる。①1142～1157は底部に圧痕文がないものである。1145、1154はナデ、1147、1152はミガキ、1148、1150、1155はヘラケズリ等の調整が施される。しかし、一般に調整は雑である。なお、1144はミニチュア土器で、内外面が赤く彩色されている。②1157～1165は底部に圧痕文を有するものである。1159、1164～5は木葉痕であり、その他は網代痕である。1164は笹状の単子葉植物の葉痕である。

第2項 (1166～1177) 本項は上げ底の土器を一括した。1168は大部分の底部が欠損する。1166～9、1172～4はミガキ調整で光沢を滞びる。いずれも胎土に繊維が含まれる。1175は本項に属する土器は圧痕を有する土器であるが、痕跡は不鮮明である。1167は多軸絡条体回転圧痕文、1176は櫛歯状条痕文でミニチュア土器である。

第3項 (1178～1187) 本項は広い意味では上げ底であるが、台付き状に明瞭に意識して作られた土器を一括した。1179と1187は底部を削る手法をとるのに対し、他は底部の外周を一段高くする手法をとる。1180～1は明らかに台部である。1188は本項に含まれるものではないが、ここで説明しておく。これは凸状になっている底部で、焼成によるゆがみではなく、意識的に作られている。すわりには関係がない。

第4類 (第205図、写真図版147)

本類は土製品を一括した。1189～1190は円盤状土製品、1191は板状土器の破片である。

第9群土器 (第205図、写真図版148)

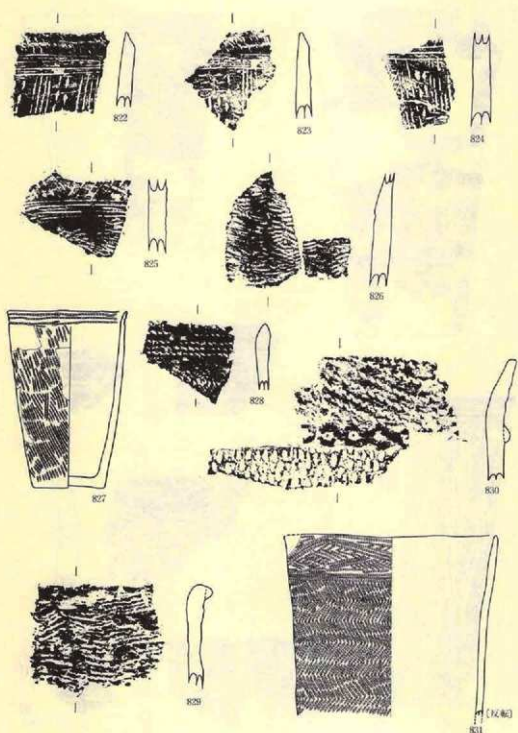
本群は弥生式土器を一括した。小破片かつ出土量が少なく詳細は不明であるが、1192は坏か皿、1193は坏の高台部、他は鉢と思われる。1192は口縁部は緩やかな波状口縁をなし、波頂部は二又に分かれる。口縁部直下には帯縄文が1本めぐり、その下には入組文状に磨消縄文が施文される。縄文部は赤く彩色される。1193は上下とも欠損しており詳細は不明であるが、深い沈線によって波状に区画され、磨消縄文となる。1194～6はすべて異個体であるが、その文様は同じで、平行沈線と鋸歯状の沈線文の組み合わせである。1192は口唇部に縄文が施文される。1195は赤く彩色される。1197は緩やかな波状口縁をえがく。磨消縄文である。

本群に一括された土器は一時期に一括できるかどうかは疑問である。1194～7は新里村、和井内遺跡から出土した土器に類似する。

(注8)

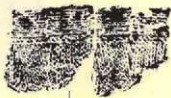
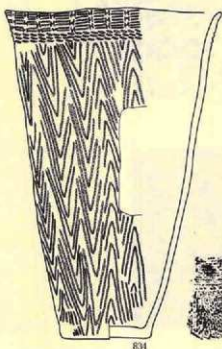
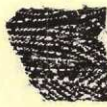
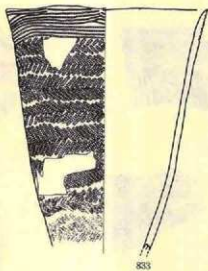
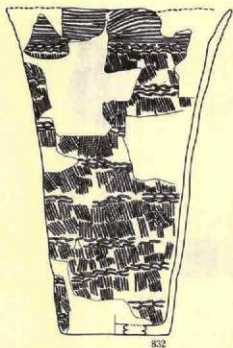
第10群土器 (第206図、写真図版148)

本群は土師器を一括した。土師器はその大部分が遺構内出土であり、遺構外からは少数点が南区から出土したのみである。いずれも張の破片である。1198は緩く、1199は鋭く外反する口縁部であり、1200は底部片である。ロクロ未使用で、器面調整はヘラケズリを主とする。



第172圖 遺構外出土遺物 (No.12)

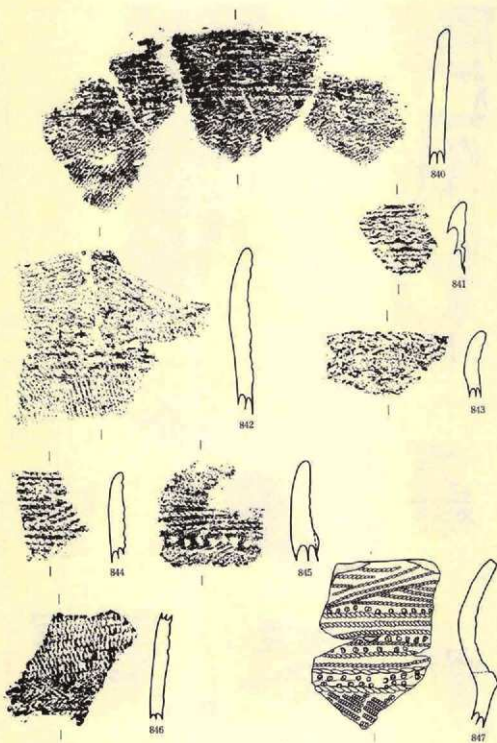
$S = \frac{1}{2}$
 (827, 831 - $S = \frac{1}{4}$)



(832, 834 - $S = \frac{1}{4}$)

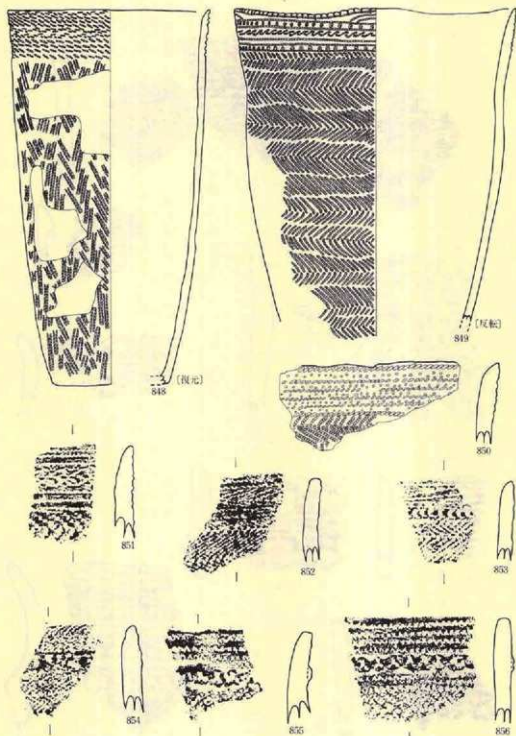
(835, 839 - $S = \frac{1}{2}$)

第173图 遺構外出土遺物 (No.13)



第174图 遺構外出土遺物 (No.14)

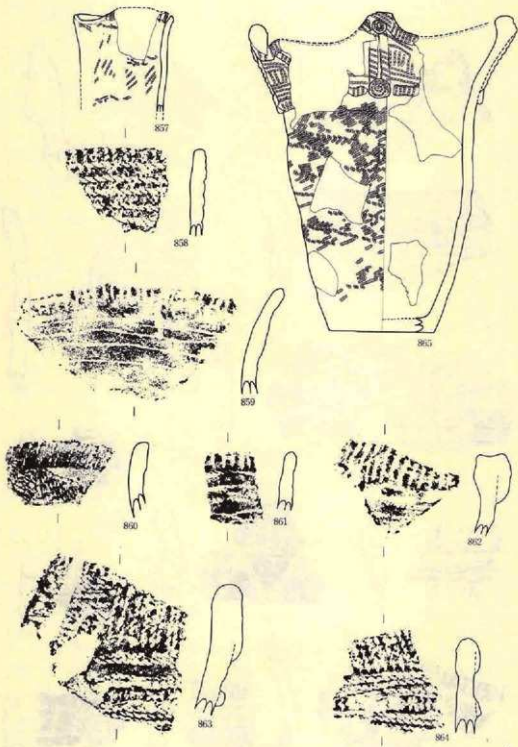
S=1/2



第175图 遺構外出土遺物 (No.15)

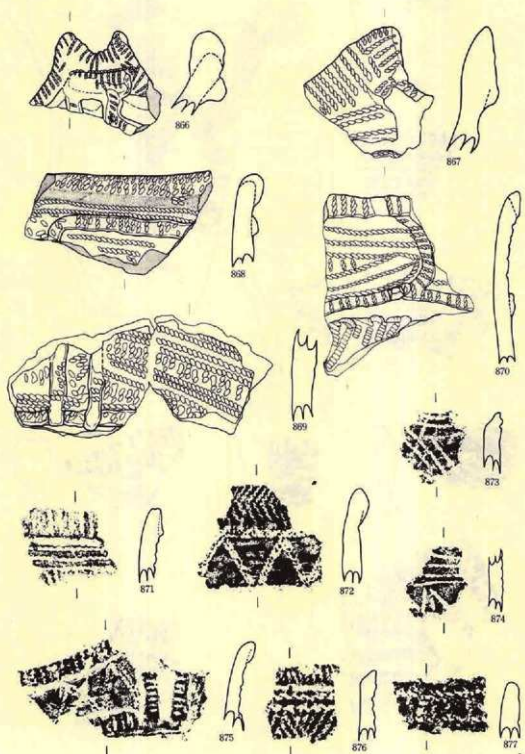
(848-849-S- $\frac{1}{4}$)

(850-856-S- $\frac{1}{2}$)



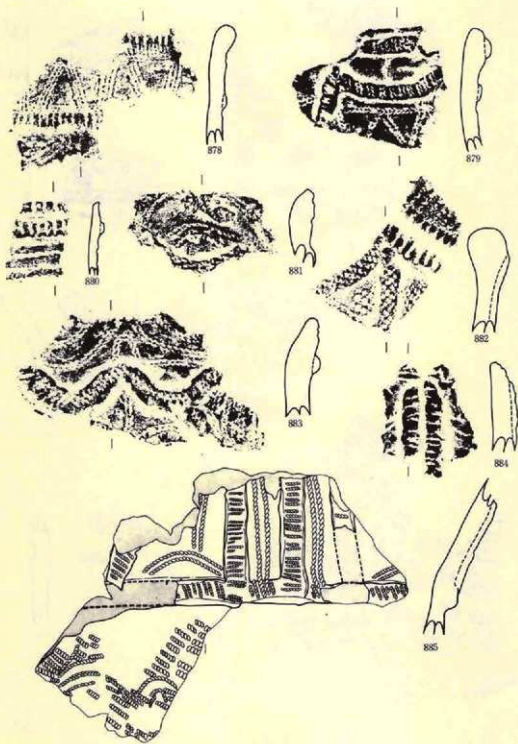
第176圖 遺構外出土遺物 (No.16)

$S = \frac{1}{2}$
 (857, 865 - $S = \frac{1}{4}$)



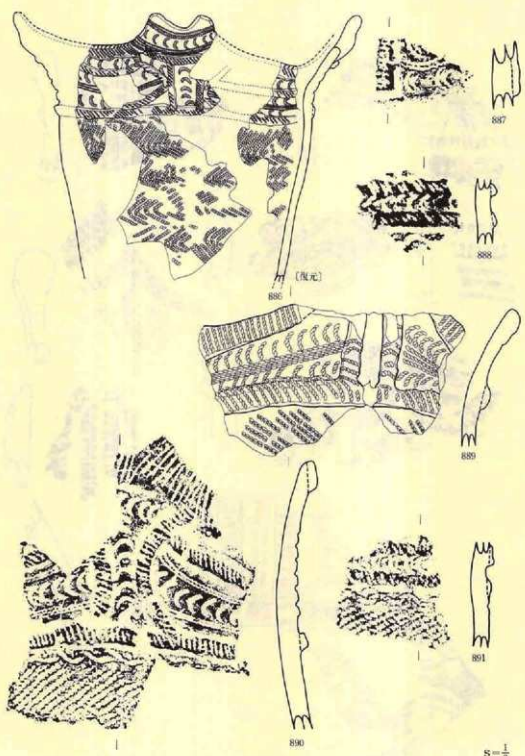
第177图 遺構外出土遺物 (No.17)

S = 1/2



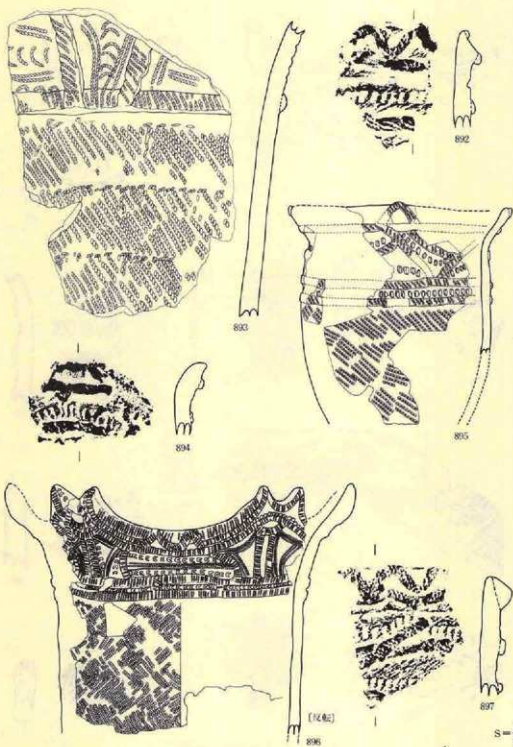
第178圖 遺構外出土遺物 (No.18)

S=1/2



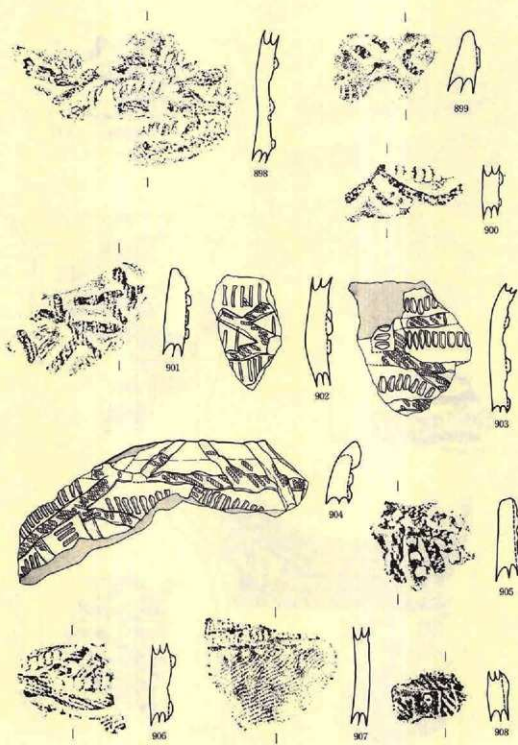
第179図 遺構外出土遺物 (No.19)

$S = \frac{1}{2}$
 $(886 - S = \frac{1}{4})$

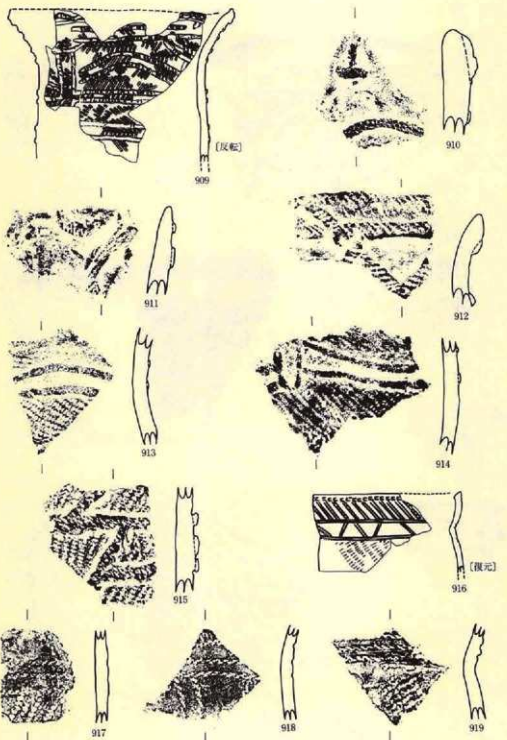


第180图 遺構外出土遺物 (No.20)

$s = \frac{1}{2}$
 $(895, 896 - s = \frac{1}{4})$

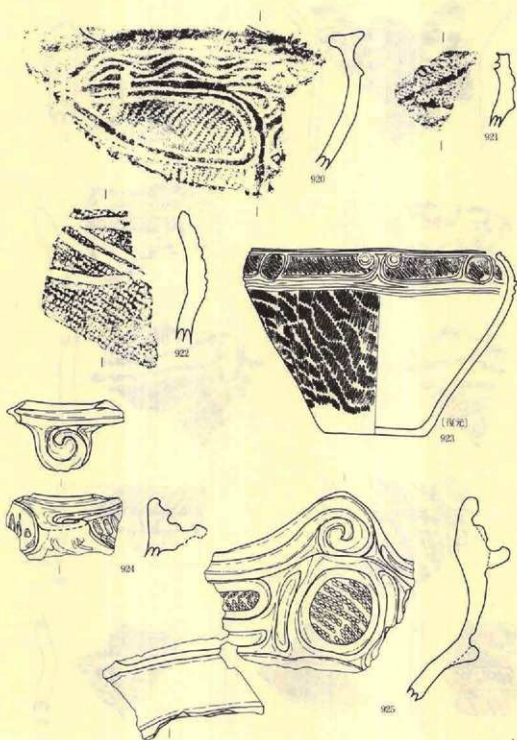


第181图 遗物外出土遺物 (No.21)

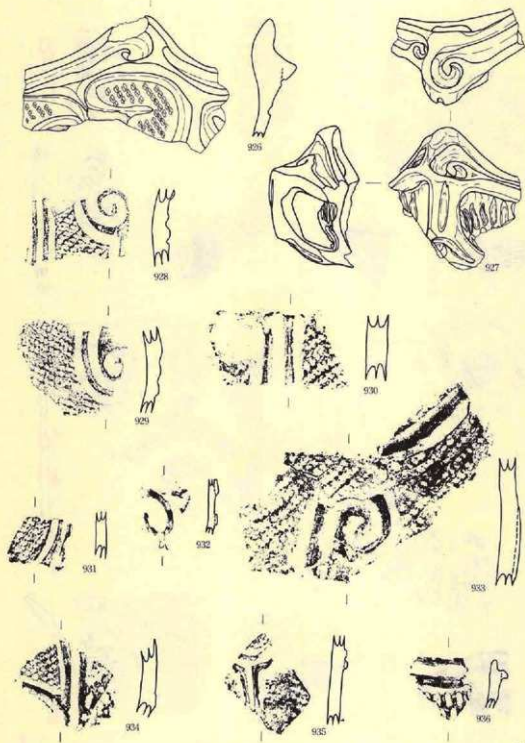


第182圖 遺構外出土遺物 (No.22)

S = $\frac{1}{4}$
 (909, 916-S = $\frac{1}{4}$)

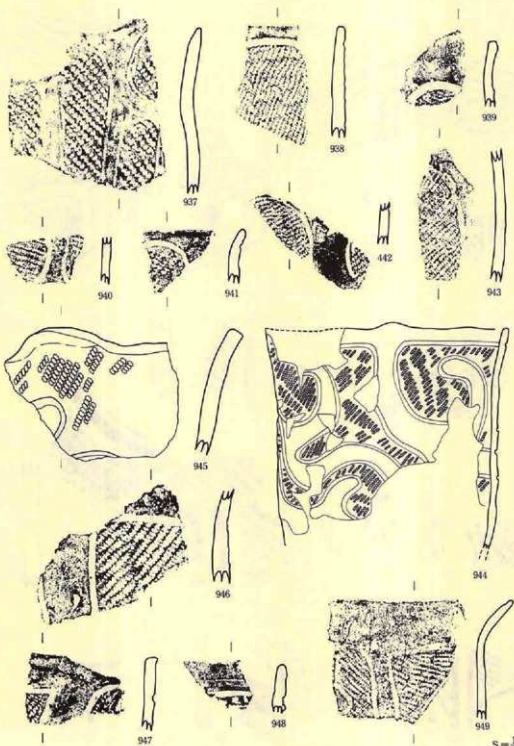


第183圖 遺構外出土遺物 (No.23)

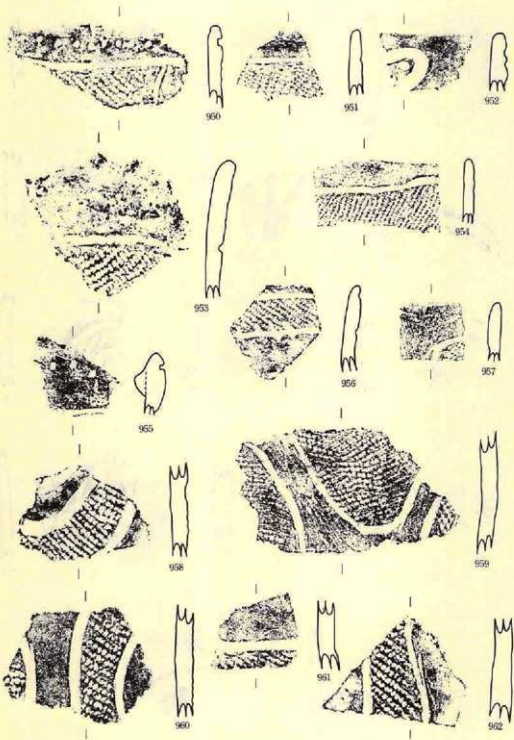


第184图 遗構外出土遺物 (No.24)

S=1/2

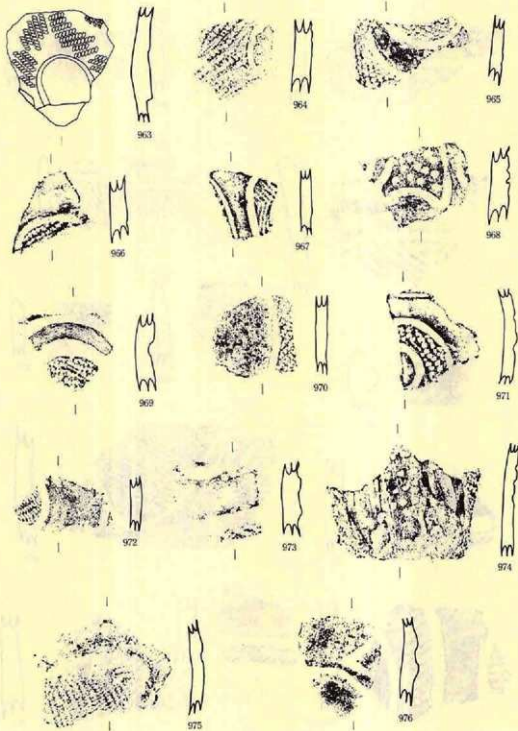


第185图 遺構外出土遺物 (No.25)



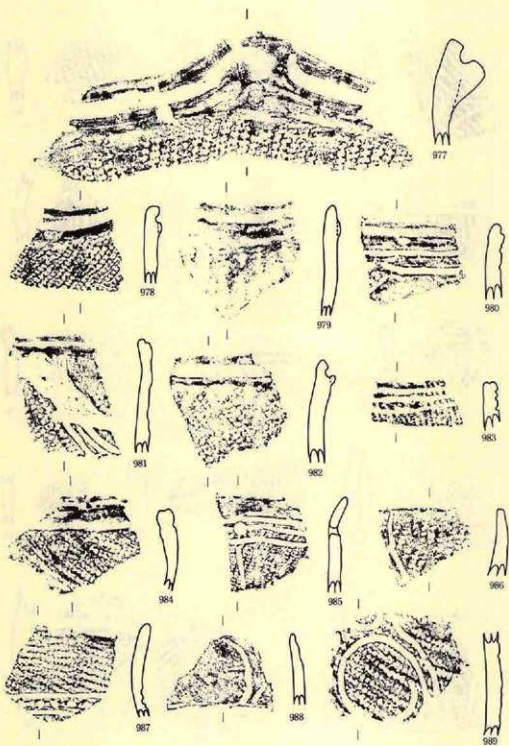
第186圖 遺構外出土遺物 (No.26)

S- $\frac{1}{2}$



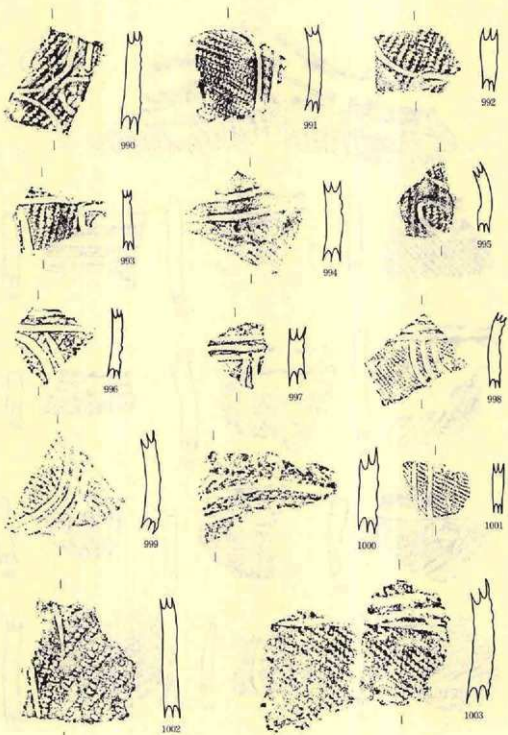
第187圖 遺構外出土遺物 (No.27)

S = $\frac{1}{2}$



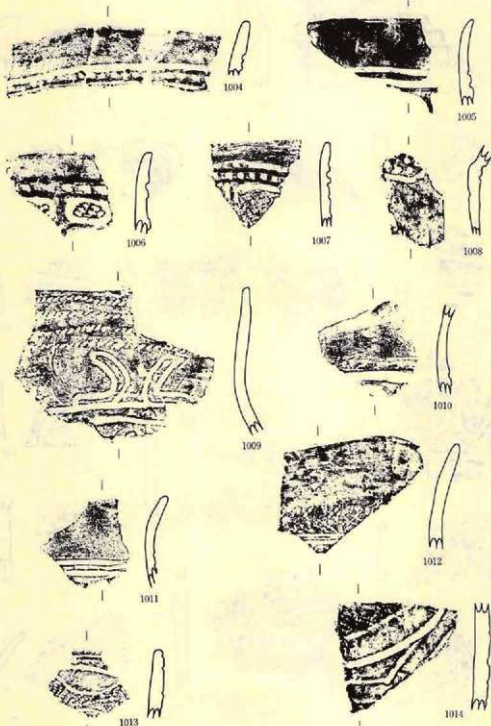
第188圖 遺構外出土遺物 (No.28)

S = $\frac{1}{2}$



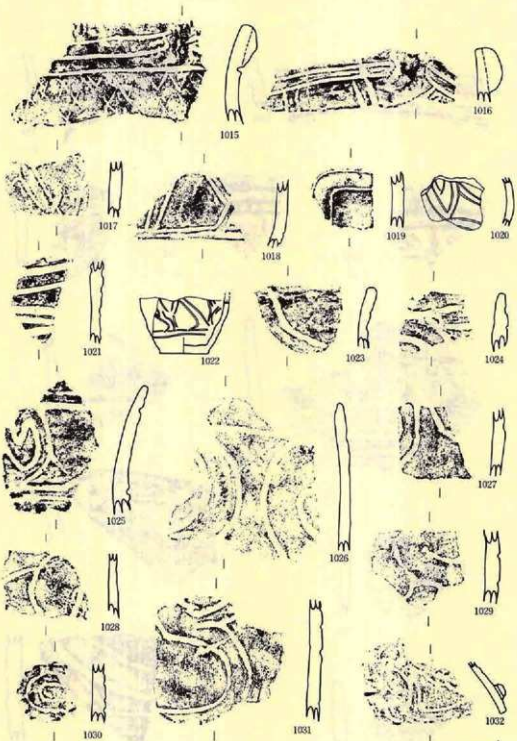
第189图 遺構外出土遺物 (No.29)

S- $\frac{1}{2}$



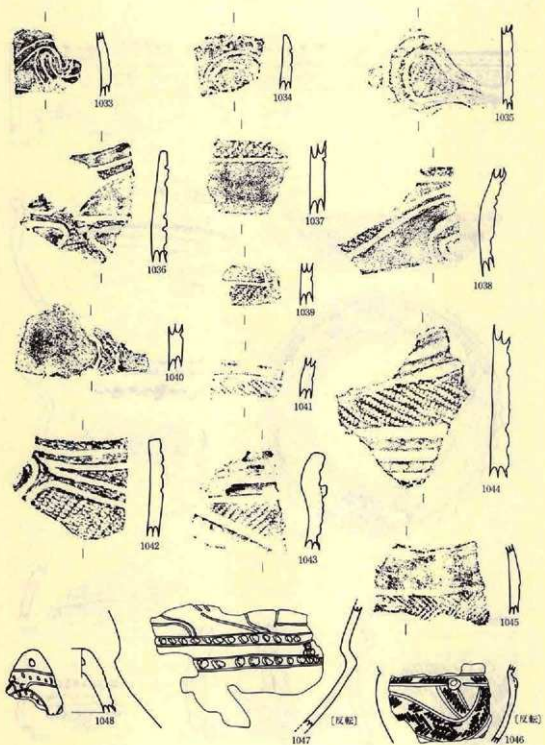
第190圖 遺構外出土遺物 (No.30)

S = $\frac{1}{2}$



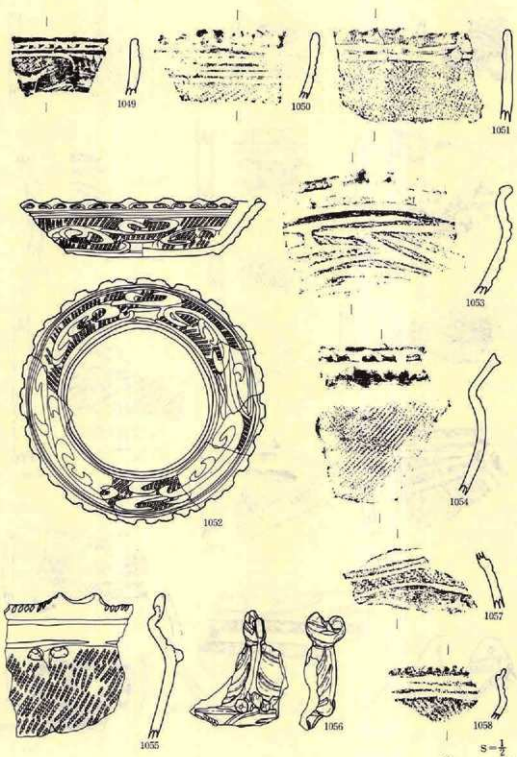
第191圖 遺構外出土遺物 (No.31)

S = $\frac{1}{2}$
 (1022 - S = $\frac{1}{3}$)

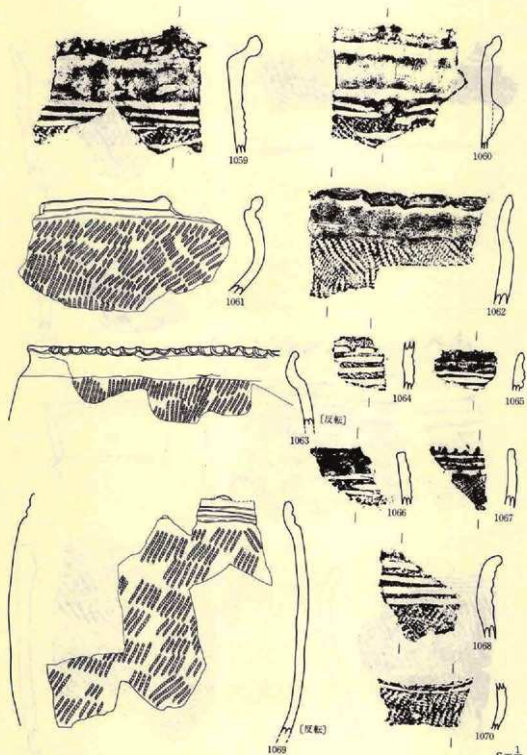


第192図 遺構外出土遺物 (No.32)

$S = \frac{1}{3}$
 (1046, 1047 - $S = \frac{1}{3}$)



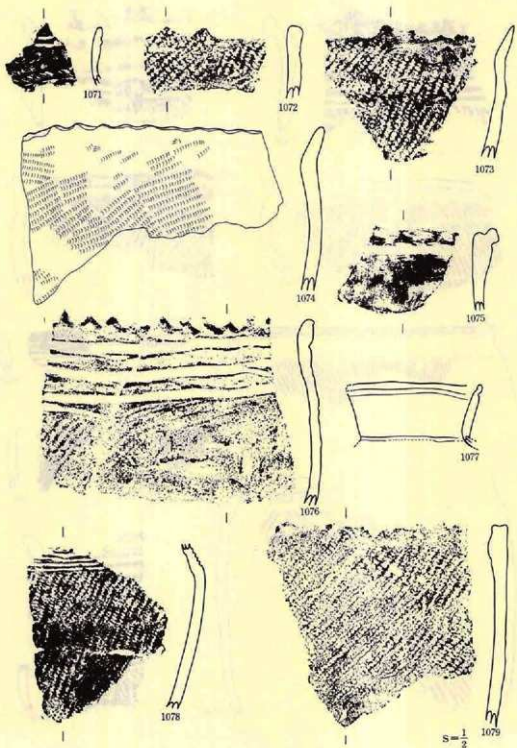
第193圖 遺構外出土遺物 (No.33)



$S = \frac{1}{2}$

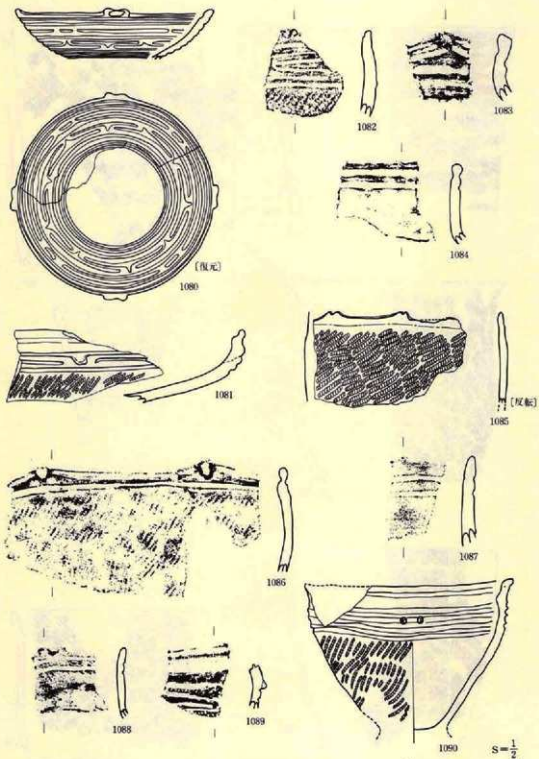
(1063, 1069 - $S = \frac{1}{3}$)

第194图 遺構外出土遺物 (No.34)



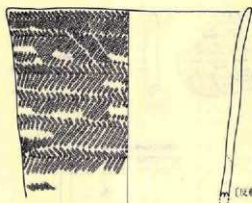
第195圖 遺構外出土遺物 (No.35)

$S = \frac{1}{2}$ 1079
 $(1077 - S = \frac{1}{3})$



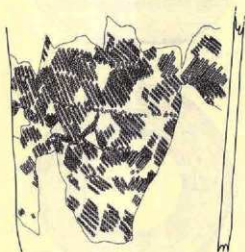
第196図 遺構外出土遺物 (No.36)

(1080, 1085, 1090 - $S = \frac{1}{3}$)

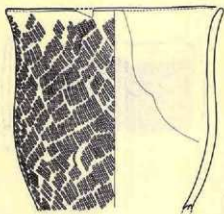


1091

[反転]



1092



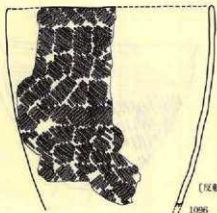
1093



1094

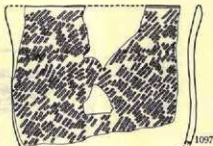


1095



1096

[反転]

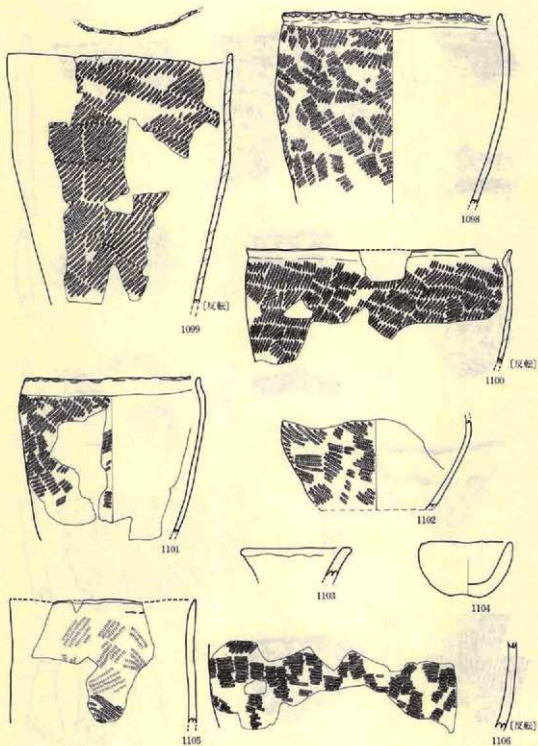


1097

第197図 遺構外出土遺物 (No.37)

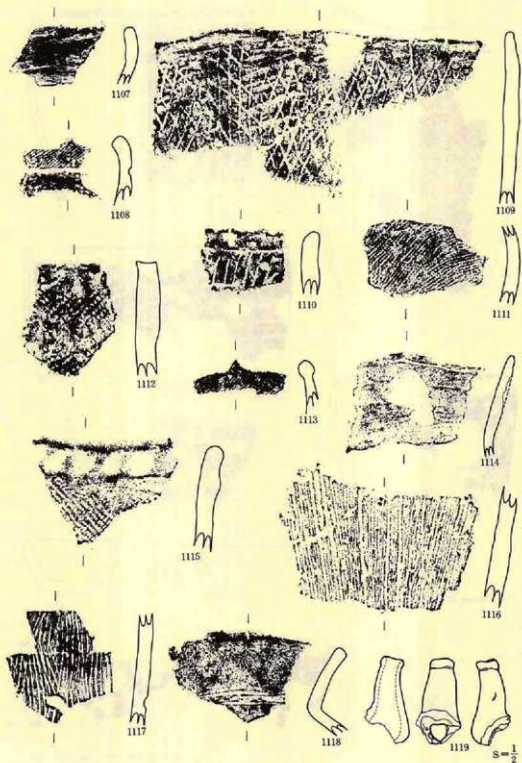
(1093, 1094, 1095 - S = $\frac{1}{3}$)

(1091, 1092, 1096, 1097 - S = $\frac{1}{4}$)



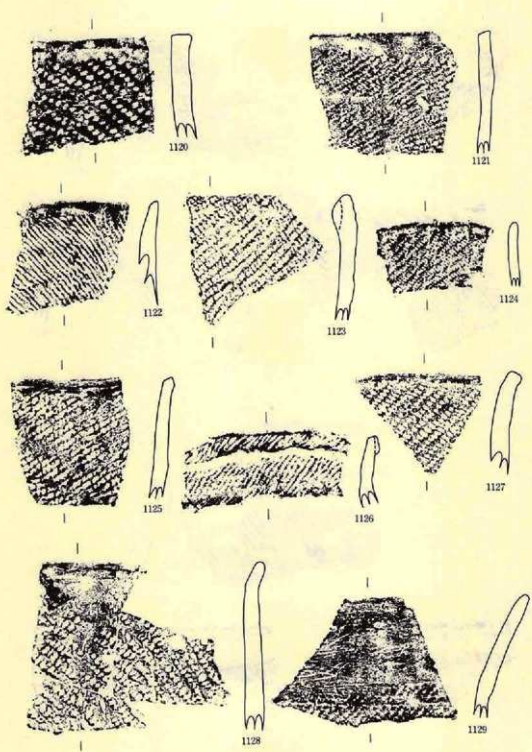
第198図 遺構外出土遺物 (No.38)

(1098, 1099, 1100, 1101 - S = $\frac{1}{4}$)
 (1102, 1103, 1105, 1106 - S = $\frac{1}{3}$)
 (1104 - S = $\frac{1}{2}$)



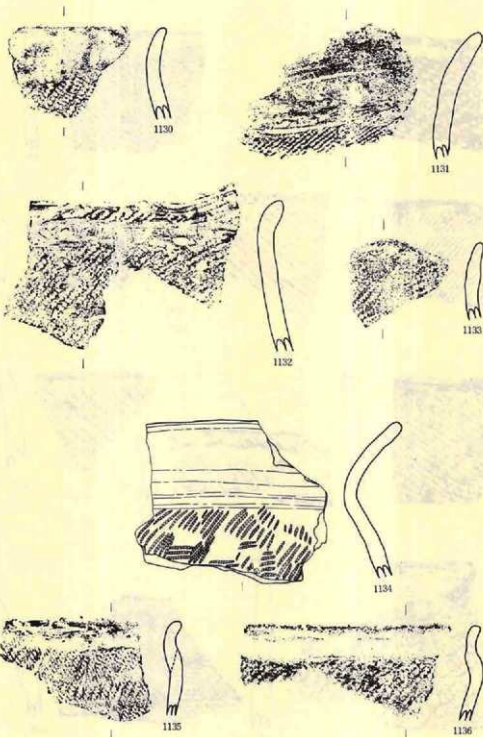
第199圖 遺構外出土遺物 (No.39)

$S = \frac{1}{2}$
 (1119-S = $\frac{1}{3}$)



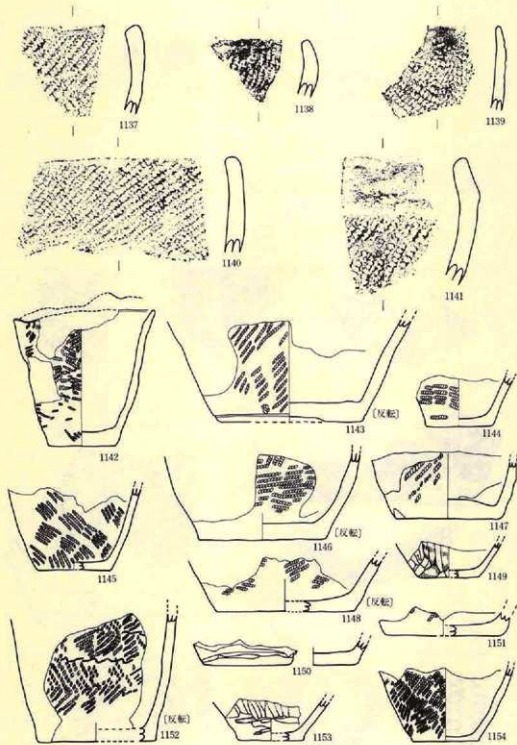
第200图 遺構外出土遺物 (No.40)

S=1/2



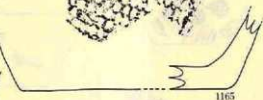
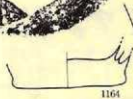
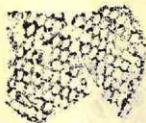
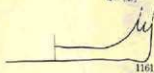
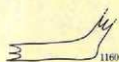
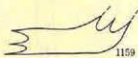
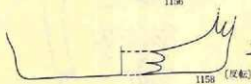
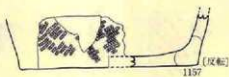
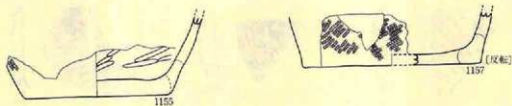
第201圖 遺構外出土遺物 (No.41)

$S = \frac{1}{2}$



第202図 遺構外出土遺物 (No.42)

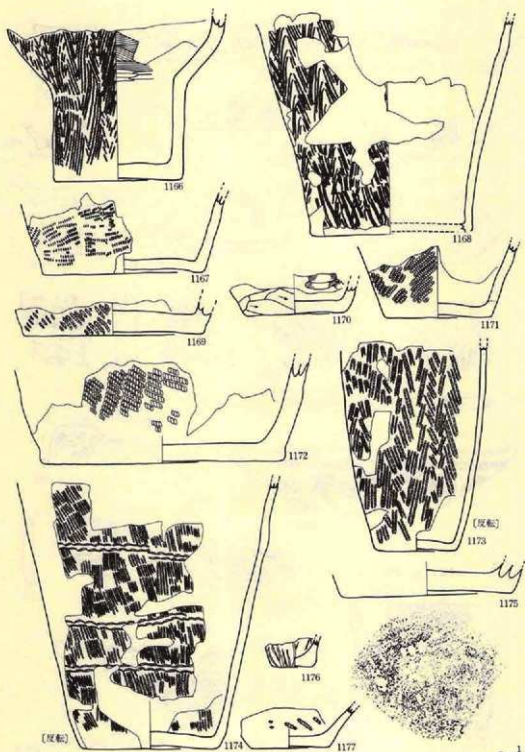
1137~1141, 1144-S = $\frac{1}{2}$
 1142~1143 |
 1145~1154 } - S = $\frac{1}{3}$



$S = \frac{1}{2}$

(1155~1157 - $S = \frac{1}{3}$)

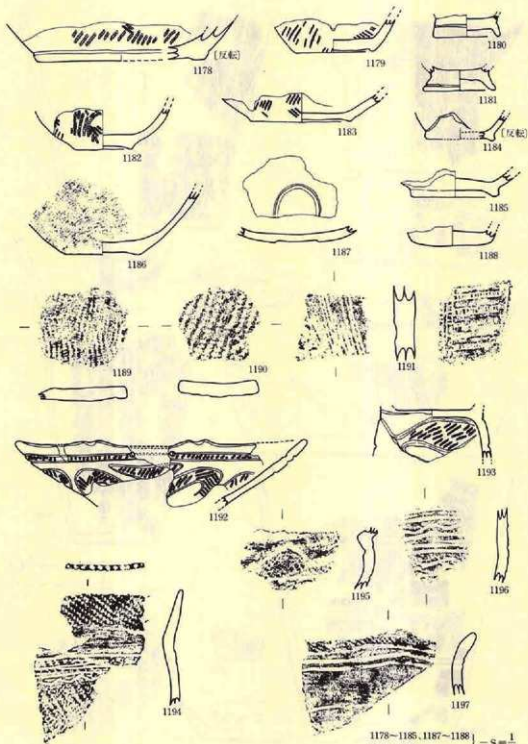
第203図 遺構外出土遺物 (No.43)



第204図 遺構外出土遺物 (No.44)

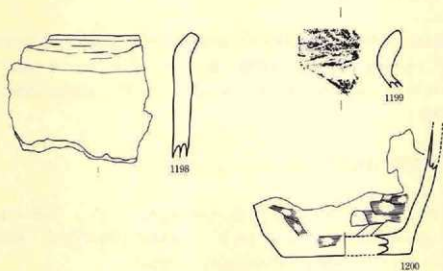
(1167, 1168, 1173, 1174 - $S = \frac{1}{4}$)

$S = \frac{1}{3}$



第205圖 遺構外出土遺物 (No.45)

1178~1185, 1187~1188 | -S- $\frac{1}{3}$
 1192~1193
 1186, 1189~1191 | -S- $\frac{1}{2}$
 1194~1197



第206図 遺構外出土遺物 (No.46)

$$S = \frac{1}{2}$$

$$(1200 - S = \frac{1}{3})$$

[V章注記]

1. 山内清男「日本先史土器の縄文」先史考古学会 1979 P.47
2. 高橋与右エ門(当センター専門調査員)の教示による。
3. 筆者は搔器と削器が明確に分類できるかどうかについて疑念を持っている。よって本巻では従来、搔器と呼ばれた典型的な形状を持つ124以外はすべて「削器」の用語を使用した。
4. 村越 潔「円筒土器文化」雄山閣
5. 山内清男 前掲書 P.28
6. 岩手県教育委員会「岩手県文化財調査報告書第70集」1982 P.129 第3群I類に類似する。
7. 文化庁「大湯町環状列石」第68回版
8. 岩手県立博物館「岩手の土器」1982 P.127

VI まとめと考察

Ⅱ遺跡は折爪岳東麓に広がる縄文時代から平安時代までの複合遺跡群の中の一つである。したがって、まず本遺跡の複合状況（時代別の占地）について述べることにする。次に、本遺跡の一つの特徴でもある多数の土坑群について触れる。そして最後に、本遺跡出土遺物について、若干触れることにする。

〔1〕複合状況について

今回の調査において、27棟の住居址と201基の土坑が検出された。しかし、土坑は共伴遺物を欠き、大部分は時期不明のものである。したがって、時期別の占地状況を考察する対象とはなりにくい。ここでは、住居址についてのみ考えることにする。

検出された27棟の住居址は、縄文時代に属するものと平安時代ないしそれ以降のものに大別される。よって、はじめに縄文時代の住居址を取り上げ、次に平安時代のものについて取り上げることにする。

(1) 縄文時代の住居址について

縄文時代に属する住居址は合計23棟である。これらの時期を比定するにあたり、非常に限定して、中期4棟、後期2棟、晩期1棟をあげておいた。時期不明ないし不詳とされた住居址は^(注1)16棟である。ここでは、この16棟を中心に一歩ふみこんで考察してみたい。

はじめに、時期を比定された住居址について、その要点をまとめることにする。

第1号住居址。隅丸長方形（4.7×3.4m）。主柱穴6。土器埋設炉。

（時期）円筒土器上層C式。

第2号住居址。円形（4.3m）。主柱穴4。床面土器（円筒土器上層式（？）粗製深鉢）。石囲炉。

（時期）床面土器から中期中葉に位置付けられる。

第3号住居址。隅丸方形（？）（約3.5m）。主柱穴不明。床面土器。地床炉。

（時期）円筒土器上層d式。

第4号住居址。楕円形（4.2×2.5m）。主柱穴4。床面土器。石囲炉。

（時期）大木9式。

第5号住居址。円形（約2.9m）。主柱穴4（？）床面土器。石囲炉。

（時期）十腰内1式。

第6号住居址。円形（4m）。主柱穴4。床面土器。石囲炉。

(時期) 十腰内1式。

第7号住居址。円形(約5m)。主柱穴4。土器埋設炉。

(時期) 埋土中から出土した後期末葉の船付き土器は出土状況からみて流れ込みと考えられ、他はすべて大洞C₂式に比定される土器のみが埋土中から出土している。炉に使用された深鉢も晩期の粗製土器であることから、晩期中葉とされる。

次に第8号住居址以降を検討したい。

第8号住居址。隅丸長方形(?) (10.5×3m)。主柱穴10。地床炉。

(時期) 前期後半～中期前半の土器片が周囲から出土するが、共存関係は不明。よって時期は不明とされた。

この住居址は所謂、大型住居址の概念に包括されるものと思われる。大型住居址については諸氏によって論考が加えられているが、本票に係わるものとしては、高橋与右エ門の論考がある。高橋によると、まず「大型」の概念規定において、その一つに長径がおよそ10mを越えるもの、としている。次に時期別に分類したうえで平面形の変遷について触れ、前期末から中期前半に多く、その形状は長楕円又は隅丸長方形が多いこと、炉の形態は中期中葉までは地床炉、中期後葉以降は石囲炉があらわれる、と指摘している。このことを参考に本住居址を考えると、前期後半(円筒土器下層c～b式)から中期前半(円筒土器上層a～b式)の土器片が集中することと平面形や炉の形態から中期中葉以前に編年される可能性が強い。しかし、高橋も前掲書で述べているが、大型住居址は集落の全体構造から、どのような配置となっているのかを考える必要があるが、後述するように、今回の調査では円筒上層b式以前の住居址は検出されていない。以上のことから、本住居址を特定の時期に比定することはできない。

第9号住居址。円形(約4.3m)。主柱穴不明。石囲炉。

(時期) 出土土器は前期末葉から後期初頭と土師器が混然となっており、流れ込んだものである。ただし、埋土下位の土器は第5群第1類が多い。床面出土の炭化材はC¹⁴の年代測定によれば、5370±130 B・Pの結果を得た。C¹⁴法については後述するが、これらから、第10号住居址とはほぼ同期と考えてよい。

第10号住居址。小判形(約4.8×3m)。主柱穴4。床面土器。石囲炉と地床炉。

(時期) 床面から出土した土器は第4群ないし第5群第1類に共存すると思われる土器である。埋土上位から368が出土すること、炉が長方形の石囲炉であること、床面出土の炭化材のC¹⁴法によると第4号住居址より古く、第9号住居址とはほぼ同期とされること等から、大木8式前後に位置付けられるであろう。

第11号住居址。長円形(4×3m)。主柱穴。石囲複式炉。

(時期) 埋土1層は層厚が厚いにもかかわらず、422を含む僅か10点のみの出土である。

また、床面出土は378～382を含む10数点であるが、時期を決定できる資料はなく、かつ、小破片で流れ込みの可能性が強い。383～391は第3層、392～421は第2層から出土したものであるが、これは間層をもち層位的に明瞭に分離できる状態で出土したものではない。したがってこれを一括して考えるならば、第5群から第6群第1類の時期（中期末葉～後期初頭）と考えられる。したがって、遺構の時期としては中期末葉と考えられる。

第12号住居址。円形（3 m）。主柱穴不明。地床炉。

（時期）423が本住居址と共存するかどうかは不確定であるが、共存すると考えるなら、大木8 b 式並行の複林式であることから、大木8 b 式期と考えられる。

第13号住居址。円形（3 m）。主柱穴4。石囲複式炉。

（時期）第47・48図に示めた土器はすべて埋土下位から一括出土したものである。また、炉の形態が第11号住居址と基本的には同じ形態であることから、第11号住居址と同じ中期末葉と考えられる。

第14号住居址。楕円形（3.6×2.9 m）。主柱穴7。石囲複式炉。

（時期）449～467の土器が埋土5～6層から一括出土したものである。これらは大木10式と考えられる。また、炉の形態も第11・13号住居址と同様であることから、中期末葉（大木9～10式）と考えられる。

第15号住居址。円形（3.6 m）。主柱穴3。石囲炉。

（時期）485に若干の疑問が残るが、中期末葉と考えられる。

第16号住居址。楕円形（2.8×2 m）。主柱穴不明。石囲複式炉。

（時期）炉の形態が、第14号と同じことから、中期末葉と考えられる。

第17号住居址。平面形、規模、主柱穴等は不明。石囲炉。

（時期）第11号住居址と重複し、それよりも新しい。床面出土の土器はすべて、第6群第1類とみられる。よって、後期初頭（十腰内1式）と考えられる。

第18号住居址。円形（2.6 m）。主柱穴4。地床炉。

（時期）埋土3層上位に形成された焼土内から、462が復元可能な1個体分のまともとして出土したことにより、この焼土は十腰内1式期のものである。埋土4層上位からは461が出土する。炉は石囲複式炉とはならない。以上のことから、中期後葉と考えられる。

第19号住居址。円形（3.8 m）。主柱穴4（?）。石囲炉。 （時期）不明。

第20号住居址。楕円形（3.1×2.8 m）。主柱穴2。地床炉。 （時期）不明。

第21号住居址。小判形（5.8×4.5 m）。主柱穴。地床炉。 （時期）不明。

第22号住居址。平面形、規模、主柱穴、炉等不明。 （時期）不明。

第23号住居址。円形（?）。規模、主柱穴等不明。地床炉。 （時期）不明。

以上のように、共存遺物及び遺物の出土状況により、一応の時期区分が考えられる。次に、
炉の形態から更に考えてみたい。

本遺跡から検出された炉は、形態上から次のように分類される。地床が1、土器埋設炉1、
石囲炉13（単式9・複式4）、土器埋設石囲炉1。

本卑の複式炉について、中村良幸氏が概括的に論考している。それによると、石組部と掘り
込み部だけのものをA類、石組が十石組が十施設なしをB類とし、以下H類までの8タイプに
分類している。^(注3)そして、卑北部では、大木9b式になると複式炉が現われ、その形態はほとんど
A・B類であり、使用される時期は大木9～10式に限定されることを指摘している。これに
もとずいて、第9・10・15・19号の住居址について再考してみたい。

第9号住居址は炉から離れる形で一個の石が埋置されており、これが先行炉に伴なうものか、
検出された石囲炉に伴なうかはもう一つ明確ではないが、いずれにしても、所謂・前底部を強く
意識して埋置されている。堀り込みはもたないが、やはりA類に該当するものと考えられる。
C¹⁴法の測定結果はあるものの、中期末葉と考えられる。

第10号住居址はC¹⁴法によっても第9号住居址とは同期と考えられ、かつ出土遺物も中期末
葉と考えられる。ただ、ここの石囲炉は長方形であり、所謂「単式」である。しかし、まったく
掘り込みをもたず、加熱による変化も炉床、炉縁石のどちらにも見られないこと等から、単
式ではあるが、本遺跡から検出された他の複式炉とその状況は酷似する。よって、この住居址
も中期末葉と考えてさしつかえないと思われる。

第15号住居址の炉は明確に単式の石囲炉である。出土遺物は中期後葉から後期にみられる粗
製深鉢形土器である。炉の形態からみるなら第2号住居址や第9号住居址に類似する。したが
って、第9号住居址の先行炉が複式炉のA類タイプとするならば、後から作られた炉の形態と
この第15号住居址の炉が同時期を示すと考えられる。すなわち、中期末葉とされる複式炉を持
つ住居址群より、やや後に続くものと考えられる。ただし、埋土及び周辺から、後期初頭の土
器片は出土していない。よって、一応、中期末葉としておきたい。

第19号住居址の炉は破壊されてはいるが、床面より一段低い凹地が長楕円状に広がり、その
一部を遮る形に石が埋置されている。この形態はA類であり、同様の形態は江刺家遺跡から
7基検出されている。うち3基は大木10式を伴っている。また、炉の位置も壁に寄る。以上
のことから、本住居址も中期末葉と考えられる。^(注4)

最後に放射性炭素年代測定法（C¹⁴法）について若干触れておきたい。

本遺跡から出土した3資料をC¹⁴法による年代測定にかけ、次のような結果を得た。

第4号住居址、3450±110 B・P 1500 B・C

第10号住居址、4860±120 B・P 2910 B・C

第9号住居址、5370±130 B・P 3420 B・C

第4号住居址は床面から大木9式土器を出土している。大湯ストーンサークルが後期初頭とし、そこから出土した資料が3680±130 B・Pであるなら、単純比較して第4号住居址は後期前半となる。しかし、C¹⁴法の測定に当たって、多くの条件（炭化材そのものに係わる条件、採取から測定に出すまでの条件、測定そのものの条件等）をコントロールしたものではない以上、測定された数値をそのまま絶対年代に置きかえることはできない。とすれば、おおよその編年資料と理解するのが妥当である。以上のように理解するならば、第4号住居址は第9・10号住居址より若干新しく、第10号と第9号は前者が比較的新しいものの、ほぼ同期ととらえられる。以上の結果を分類すると下記の6期に分けられる。

第Ⅰ期 縄文時代中期中葉で円筒土器文化に属するもの。……1号住・2号住・3号住。

第Ⅱ期 縄文時代中期中葉から後葉にかけてのもの。……12号住・18号住。

第Ⅲ期 縄文時代中期末葉のもの。……4号住・9号住・10号住・11号住・13号住・14号住・15号住・16号住・19号住。

第Ⅳ期 縄文時代後期前葉のもの。……5号住・6号住・17号住。

第Ⅴ期 縄文時代晩期中葉のもの。……7号住。

第Ⅵ期 縄文地代の時期不明のもの。……8号住・20号住・21号住・22号住・23号住。

(2) 平安時代の住居址について

平安時代に属する住居址は3棟である。また、第27号住居址は平安時代の可能性もあるが、平安時代とは限定しないでいきたい。

第24号住居址。隅丸方形（一辺5.8m）。主柱穴4。カマド。床面出土遺物（鬘・鉄滓等）

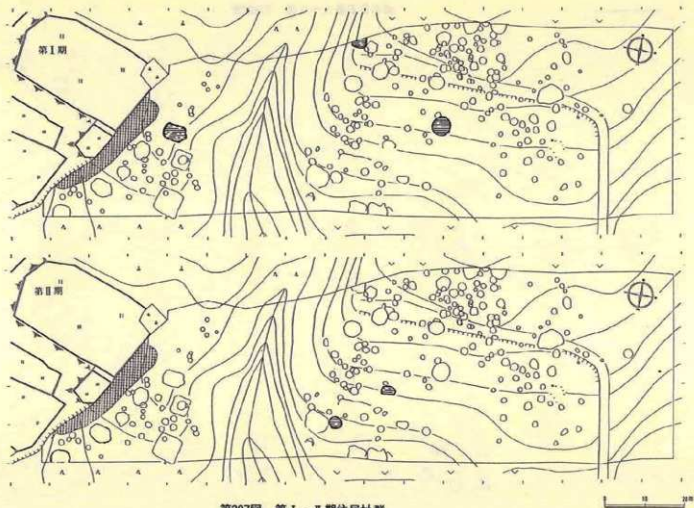
第25号住居址。隅丸方形（一辺4.1m）。主柱穴4。カマド。床面出土遺物（鬘・鉄製品）

第26号住居址。隅丸方形（？）（一辺4.5m）。主柱穴不詳。カマド。床面出土遺物（鬘）

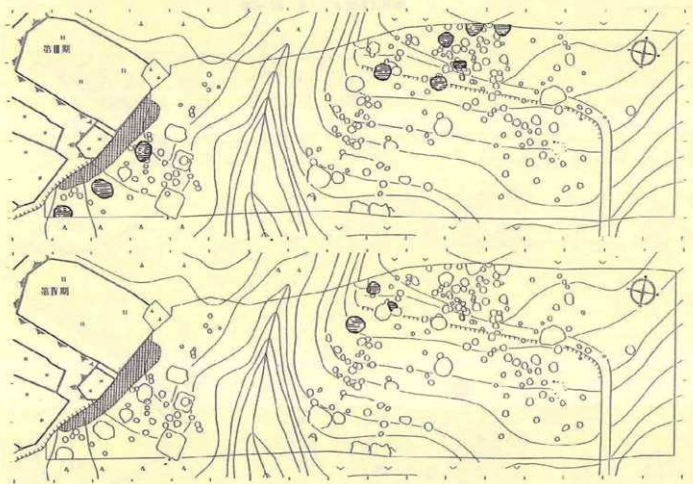
この3住居址から出土した土器はすべて鬘だけである。その成形方法はロクロを使用せず、ヘラケズリを主とすること、口縁部が短かく、つまみ出されたように外反すること、器形は体部の膨らみが少なく円筒状であること等から、関豊氏の編年にしたがい、同編年のⅧ期（10世紀後半～11世紀）と同じ時期に比定したい。
(注6)

第27号住居址。隅丸方形（？）（一辺4m）。主柱穴8（？）。地床炉。

（時期）不明であるが、周溝が柱間にまわることから、第24～26号住居址より新しいと思われる。

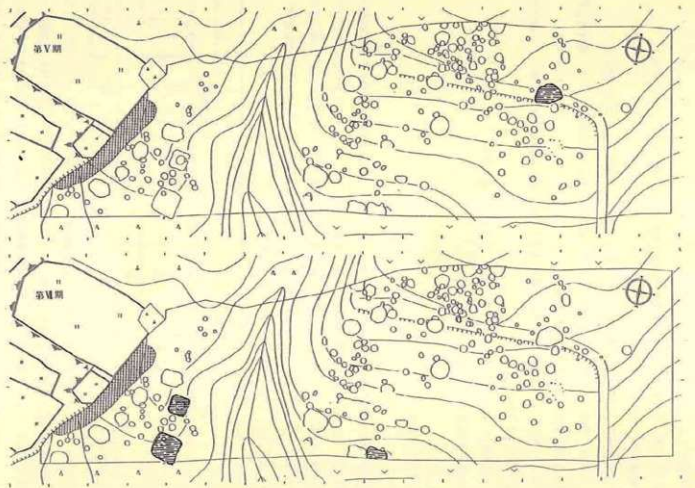


第207图 第I~II期住居址群



第208图 第Ⅱ~Ⅳ期住居址群





第209图 第V·VI期住居址群



以上、第24～26号住居址をⅤ期とし、Ⅰ～Ⅴ期も合わせて配置図上に表わしたのが、第207～209図である。

以上の結果、時期別の占地及び特徴について、次のように要約することができる。

- ① 時期別に一定のまとまりをもって、構成されている。
- ② 特にⅢ期は一段高い所と埋没谷沿いに、Ⅳ期は高い所、Ⅴ期は低い所に位置する。
- ③ 住居址の形状は縄文時代では中期前半までは隅丸長方形や円形がみられるが、他はほぼ円形となる。平安時代は隅丸方形である。
- ④ 炉の位置は、Ⅰ期は北～北東寄り、Ⅱ期はほぼ中央、Ⅲ～Ⅳ期はほぼ南東寄り、Ⅴ期はほぼ中央に設置される。
- ⑤ 平安時代のカマドは、南～東の辺にあり、どちらかの隅による。
- ⑥ 縄文時代中期末葉には複式炉が出現する。

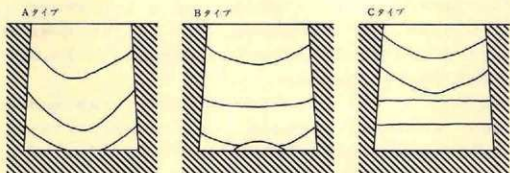
(2) 土坑群について

検出された201基の土坑は、共存遺物が少ないことから、大部分は時期不明である。時期は不明ながらも、土坑は微高尾根上に集中する。規模は大きく3つに分けられるが、およそ1/2の土坑は耕作地造成に伴ない上部を削平されており、単純に開口部径や深さを比較し、統計処理することは、むしろ実態とかけはなれた結果を招くことになる。したがって、ここでは規模については底部径、形状については断面形から分類することとした。

群	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	計
規模 (cm)	90未満	90～119	120～149	150～199	200以上	
ピーカー状土坑	61	45	4	2	1	113
フラスコ状土坑	4	17	27	34	6	88
計	65	62	31	36	7	201
フラスコ状土坑の割合	6%	27%	87%	94%	86%	44%

この結果、およそ120cmを境に土坑の形状が分かれる。すなわち、ピーカー状の土坑は120cm以下に集中する。そのうちⅠ群のピーカー状土坑の底面の形状は皿状(鍋底状)に彎曲しているものが多い。また、Ⅴ層より上位までの比較的浅い掘り込みの土坑は61基中27基で44%になる。この27基の大部分はⅠ区北側斜面とⅢ区尾根上～北側斜面に集中する。Ⅱ群のピーカー状土坑は上位がかなり削平された土坑が多い。したがって、一部はフラスコ状となる可能性を持った土坑が含まれている。

土坑の埋土の堆積状況を観察すると、次の3タイプに分類される。また、タイプ別の実数及び割り合いは次の表のとおりである。



第210図 土坑埋土堆積状況模式図

形状 \ タイプ	A	B	C
ビーカー状土坑	62 (35%)	11 (6%)	24 (14%)
フラスコ状土坑	28 (16%)	12 (7%)	38 (22%)
計	90 (51%)	23 (13%)	62 (36%)

注1 堆積状況の不明なもの、及び単層の土坑は除く。

注2 割り合いは全合計(175基)に対するものである。

AタイプとはU字状の堆積を示すものである。これは土坑の形状にこだわらず、最も自然な堆積状況を呈するものである。約半数の土坑はこのタイプに属する。

Bタイプとは底面中央に堆積したのち、壁際からU字状に堆積するものである。このタイプは土坑の形状、規模によって分けて考える必要がある。壁がきちんと内傾し比較的フラスコ状の形状を保つ土坑は、その規模に係わらずこのタイプに属する一群があり、自然堆積と考えられる。第71号、第155号土坑等はその典型である。これに対して、ビーカー状土坑でこのタイプとなる土坑は、規模の小さい土坑は層が入り組むものが多く人為堆積を窺わせるが(例、第42号、98号等)、規模の大きい土坑は上位が剛平を受けた可能性をもつ土坑もあり、いちがいに自然、人為と明瞭に判断できない土坑が含まれる。

Cタイプとは下位は水平に堆積し、その上はU字状の堆積となるものである。このタイプは下位の堆積状況によって2分される。一つは一つの層が厚く堆積する例(第121号、第130号等)であり、他の一つは板状に層が重さなる例(第61号、第162号等)である。前者には層の逆転はみられないが、後者はほとんど逆転又は交互に繰り返す。いずれにしても、強く人為堆積を窺わせる。

単層又はそれに準ずる型はいちがいに自然、人為と判断することは困難である。

本報告書で「自然堆積」、「人為堆積」の判断を下す視点として、①土層の逆転の有無及びその状況、②堆積状況（U字状、水平等及び混土の状況等）によった。しかし、実際にはCタイプは上位は自然堆積で、下位は人為堆積を窺わせるものが多い。また、一見U字状の堆積ではあっても、第22号土坑のように遺物の出土状況からは人為堆積を窺わせるものがあり、実際には一応の状況判断の域を越えるものではない。

土坑の機能について、これまでにさまざまな見解が提出されてきたが、本遺跡で検出された土坑群はいずれの説も強く裏付ける状況ではない。したがって、土坑の機能については不明である。以下、土坑の検出状況の特徴を列記する。

1. 土坑の形状によらず、すべて、微高尾根沿いに構築されている。
2. 土坑内出土遺物は少なく、出土したものの大半は埋土上位からのものである。
3. 重複する土坑が相当数あることから、長い間にわたって構築されたことを窺わせる。
4. 必ずしも住居址の近くに作られたものとは言いがたい。（第7号住居址と第152号土坑はともに大洞C₂期であるが、50mも離れている。）
5. 底部径120cm以下の土坑はピーカー状、120cm以上はフラスコ状土坑が多い。
6. フラスコ状土坑は大半が廃棄時点で破壊されており、下位の壁の状況がフラスコ状を示す程度のものである。
7. フラスコ状土坑の約半数は一部を埋め戻したものとと思われる。

〔3〕出土遺物について

本遺跡から出土した遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、木製品、鉄製品、炭化物である。しかし、土器と石器を除くと他は出土点数がきわめて少ない。また、土器も縄文式土器を除くと出土点数はきわめて少ない。よって、ここでは縄文式土器と石器についてのみ、若干触れることにする。

〔1〕縄文式土器について

早期から晩期まで各期にわたって出土しているが、その出土量及び出土地点には粗密がみられる。出土量が多いのは、円筒土器下層e～d式、円筒土器上層a～D式、大木9～10式、榎林式十腰内1式、大洞C₂式である。これらの土器は、その期に対応する住居址の埋土ないしその周辺から集中的に出土している。また同筒土器下層式は南区では遺物包含層及びその周辺、北区では第8号住居址付近から出土している。遺構外出土遺物中最も広範囲から出土した土器

は、円筒土器上層式のものであり、特にC式はその中でも圧倒的に多い。大洞C₂式は4ヶ所(第7号住居址、第152号土坑、第39号土坑を含む凹地、第145号土坑付近の凹地)に集中して見られる。また、大木1~7a式、十腰内2~3式がまったく見られないほかは、早期を除き、僅かな量ながらも出土しているのも一つの特徴と言えるであろう。次に群ごとに概略を述べる。

第1群土器、本群に対応する遺構は検出されていない。第1類は沈線文十貝殻文、第2類は貝殻文のみであるが、第2類は第1類の体部片の可能性もある。胎土に繊維は含まれるが焼成は良好である。

第2群土器、本群に対応する遺構は検出されていないが、第8号住居址にその可能性が窺われる。第1~2類は比較的焼成が悪く、ぼろぼろしているが、第3~4類は焼成が良好なものが多くなる。第3~4類はほとんど黒褐色で、内部が光沢を帯びるほど研磨される特徴を持っている。体部文様は木目状摺糸文、摺糸文など単軸絡状体回転圧痕文が主である。胎土には多量の繊維が混入されている。すべて、深鉢形土器である。

第3群土器、本群の第3類土器は本群の中では最も多量に出土しているが、一括出土が見られない。第3類に対応する住居址は第1号住居址であるが、埋土中からの出土は少ない。第4類に対応する住居址は第3号住居址である。この4類も3類同様、広範囲から出土する。第4類の隆帯には縄文が施文されるものは少なく、貼付も雑なため剥落が目立つ。本群の土器には繊維は含まれない。完形品は一点もない。

第4群土器、本群は特定の場所から集中的に出土する。また、第5群土器の出土地点と非常によく重なる。本群に対応する住居址が最も多く、第Ⅲ期の住居址群がそれに当たる。本群の特徴は体部に渦巻状又はアルファベット状の連続した文様を隆帯、磨消縄文等で施文するものである。焼成は良好である。大型の深鉢が多い。器形は体中央部から底部にかけてすぼまる。

第5群土器、本群は縄文の上に2~3本1組の沈線文が弧状、渦巻、曲線文に描かれるものである。第4群土器とかなりの部分で重複して出土する。第12号住居址が本群と対応する。

第6群土器、本群の中心は十腰内1式であり、Ⅳ期の住居址が対応する。本群も同住居址及びその周辺と第18号住居址埋土に集中するのみである。とくに、南区ではほとんど出土していない。本群第1類は細く鋭い沈線で区画文をえがき、磨消縄文は帯縄文となる特徴を有する。

第7群土器、本群の中心は第2類の平行沈線文とキザミ目をもつ土器群である。鉢、台付鉢、壺、浅鉢等と器種が多く、完形品が一括出土している。本群に対応するのは第7号住居址である。

(2) 石器について

磨石、敲石、半円状扁平打製石器、石斧、凹石、石皿、砥石、石鏃、削器、搔器類等が出土している。磨石、敲石、凹石等は大部分が多目的に使用されているか、または二次使用されて

いる。本項では半円状扁平打製石器についてのみ述べることにする。

半円状扁平打製石器は全部で13点出土している。そのうち、第21号住居址からは5点、半円状扁平打製石器状のもの1点の計6点が一括出土している。出土層位は埋土下位である。これは人為的にその場所へ廃棄されたものである。このことは、一時に多量に使用していたことを窺わせる。出土した13点のうち71を除くと、すべて側面が研磨又は川原石のように滑らかなものであり、両面から側縁部に打撃を加えて剥離し、刃部を作り出している。しかし、弧状の刃部には多少の漬痕がみられるものもあるが、所謂、明瞭な使用痕は見られない。それに対し、直線部は大部分が磨滅し、磨滅しないまでも明瞭な使用痕を有する。以上のことから、半円状扁平打製石器は、直線の刃部を使用することを主たる目的とした石器と言えるであろう。また、13点中完形品が僅かに3点のみで、他はいずれも刃〜刃ほど欠損する。これは使用に伴って破損したとするならば、「磨る」ことより「敲く」ことが主となる使用と考えられるであろう。

<IV章、注記>

1. 第2表参照
2. 高橋与右衛門 「上里遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983
3. 中村良幸 「複式炉について」『考古風土記 第7号』所収 1982
4. 田原寿夫・他 「江刺家遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1984
5. 松山 力 「馬場瀬遺跡発掘調査報告書」(財)青森県埋蔵文化財センター 1981
6. 関 豊 「駒場遺跡緊急発掘調査報告書」 二戸市教育委員会 1983
7. 貯蔵穴論(近藤宗光・他「赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983)、
葦坑論(目黒吉明「塩沢上原A遺跡」『福島県文化財調査報告書 第47集』所収 1975)、おぐら論(草間俊一「日本原始時代の生活についての一考察」『在野美術教授退官記念論文集、社会経済史の諸問題』所収 1969)等々がある。

遺物番号	器 種	出土地点	出土層位	最大値 (cm)			重さ (g)	石 質	図帳番号	写真図版	備 考
				たて	よこ	厚さ					
1	磨石(磨石)	第1号住居址	埋土	10.9	10.4	5.1	900	輝石安山岩	第7図	86	
2	凹石	"	床面	9.0	8.1	5.2	470	"	"	"	
3	磨石	"	埋土	11.4	7.0	6.8	530	硬砂岩	"	"	一部欠損
4	"	"	"	15.8	7.1	4.7	840	"	"	"	
5	石盤	"	"	10.1	11.0	5.2		閃緑岩	"	"	破片
6	白石	"	"	21.5	16.8	1.3		"	第8図	"	
7	半円状扁平打製石器	第2号住居址	"	12.0	7.3	2.5	410	凝灰質硬砂岩	第14図	89	一部欠損
8	石盤	"	床面	15.3	14.7	8.4		硬砂岩	"	"	破片
9	"	"	"	20.7	18.9	8.1		凝灰質硬砂岩	"	"	"
10	敲石	"	埋土	9.4	6.1	3.6	260	奥輝石安山岩	"	"	一部欠損
11	削器	第4号住居址	"	3.1	2.3	0.6	4.4	粘板岩	第19図	94	
12	"	"	"	3.5	2.6	0.8	7.2	凝灰質硬砂岩	"	"	
13	磨石(磨石)	第5号住居址	"	10.8	7.8	4.0	520	輝石安山岩	第21図	92	
14	玉石	第6号住居址	床面				105	チャート	"	"	
15	"	"	"				90	在来閃緑岩	"	"	
16	削器	"	埋土	1.85	3.6	0.7	7.0	チャート質粘板岩	第24図	"	
17	"	"	"	1.8	3.4	0.4	2.8	粘板岩質泥岩	"	"	
18	磨製石厚	"	"	11.7	6.0	3.4	415	硬砂岩	"	"	
19	石盤	第9号住居址	"	1.5	1.6	0.35	0.75	チャート	第32図	95	一部欠損
20	石盤	"	"	3.5	4.8	0.7	14.15	粘板岩粘板岩	"	"	
21	敲石	"	"	16.15	8.2	4.7	620	硬灰質硬砂岩	"	"	
22	半円状扁平打製石器	第10号住居址	"	16.5	6.4	2.3	445	硬砂岩	第35図	96	
23	磨石	"	"	10.8	3.7	2.8	250	"	"	"	一部欠損
24	凹石	"	"	15.0	4.2	3.0	305	輝石凝灰質千枚岩	"	"	
25	磨製石厚(?)	"	"	11.1	8.2	4.3	710	角閃岩	第38図	"	一部欠損
26	石盤	第11号住居址	埋土	2.9	0.9	0.3	0.95	チャート	第39図	97	
27	石盤	"	"	2.8	2.3	1.15	5.8	硬質凝灰質泥岩	"	"	
28	"	"	"	2.2	1.7	0.3	1.15	チャート	"	"	
29	削器	"	"	2.4	1.4	0.5	1.4	"	"	"	
30	"	"	"	3.4	1.8	0.8	5.02	粘板岩	"	"	
31	"	"	"	5.2	2.8	1.4	18.7	粘板岩粘板岩	"	"	
32	"	"	"	4.0	1.4	0.9	4.2	粘板岩	"	"	
33	石盤	"	"	8.8	4.8	1.3	100	輝石凝灰質千枚岩	"	"	
34	磨石	"	"	12.4	8.1	5.7	820	硬砂岩	"	"	
35	敲石(磨石)	"	"	10.4	8.0	3.5	380	"	"	"	
36	削器	第12号住居址	床面	2.8	3.1	0.2	2.3	輝石凝灰岩	第44図	99	
37	棒状磨石	"	"	9.7	5.0	3.9	250	硬砂岩	"	"	
38	石盤	第13号住居址	埋土	2.8	0.9	0.55	1.4	輝石凝灰岩	第46図	"	
39	"	"	"	1.4	1.7	0.3	0.65	玉子い	"	99	一部欠損
40	"	"	"	2.3	1.6	0.3	1.0	粘板岩	"	"	
41	石盤	"	"	2.9	1.25	0.2	1.3	粘板岩粘板岩	"	"	
42	削器	"	"	4.2	3.2	0.9	12.25	チャート	"	"	
43	"	"	"	2.9	1.6	0.5	2.3	粘板岩	"	99	
44	"	"	"	3.6	2.7	0.4	4.25	玉子い	"	"	
45	フレーク	"	"	4.4	2.1	0.7	7.15	チャート	"	"	
46	"	"	"	2.4	3.7	1.1	8.15	"	"	"	

第3表 石器・石製品計測表(1)

器物番号	器 種	出土地点	出土部位	最大径 (cm)		高さ (cm)	石 質	国番号	写真図版	備 考	
				たて	よこ						
47	フレーブ	第13号住居址	埋 土	2.2	3.6	0.55	チャート	第46図	99		
48	*	"	"	4.6	4.1	0.9	硬質泥岩	"	"		
49	浮子	"	"	6.0	4.5	2.4	軽石	"	"		
50	石 芥	"	"	9.3	4.6	2.2	砂質凝灰岩	"	"		
51	削 器	第14号住居址	"	1.2	1.9	0.5	チャート	第50図	100		
52	*	"	"	4.8	2.3	0.6	粘板岩	"	"		
53	*	"	"	2.3	3.2	0.8	凝結凝灰岩	"	"		
54	*	"	"	4.1	2.8	1.1	粘板岩	"	"		
55	*	"	"	2.1	2.1	0.3	"	"	"		
56	石 匙	"	"	4.5	7.2	0.9	塊質凝結凝灰岩	"	100		
57	浮子	"	"	6.7	4.7	2.5	軽石	"	"		
58	砥石	"	"	9.4	4.05	2.4	硬砂岩	"	"		
59	石 匙	第15号住居址	"	3.8	6.2	0.9	凝結凝灰岩	第55図	102		
60	石 鏝	第16号住居址	"	2.8	2.1	0.7	チャート	第56図	103		
61	*	第17号住居址	"	1.7	1.6	0.3	粘板岩	第58図	"	一部欠損	
62	削 器	"	"	1.1	1.3	0.35	塊質凝結凝灰岩	"	"	破 片	
63	磨石	第18号住居址	"	11.2	8.4	5.5	760	硬砂岩	第59図	"	
64	半円状扁平打製石器	"	"	10.8	7.1	2.7	300	"	"	一部欠損	
65	玉 石	"	"	"	"	"	90	チャート	"	"	
66	削 器	第20号住居址	"	3.9	3.1	0.9	8.05	硬質凝結凝灰岩	第63図	104	
67	砥石	"	"	7.7	7.2	4.4	335	花崗閃緑岩	"	"	(磨石?)
68	*	"	"	10.0	10.0	2.4	410	硬砂岩	"	"	
69	*	"	"	8.2	7.8	4.0	415	粘板岩	"	"	
70	半円状扁平打製石器	第21号住居址	"	17.9	8.0	3.0	570	輝石安山岩	第66図	"	
71	*	"	"	13.8	6.7	2.2	290	硬砂岩	"	"	一部欠損
72	*	"	"	14.8	9.0	4.0	680	凝灰質硬砂岩	"	"	
73	*	"	"	12.5	9.0	1.8	300	輝石安山岩	"	"	一部欠損
74	*	"	"	9.0	8.0	2.5	270	硬砂岩	第67図	"	一部欠損
75	磨石	"	"	12.3	7.7	2.2	325	"	"	"	
76	石 鏝	"	"	11.5	16.8	13	"	閃緑岩	"	105	
77	*	"	"	14.6	8.5	7.7	"	凝灰質硬砂岩	"	"	
78	*	"	"	8.4	7.7	3.2	"	硬砂岩	"	104	破 片
79	削 器	"	"	4.0	3.6	0.8	"	凝結凝灰岩	"	"	微彫石器(?)
80	砥石	第24号住居址	カマド内	7.0	8.0	6.5	"	流紋岩	第75図	107	
81	半円状扁平打製石器	"	埋 土	10.7	6.6	2.7	270	硬砂岩	"	"	一部欠損
82	削 器	"	"	3.6	3.0	0.5	3.0	塊質泥岩	"	"	
83	砥石	"	"	13.2	11.0	8.2	"	流紋岩	"	107	破 片
84	磨製石斧	第25号住居址	"	11.0	5.7	4.1	400	角閃閃岩	第80図	109	一部欠損
85	磨石	"	"	9.2	6.1	3.6	300	輝石安山岩	"	"	
86	*	第26号住居址	"	10.9	6.2	4.5	510	硬砂岩	第83図	110	
87	半円状扁平打製石器	第27号住居址	"	7.6	4.6	2.5	90	"	第85図	111	破 片
88	磨石	"	"	11.5	6.8	4.3	535	"	"	"	
89	*	第21号土坑	"	11.7	9.7	5.8	855	"	第131図	"	
90	石 鏝	第50号土坑	"(下位)	10.5	17.4	10.15	"	閃緑岩	第132図	113	
91	四 石	第61号土坑	"	17.4	11.6	9.3	"	凝灰質硬砂岩	"	112	石鏝の転用(?)
92	石 鏝	第76号土坑	庭 圃	1.9	1.6	0.4	0.6	塊質泥岩	第135図	113	

第3表 石器・石製品計測表(2)

遺物番号	器 種	出土地点	出土層位	最大値 (cm)		重さ (g)	石 質	図版番号	写真図版	備 考	
				たて	よこ						
93	磨石	第76号土坑	埋 土	11.6	6.7	4.7	500	硬砂岩	第135区	113	
94	石 鏃	第91号土坑	"	2.8	1.7	0.6	1.65	粘板岩	第136区	114	
95	石 鏃	第98号土坑	"	1.8	1.2	0.9	1.6	埴貫泥岩	第138区	115	
96	磨石	第100号土坑	"	5.1	5.0	1.3	140	硬砂岩	"	"	破 片
97	石 鏃	第106号土坑	"	2.8	1.6	0.4	0.9	チャート	"	"	
98	"	第105号土坑	"	3.5	1.2	0.5	1.45	"	第138区	"	
99	"	第107号土坑	"	3.1	1.3	0.5	1.85	埴貫泥岩	"	"	116
100	削 器	第110号土坑	"	3.2	1.8	0.55	4.65	"	"	"	
101	"	第110号土坑	"	4.4	2.6	1.0	11.65	輝緑凝灰岩	"	"	
102	"	"	"	2.6	2.8	0.9	7.15	埴貫凝灰岩	"	"	
103	鏡 石	第116号土坑	"	12.5	10.0	2.4	515	硬砂岩	第140区	"	
104	砥 石	第129号土坑	"	16.5	5.3	4.8	"	"	第142区	117	
105	斗笠状扁平打製石器	第132号土坑	"	10.9	7.4	2.7	390	凝灰質硬砂岩	第144区	118	
106	砥 石(?)	"	"	7.5	8.5	4.9	415	河原石安山岩	"	"	
107	石 斧	第165号土坑	"	9.6	9.25	3.1	425	"	第146区	119	
108	石 鏃	第173号土坑	"	4.7	1.7	1.0	6.2	粘板岩	"	"	120
109	石 鏃	第176号土坑	崖 面	25.5	14.2	4.8	"	閃緑岩	第147区	"	
110	削 器	第187号土坑	埋 土	2.5	2.4	0.6	4.0	埴貫泥岩	第149区	121	
111	"	"	"	3.1	2.2	0.8	4.9	粘板岩	"	"	
112	"	"	"	1.3	1.45	0.3	0.5	埴貫泥岩	"	"	
113	フレーク	"	"	4.3	3.7	1.2	20.6	輝緑凝灰岩	"	"	
114	石 鏃	DV区	"	4.0	1.3	0.6	3.6	粘板岩	第150区	123	
115	"	"	"	3.6	1.9	0.7	3.5	チャート	"	"	
116	"	FⅡ区	"	2.3	1.4	0.7	2.0	硬質凝灰質泥岩	"	"	
117	"	"	"	3.3	1.7	0.5	2.05	輝緑凝灰岩	"	"	
118	"	"	"	2.9	1.3	0.4	1.45	埴貫泥岩	"	"	
119	"	"	"	3.5	1.4	0.4	1.8	埴貫泥岩	"	"	
120	"	出土地不明	"	2.7	0.9	0.3	0.5	チャート	"	"	
121	石 鏃	FⅡ区	"	4.45	2.2	1.0	8.45	玉石	"	"	
122	"	"	"	5.8	3.3	0.5	12.75	泥貫凝灰岩	"	"	
123	削 器	"	"	3.2	4.2	0.9	14.0	粘板岩	"	"	
124	播 器	"	"	5.6	2.6	1.15	23.45	硬質泥岩	"	"	
125	削 器(?)	"	"	2.3	3.0	0.7	3.7	粘板岩	"	"	
126	削 器	出土地不明	"	3.5	2.9	0.5	7.7	硬質泥岩	"	"	
127	"	GⅡ区	"	2.7	1.4	0.4	1.9	粘板岩	"	"	
128	" (?)	CV区	"	5.3	3.9	1.5	32.25	ホルンフェルス 粘板岩	"	"	
129	" (?)	FⅡ区	"	4.0	2.2	0.9	9.15	埴貫凝灰岩	"	"	
130	"	FV区	"	4.1	2.4	0.45	5.55	チャート	"	"	
131	"	FⅡ区	"	3.6	4.0	0.4	5.25	埴貫泥岩	第161区	"	
132	フレーク	GⅡ区	"	4.3	3.4	1.2	12.25	粘板岩	"	"	
133	磨製石斧	FV区	"	11.3	7.1	2.3	300	"	"	"	四石(?)
134	"	"	"	9.4	4.3	2.7	180	河石安山岩	"	"	
135	"	FⅡ区	"	14.7	5.25	3.5	415	硬質凝灰岩	"	"	一部欠損
136	"	"	"	13.1	5.3	2.5	375	砂質凝灰岩	"	"	"
137	"	GⅡ区	"	2.3	3.1	1.0	6.0	チャート質輝緑 凝灰岩	"	"	破 片
138	石製石製品	FⅡ区	"	16.3	4.0	1.1	120	輝緑凝灰質千枚岩	第162区	"	"

第3表 石器・石製品計測表(3)

遺物番号	器 種	出土地点	出土層位	最大値 (cm)			重量 (g)	石 質	図版番号	写真図版	備 考
				長さ	幅	厚さ					
139	石 刺	GⅡ区		11.4	4.0	1.5	190	輝綠閃長質千枚岩	第162区	123	破 片
140	石刺状石製品	FⅡ区		8.0	3.8	1.1	50	粗粒岩	-	-	-
141	石 棒(?)	-		17.6	4.4	1.1	130	-	-	-	一部破製
142	石 棒(?)	-		15.2	3.9	0.8	95	-	-	-	-
143	石 棒	出土地不明		14.2	4.2	3.2	280	-	-	-	一部欠損
144	四 石	FⅡ区		7.5	7.2	7.1	500	崗輝石安山岩	-	-	-
145	*	FⅡ区		7.8	7.7	5.1	340	輝石安山岩	-	-	一部欠損
146	*	-		5.9	8.2	3.0	150	崗輝石安山岩	第163区	124	*
147	*	CⅡ区		9.5	8.1	5.0	550	-	-	-	-
148	*	FⅡ区		7.7	6.7	4.7	370	-	-	-	-
149	*	-		12.7	7.1	5.5	670	硬砂岩	-	-	-
150	*	出土地不明		5.8	5.5	3.1	140	崗輝石安山岩	-	-	一部欠損
151	*	FⅡ区		10.3	8.5	5.5	630	*	第164区	-	-
152	*	出土地不明		8.7	7.4	3.5	350	輝綠閃長質千枚岩	-	-	-
153	*	-		11.2	8.7	1.7	225	硬砂岩	-	-	破 片
154	*	FⅡ区		11.6	10.0	6.5	830	崗輝石安山岩	-	-	一部欠損
155	*	出土地不明		10.2	8.4	2.9	320	-	-	-	-
156	*	FⅡ区		16.1	4.7	2.15	320	硬砂岩	-	-	(崩 石)
157	*	GⅡ区		25.6	8.3	1.9	550	粗粒岩	第165区	-	-
158	磨 石	FⅡ区		10.0	8.6	4.3	610	輝石安山岩	-	-	-
159	*	FⅡ区		11.0	7.6	3.8	490	-	-	-	-
160	*	-		13.8	11.2	7.6	1,540	硬砂岩	-	-	-
161	*	FⅡ区		7.9	6.2	3.4	250	-	-	-	-
162	*	FⅡ区		13.0	10.9	6.3	1,250	-	第166区	-	-
163	*	GⅡ区		6.2	5.0	4.3	200	花園閃綠岩	-	123	-
164	*	DⅡ区		11.2	8.0	5.3	750	硬砂岩	-	124	-
165	*	FⅡ区		10.0	8.6	4.3	610	輝石安山岩	-	125	-
166	*	FⅡ区		9.6	9.0	4.2	515	-	-	-	-
167	*	-		10.0	7.0	5.5	560	花園閃綠岩	第167区	-	(崩 石)
168	*	-		7.0	6.3	6.7	520	崗輝石安山岩	-	-	-
169	*	-		5.5	8.6	4.2	340	硬砂岩	-	125	-
170	*	EⅡ区		9.2	6.1	6.1	570	輝石安山岩	-	-	-
171	砥 石	FⅡ区		14.9	6.5	5.9	820	硬砂岩	-	-	-
172	磨 石	FⅡ区		7.5	7.2	7.1	500	崗輝石安山岩	第168区	-	-
173	半円状扁平打製石器	FⅡ区		16.4	7.1	1.7	200	硬砂岩	-	-	-
174	*	-		10.1	7.5	3.6	470	-	-	-	-
175	砥 石	GⅡ区		10.95	8.5	7.4	990	-	-	-	-
176	円錐状石製品	GⅡ区		5.6	5.3	1.8	100	-	-	-	-
177	*	FⅡ区		6.9	7.3	3.9	310	花園閃綠岩	-	-	-
178	石 錘	出土地不明		8.9	4.95	1.0	70	粗粒岩	-	-	-
179	石 錘	FⅡ区		34.5	21.2	5.7		福沢貫硬砂岩	第169区	126	-
180	*	-		29.5	22.5	13.9		閃綠岩	-	-	-
181	*	-		5.7	6.3	3.1		崗輝石安山岩	-	127	破 片
182	*	FⅡ区		23.3	20.4	8.0		閃綠岩	第170区	-	-
183	打製硬石器	FⅡ区		14.7	10.9	3.4	550	硬砂岩	-	125	-

第3表 石器・石製品計測表(4)

写真図版



写真図版 1 堀I遺跡周辺のようす (空中写真)



写真図版2 楸Ⅰ遺跡全景（空中写真）



トレンチ③



トレンチ⑥



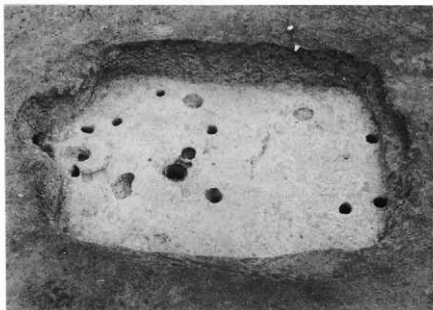
CV区
調査前（南側より）



CV区
遺構検出時（東側より）



CV区
調査終了時（南東より）



(平面)



(断面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



(断面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



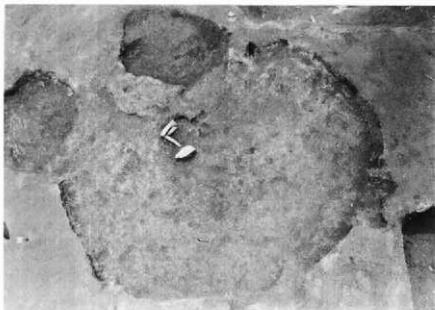
(断面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



(炉跡平面)



(遺物出土状況)



(炉跡断面)



(平面)



第6号住居址

(断面)

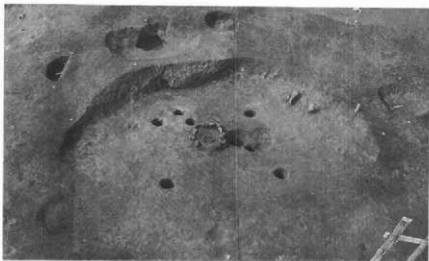


(伊勢断面)



(遺物出土状況)

第3号住居址



(平面)



(断面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)

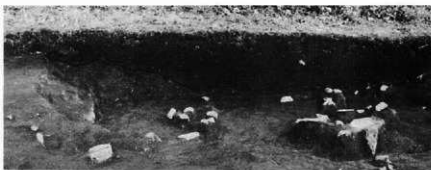


(平面)

写真図版11 第8号住居址



(平面)



(断面)



(炉跡断面)



(平面)



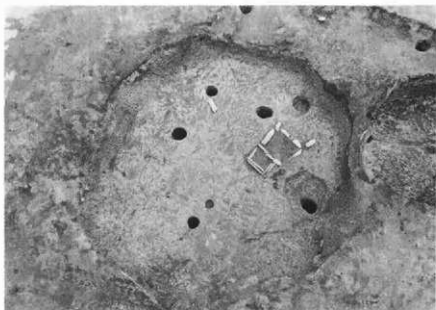
(断面)



(第8号烧土遺構)



(遺物出土状況)



(平面)



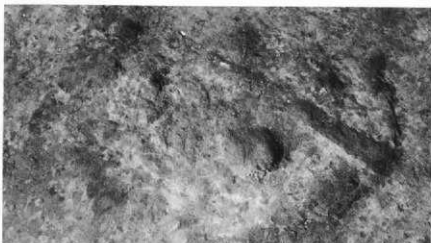
(断面, 部分)



(炉跡断面)



(遺構検出状況)



(第12号住居址.平面)



(第18号住居址.平面)



(柱穴1)



(炉跡断面)

第20号住居址

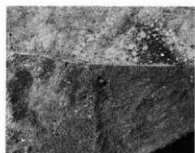
写真図版15 第12.18.20号住居址



(平面)



(断面)



(ドングリ出土状況)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



(断面部分)



(炉跡平面)



(炉跡検出状況)



(炉跡断面)



(平面)



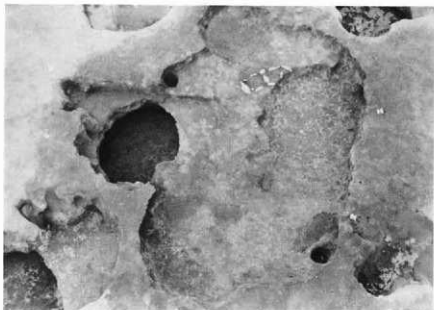
(断面)



(炉跡断面)



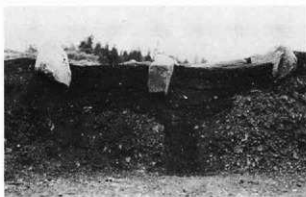
(遺物出土状況)



(平面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



(断面)



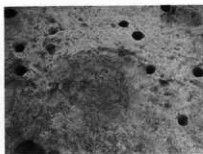
(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



(炉跡平面)



(炉跡断面)

第21号住居址



第22号住居址(平面)

写真図版21 第21、22号住居址



(平面)



(断面)



(カマド跡断面)



(土坑と柱穴の重模)



(平面)



(断面, 部分)



(炉跡平面)



(炉跡断面)



(平面)



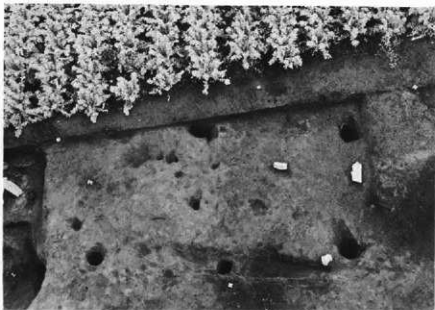
(断面)



(カマド跡)



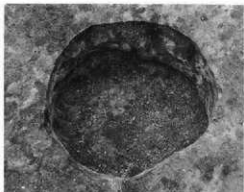
(カマド断面)



(平面)



(炉跡断面)

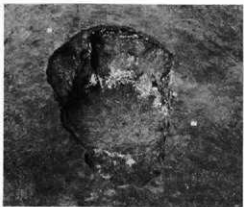


第1号土坑

(平面)



(断面)



第2号土坑

(平面)



(断面)



第3号土坑

(平面)

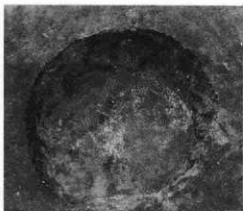


(断面)



第4号土坑

(平面)

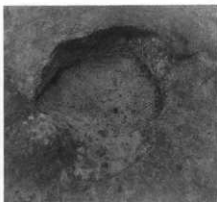


第5号土坑

(平面)

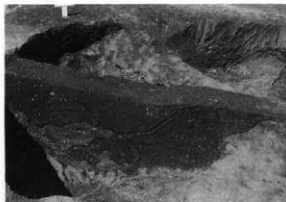


(断面)



第6号土坑

(平面)



(断面)



第7号土坑

(平面)



(断面)

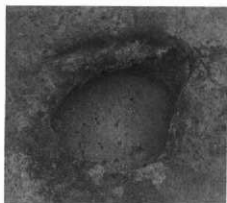


第8号土坑

(平面)



(断面)

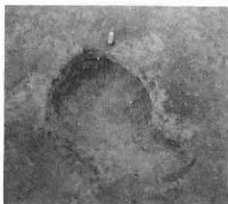


第9号土坑

(平面)



(断面)

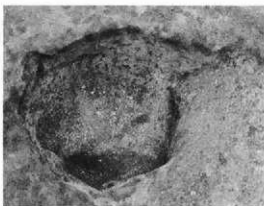


第10号土坑

(平面)



(断面)



第11号土坑

(平面)



(断面)

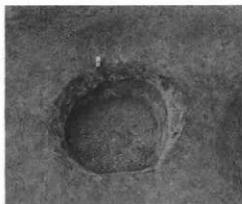


第12号土坑

(平面)



(断面)

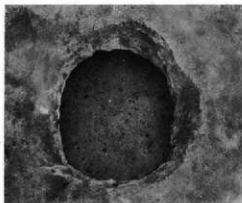


第13号土坑

(平面)



(断面)

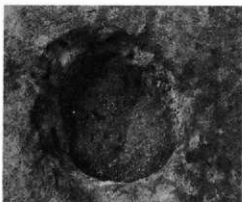


第14号土坑

(平面)



(断面)

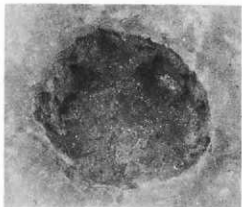


第15号土坑

(平面)

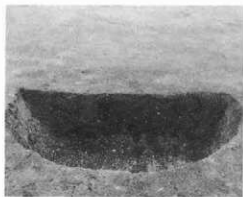


(断面)

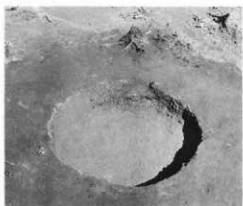


第16号土坑

(平面)



(断面)



第17号土坑

(平面)



(断面)



第18号土坑

(平面)



(断面)

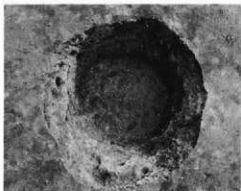


第19号土坑

(平面)



(断面)

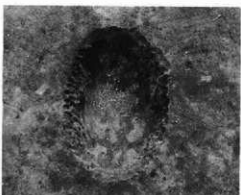


第20号土坑

(平面)

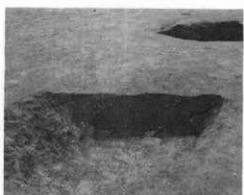


(断面)



第21号土坑

(平面)



(断面)



第22号土坑

(平面)

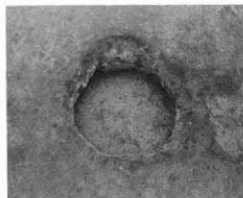


遺物出土状況



第23号土坑

(平面)

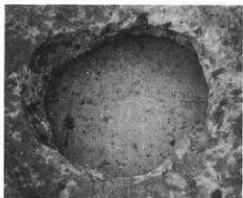


第24号土坑

(平面)

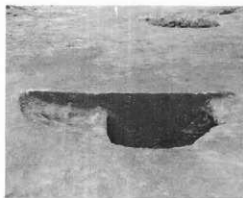


(断面)

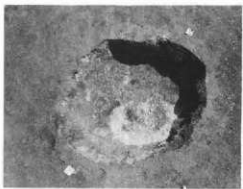


第25号土坑

(平面)



(断面)

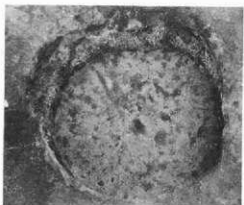


第26号土坑

(平面)

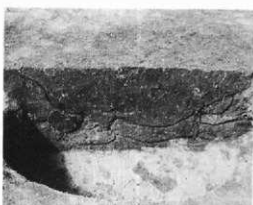


(断面)

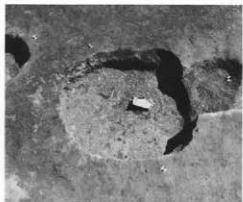


第27号土坑

(平面)



(断面)

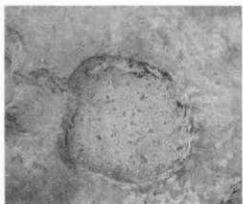


第28号土坑

(平面)



(断面)

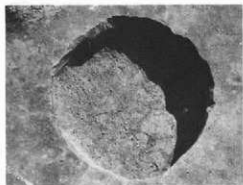


第29号土坑

(平面)



(断面)

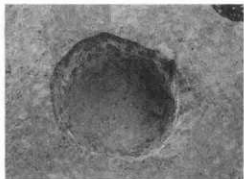


第30号土坑

(平面)



(断面)



第31号土坑

(平面)



(断面)

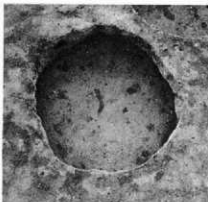


第32号土坑

(平面)



(断面)

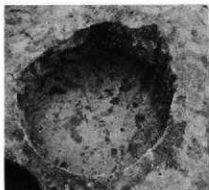


第33号土坑

(平面)



(断面)

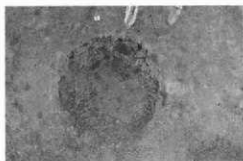


第34号土坑

(平面)



(断面)



第35号土坑

(平面)



(断面)



第36号土坑

(平面)



(断面)



第37号土坑

(平面)

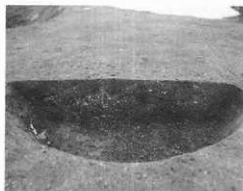


(断面)



第38号土坑

(平面)



(断面)

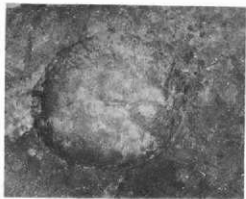


第39号土坑

(平面)

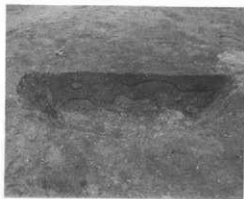


(断面)



第40号土坑

(平面)

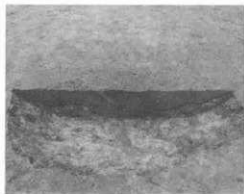


(断面)

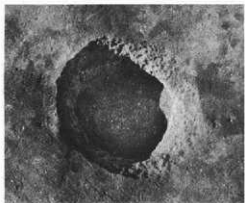


第41号土坑

(平面)



(断面)



第42号土坑

(平面)



(断面)



第43号土坑

(平面)



(断面)

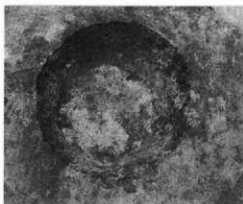


第44号土坑

(平面)



(断面)



第45号土坑

(平面)

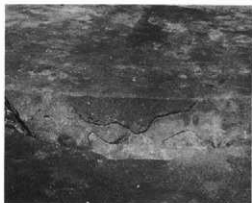


(断面)

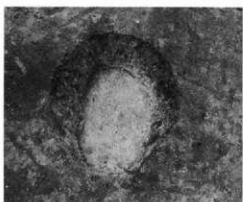


第46号土坑

(平面)



(断面)



第47号土坑

(平面)



(断面)



第48号土坑

(平面)



(断面)



第49号土坑

(平面)



(断面)

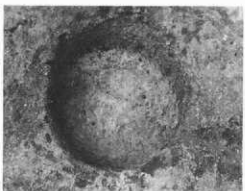


第50号土坑

(平面)

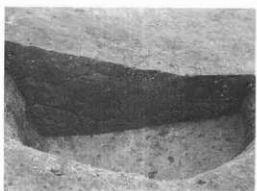


(断面)



第51号土坑

(平面)



(断面)



第52号土坑

(平面)



(断面)



第54・55号土坑

(平面)



(断面)



第56号土坑

(平面)



(断面)



(断面)



(断面)



(平面)

第58~61号土坑



(断面)



(断面)

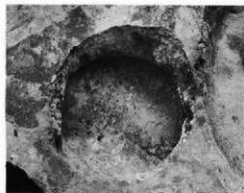


第62·63号土坑

(平面图)



(断面)



第64号土坑

(平面图)



(断面图)



第65号土坑

(平面图)



(断面图)

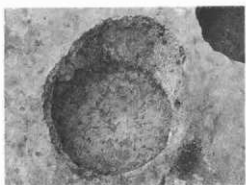


第66号土坑

(平面)



(断面)

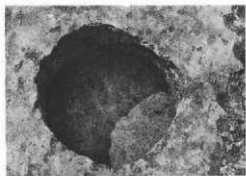


第67·68号土坑

(平面)



(断面)

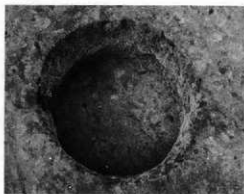


第69号土坑

(平面)



(断面)

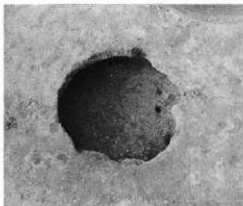


第70号土坑

(平面)

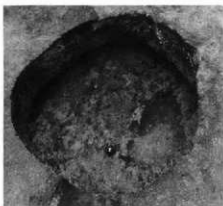


(断面)



第71号土坑

(平面)

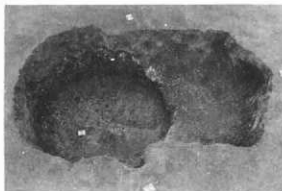


第72号土坑

(平面)



(断面)



第75号土坑

(平面)



(断面)



第76·77号土坑

(平面)



(断面)



第78·79号土坑

(平面)



(断面)

第81号土坑



(断面)



第82号土坑

(平面)



(断面)



第83号土坑

(平面)

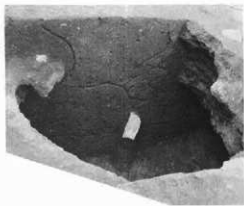


(断面)



第84号土坑

(平面)



(断面)

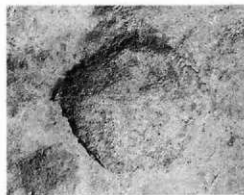


第85·86号土坑

(平面)



(断面)

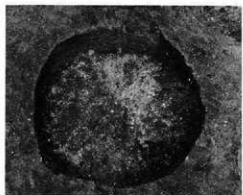


第87号土坑

(平面)



(断面)



第88号土坑

(平面)



(断面)



第89号土坑

(平面)



(断面)

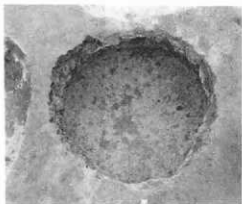


第90号土坑

(平面)

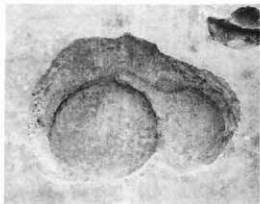


(断面)



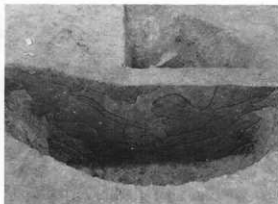
第91号土坑

(平面)

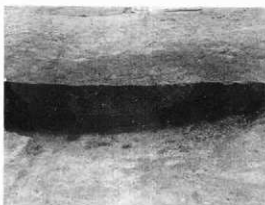


第92·93号土坑

(平面)



(断面)



第94号土坑

(断面)



第95号土坑

(平面)



(断面)

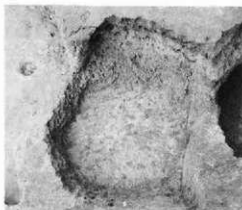


第96号土坑

(平面)



(断面)

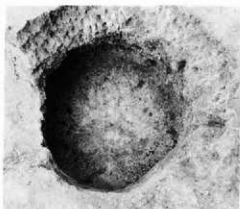


第98号土坑

(平面)

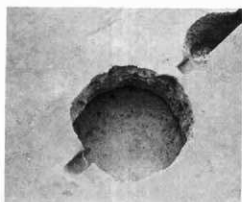


(断面)



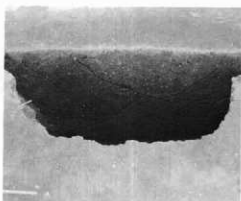
第99号土坑

(平面)



第100号土坑

(平面)

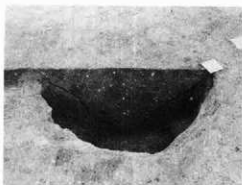


(断面)



第101号土坑

(平面)

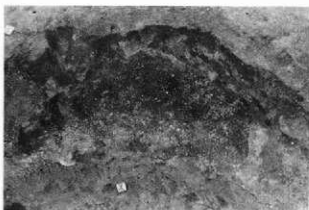


(断面)



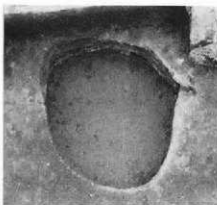
第102号土坑

(平面)



第103号土坑

(平面)



第104号土坑

(平面)

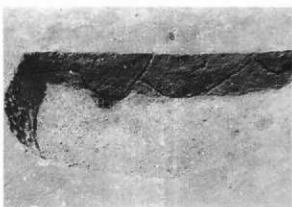


(断面)

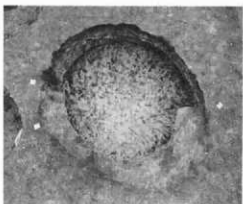


第105号土坑

(平面)

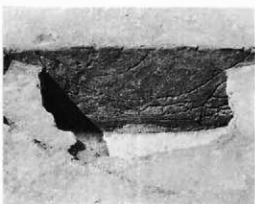


(断面)



第106号土坑

(平面)



(断面)

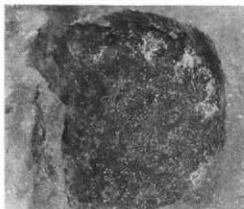


第107号土坑

(平面图)



(断面)



第108号土坑

(平面)



(断面)

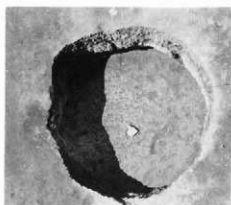


第109号土坑

(平面)

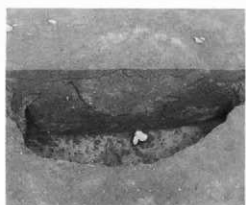


(断面)



第110号土坑

(平面)



(断面)

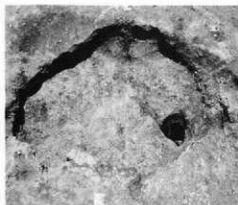


第111号土坑

(平面)



(断面)

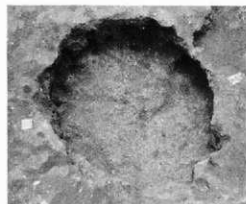


第112号土坑

(平面)



(断面)



第113号土坑

(平面)

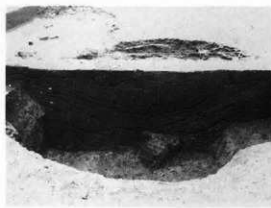


(断面)

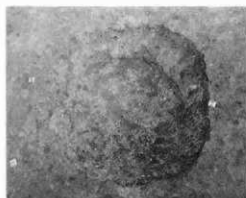


第114号土坑

(平面)

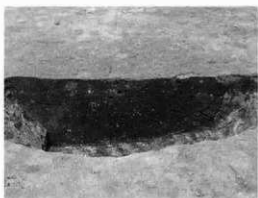


(断面)

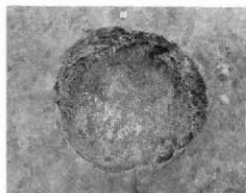


第115号土坑

(平面)

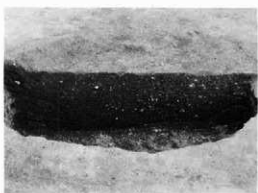


(断面)



第116号土坑

(平面)



(断面)



第117号土坑

(平面)

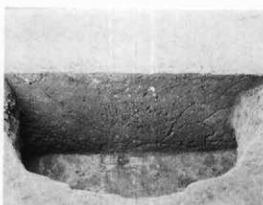


(断面)

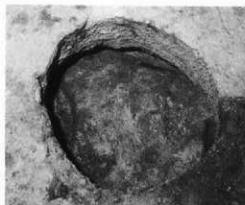


第118号土坑

(平面)



(断面)



第119号土坑

(平面)



(断面)



第120号土坑

(平面)

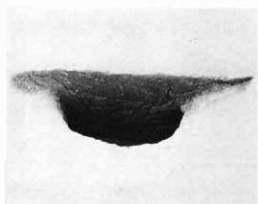


(断面)

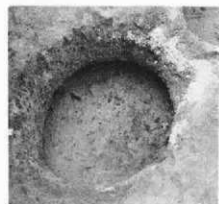


第121号土坑

(平面)

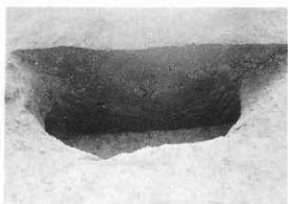


(断面)

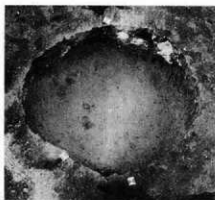


第122号土坑

(平面)



(断面)

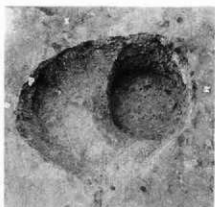


第123号土坑

(平面)

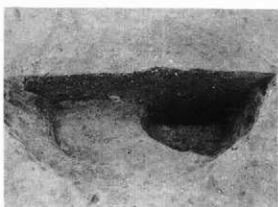


(断面)

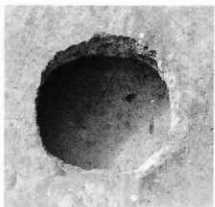


第124-125号土坑

(平面)



(断面)

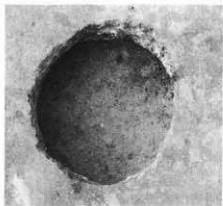


第126号土坑

(平面)



(断面)

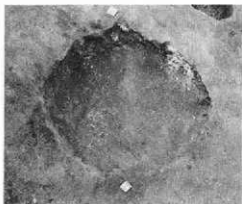


第127号土坑

(平面)



(断面)



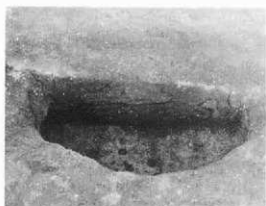
第128号土坑

(平面)



第129号土坑

(平面)



(断面)



第130号土坑

(平面)



(断面)



第131·132号土坑

(平面)

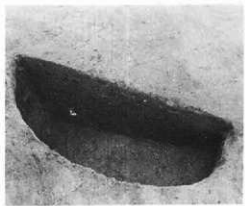


(断面)

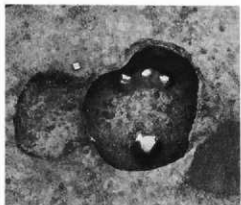


第133号土坑

(平面)

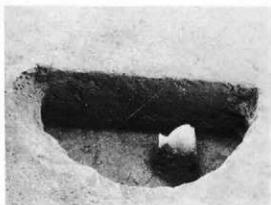


(断面)



第134·135号土坑

(平面)

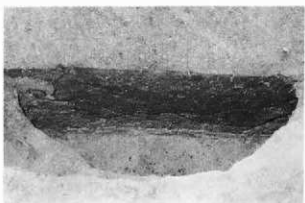


(断面)



第136号土坑

(平面)



(断面)



第137号土坑

(平面)



第138号土坑

(平面)



(断面)



第139·140号土坑

(平面)



(断面)



第141·142号土坑

(平面)

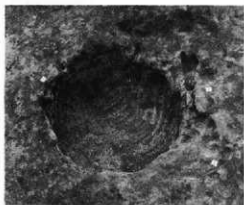


(断面)



第144号土坑

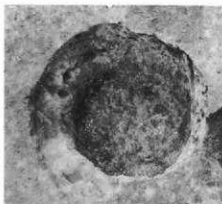
(平面)



第145号土坑



(断面)

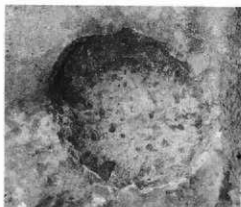


第146号土坑

(平面)



(断面)



第147号土坑

(平面)



(断面)

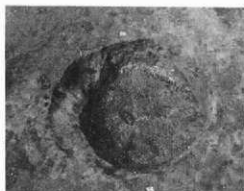


第148号土坑

(平面)



(断面)

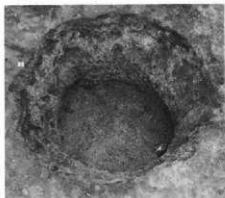


第149号土坑

(平面)



(断面)

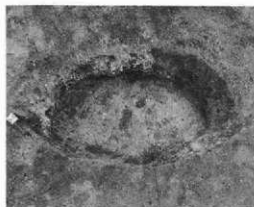


第150号土坑

(平面)



(断面)

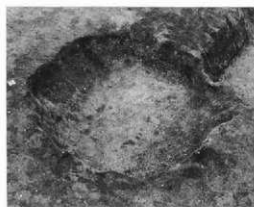


第151号土坑

(平面)



(断面)



第152号土坑

(平面)



(断面)



第153号土坑

(断面)



第155号土坑

(断面)

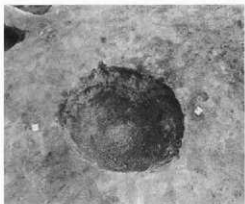


第154号土坑

(平面)



(断面)

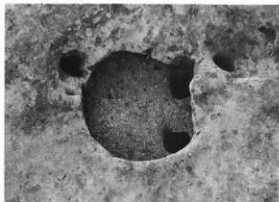


第156号土坑

(平面)



(断面)



第157号土坑

(平面)

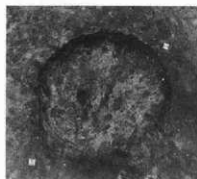


第158号土坑

(平面)



(断面)

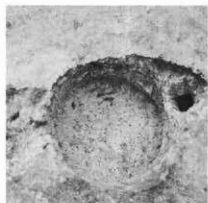


第159号土坑

(平面)

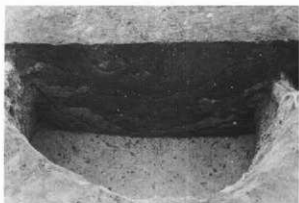


(断面)



第160号土坑

(平面)

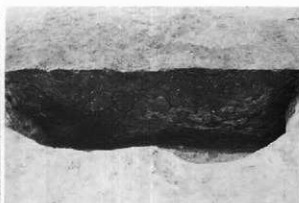


(断面)

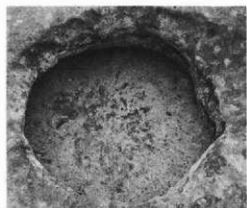


第161号土坑

(平面)

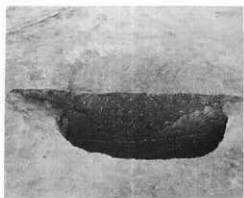


(断面)

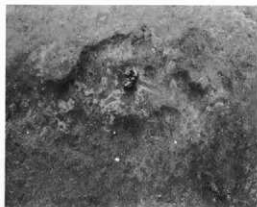


第162号土坑

(平面)



(断面)



第163号土坑

(平面)



(断面)



第164号土坑

(平面)



(断面)



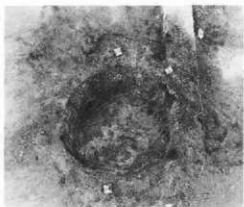
第166号土坑

(断面)



第167号土坑

(断面)



第168号土坑

(平面)



第169号土坑

(平面)



第170号土坑

(平面)



(断面)



第171号土坑

(平面)



(断面)



第172号土坑

(平面)



(断面)



第173号土坑

(平面)

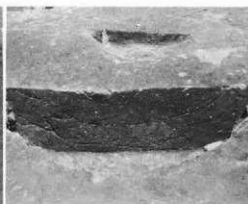


(断面)



第174号土坑

(平面)



(断面)



第175号土坑

(平面)

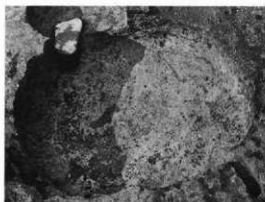


第176号土坑

(平面)



(断面)

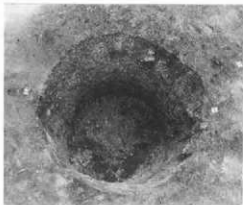


第177号土坑

(平面)



(断面)



第178号土坑

(平面)



(断面)



第179号土坑

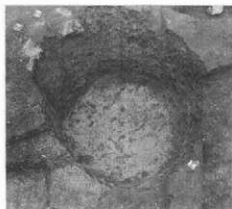
(平面)



第180号土坑



(断面)



第181号土坑 (平面)



(断面)



第182号土坑 (平面)



(断面)



第183号土坑 (平面)

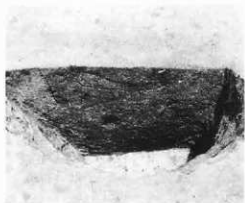


(断面)



第184号土坑

(平面)



(断面)

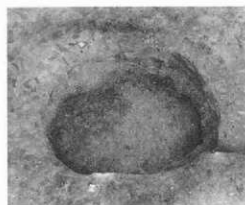


第185号土坑

(平面)



(断面)



第186号土坑

(平面)



(断面)



第187号土坑

(平面)



(断面)

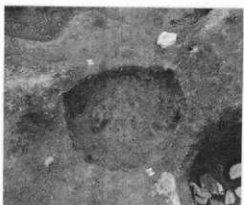


第189号土坑

(平面)



(断面)



第190号土坑

(平面)



(断面)



第191号土坑

(平面)



第192号土坑

(平面)



(断面)

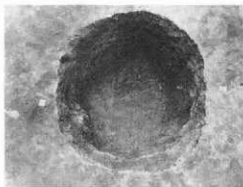


第193号土坑

(平面)

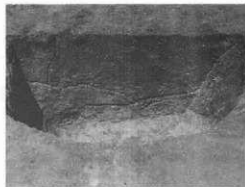


(断面)



第194号土坑

(平面)



(断面)



第195号土坑

(平面)

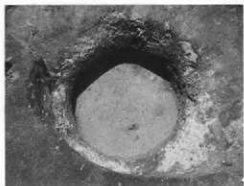


(断面)



第196号土坑

(断面)



第197号土坑

(平面)



(断面)



第198号土坑

(平面)



第199号土坑

(平面)



(断面)



第200号土坑

(断面図)



第201号土坑

(平面図)



(断面図)



埋設土器



集石遺構



第18号住居址



第66号土坑



第72号土坑



第82号土坑



第89号土坑



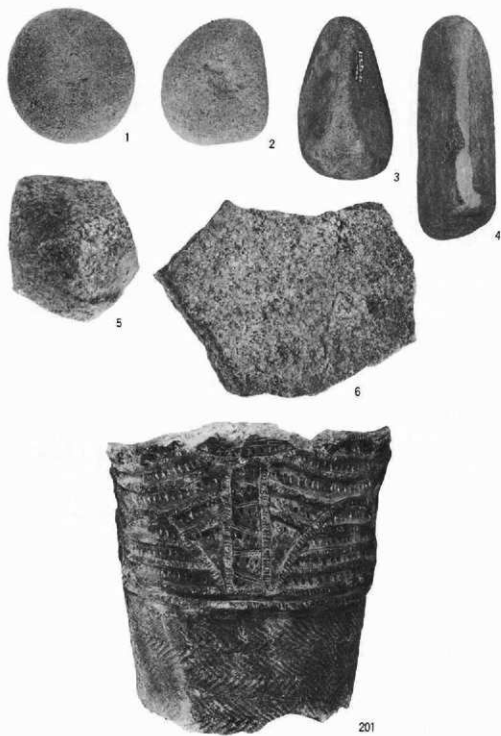
第152号土坑



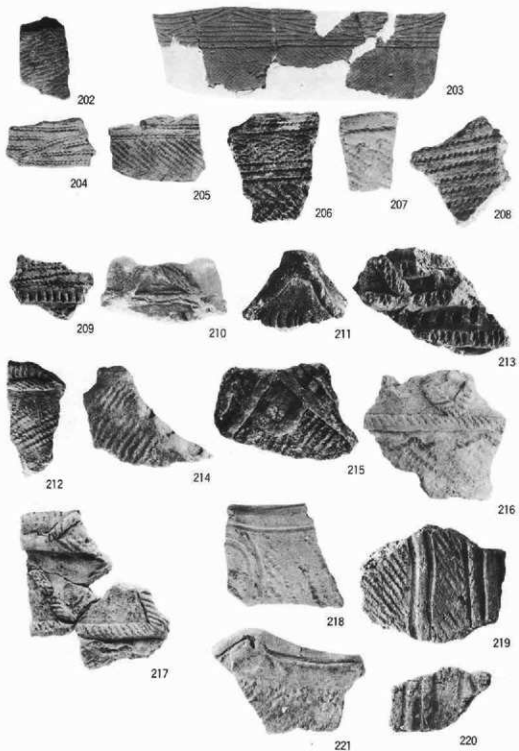
第163号土坑



第1号烧土遗構



写真図版86 第1号住居址内出土遺物



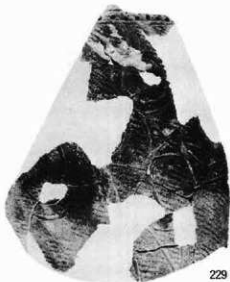
写真図版87 第1号住居址内出土遺物



222



223



229



224



225



226



227



228



230



231



232



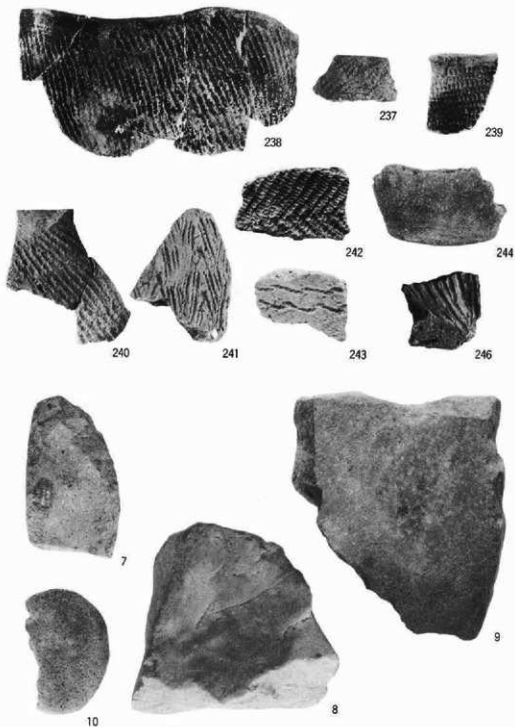
233



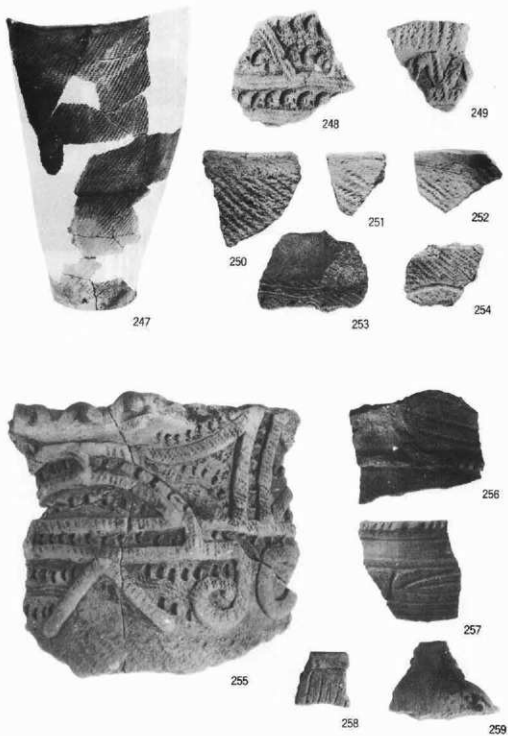
234



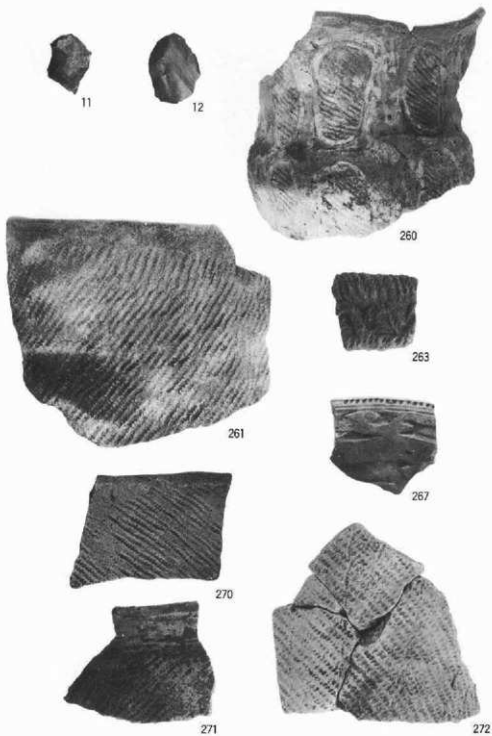
235



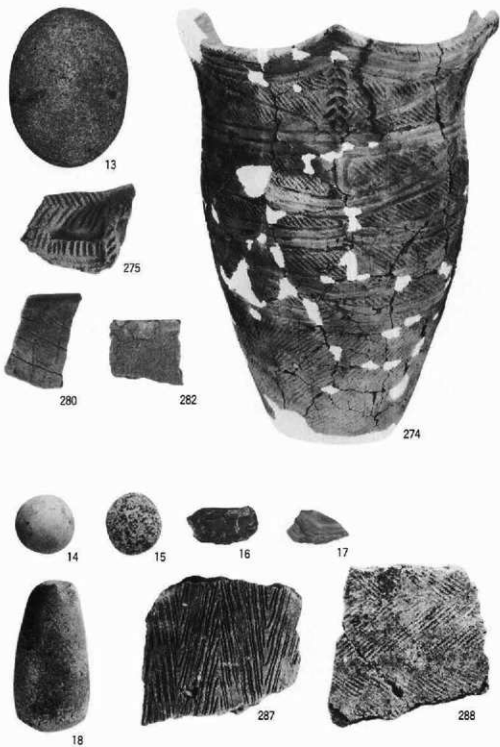
写真图版89 第1·2号住居址内出土遗物



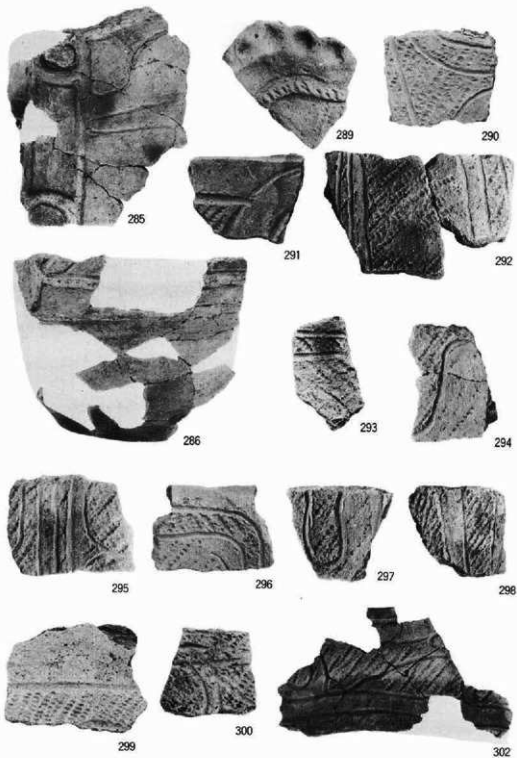
写真图版90 第2·3号住居址内出土遗物



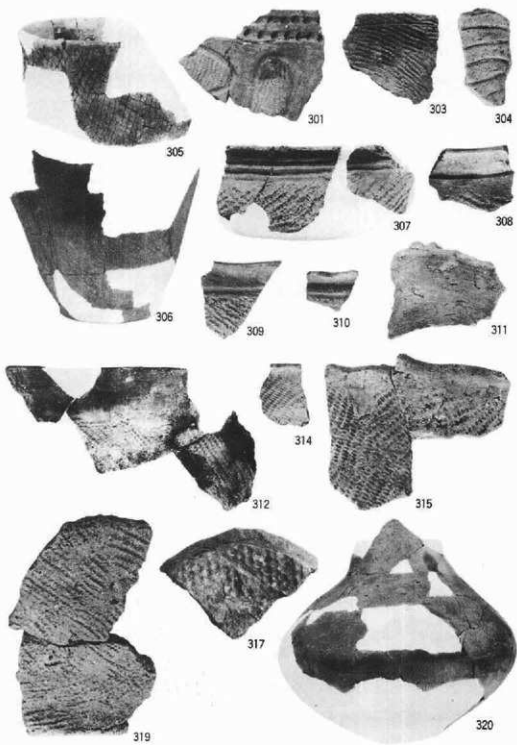
写真図版91 第4号住居址内出土遺物



写真図版92 第5・6号住居址内出土遺物



写真図版93 第6号住居址内出土遺物



写真图版94 第6号住居址内出土遗物



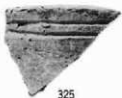
321



323



324



325



325



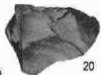
326



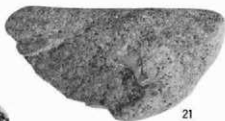
328



19



20



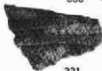
21



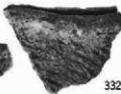
329



330



331



332



333



334



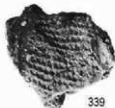
335



336



338



339



340



341



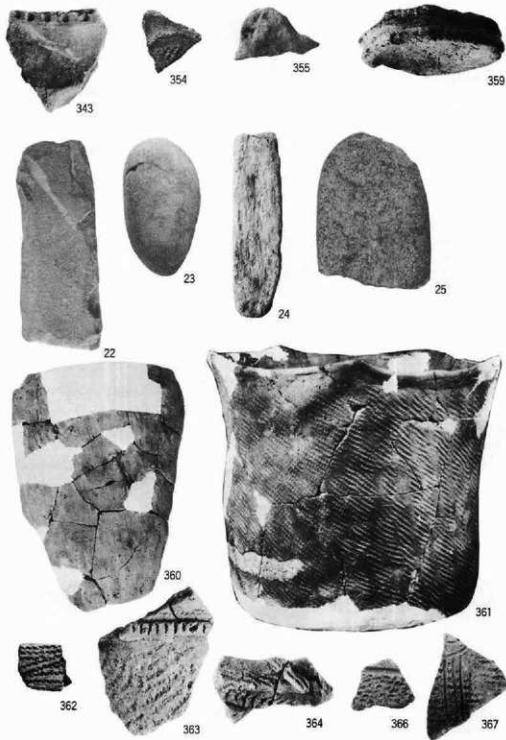
344



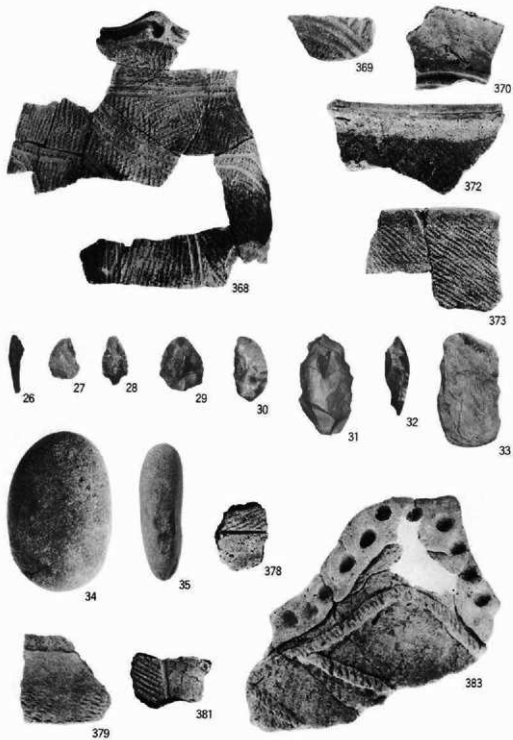
345



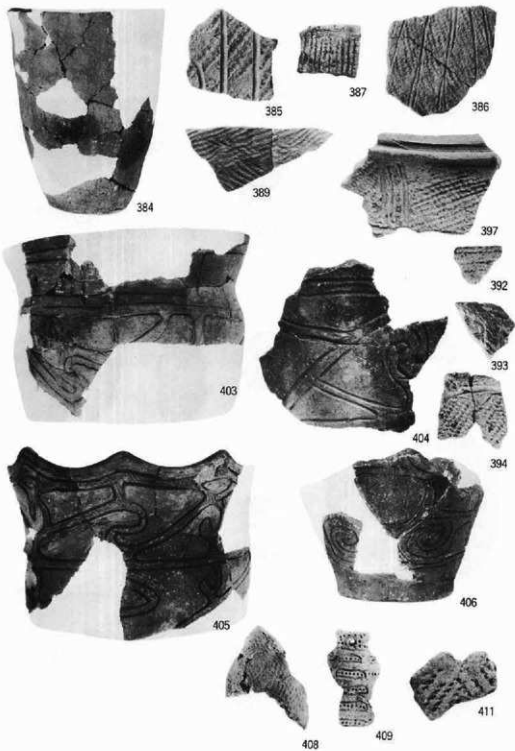
346



写真図版96 第9・10号住居址内出土遺物



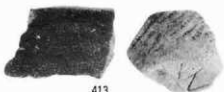
写真図版97 第10・11号住居址内出土遺物



写真图版98 第11号住居址内出土遗物

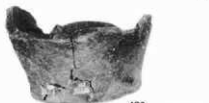


412



413

421



420



422



36



37



423



39



42



43



44



49



45



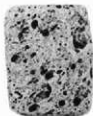
46



47



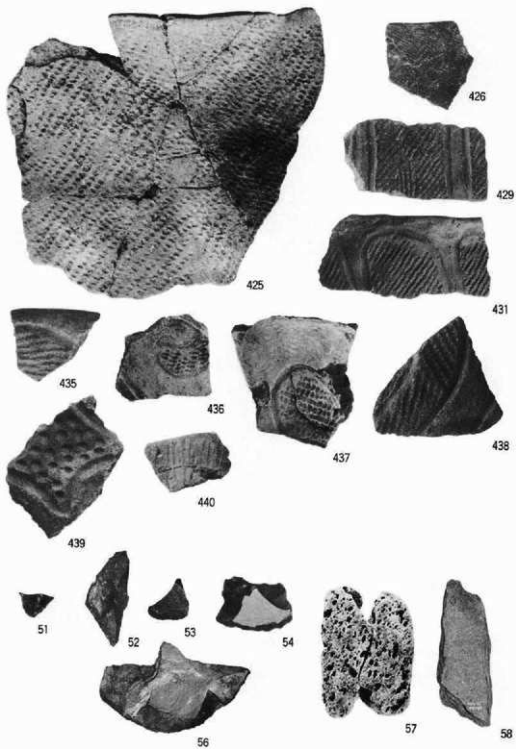
48



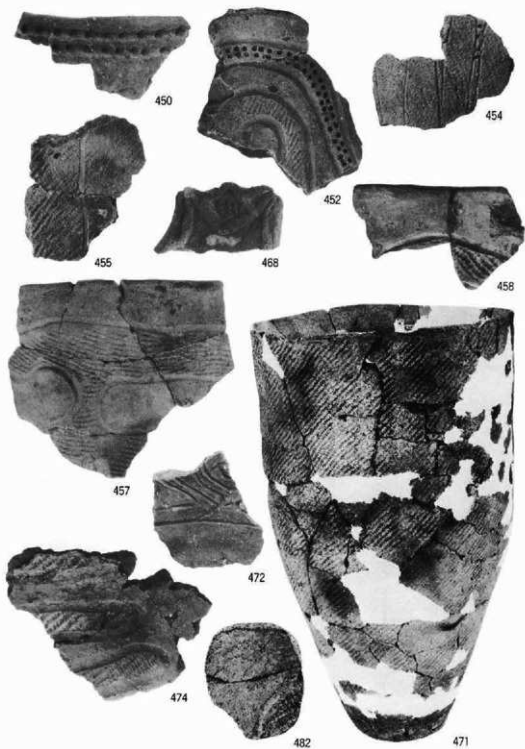
50



写真図版99 第11・12・13号住居址内出土遺物



写真图版100 第13-14号住居址内出土遗物



写真図版101 第14号住居址内出土遺物



483



59



485



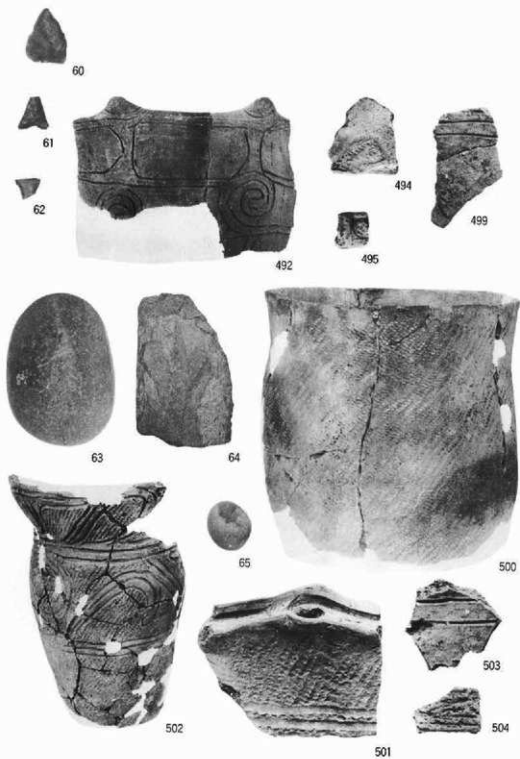
486



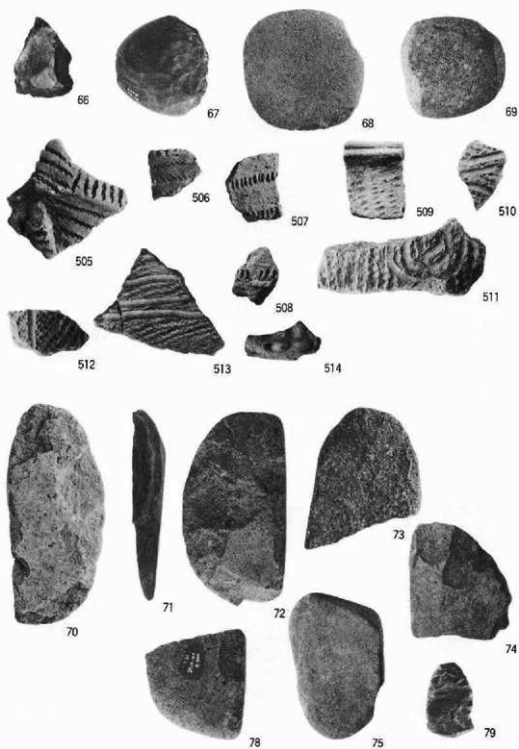
487



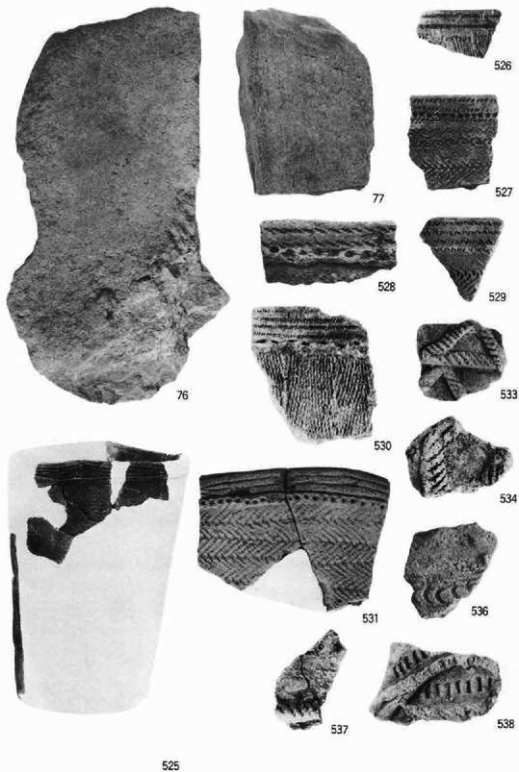
488



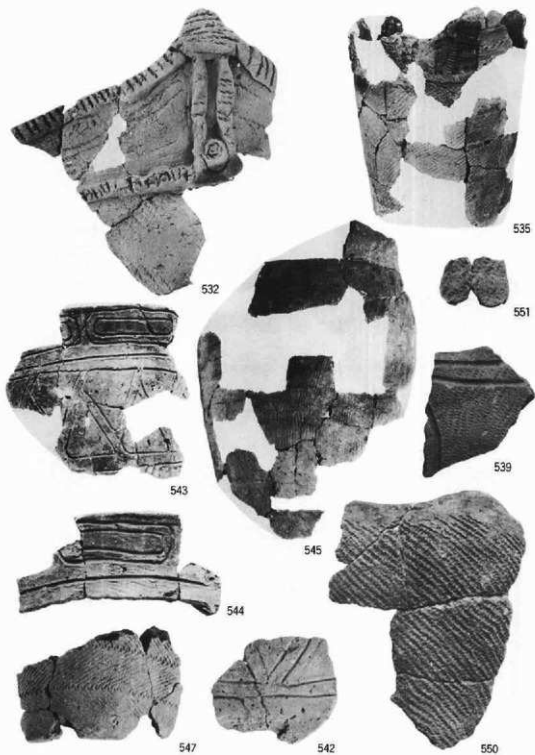
写真图版103 第16·17·18号住居址内出土遺物



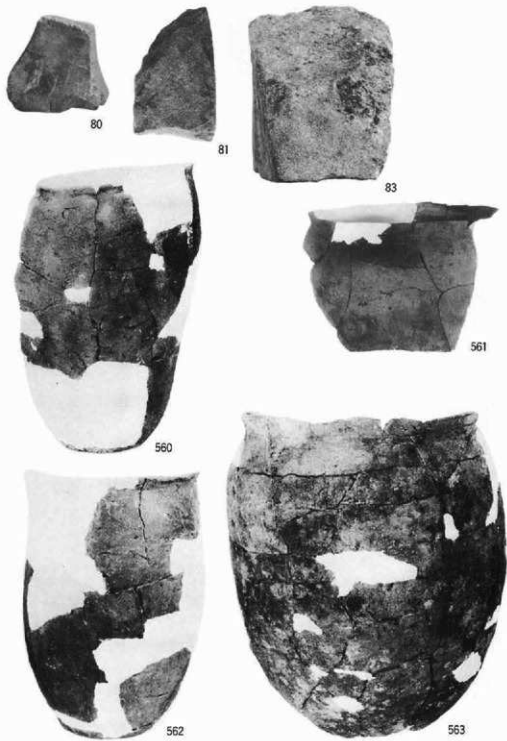
写真図版104 第20-21号住居址内出土遺物



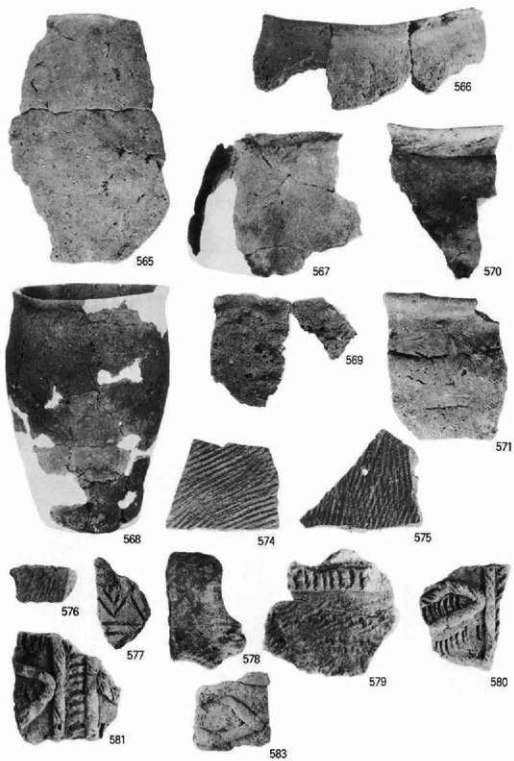
写真图版105 第21号住居址内出土遗物



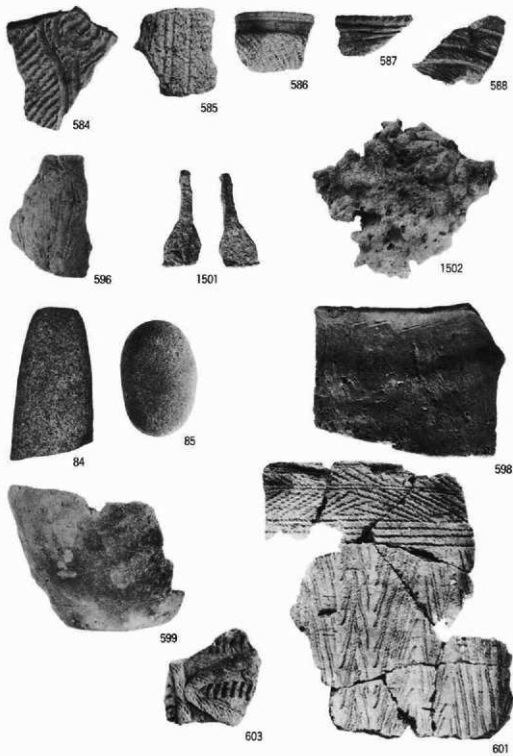
写真図版106 第21号住居址内出土遺物



写真图版107 第24号住居址内出土遺物



写真图版108 第24号住居址内出土遗物



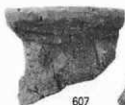
写真图版109 第24·25号住居址内出土遗物



602



606



607



608



609



1504



86



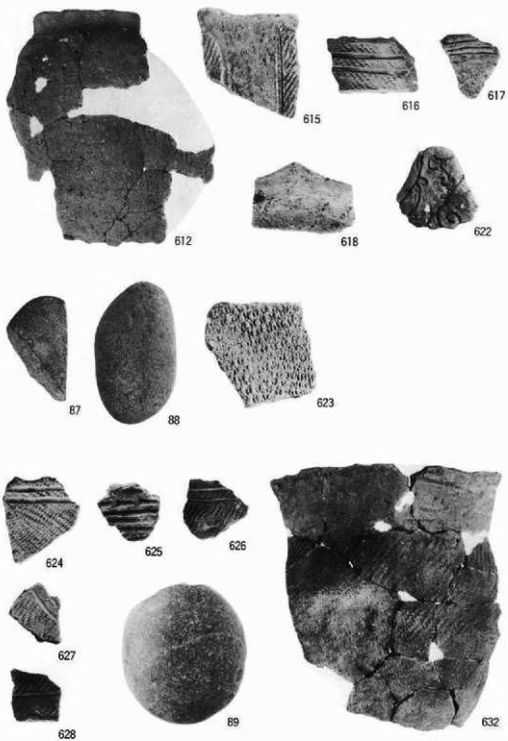
610



613



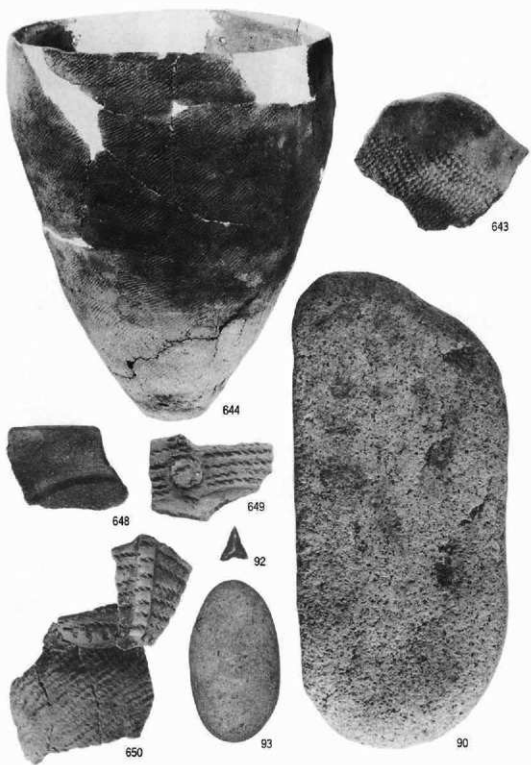
614



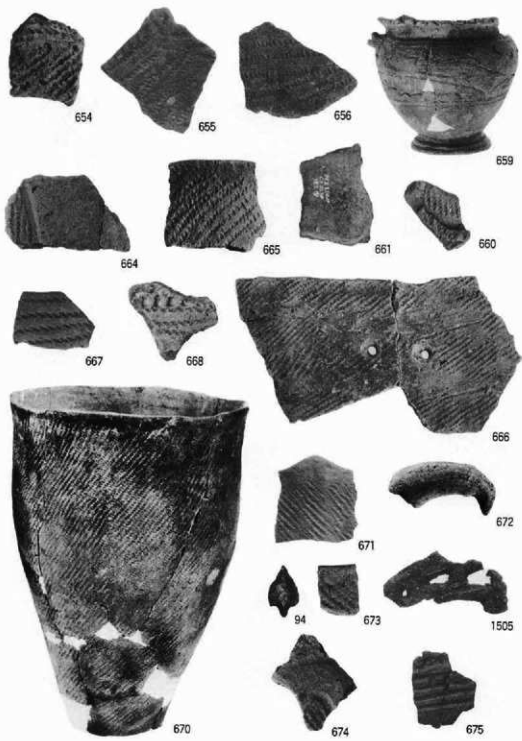
写真図版111 第26・27号住居址内、及び土坑内出土遺物



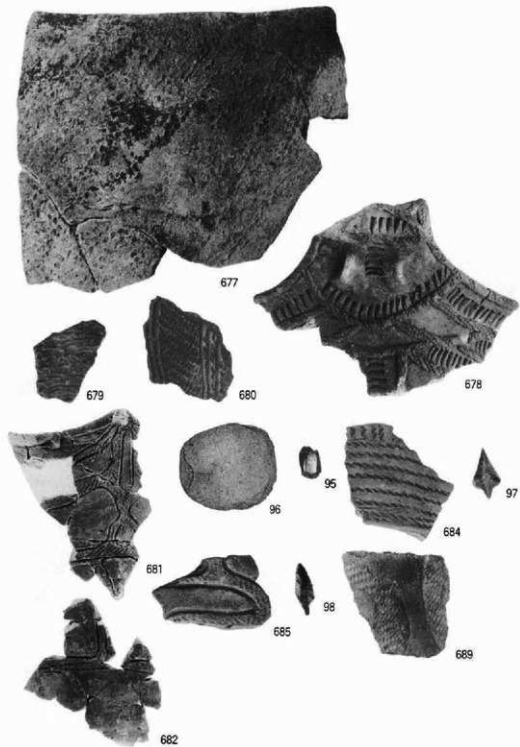
写真図版112 土坑内出土遺物



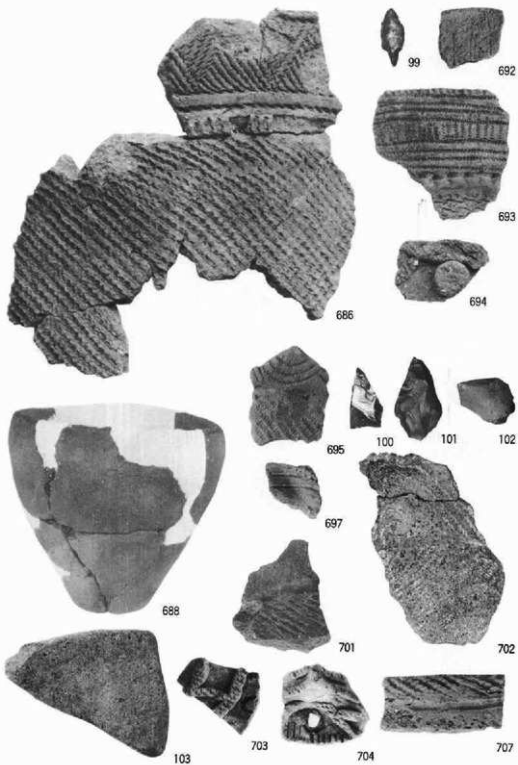
写真図版113 土坑内出土遺物



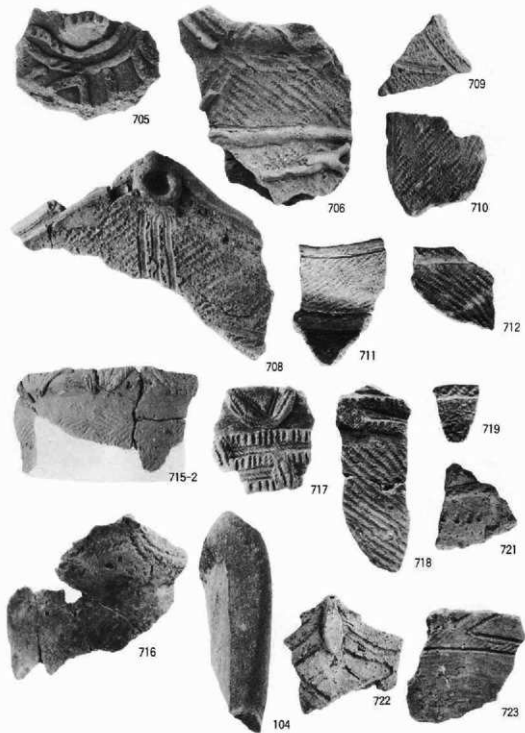
写真图版114 土坑内出土遗物



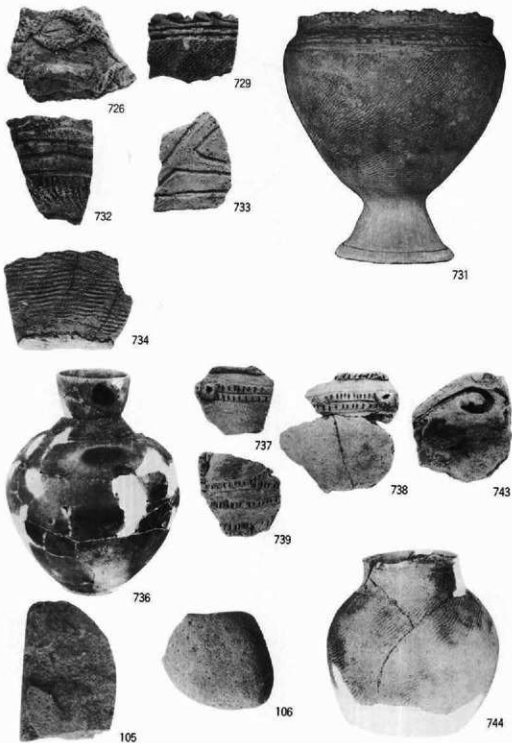
写真図版115 土坑内出土遺物



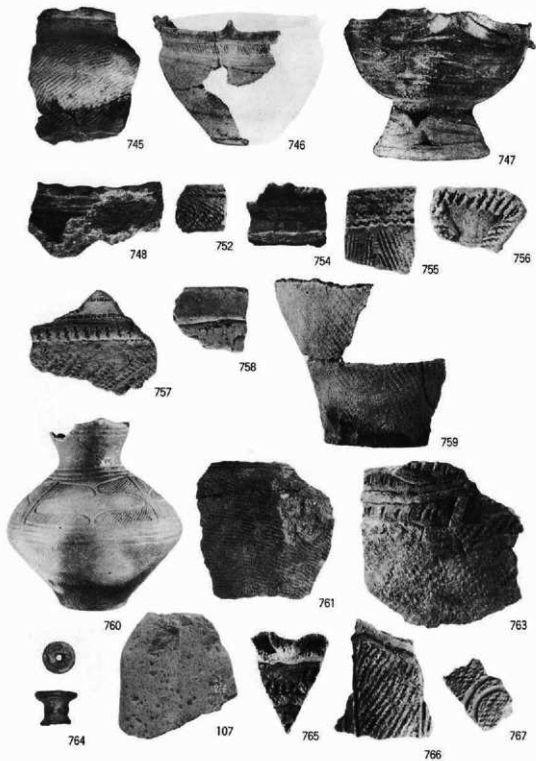
写真図版116 土坑内出土遺物



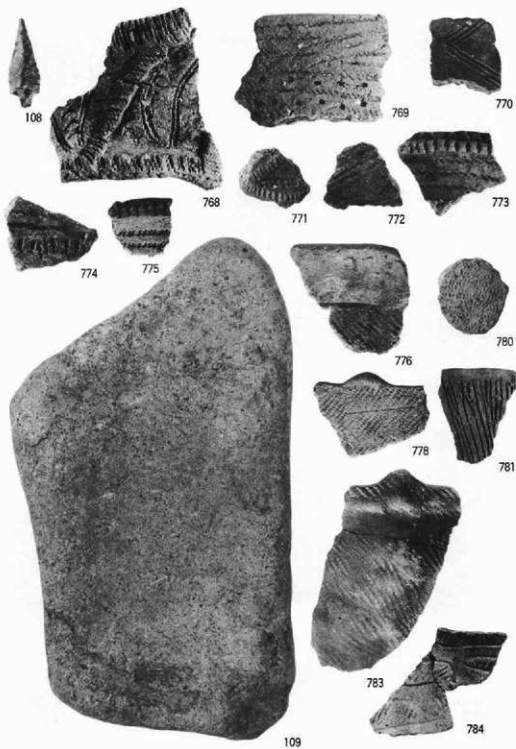
写真图版117 土坑内出土遗物



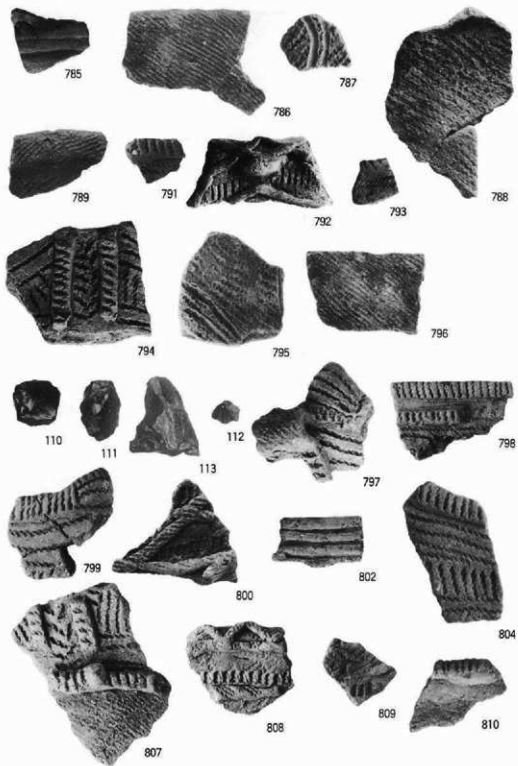
写真图版118 土坑内出土遗物



写真图版119 土坑内出土遗物



写真图版120 土坑内出土遺物



写真图版121 土坑内出土遗物



811



813



812



816



817



819



821

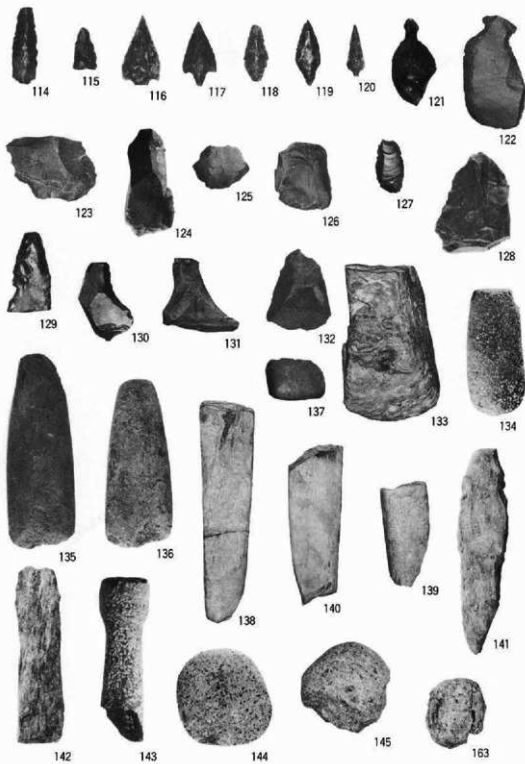


818

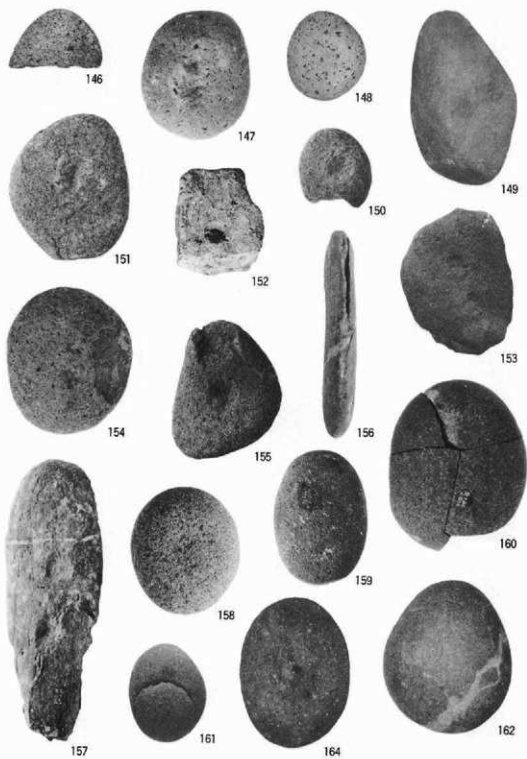


820

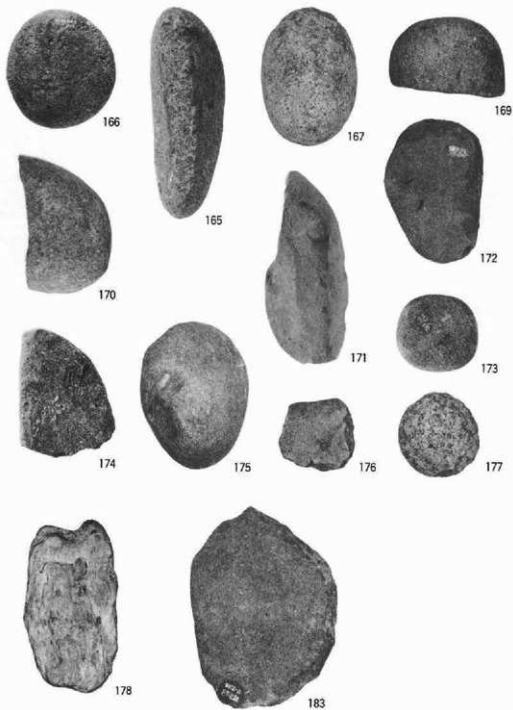
写真図版122 土坑内出土遺物



写真図版123 遺構外出土遺物



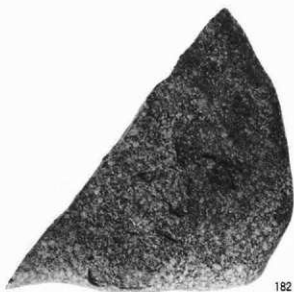
写真図版124 遺構外出土遺物



写真図版125 遺構外出土遺物



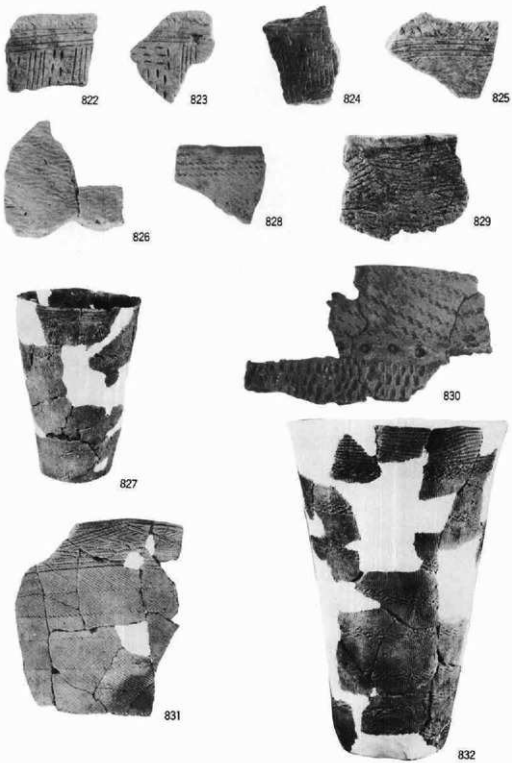
写真図版126 遺構外出土遺物



182



181



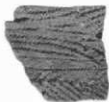
写真図版128 遺構外出土遺物



834



833



835



836



839



837



838



841



843



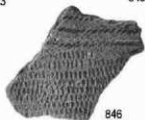
845



840



844



846

写真図版129 遺構外出土遺物



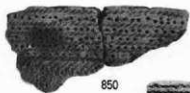
847



848



849



850



851



852



853



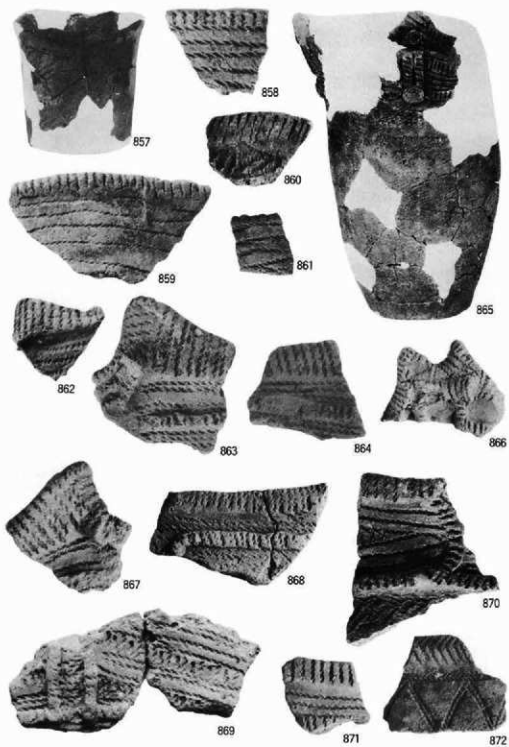
854



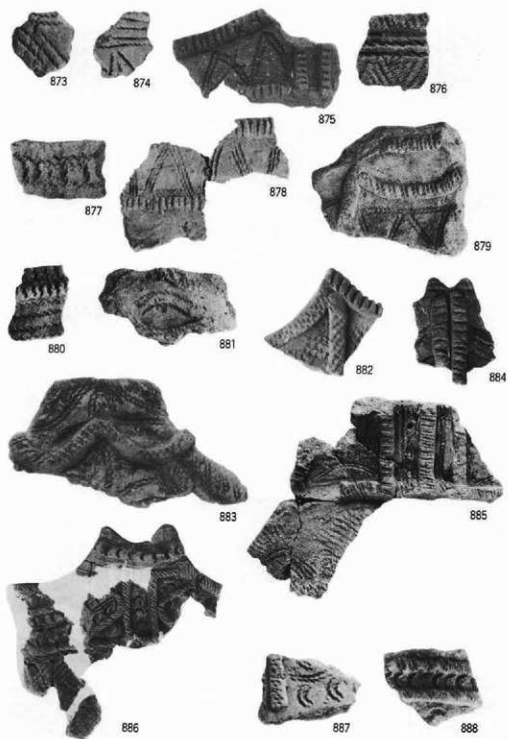
855



856



写真図版131 遺構外出土遺物



写真図版132 遺構外出土遺物



889



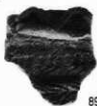
890



892



891



893



894



897

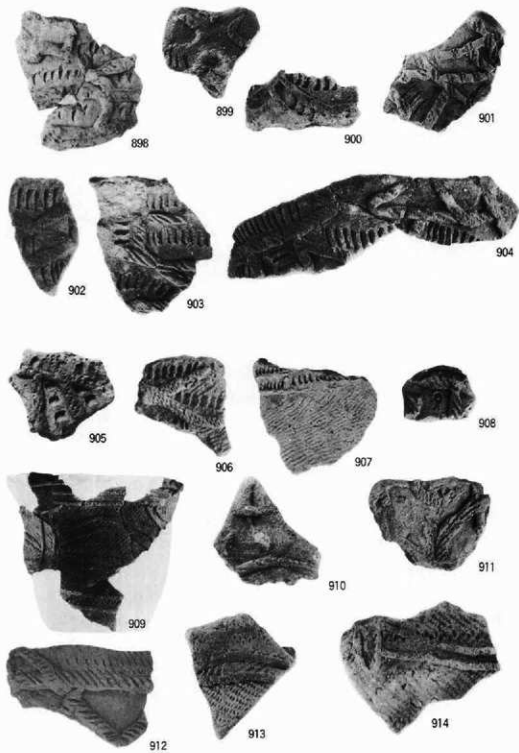


895

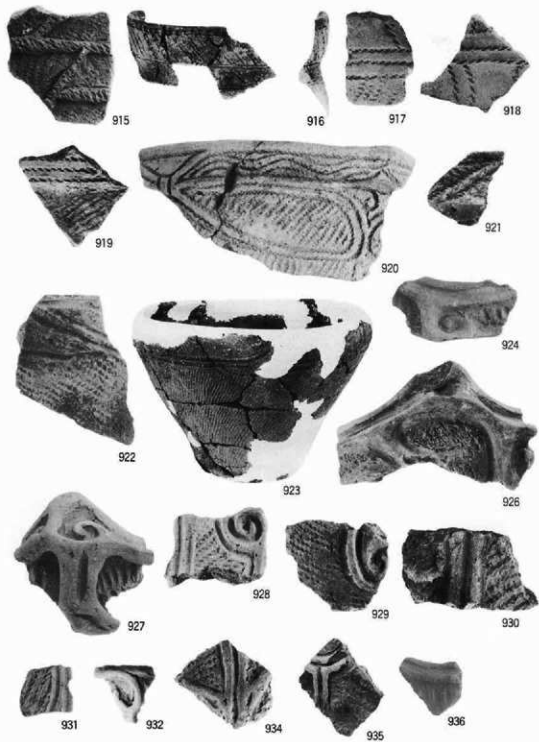


896

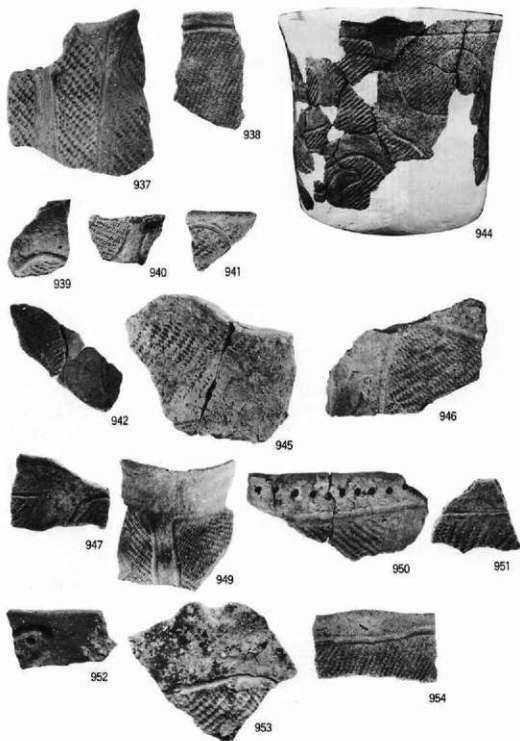
写真図版133 遺構外出土遺物



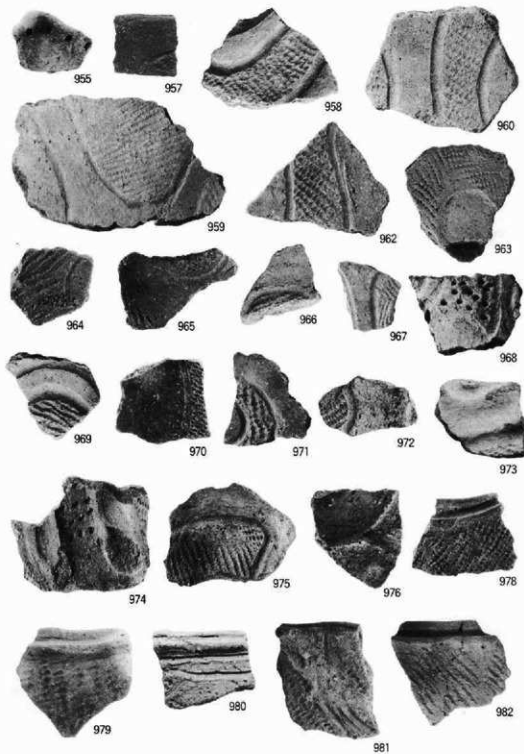
写真図版134 遺構外出土遺物



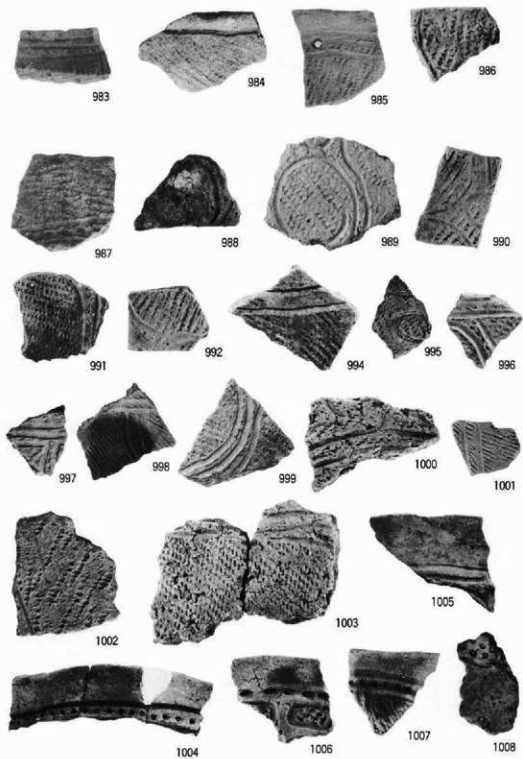
写真図版135 遺構外出土遺物



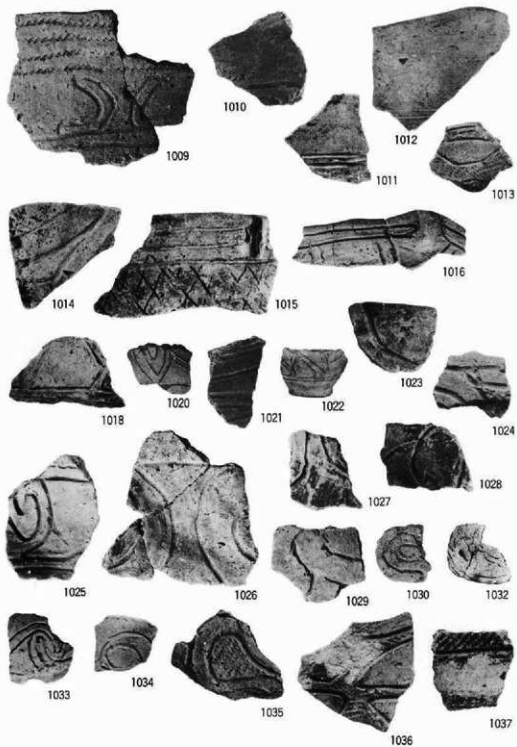
写真図版136 遺構外出土遺物



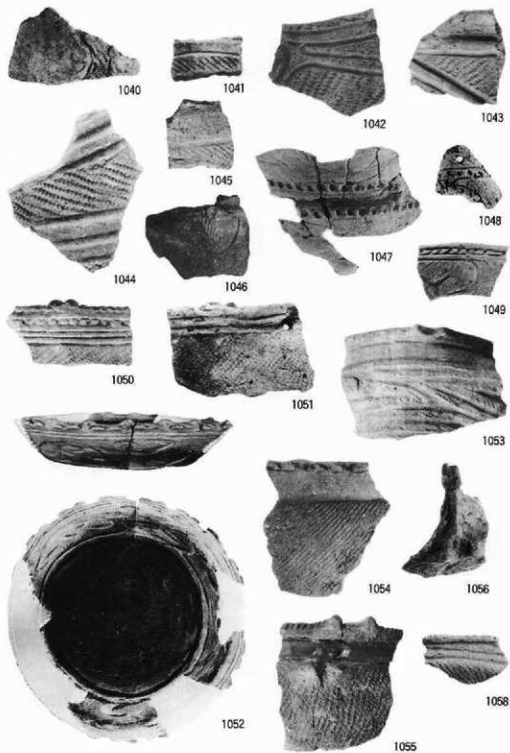
写真図版137 遺構外出土遺物



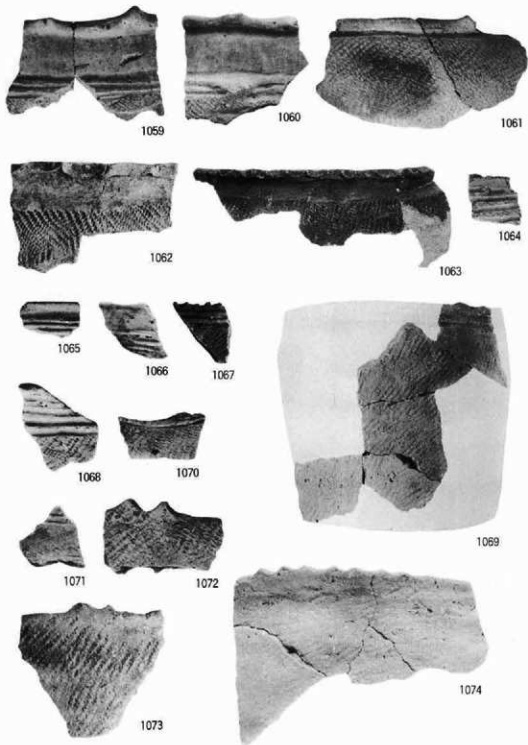
写真図版138 遺構外出土遺物



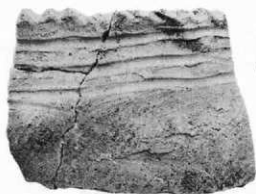
写真図版139 遺構外出土遺物



写真図版140 遺構外出土遺物



写真図版141 遺構外出土遺物



1076



1075



1078



1077



1079



1080



1082



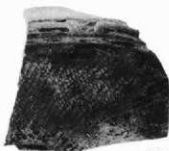
1083



1087



1088



1081



1085

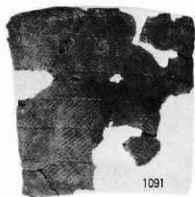


1086



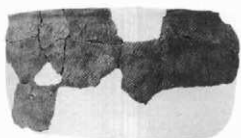
1090

写真図版142 遺構外出土遺物





1098



1100



1101



1102



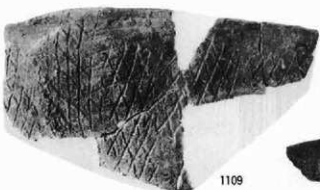
1103



1107



1108



1109



1113



1110



1111

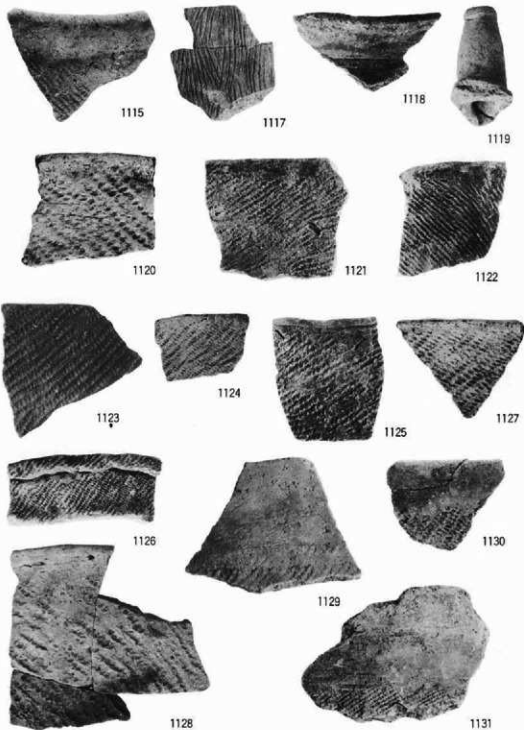


1112

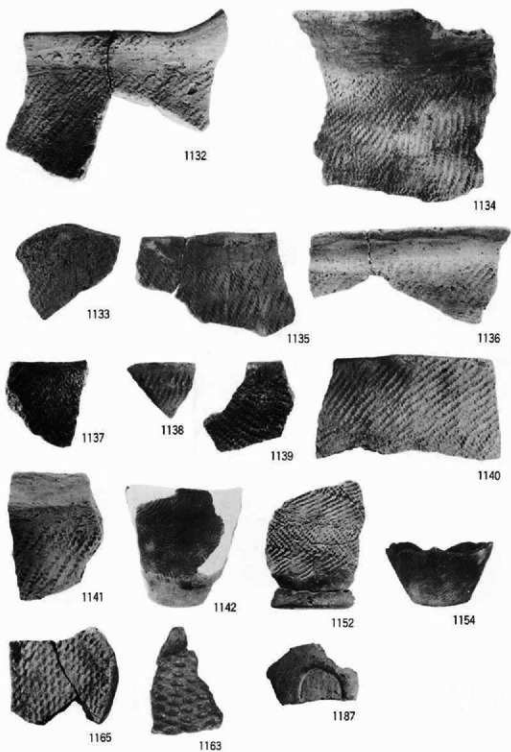


1114

写真図版144 遺構外出土遺物



写真図版145 遺構外出土遺物



写真図版146 遺構外出土遺物



1166



1168



1172



1173



1174



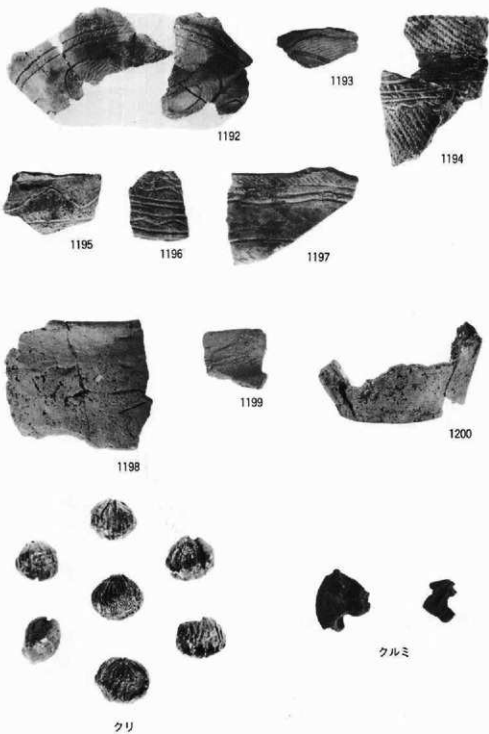
1189



1190



1191



写真図版148 遺構外出土遺物及び堅果類

岩手県埋文センター文化財調査報告書第78集

嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和59年8月25日

発行 昭和59年8月30日

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡和南村大字下飯岡字高屋敷

☎0196(38)9001-2

印刷 (株) 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6番49号

☎0196(53)4151